# The 50th Anniversary

立教大学 体育会バドミントン部

創部50周年記念誌

ST.PAUL'S UNIVERSITY

*50th.*
*Anniversary*

# ST.PAUL'S UNIVERSITY BADMINTON CLUB





正門から本館を望む

## 校歌　栄光の立教

諸星寅一　作詞
杉浦貞二郎　補作詞
島崎赤太郎　作曲
辻　荘一　編曲

一、芙蓉の高嶺を雲井に望み
紫匂える武蔵野原に
いかしくそば立つ我等が母校
見よ見よ立教　自由の学府

二、愛の魂正義の心
朝に夕べに鍛えつ錬りつ
邦家に捧ぐる我等が母校
見よ見よ立教　自由の学府

三、星経る幾年伝統うけつ
東西文化の粋美をこらし
栄光輝く我等が母校
見よ見よ立教　自由の学府

## 第一応援歌　行け立教健児

小藤武門　作詞
上橋啓二　作曲

一、見よや十字の旗かざす
立教健児の精鋭が
武蔵野原をいでゆけば
若き心の血は燃えて
われらの行く手に敵ぞなし
立教！　セントポール　おおわが母校

二、愛と正義の心もて
いざゆけわれらの強者よ
勝利の力われにあり
ああ立教の旗の下
猛き血潮の尽きるまで
立教！　セントポール　おおわが母校

三、ああわれ勝てりおお覇者ぞ
聞け立教の勝ち歌を
みよ紫の旗風に
セントポールの鐘の音は
われらの勝利を告ぐるなり
立教！　セントポール　おおわが母校

## 立教大学寮歌

武藤重勝　作詞
大町北造　作曲

一、棘路とおくたどり来て
同じ園辺に慕いよる
眉若げなる友はみな
真理の旅の人ならむ
されば短かき青春の日を
かたみに愛と歌わずや

二、朝夕にそびえたる
知識の重扉けれど
なげくをやめて渾身の
力を揮え若人よ
いのちと愛の揺籃に
まどろむ宵も近ければ

三、星屑淡き高楼の
夕の色に染まりつつ
鐘の調もこぼれゆく
ここ武蔵野の園にたち
地平を遠くはるばると
富士豊麗の色に酔え

四、足音秘めて歩みゆく
時こそさびし人生の
想いは胸にこもれども
ああ若人が青春の
園辺によりて吹きならす
希望の笛は高からむ

五、ああいつの日か「立教」と
さらばと記す旅の日は
ああいつの日か「立教」と
泣ぐみつつ語る日は
想えば更にひたませる
高鳴る胸をいかにせむ



本館から4丁目、第1食堂を望む

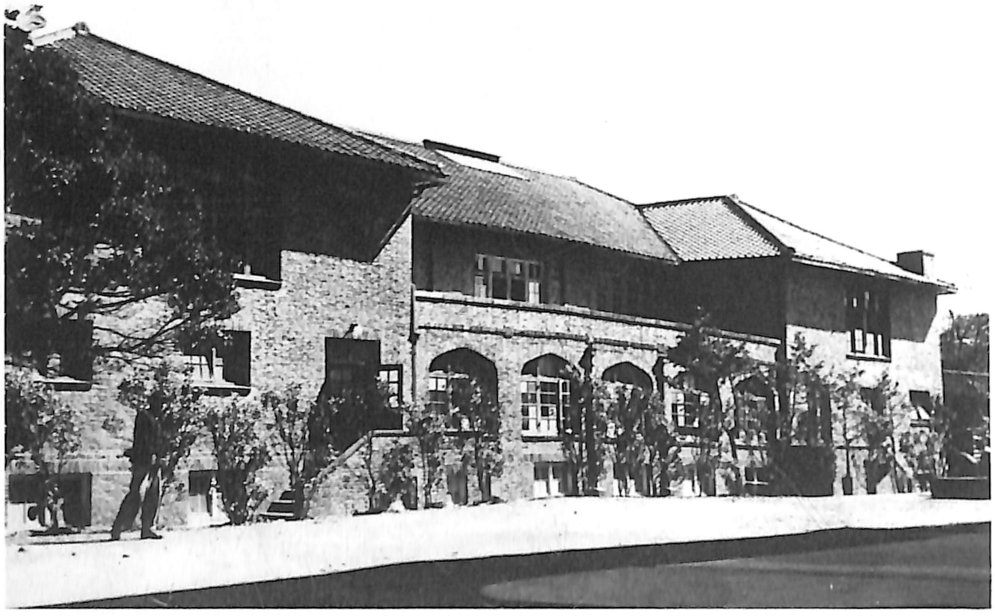


トレーニングで苦しめられた「鈴懸の径」

## 第二応援歌　St. Paul's will  shine tonight

1.St. Paul's will shine tonight,
St. Paul's will shine.
St. Paul's will shine tonight,
St. Paul's will shine.
St. Paul's will shine tonight,
St. Paul's will shine.
When the sun goes down
and the moon comes up,
St. Paul's will shine.

2.St. Paul's will shine tonight,
St. Paul's will shine.
Will shine in beauty bright,
All down the line.
Won't we look neat tonight,
Dressed up so fine.
When the sun goes down
and the moon comes up,
St. Paul's will shine.



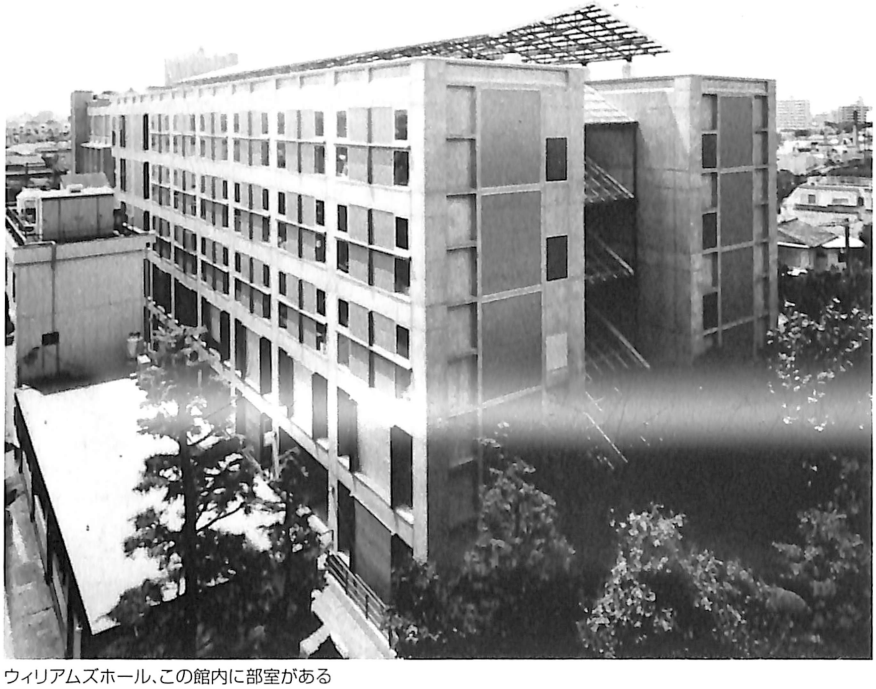
懐かしの体育館（近々取り壊されてしまう）



先輩方には想像もつかない新座キャンパス体育館の勇姿



チャペル前の本学創立者ウィリアムズ主教像



ウィリアムズホール、この館内に部室がある

50th Anniversary ST.PAUL'S UNIVERSITY BADMINTON CLUB 記念誌

キャンパス･フォトグラフィー


立教大学体育会バドミントン部創部50周年に寄せて P.15

(1) 創部50周年を祝して 立教大学総長 塚田 理
(2) 創部50周年を祝して 立教大学体育会会長 原川 恭一
(3) 50周年、おめでとうございます 立教大学体育会OBクラブ会長 中原 照
(4) 創部50周年を迎えて 立教大学体育会バドミントン部部長 堀内 昭
(5) 創部50周年おめでとうございます 立教大学体育会女子バドミントン部部長 藤井 陽江
(6) 創部50周年に寄せて 三田バドミントンクラブ会長 岡本 圭
(7) 創部50周年を迎えられて想うこと 駿台バドミントンクラブ会長 石井 保典
(8) 定期戦の想い出 同志社大学体育会バドミントン部OB会幹事長 岸本 晃一
(9) 創部50周年に寄せて 立教大学体育会バドミントン部OB・OG会会長 川端 昇市

1 誕生物語 昭和24年～29年OB P.35

(1) 立教大学バドミントン部同好会の誕生 武藤 欣吾
(2) 和と根性 鈴木 旭
(3) 有馬よ、ありがとう 川端 昇市
(4) カーキ色のバドミントン 森本 友三郎
(5) タイム・スリップ 菊池 醇
(6) 体育館を借り歩いた渡り鳥 内海 冠次
(7) バドとの出会い 遠山 宏
(8) 座談会：クラブ誕生物語

2 天才監督と黄金期 昭和30年～35年OB P.55

(1) バドミントン部に在籍して本当に良かった 白木 靖男
(2) 「打倒慶応」から世界への道 佐藤 芳朗
(3) 学連だけの4年間 野村 昌宏
(4) 創部五十年 力石 潔
(5) 創部50周年にあたり 望月 文雄
(6) 忘れられぬ思い出 新倉 和男

(7) バドミントンとの出会いと楽しい仲間たち　天海　正樹
(8) 片石君の想い出　加藤　正則
(9) 粋でシックな丸坊主　折井　利彦
(10) 信念をもって基礎体力と精神力を　花岡　牧夫
(11) 錆びたナイフ　浅野　久
(12) 出会い　永井　栄一
(13) 今でも思い出される哲学堂と千歳橋　並木　伸裕
(14) 学生の特権を持った社会人の誕生　内山　巌
(15) 思いつくままに　瀬戸　喜行
(16) 優勝カップは数知れず　小宮　貞男
(17) 有馬英三氏を想う　折井　利彦
(18) 座談会：名監督・有馬英三氏を偲ぶ

3　転換期への序章　昭和36年～39年OB　P.101
(1) 思い出されるのは苦しかった1、2年の合宿　大林　義和
(2) 喜びも苦しみも凝縮されたそれぞれの合宿　小栗　和平
(3) バドミントン部で培った精神と肉体、そして多くの友人たち　安田　元信
(4) あの一戦…昭和35年11月、大阪　小宮　好雄
(5) 50歳の誓いは実行できないが　長谷川　陽一
(6) 遊行寺合宿の失踪事件と偶然の再会　望月　昭
(7) 足を大地につけ、一歩一歩前進を　浅見　征一郎
(8) 赤字を埋めたダンスパーティー　岩佐　俊二
(9) 第6回トマス杯への参加　板垣　善憲
(10) バケツの水がこんなに旨いとは　鈴木　幸春
(11) 感謝の気持ちでいっぱい　佐藤　次之
(12) 後輩よ、同級生を大切にし大いに議論してほしい　東条　義昭
(13) 2年4か月で終わった競技生活　田中（松下）邦彦
(14) 日本選手として初めて全英、全米に出場　小宮　好雄

4　新時代の始まり　昭和40年～49年OB　P.125
(1) 私の人生を決めた運命の1日　秦　浩
(2) 4年間の異次元体験　安沢　武司
(3) 学生として、そして監督として　松崎　正門

(4) 厳しく、忙しく、楽しかった裏方の4年間　鵜飼　良機
(5) 息子と青春を共有できるうれしさ　加藤　寛
(6) チョークで濁った水も旨かった　星野　義昭
(7) バドミントン部の誇りを忘れず前向きに　須田　孝夫
(8) 人数は少なくても　立野　政昭
(9) お寿司で知った体育会の味　丸　保信
(10) 我が人生バドミントンと共に　堀　幸矩
(11) バックスマッシュを打ちたくて　瀬戸　孝
(12) 忘れられない下級生たちの支えと協力　高橋　宣
(13) バドミントン後の真の生きがい　谷口　寛
(14) 全力をかけた後継者の育成と財政健全化　大内　進

5　大いなる継承　昭和50年～59年OB　P.147
(1) 努力すれば、できないことはない　岡田　哲男
(2) いつか部室の一番奥で着替えたい　深沢　政明
(3) 大きな財産、それはバドミントンで培ったふれあい　下平　勝久
(4) バドミントン部の4年間は今でも心の支え　桑田（清水）正栄
(5) 過渡期の立大バドミントン部　井上　龍
(6) ある初心者のシャトル日記　伊藤　要三
(7) 人生を変えた伊藤先輩の言葉　鈴木　宏
(8) 想い出の「体育館」　曽我　之雄
(9) 立教、それは私のほうれん草　植竹　明彦
(10) ここでやめたら負けだぞ!おまえ!　薗部　秀之
(11) 4年間　金子　真人
(12) 新しい息吹きをもったバドミントン部への期待　関山　浩
(13) バドミントン部万歳!　思い出すままに　有賀　和美
(14) あの時の水よりもおいしいビールには出会っていないか　松下　一成
(15) つれづれなるままに　石田　俊司

6　部室の灯は輝く　昭和60年～平成8年OB　P.171
(1) 大森君の指紋　遠藤　敬志
(2) 忘れられないあの日　大森　康裕
(3) レギュラーにはなれなくても　村島　実

(4) 良きライバルとの4年間　柴　公人
(5) 思い出すのはランニングでの一喜一憂　宇佐美　正彰
(6) 創部40周年のクラブ唯一の現役　川底　宏至
(7) 悩み、試行錯誤を繰り返した輝ける時代　飯島　伸仁
(8) 走れバドミントン部　丸山　泰史
(9) なぜ、バドミントン部に入部したのでしょう？　西島　次朗
(10) どん底脱出の原動力となった“上へ”の気持ち　高橋　幸二
(11) 自分という人間の核をつくってくれたのはバドミントン部　田中　尚
(12) 平成8年卒業・オレたちのバドミントン部　三井 邦雄・小林 敦哉・相田 敏広・桑山 洋典
(13) 座談会：部室の灯を消すな

7　一人歩きめざして　昭和34年～43年OG　P.191
(1) 昭和33年・インカレ・久留米・ニモツミツカル　井口（上野）久美子
(2) 体育館　牧（吉武）禊
(3) 1年生の思い出　青柳（井出）陽子
(4) 暖かく豊かな人の輪　佐原　美子
(5) 海外で役立ったバドミントンの体験　豊田（佐藤）恵子
(6) 回想－つらかったけど堪能した3年間　小林（桑原）延枝
(7) じゃじゃ馬がんばっとるなー　佐川（篠塚）栄子
(8) 私とバドミントン－今も楽しんでいます　鈴木（谷口）嘉代子
(9) 風呂敷・立山・ジョンF.ケネディ　北村（丸田）登喜子
(10) バドミントンで得た宝物　谷田（沢井）秀子
(11) 女子バドミントン部存続の陰に私あり？！　脇（堀部）晴代

8　継承の糸はつながった　昭和44年～昭和63年OG　P.213
(1) 切れかかった糸がしっかりつながった　高橋（斎藤）啓子
(2) 仲間たち、それは私の貴重な財産　畑（栗田）寿子
(3) 大きなピンクのバラの花束をありがとう　鈴木（中嶋）久江
(4) いつまでも忘れない　昭和55年・56年卒業部員一同
(5) 思い出すこと－赤い階段と黄色い壁　増澤　みどり
(6) つらかったけど楽しかった　小副川（吉野）由樹子
(7) 思い出すのはラケツトの匂い　飯塚（賀茂）由美子

9　新特代への扉　平成元年～平成8年OG　P.225
(1) メイクイーンと男爵イモ　野津山　まり子
(2) 立教バドミントン部から得たもの　二谷　伸子
(3) 今、思うこと－成長させてもらった4年間　長谷川　千秋
(4) 大きな変化の時期に貴重な体験　和田　陽子
(5) 崖っぷちの新勧活動　鈴木　道代
(6) ピカピカの床と水銀灯　森屋　利夏
(7) バドミントンをやりたい気持ちがメラメラと　西島（山口）日登美
(8) この1勝もあの1勝も、同じに重い　池田　道子
(9) 私のバドミントン部　坪　宏美

10　新たなる50年へのスタート　P.235
男子・女子現役部員

11　50年の足跡（戦績）　P.259

12　男女歴代キャプテン・マネージャー　P.293

13　OB・OG会名薄　P.299

14　編纂を終えて・実行委員会メンバー　P.321

INTRODUCTION

# 立教大学体育会バドミントン部
# 創部50周年に寄せて

# 立教大学体育会バドミントン部 創部50周年を祝して

立教大学総長
**塚田 理**



立教大学体育会バドミントン部創部50周年おめでとうございます。

50年という年月の中で、素晴らしい部の歴史を築き上げてこられた諸先輩方の並々ならぬ努力、熱意に深い敬意を表するとともに、皆様方に心からのご祝意を贈りたいと思います。

1947（昭和22）年に、体育会認定の同好会として活動を開始したとうかがっておりますが、半世紀にもわたる長い間、数多くのOB、諸先輩が、学生時代にそれぞれの時代を支え、築き、素晴らしい歴史を作ってこられました。とりわけ、昭和20年代後半から30年代にかけての活躍には、関東大学リーグでの16回にわたる1部優勝、全日本大学選手権での優勝9回に表されるように、目を見張るものがあります。立教大学のバドミントン部が日本のバドミントン界をリードするとともに、多大な貢献を果たしたと聞き及んでおります。

また、バドミントン部は、学問を修めると同時に、厳しい練習を自ら課し、自己の精神力や体力を限界まで高め、競技における勝利と全人格的成長を果たすという、学生スポーツの本質を見事に実践してきた集団として、数多くの優秀な人材を輩出し、学内的にも社会的にも高い評価と信用を獲得しております。

こうしたバドミントン部の活躍は、部長、監督、コーチ、そして現役学生のたゆまない努力があったからだということは言うまでもありませんが、その陰にはいつもOB会があり、どんな時にも良き理解者として、後輩を指導しつつ、しっかりと支えてきたことを忘れることはできません。ここに、あらためて諸先輩方に対し、心からお礼申し上げますとともに、今後一層のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

長い人生の中で、一つの目標に対して全力で若さをぶつけ、自らの可能性に挑戦し、多くのものを得て卒業後の人生を豊かなものにする基盤を作るのは、大学4年間しかないと思います。その標的として体育会での活動を選び、大学生活を送った学生諸君は、厳しい部活動を通して「心・技・体」を鍛え、忍耐力や集中力を養うと共に責任感、協調性、母校愛を身につけ、さらには、喜びや苦しみを分かち合った生涯の友人を得るなど、人生における大きな財産を卒業時に手にして旅立っていったことと思います。学生時代にバドミントン部で活躍された諸先輩方もこれらの財産を糧として、みのり多い人生を歩んでおられることと存じます。そして先輩方がこの財産を十分に活かして後輩をご指導されたことが大きな力となって、部の今日の発展をもたらしたものと確信いたします。

一時期は部員の激減という状況に陥り、廃部の危機に直面した際にも、監督・コーチ・OBの諸先輩方々、そして現役部員や部長が力を合わせて努力した結果、関東大学リーグの上位30校の中に入るまでになったことは高く評価されるべきことであると思います。

最後になりましたが、創部50周年を記念するにあたり、バドミントン部の学生諸君が指導にあたられた諸先生、諸先輩への感謝の気持ちを新たにし、立教大学、バドミントン部、そして自分自身をその根源に遡って見つめ、学び、問いつつ、これから始まるバドミントン部の新しい時代に向かって、力強い第一歩を踏み出されることを期待しております。

# 創部50周年を祝して

立教大学体育会会長
**原川恭一**



立教大学体育会バドミントン部が、本年4月をもって創部50年を迎えられたとの報に接し、ここに心からなる祝意を申し述べたいと存じます。昭和22年に体育会認定の同好会として発足し、同24年から体育会競技部として活躍を続け現在に至っている由ですが、紆余曲折はいずれにいたしましても、実に半世紀の長きにわたって続けられた部活動そのものに、そして、その活動をその時その時に支えてこられた各世代のOB、OG諸氏に、まずは満腔の敬意を表する次第です。

あえて紆余曲折と申しましたが、それは、たとえば発足した昭和20年代前半は周知のように終戦後間もない混乱期であり、時代相応の苦労が多々おありになったと思われますし、また、30年代を中心としたいわゆる体育会活動の黄金期には他の部と同様の高揚が、そして、50年代以降現在に至る各部共通の人的、物的困難などが想像されるからであります。

私事にわたって恐縮ですが、あの黄金期に幸いにもキャンパス生活を送ることのできた私は、体育会各部の部員とそのOB、OGのみならず、広く立教大学の学生、卒業生、教職員をも含めた、言ってみれば大学総体が分かち担った比類のない高揚感と一体感とを実際に体験して参りました。文弱の

身にもかかわらず、あちこちの試合の場に出かけて行き、大学の名誉をかけて戦う選手たちのプレーに、惜しみない声援を送った遠い記憶が今も懐しくたち返ってきます。文字どおりそれは体育会疾風怒濤の時代であり、同時に立教大学がさまざまな面で大きく発展し始めた時期でもありました。

やがて時代が変転し、いわゆるスポーツ推薦入学制度と学生会費の代理徴収制度の全廃によって、体育会各部は未曾有の人的、物的困難に遭遇し、"冬の時代"を迎えることとなりました。当然のこと、バドミントン部もその例外ではなかったはずです。しかしながらこの間、劣悪な状況を憂え、それに耐えながらも、物心両面にわたって現役の部活動に変らぬ支援の手をさしのべてくださったのがOB、OG諸氏であることを私は知っておりますし、このことにつきましては、大学に勤務する者として、また、とりわけ体育会会長として、ただただ深謝申し上げる他はありません。

教育の根幹が正課の授業にあることは当然ですが、同時に、大学教育もまたそれまでの教育と同じように、総合的な人間形成の場、人格陶冶の場でもあると思います。もしそうだとするならば、志を同じくする友と親しく語らい合い、切磋琢磨し、悲喜苦楽を共有しうる正課外活動、つまり体育会の部活動もその一環であり、その後の長い実人生へ船出する総仕上げ的な4年間という意味合いから、いっそう重要なものと言えましょう。バドミントン部のOB、OG諸氏もおそらくは部活動からさまざまな徳目を体得し、その原体験を携えて実社会へと、実人生へと船出して行かれたものと存じます。

昨今、指定校推薦や秋の自由選抜入試で、結果的にスポーツ能力の高い学生が幾人か入学、入部し始めてきてはいますが、体育会48部を思えば、その数はあまりも寥々たるものでしかありません。いわゆる文武両道の人間形成をめざし、今後とも人材の獲得、育成につとめて参りたいと念じていますので、このたびの50周年の歴史を寿ぐと同時に、皆々さまにはなおいっそうのご支援、ご協力をたまわりますようお願い申し上げる次第でございます。

# 50周年、おめでとうございます

立教大学体育会OBクラブ会長
**中原　照**



バドミントン部の創部50周年を心よりお祝い申し上げます。ひとくちに50年といっても様々な出来事の積み重ねだと思いますし、それだけにあらためてここに50周年を迎えられたことに対し敬意を表したいと思います。

ふりかえってみますと私が立教大学に入学したのが昭和29年（1954年）、まだ西口のバラックマーケットが残っていた時代でしたが、当時の立教大学は文学部・経済学部・理学部の3学部で1学年も1200人くらいだったと思います。タッカーホールも工事中であり、5号館、6号館もまだなかったこぢんまりとした大学でした。

入学式は4号館の教室で行われ、いよいよ立教での生活が始まったわけですが、その頃の立教スポーツはほとんどの部が軒並みに1部クラスの上位に存在していました。

バドミントン部もその中で活躍していた部の一つでもありました。立教スポーツが上昇しつつあった華やかな時代だったと思います。

しかし昭和46年頃から選手がとれなくなり、急速にその牙城がくずれ始め、アッという間に凋落して、かつての姿が失われてしまったことはきわめて残念な状況でありました。新聞紙面から立教の文字が消えてしまいました。

そんな中で各部とも、必死になってその維持、向上につとめ今日に至った

歴史があります。部員がいなくなってしまった部もありましたし、選手の数が不足した部もありました。

そんな努力を続けて来た現役諸君をサポートしてきたのがOB会です。物心ともに何とか伝統を継続できるよう力を注いできた歴史が各部の状況だったと思います。そんな流れを重ねてバドミントン部も50周年を迎えられたことを大きな重味として感じなければなりません。

そして立教スポーツは再び蘇える時を迎えようとしています。どうしたら良いのかについては、大学も改めて考えておられる様子ですし、OB会としても新たな視点で戦力の強化を進めている状況が感じられます。

もう一度活性化をはかっていくための、それぞれの部の努力がきっと実ってくると期待しております。

来年は新しい学部が2つ誕生し、立教大学もますます充実してきます。もうすぐ立教が創立されて125年になろうとしています。そんな私達の立教の中で、スポーツはよりいっそう振興させなければなりません。体育会OBクラブとしても各部と連繋して一歩でも前進していくことを目指しております。皆様と共に頑張ってやりましょう。創部50周年に当たり一言感想を述べさせていただきました。

# 創部50周年を迎えて

立教大学体育会バドミントン部部長
**堀内　昭**



創部50周年おめでとうございます。一つの活動を半世紀も続けるというのは大変なことだと思います。部長としてひとことお祝いを述べることができますことは、小生の大きな喜びです。

思えば、1989年2月某日夕刻、当時の体育会会長伊藤謙哉先生から声をかけられ、セントポール会館でOB会副会長の折井利彦氏とお会いして、部長を引き受けることになりました。実はその2、3年前から何人かの先生からいくつかの部の部長後任にとお誘いがありましたが、多忙を理由に逃げていました。折井氏のお話を伺うにつれ、大変伝統のある部であることがわかり、若輩の小生で務まるのか不安でしたが、折井氏の熱いお言葉に大変感動してお引き受けしました。

2、3日して研究室にバドミントン部員という女子学生が挨拶のために訪ねてきました。その学生が村田紀子君であり、小生は男子部の部長を引き受けたことを述べたところ、男子部は部員が主将の川底宏至君1人であるために、女子部が協力していることを初めて知りました。何年か前、チャペル団体の一つBSA第5支部の最後のカウンセラーとして部の最後を見届けた時のことが脳裏をよぎり、悪い予感がしました。しかし、OB会からは新人獲得のために勧誘のチラシ等を提供するとの申し出がありました。風前の灯火となった部に多くの方々の力が寄せられたのです。

川底君や女子部の村田・二谷両君はじめ女子部員の応援により、徐々に部員が集まりはじめ、ほっとひと安心しました。これもひとえに学生諸君の努力はもとより、松崎正門監督はじめOB諸兄の応援の賜物であると感謝しています。

振り返りますと、昭和22年に慶応大学に続きスタートしたバドミントン部は、以来、40年代まで1部優勝16回、全日本優勝9回の輝かしい成績を残してきましたが、その後は低迷を続けました。しかし現在では関東リーグ加盟120校中上位30校に入るようになってきました。50年の間には浮き沈みがあり、実にさまざまな喜びと困難の繰り返しだったと思います。入学して部員となり数年後には卒業する、このサイクルを繰り返す大学の部活動にはそれなりの限界があります。50年間継続できたのは、バドミントンを愛し、仲間とのつながりを大切に考えてきた学生諸君の力によるものであり、またそれにもまして大きいのは社会の第一線で多忙な中、母校を思いやってくださるOB会の方々の暖かい御見守りと日頃の励ましのお声です。どん底時代にも胸を貸していただいた明治大学の諸君や、昨年から同立戦を復活していただいた同志社大学の諸君にも、この節目にあたり、あらためてお礼を述べたいと思います。こうして考えると、なんと数多くの支えがあったことかとしみじみ感じます。

現在、部員は文武両道をモットーとしており、過去の体育会のイメージはありませんが、松崎監督のもとで精一杯頑張っていますので、引き続きの応援を小生からもお願い申し上げます。

小生は、有機化学の合成と新しい反応の開発を研究していますが、バドミントンに非常に似ていることが部長を引き受けてからわかりました。小生の研究は、世の中でいう3Kや4Kですので、最近の学生諸君には人気がありません。しかしそんな中、小生の研究室を選んできた学生諸君とは、一つの有機化合物を世界で初めて合成したときには大いに喜びを分かち合います。苦労した研究の末に喜びを見出した学生の目は輝いています バドミントン部の学生諸君もこの部を選択し、地道な練習を重ねてきた結果、現在、この域に達し目を輝かせていますので、近い将来3部昇格があるのではないかと秘かに期待するこの頃です。

小生も微力ながら今後ともバドミントン部の発展に尽力いたすつもりでおります。

神の御守りを信じつつ……

# 創部50周年
# おめでとうございます！

立教大学体育会女子バドミントン部部長
**藤井　陽江**



過ぎゆく日々の速さに驚きを感じ、また継続の力の大きさに感慨を深くいたしております。

多くのOB、OG諸先輩、現役方々それぞれが大活躍の時を重ねて、今日めでたく創部50周年を迎えられることは、誠に意味深く素晴らしいことです。これもひとえに皆様方がバドミントンを愛し、クラブや同士、後輩の活躍に向ける熱い眼差しと、それぞれの日々努力の賜と思い深く尊敬と感謝の念を抱いております。本当におめでとうございます。

一口に創部50周年といいますが、人の一生になぞらえて50年といえば、現代人の多くはその昔ほどの老成さは見られぬものの、早なかばを越えて熟成の期にさしかかり、後の実り多い時に向けて再度発進の時と言えましょう。

さらなる発展を期して、先輩諸氏現役ともどもバドミントンを通じてますます気を合わせ和を大切に、創部60周年に向けて価値ある活動をつなげていきましょう。

不祥私につきましては、1969年に女子バドミントン部初代部長中村亮先生より引継いでから今日に至りますが、名を連ねるばかりで、気になりながらも積極的な関わりを持てず、誠に恥しい限りで申し訳ありません。

創部50周年というこの良き期をきっかけとして、より積極的な関わりを持って初代部長中村亮先生にも一矢報いていこうと思う所存です。改めてよろしくお願い申し上げます。

今や、立教大学は大変革の期となり皆様ご存じのことと思いますが、すでにカリキュラム内容は再編され、開講される科目は必修科目をなくし、すべて選択科目となり、97年度よりこの新方式で開始されます。体育の授業においておや選択となり、バドミントンの楽しさを味わっていただく学生との交流の機会が持ち難くなり、実に残念です。せいぜいバドミントンを受講する学生には良き授業を提供し、体育会クラブ活動に興味を持てるようにすすめていきたいものです。

さらに大きな変化は、98年4月新座キャンパスで開校される2新学部、長い間の念願であったユニークな観光学部、21世紀高齢化社会に向けて嘱望される社会福祉士を養成するコミュニティー福祉学部で、開校に際し教室棟、研究棟の建設に懸命な日々が続いています。

併せて池袋キャンパスの再開発計画が近々開始されるようです。この計画の中で、我々スポーツを手掛けてきた者たちにとっては本当に残念無念ですが、懐かしい趣のあるあの体育館が壊される破目になりそうです。寝耳に水の方もいらっしゃると思いますが、立教大学の将来発展のためにはやむを得ない事態といえましょう。

しかしながら、体育館で汗を流した学生達との生活のページが削り取られる思いがして悲しいです。体育科は、体育館を壊すことに反対文を大学側に提出しましたが、残念ながら結果を変えるほどのことにはなりません。なにか方法がないかと考えを巡らせてはみても、究極のところは経済的・資金の不足に至ることです。なくなる前に一度お別れ会でもいかがでしょう。今後とも体育会の活発な活動が展開されることで、大学の活性の一助となるよう願

何はともあれ皆様が日々お元気に過ごされることが大学のため、クラブのためになることですので、健康に気をつけて創部60周年にむけて元気に頑張りましょう。バドミントンの良き仲間に栄光あれ！

# 立教大学体育会バドミントン部 創部50周年に寄せて

三田バドミントンクラブ会長
**岡本　圭**



このたび立教大学バドミントン部が創部50周年を迎えられることは、誠に喜ばしいことであります。思えば慶応義塾大学が、立教大学昭和22年創部以来の良きライバルとしてともに歩んで来たること50年、そしてこのたび立教大学バドミントン部創部50周年の祝賀を我がことのような大きな喜びを感じながら、この立教大学の輝かしい歴史と伝統に対し深甚なる敬意を表するとともに、心から祝意を捧げお慶び申し上げる次第であります。

さて創部以来関東大学リーグに参加され、慶応とともに好敵手として覇を競い、その間立教バドミントン部は関東大学リーグ、全日本学生と輝やかしい成績を残され、戦後バドミントン界の草分けとして発展に名実ともに基礎を築いてまいったと申しても過言ではありません。

さてひとくちに50周年と言い過ごしますが、皆様もご承知のとおり、バドミントンの道は決して安易なものではありません。山あり谷あり、きわめて険しい道を、先輩が築き残した輝かしい伝統を守らんと、言語を絶する苦しい練習を耐え忍び、一日たりともおろそかにせず、精進に精進を重ね、前に立ちはだかる強敵に挑みかかり、苦闘の末、勝ち取った数々の栄冠に声援を贈るしだいです。

50周年を契機として、立教大学バドミントン部の現役部員、先輩諸兄が一致団結して部の強化を図り、優勝を目指して頑張っていただきたいと思います。

今後立教大学バドミントン部がますますの御隆盛、発展されることを期待しております。

# 創部50周年を迎えられて想うこと

駿台バドミントンクラブ会長
**石井　保典**



創部50周年を迎えられた立教大学体育会バドミントン部に、心からお慶びを申し上げます。

50年前といえば、終戦直後の何もない時代でした。そんな時代に日本のバドミントン競技が生まれました。

昭和22年秋に慶応義塾大学、立教大学、明治大学の3大学対抗戦が開かれました。翌年春に法政大学も加わり4大学で関東大学リーグ戦がスタートいたしました。各大学は互いに技術を研鑽し、その技術は日々急速に高められ、春秋リーグ戦はいくつもの白熱する試合が見られるようになりました。同時に試合、練習の合間をぬって組織づくりにも励み、関東学生バドミントン連盟、さらに全日本学生バドミントン連盟をも作りました。また、東京都バドミントン協会、日本バドミントン協会の発足当時から、4大学OBが中心となって積極的に参加し、その発展に尽くして参りました。

なかでも立教OB川端昇市さんのリーダーシップが協会運営に力を発揮したことは、いまでも記憶するところであります。こうした尽力があって、日本バドミントンの基礎が出来、環境が整って参りました。その間学生、実業団、クラブ団体等、バドミントン関係の各界各層が共に普及発展に努め、

日本中に素晴らしいブームを呼び起こし、今日の日本バドミントンがつくられました。

立教大学バドミントン部は、昭和20年代から40年代にかけて黄金時代を築き、その輝かしい金字塔はいまでも他校の追随を許さない立派な戦歴であります。1部リーグ優勝16回、全日本大学選手権優勝9回を数え、幾多の日本を代表する名選手を誕生させました。その後部員数の減少から、部の存続の危機にまで追い込まれる苦況に直面するという、まさに山あり谷ありの歴史も経験されました。しかしながらバドミントン界の名門校として、一貫して変わらない精神は代々受け継がれ、OB・現役の結束によって無事に今日の祝典を迎えることができました。

明治大学も創部50周年を迎えるわけですが、立教大学とは違う経験をいたしました。昭和61年11月に鈴木敏勝コーチ、その翌年2月に内藤安雄監督を相次いで亡くすという出来事に遭遇しました。OB同志の結束をさらに強め、新監督・コーチのもとにピンチを脱した経緯があります。

50年の歴史のなかには、先輩から後輩へと貴重な教え、そして教えられた中身が一杯詰まっております。お互いどんな状況にも立ち向かい、またどんな困難をも排除して、明日に向かう希望に前進したいものです。

昭和22年3大学対抗戦から数えて、本年春季関東大学リーグ戦がちょうど100回目に当たります。捲土重来、創部50年を節目に、少しでも上部をねらい、お互い1部リーグで戦うことを目標にして頑張りたいと思います。

# 定期戦の想い出

同志社大学体育会バドミントン部
**OB会幹事長　　岸本　晃一**



貴部の半世紀に及ぶ輝かしき伝統と歴史に大いなる拍手を送りますと共に、それを支えてこられた多くの先輩諸氏のご努力に対し、深く敬意を表します。

立教大学と同志社大学の定期戦は、ミッション校同士の東西の交流として、バドミントンだけに限らずすべての種目でかなり古くから行われ、現在でも半数以上の種目で行われています。しかしながら、同志社スポーツユニオン、スポーツの機関紙「アトム」に問い合わせても詳細はわかりませんでした。

一時中断していた定期戦が、昨年からめでたく復活いたしました。そこで30数年ぶりに小宮君に会い、懐かしく昔の事を語り合うことができました。

私は現在、同志社大学バドミントン部と、同志社スポーツにどっぷりと漬っております。そのきっかけになったのは、他でもないこの立教大学と同志社大学の定期戦であります。私が高校1年の時、柏野小学校で行われた定期戦、それは東西の優勝校同士の王座決定戦ということで、100円の入場料を払って見に行きました。

片石さん、佐藤さんのプレーを見ることができ、一番感動したのは、望月さんと上田さんのシングルスでした。

たしか8対1で立教が勝ち、その1勝は上田さんの1勝だけだったと記憶しています。その試合を見たお蔭でバドミントンに嵌り、今ではもう同志社大学バドミントンと同志社スポーツから抜けられなくなってしまいました。

私の4年間の定期戦の結果は、0-9、1-8、0-9、0-9で同志社はわずか1勝しか挙げることができませんでした。その1勝は2年生の時でした。同志社中学の体育館で行われ、その時も東西の優勝校同士の対決で、王座決定戦という勝手なタイトルをつけ、100円の入場料を取って行いました。そこで私が並木さんに勝った1勝が4年間の定期戦での同志社の1勝でした。

東西の交流は、たしかにバドミントン界の発展にとって大切なことであったかも知れませんが、親睦を第一に考える私たち同志社は、夜の部はいつも圧勝していたと今も信じております。

現在同志社も2部に甘んじておりますが、近い将来、もう一度王座決定戦が行われるよう願ってやみません。

# 創部50周年に寄せて

立教大学体育会バドミントン部OB・OG会会長
**川端　昇市**



我がバドミントン部創立50周年にあたり、OB・OGの皆さん、現役部員諸君と共に喜びたいと思います。

50年前、創部に深く関わった武藤欣吾氏はじめ、往時の諸先輩がこの祝年にご壮健であることをお喜び申し上げます。

この時にあたり、私の所感をやや感傷を交えながら申し述べたいと思います。

今、胸を占める思いは「人の和」の歴史についてであります。

B-29の空爆で焦土と化した東京は、終戦直前まで勤労動員に明け暮れた毎日でした。茫然自失の中で立教大学のキャンパスは唯一明るく救いのある場でした。

良書に飢えていた私は読書組合の会員になり、出版会社をめぐって書籍を買い求め、共済会を通じて販売したり、会の運営をしていました。そんなある日バドミントンという新しいスポーツ同好会に遭遇しました。

静かな読書の日々も楽しいものでしたが、体を動かすスポーツ、特にバドミントンに魅かれ、同好会に飛び込みました。

学食の中にネットを張り、ルールもよくわからぬまま、ラケットを振

り、シャトルを追いかけました。頭にハチマキを締めて、他校と交流試合をしていくうちに、競技の実態がわかってくるという稚拙なものでした。その後、ようやく体育会に認知されることとなりました。

文化部委員長をしながら、バドミントン部の選手兼主務となって卒業しましたが、その後の我が部のトレーニングの激しさ、練習の厳しさをみると、私の現役時代はいかに長閑な部生活であったかと思われます。

昭和25年秋季国体(オープン種目)シングルス決勝戦で、慶応大学の佐藤(保)OB対広田選手の2時間半に及ぶ死力を尽くした戦いを見て、体が硬直する感動を味わい、バドミントン競技の真髄を知ったのでした。

広田選手の華麗なフォームと力強いラケットさばきにバドミントンの原点を見て、自分のなし得なかった技と力の精華を後輩に託すことを決意しました。

さりとて、完成されたプレーヤーをすぐ確保できるものではなく、新入生の中から競技経験者をさがし、部員を増やし、基礎体力を上げながら、それぞれを競わせることから始めました。ここに立教大学体育会バドミントン部の伝統が始まりました。

すべてのOBの期待を現役が受け継ぎ、チームワークを大切にしながら競技技術の向上に励み、驕慢を恥とし、一流のチームを目指しました。

昭和30年代に救世主が現われました。良き指導者・有馬の出現で、我が部のエネルギーが一挙に噴出し、リーグ戦、インカレ、全日本、国際試合で日本を代表する一流選手を輩出することとなったわけです。

次に私に課せられたものはなにか。先輩、後輩、現役、OB、OGの隔たりの撤廃、連帯感の密度を高め、お互いの交流を図ることでした。それによって古巣立教大学バドミントン部の伝統を守り、部の存続を確かなものにしようと思いました。

昭和40年代の終わり頃から、推薦入学制度、学生の諸活動補助金制度が廃止され、部活動の目的が大きく変わりました。昭和63年、創部40周年の年、男子部員はわずか3名となり、我が部は消滅の危機に瀕したのでした。この頃まさに社会的にはバブル経済に国中が酔いしれた時代と重なるのです。

長年の夢であった体育館建設、そのための募金活動、私に代わって

折井、小宮をはじめ、多くのOB・OGがこぞって協力を惜しまず、目標額以上を献金できました。

有馬、折井、永井、鈴木（幸）、松崎という歴代の監督にも恵まれ、新座体育館完成からは体育会を優先使用者とするという学校当局の配慮もあり、4面のコートが実現し、部員も増えて新しい時代を迎えようとしています。

顧るに、我が部50年の歴史は、日本バドミントン界をリードする人材を多出したが「己が」、「己こそ」という唯我独尊の者は一人たりとも居らず、年代ごとにまとまり現役を温かく育んできたものであります。これぞ「人の和」の歴史です。

今こそ、260名のOB・OGが50年の歴史を祝おうではありませんか。そして「人の和」を大切に、さらにバドミントン部将来の発展を期待しようではありませんか。

この10年、現役部員を育んでいただいた堀内部長先生、藤井先生、松崎監督、コーチの諸君に深甚なる謝意を表します。

最後に、創部50周年記念［感謝の夕］と記念誌の編纂に大変な苦労と奉仕をしてくれた小宮実行委員長、瀬戸編集委員ならびに支援をいただいた会員諸君に、心から敬意と感謝を呈するものであります。

Chapter-1

# 誕生物語

1949-1954

昭和24年～昭和29年OB

# 立教大学バドミントン同好会の誕生

武藤 欣吾
(昭和24年卒)

創部50周年記念行事として創刊される記念誌への寄稿依頼をいただきながら過去50年間、何らの協力もできず、無責任な一人の傍観者として過してきた私としては、筆をとることに、はじめは大変躊躇しました。しかし、再三のお誘いに対し、昔の語り部(かたりべ)たちにならい、歴史の伝承者として実際に行われた過去の出来事やエピソードを語り伝えるのも意義あることかと考え直し、雑文ながら寄稿することにいたしました。

「事にはすべて初めあり」……偶然やちょっとした出来事が契機となって歴史は始まります。

昭和21年10月、当時立教大学スキー部の主将であった山本洋氏(昭和22年卒、平成6年没)から、私の同期生であった同スキー部マネージャー村上善夫君を仲介者として、当時未だ日本にはほとんど紹介されていなかったバドミントンの用具(ラケット4本、シャトルコック20個、ネット一式)の寄贈を受けました。

この用具は、山本氏がアメリカからのみやげ物として入手されたもので、卒業を目前に控えた同氏が、立教大学体育会の新しいスポーツ部門としての設立を後輩に託されたものでありました。

村上君から用具を受け取った私は、まず同期生の中からこの新しいスポーツに興味をもち、しかも他の運動部に属していない友人達に用具を紹介して参加を求めました。

その結果、鷲塚圭司、中川孝治(平成4年没)両君の賛同を得ることができたわけです。

続いて下級生の入会募集を実施することになりましたが、体育会に正式の部として認可されるためには、数年間の実動実績が必要なので、一応募集母体の名称を「立教大学バドミントン同好会」として募集することになりました。10月というのは会員募集の時期としては時期はずれであったため、他の運動部との募集競合は避けられたと思います。

手書きの募集ポスターを学生食堂内の壁と藤棚の柱等に貼り出し、受付けを食堂内に設けました。

ポスターを貼り出した初日、入会第1号者として川端昇市君(予科2年)が申し込んでくれたことを、彼が初めての入会者であったことから、嬉しくて今でも明確に記憶しています。

彼には早速スカウト係として、主に予科生対象の募集を始めてもらいました。

募集第2日目、鈴木旭君、守屋林君、吉田紀久君(予科3年)の入会申込みがあり、これで跡取りの学年が揃ったことを喜んだのを思い出します。

続いて瀬川多七君、寺内秀興君(予科1年)の入会が決まり、ここに予科1年から学部1年にいたる組織が出来上がりました。(当時の入会者の氏名および順次については正式な記録がなく、私の記憶によるもので、もし誤った場合には深くお詫びするしだいです)。

昭和22年4月には、新入生内海冠次、村松真次両

君の参加があり、これを機に立教大学体育会に「立教大学バドミントン同好会　主将鷲塚圭司」として登録されることとなりました。

当時、全国大学の体育会に登録されたバドミントン同好会は立教のみであり、永く競争相手となる慶応も個人クラブの集まりであったことから、組織として立教は日本の学生バドミントン運動の草分けとして、ここに誕生したということができるわけです。

# 和と根性

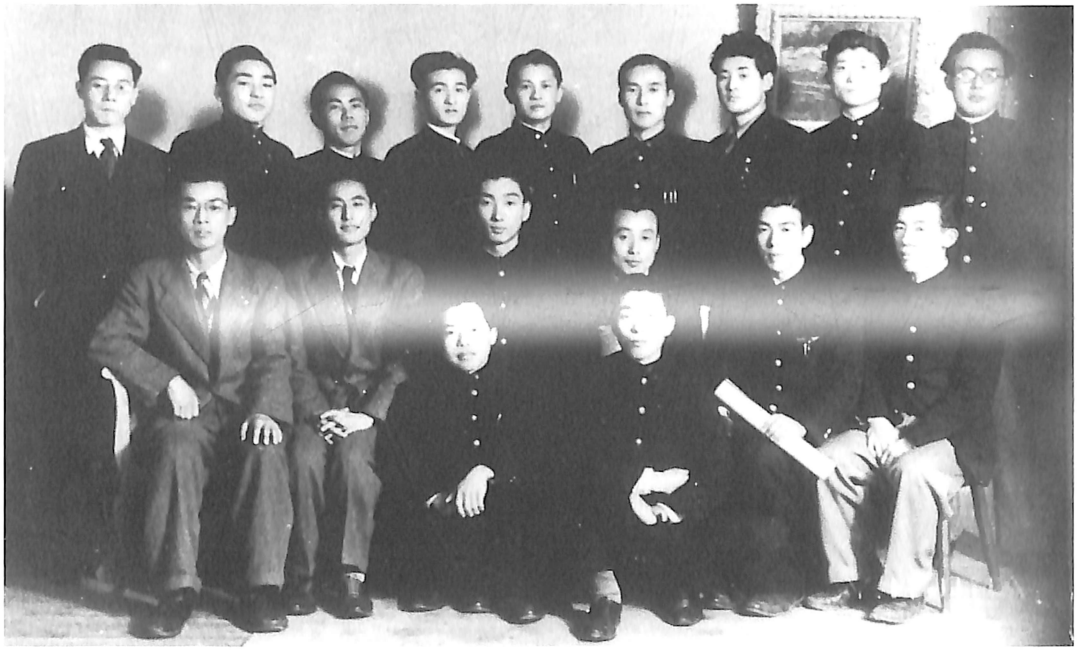
鈴木　旭
(昭和25年3月卒)

過ぎし50年を顧みて、感無量であります。ルールもわからないままバドミントンを発展させようと、同好の士15、6名が集まり、練習場もままならず、浜松町の小学校の講堂をお借りし、天井が低く、ただサーブ練習と平行に打ち合うだけでも、楽しい練習に明け暮れました。

今日このように立教大学バドミントン部が、数多くのOB、OGを輩出していることは、夢のような思いです。

同好会で出発し、昭和24年度から体育会に加入できた時は、本当に涙して喜びました。

その時に、人の「和」の大切が身に滲みました。先輩、後輩が一つになって、目的達成に寝食を忘れ、



バドミントン部1期生（昭和24年）卒業記念写真

各自が努力した賜と思います。

連綿と50年を経た今日も、この「和」が生きて、今後もさらに続けてもらいたいものです。

私事ながら古稀を過ぎ、社会生活においても、「和」を大切に、何事も一致団結物事に当たりました。

やはり思い出すことは、夏の合宿です。練習の行き帰りに、マラソンに精を出し、やっと「根性」が発揮されました。

YMCAや慶応大学の諸兄のコーチで、だんだんと試合も行えるようになり、慶応、明治、立教の3大学で始まったリーグ戦は、法政も加わり、4大学リーグとなりました。

さらに、関西の同志社をはじめ、全国の各都道府県にも協会が創設され、神戸では東西大学対抗試合を学連(学生連盟)として初めて行うことができました。

名古屋の愛知県庁の中庭で試合を行ったのも、懐かしい思い出の一つです。

その後、数多くの試合をできるようになり、下手ながらも身についた「我慢と根性」は当時のおかげだと思います。

社会生活において40有余年、一度も会社を休まず活躍できたのも、バドミントンで鍛えられた心身によるものであり、今でもこうして、ペンをとることができるのも、「和と根性」が身に滲み込んでいるからだと自負しております。

# 有馬よ、ありがとう

川端　昇市
(昭和25年12月卒)

ある夏の夕さがり、古畑と二人で有馬を見舞いに行く。薄暗い病床に横たわる。かつてのあの元気な姿がない。

バカヤロー、もっとしっかりしろ!

古畑の怒号が響く。後輩からの叱言にも、なんの反応もない。

悲しい!

古畑は涙を流しながら、さらに叱咤した。

クロスのバックハンドを得意とし、知的な雄弁と抜群の行動力を兼ね備えた男が、自木と一緒に、我が母校に進学してきたのは、いつ頃だったか。

そんなある日、当時監督だった私に、彼は突然、言った。

「プレーヤーとは、競馬場のサラブレッドと同じですよ。より優秀な品種(人材)を選び、よりよい環境(部生活)のもとで、厳しく指導してゆくことです」

その言葉は、なぜか私の心の底に、ずっと残っていた。

天才的サウスポー玉越を軸に、夏の合宿が長野の岡谷で行われた時、その言葉の「厳しく」が私の頭を

かすめた。

18キロもある諏訪湖一周に向かって、全員をスタートさせた。

上村のこぐ自転車の後ろに乗った私が、遅れがちな部員の尻を竹棒で叩いていく。

ゴール近くの諏訪神社手前の橋の上ではウサギ跳び、神社の急な石段では、秒読みで駆け上る。遅れれば再度挑戦、倒れれば、バケツの水が顔を直撃する。

誰の目にも鬼と思われる私の顔を、ただ一人、有馬は臆せず笑って見返していた。

そんな有馬が、プレーを捨て、いつの間にか部のマネージャーに専念してゆく。それは、彼が目をかけていた若きサラブレッド達が育ち始めていたにほかならない。

部生活の充実、この念願を果たした彼には、次のステップが待っていたのである。

彼の構想の中には、単に立教大学のみならず、全日本学生連盟を結集して、日本バドミントン界を世界に通用する組織に飛躍させたいという執念があった。

その尖兵として私が、全日本学連初の推薦理事として日本バドミントン協会に送りこまれることになったのは、彼が全日本学連の委員長に就任し、学連全国総会での承認を得てからであった。

それからは、私にとって大変なことになる。

昼夜を問わず、彼は毎日のように銀座の家に現われ、バドミントン競技のすべてについて数時間にわたって、ディスカッションを求めにきた。

その合間には、北海のキンギョも混じった。彼は疲れることなく、私もそれに応じた。こんなことができたのも、理解あるオバアチャンがいなければと、今でも思う。

彼の学連委員長時代は自身に対して過酷だった。病魔に襲われたときにも、それに臆することなく、担架に乗ってでも会合に出席するという、まさに身を削る毎日であった。

そして、幸いにも、有馬の願望だった我が部が日本一として喜び合える日が現実となって、彼の前に現われたのである。

仙台での全日本学生選手権大会(インカレ)で連戦連勝、慶応大学を破り、個人、団体とも初優勝をなしとげ、栄えある優勝杯を広田大会委員長から有馬自



昭和28年全日本学生連盟メンバー
(東北大にて、前列左側が故有馬OB)



昭和28年、第3回全日本大学選手権(仙台、東北大)にて
川端、故有馬両OB

身の手で受領したのである。

そのうえに、日本バドミントン界最初の解説者として、ラジオ中継を担当し、テレビ放送なき時期に、その名を全国に知らしめたのである。

仙台大会を皮切りに、京都大会、札幌大会とインカレ3連覇と勢いづいたさなかに私は監督を有馬に引き継いだ。

その後彼の的確な指導の証しか、日本バドミントン協会主催各大会の準々決勝以上のコートは、常に立教のカラー・紫紺でうまり、いまだ破られることのないインカレ7連勝の金字塔を打ちたてたのである。

私は中華人民共和国を世界の表舞台へと導く門戸を開き、佐藤(芳)・望月・片石・永井・小宮・坂垣(善)・大竹・谷口等は、日本代表ナショナルチームのプレーヤーとして、日本バドミントン界に多大な貢献をなし、板垣(隆)においては、韓国バドミントン協会を、身をもって指導し、今日の世界1・2位を争う地位にまで育て上げた。

また、折井・山崎は有馬の遺志を継ぎ、最後まで彼の仕事に協力し、有馬亡きあと、OB・OG・現役諸君のまとめ役として、部の行く末に全力をそそいでいる。

有馬よ、

お前の、最も愛した立教大学バドミントン部は、お前の精神を受け継いで生き続けている。

わかるだろう、皆のパワーを。お前のともした明るい灯は、永遠に消えることなく、部の道しるべとして、皆の心の中を静かに照らしている。

創立50周年のよき日に、有馬の面影を思い浮かべ、あらためて心から、有馬よ、ありがとうと申し上げたい。

# カーキ色のバドミントン

森本　友三郎
(昭和26年卒)

そうか、もう50年にもなるのかな……。

バドミントン部創部50周年記念事業の通知をいただいた時、私は自分のトシを忘れてあらためて歳月の速さに驚いたものです。

今、私の書斎の棚の上に、古ぼけた小さな「楯」が飾ってあります。黒塗りの板に、大学正門から時計塔を望む図柄の銀色のレリーフがはめ込まれ、その右側にはバドミントン部の記録が刻まれている、私にとってはたいへん懐かしい貴重な品です。

古い話で恐縮ですが、私は昭和21年春に九州から復員するとすぐ立教大学を受験、運良く合格しました。その頃の池袋駅周辺は一面の焼け野原で、駅前のヤミ市には「食」と「職」を求めて、真っ黒に汚れた顔に戦闘帽や国民服、モンペ姿の人々が終日

ウロつき、瓦礫の中の道路は進駐軍のカーキ色のジープだけが我が物顔に走り回っていました。

私が入学した予科1年の頃は、同級生の中にもカーキ色の旧軍服に戦闘帽、外被姿で通学していた人が何人もいたものです。

当時の私は下宿住まいでしたから食事はすべて外食券食堂。食べものといえばサツマイモかオカユのような雑炊、それに、かの有名な？ スケソウダラくらいなもの。通学の際、弁当箱に雑炊を入れて満員電車に乗るのはもう大変。弁当箱を傾ければ雑炊がこぼれてしまうから、学生帽の頭の上に載せて必死で通学したもので、至れり尽くせりの今の学生諸君には想像もつかない惨めなものでした。

そんな頃でも、私は何かスポーツをやりたくて、体育会の各部を見て回りました。私の中学生時代は軍事教練ばかりで、スポーツなどはほとんどやってませんでしたから、大学の運動部はとても興味がありました。しかし下宿住まいの腹の減った私にやれそうなスポーツは見当たりません。

そのうちに、学食近くの体育館で、見たことのないボール(?)を、見たことのないちょっぴり小さな細身のラケットでネット越しに打ち合っている学生達を見つけました。

これが「バドミントン」というものだと友人から聞かされ、「よし、これだ！これをやってみたいな」と思ったものです。これが私と「バドミントン」との出会いでした。

そこである日、そのボール(シャトルコックという名前は後で知りました)を追って来た部員の一人に恐る恐る入部をお願いしました。その人が誰だったか、どうしても思い出せないのが残念ですが、キャプテンらしい人(その人のお名前も忘れてしまったのはトシのセイでしょうか)に紹介してくださり、晴れて部員に加えていただくことができました。

今でこそ立派な「体育会バドミントン部」ですが、当時はまだ「バドミントン同好会」で「部」に昇格したのはその後1年ほど経ってからだったと記憶しています。

それからバドミントンの猛練習に参加しましたが、専用の体育館などもなく、毎日練習場が変わるというジプシー暮らし。諸先輩には何かとご苦労が多かったことと思います。



昭和26年3月卒業のOBたち
(前列左から森本、梅林、島田、後列左から寺内、瀬川、後藤部長、鈴木)

当時東京では慶応大学がインドネシアの留学生を擁してダントツに強く、立教は法政や明治にもなかなか勝てなかったものです。それでも部員達は、空腹と部費、小遣い不足に悩みながらも主将以下よくまとまって、遠征試合や合宿練習なども楽しい想い出ばかり。とても充実した素晴らしい学生生活を送ることができたことは本当に良かったと思います。

自慢にもなりませんが今年、私は「古稀」を迎えました。今ではバドミントンどころかせいぜい週1ゴルフと魚釣りを楽しむのが関の山となってしまいました。

しかし、私がいまだに現役で仕事をすることができ、健康でいられるのは、あの頃のバドミントンのお陰かなと、当時を思い出しながら感謝している今日この頃です。

# タイム・スリップ

菊池 醇
(昭和27年卒)

平成9年7月5日に「創部50周年感謝の夕」を開催し、記念誌を発刊するので、原稿を寄稿するようとのお話があり、光陰矢のごとし、もうあれから50年も経つのかと感無量のものがあります。

私が立教大学予科へ入学したのは、昭和22年(1947年)終戦後2年目の年でした。

荒涼とした東京の焼跡もまだ残り、極度の食料不足の大変厳しい時、茨城の片田舎から上京して、見慣れぬ状況にとまどったものでした。

しばらくするうち、バドミントンの同好会があることを知り、ひとつやってみようかと同じクラスの内海君、村松君等と入会しました。

私がバドミントンを知ったのは、昭和17年頃です。私の義兄が当時私の近くに住んでいて、水戸陸軍飛行学校の将校でした。その兄が大阪の出身で、当時東京の三越にもなかった、バドミントンのラケット、シャトルコック、ネットを神戸のデパートから買って来て、ルールブックと首っぴきで、家族で羽根つきがわりにゲームを始めました。

おそらく関東地方でバドミントンをしたのは私達の家族が最初ではないでしょうか。

このようなわけで、他の運動部はまったく考えずに入会したしだいです。

練習する場所も決まった所はなく、今日は東、明日は西とジプシーのようでした。

そのうち同好会ではと部に昇格し、またリーグ戦も始まり、慶大、法大、明大あとで早大も入りリーグ戦らしくなってきました。

練習も放課後だけでは強くならないと、夏休みに合宿練習することになり、鎌倉の方の海岸でやりました。食料難で各自米や調味料持参の自炊合宿で炊事当番は大変でした。

今手もとにあるアルバムを見ると、昭和24年の夏休みには、長野県の沓掛の旅館というより宿屋がふさわしい所の二階を借りての合宿のようすがあります。このときはちょうど夏祭りの最中で、木曽節の踊りを習い覚えたものです。合宿が終った後、鬼押出しへ出かけたのも思い出です。

昭和25年の夏休みは、アルバムを見ますと岐阜県の多治見市にある、虎渓山永保寺という禅宗のお寺で合宿した時の写真があります。初めて坐禅の体験をしたり、陶器の産地にふさわしく陶都中学という中学校の体育館で練習をしました。この中学校までは2キロ以上あったでしょうか。毎日精進料理でしたが、合宿最後の夜だけはトンカツが出ました。このときは、練習から帰る途中に「油のにおいがするから今夜のおかずは揚げものだ」といった者がいて、ぴったり的中したのには驚きでした。

昭和26年の夏の合宿はやはり、一昨年と同じ長野県の岡谷市でした。

練習が終り夕食をすませて、諏訪湖畔へ涼みに行くと、機織りの女工さんがいて、話しかけられたものです。

この合宿が私達学年最後の合宿となったわけですが、次の年にもやはり岡谷で合宿して、食中毒でひどい目にあったと風の便りに聞いたのも思い出です。

とりとめのないことを書いてきましたが、あの頃は、食べものもない時であり、経済的にも発展していく過渡期であり、また青春に悔いない学生生活だったかなと思っております。

立教大学バドミントン部の1部昇格が実現できたらなどと思っています。

# 体育館を借り歩いた渡り鳥

内海　冠次
(昭和27年卒)

かつての予科1年生、入学して1、2か月経ったある日、校内を歩いているところへ声を掛けられた。

「オイ！　バドミントンやってみないか、面白いぞ！」

と川端先輩。このひと声で入学後の午後をもてあましていた身にとって、やっと身の振り方が決まったようなものだ。

早速級友の村松君と図り腹は決まった。それにこの上級生は小学校の先輩、家も近いし風呂屋で顔を合せることもある。断わって他の運動部に入るのも具合が悪い……いささか不純な理由でバドの1年生の誕生だ。

数日後クラスの菊池、上田の両君も誘い、計4人の1年生が揃った。当時の上級生には旧軍隊帰りの人達もいて非常に年齢差を感じたものだ。中にはすでに社会人並みに商才に長けた先輩もいた。

お陰でダンスパーティーを開いて部費を稼ぎ出すこ

とも教えられた。慌ててダンスの教練場へ通ったりもした。

とにかく、できたての同好会では恐い先輩もおらず、やたらに気合いを入れられるということもなく、やさしい先輩ばかりだった。年季の入った角帽などをチャッカリ頂戴したりしたこともあった。

生まれて間もない、世間にあまり知られていないスポーツでは、経験者もなく、腕前の程はドングリの背比べ。特別にうまい先輩もいないことから、特に技術的に鍛えられることもなかった。そのかわり伝統のない同好会では、部室ももらえず、喫茶店なるものを部室代わりにしたり、道具を預けたりしていた。

また、練習場も思うにまかせず、都内の小学校の講堂や体育館を転々と借り歩く渡り鳥。それでも少しずつ腕前も上がり、当時あまり知られていないこのスポーツをPRするために、愛知県の県庁まで出向いて、ビルの谷間のコンクリートの上で、窓から首を出して見物している人達の前でプレーをご披露したこともあった。

慶応、明治、法政を含めた4大学のリーグ戦が開けるようになるのにはそれほど時間はかからなかった。慶応を除いてあとの3校は、ほとんど力の差がなかった。

慶応にはイスマエル君という留学生がいて、始めて間もない我々の目には、彼のテクニックは素晴らしいものに見え、なんとかそれを真似したくて一生懸命に練習したりもした。慶応には彼の他にさらに上手なプレイヤーがいた。広田君である。彼にはいつもオモチャにされた苦い思い出がある。我々だけでなく他校の人達も彼を目標に練習したものだ。

やはり楽しい思い出は合宿だろう。1年目の合宿は神奈川県の逗子、練習場は逗子開成中学(当時)を借り、宿泊は個人の留守宅を借り受けた。ちょうど小説の中の太陽族のモデル達が活躍した頃だ。

次の年は旧軽井沢(当時の脊掛)、駅前の商人宿のような旅館に泊り、練習場に借りた国道沿いの小学校まで往復2キロのランニング。今でこそ駅前からの道は商店も多く、人通りも多いが当時は駅から5分も歩くと真暗だったと記憶している。

3年目が伊豆古奈温泉。宿泊はお寺。正面に町の共同風呂(たしか無料)があり、お寺からお風呂へ出入りする人がよく見えた。

練習もそこそこに風呂に飛び込む。混浴だ。知っていて入った者、知らずに入った者、さまざまだ。やがてお座敷前の地元のお姐さん達が入ってくる。

初めは我々の人数が多かったが、間もなく数が逆転した。こうなると、まるでだらしがない。皆、すごすごと引き揚げた。後で考えると、どちらが楽しんだのかわからない。たしか出るに出られない者もいたはずである。ちなみにこの時の練習のことは何も覚えていない。

4年目の合宿は岡谷。諏訪湖近くに泊まり、毎日カッターボートを漕ぎトレーニング代わりにした。汗をかいた後はそのまま諏訪湖へドボン。藻が非常に多く気味が悪かった。

思い出は尽きないが、いずれも昨日のことのような気がする。

50年とは速いものだ。皆で築いた50年の歴史、誠にご同慶の至りだ。さらなる部史を積み上げるべく、ますますの発展を祈ってやまない。

# バドとの出会い

遠山 宏
(昭和29年卒)

小学校で水泳、中・高時代は野球と、スポーツには多少自信を持っていたオレだから、大学でも当然野球を続け、神宮球場での花形を夢みていた。

ところがである。

入部しようと訪れた東長崎グラウンドで目にしたのは、S監督の猛ノックと、そのバットでの殴打。もちろんヘルメットなどない時代だ。いい音をたてて頭を叩いているのを見て、「殺される」と恐怖心に襲われ一目散に逃げ帰った。

だが、勉強だけでは面白くない、何か運動をしたいと思いつつブラブラしていたある日、ひょいとのぞいた体育館で目に入ったのがバドだった。高校の体育で「ナンジャイ。こんなハネツキ」とバカにしながら2～3回やっただけのバド。でも、これならオレでもできると思い、その場で入部したのが、今日まで続くバドミントン部との出会いとなってしまった。

「初合宿」

新人初の夏合宿は、今でこそ時折思い出すと面白かったが、当時の合宿中は、ツラカッタ、サミシカッタ。

場所は岐阜県は多治見の虎渓山ナントカ寺。さみしい山の中の禅寺だ。朝は小坊主に叩き起こされる。境内のハキ掃除に始まり、便所の雑巾がけ(クセーンダナ、これが)。終ると「座禅」。自慢じゃないがアグラがやっとの短足・足ブトのオレにはこれがキツかった。少しでも姿勢をくずすと後から坊主が遠慮のない一撃をビシャッと肩へ。この時ほど坊主が憎いと思ったことはナイネ(クソ坊主の言葉がピッタリ)。同時に先輩を恨んだネ。誰がこんな所を選んだのかと。オレはバドの練習に来たのであって、坊主のマネ事をしに来たのではないと。

そして練習。これもキツかった。池袋のコート一面の体育館と違って、コートが多いのでサボレない、息抜きができない。そこにきて海兵帰りの某先輩の甘い誘い。ウッカリ相手をすると動けなくなるまで付き合わされる。

そして夜。ゴエモン風呂が2つ。ただし入れない。汲み出してカブルだけ。それもまず坊主。そして先輩から。待たされることしばし。やっと順番がきた時にはお湯はカラ。2日目からは近くの小川で汗を流す。流れに浸りながら仲間と「退部しようか」、「逃げ出そうか」と相談。逃げるにしても一山越えた駅までは遠い。そこまでの元気もない。結局全員最後までツキ合った。

高校の時から友人宅へ転り込んだり、キャンプに参加したりと放浪癖があり、あまり自宅が好きでなかったオレだが、この時ほど、家がなつかしく、帰りたいと思ったことはいまだ一度もない合宿ではあった。

# 座談会
# 『クラブ誕生物語』

昭和21年、終戦直後の混乱していた時代にアメリカに渡り、みやげにラケット、シャトル、ネットを持ち帰り、後輩に新しいスポーツとして、まず学内で広めるようにと託した立教ボーイがいたという。

ないないづくしの中から生まれたクラブが紆余曲折を経て、今日の50年を迎えたわけである。平成9年(1997年)1月18日、久方ぶりに集まったオールド立教ボーイは元気いっぱい。鮮明に残っている50年前のことごとを、つい昨日のことのように語りつづけた。池袋駅西口から焼跡ごしにキャンパスが見えた思い出から、部員集め、練習場確保、リーグ戦のスタート等々話題はつきない。青春をクラブの基礎づくりに捧げられた諸先輩のご努力に敬意を表すとともに、現在までをつないだOB諸氏の連携に思いを馳せたしだいである。

日時:1997年1月18日(土)
場所:アムラックス 4F「ル・コント」
<出席者>
昭和24年卒　武藤　欣吾
昭和25年3月卒　鈴木　旭
昭和25年12月卒　川端　昇市
昭和26年卒　島田　肇
司会　昭和37年卒　小宮　好雄
記録　昭和41年卒　松崎　正門

### キャンパスは混乱の中にも明るい雰囲気

**司会**　ひょんなことから50周年実行委員長を仰せつかったわけですが、私自身、部の存続の危機に瀕した話は幾度か聞いているものの、どのような経緯で誕生したのかという"そもそも"が意外と伝えられていないように思います。

今日は終戦直後のガサガサした時代にスタートしたバドミントンという競技がなぜ根付いたか振り返りながら、時代を遡ってみたいと考えております。

話のはじめとして、戦争をはさんで混乱していた学生生活についてお話しいただきます。


武藤OB

**武藤**　戦前は旧制高校が全国に20ありました。旧制高校は帝国大学の予科みたいなものでしたね。私はその中で最も新しい旧満州の旅順高校を昭和20年3月に卒業するのですが、入学願書を東京帝国大学に出したまま、その年の2月に兵隊に行きました。

昭和20年8月に戦争が終わり、大学へ行こうにも卒業証明書はないし、国立は駄目になり、昭和21年4月に立教大学の学部に入りました。

**島田**　当時の赤紙(召集令状)には勝てません

でしたね。

**鈴木**　私は名古屋出身ですが、私の兄の友人が水泳部で大活躍された太田さんでして、太田さんから中学時代に『立教へ来い、立教へ来い』と誘われたんです。


鈴木OB

**武藤**　あの名選手の太田さんですか。平泳ぎでしたか。

**鈴木**　いや、自由形でした。そんなわけで昭和19年4月に予科に入り、当時東長崎の水泳部合宿所に遊びに行ったりしてました。昭和20年5月の空襲で下宿が燃えてしまい、逗子に疎開し、逗子から通ったりもしました。


池袋本町付近（昭和21年）豊島区郷土資料館提供

昭和22年に学部に入ったのですが、当時の池袋は焼野原で、西口に出ると学校まで何もない、瓦礫の中を歩いたものでした。そのうちヤミ市ができたのですが、当時は食べ物がなくて、芋雑炊やすいとんを食ってしのいでいたんだな。

昭和24年の学部3年の時ぐらいには食事も何とか落ち着いた。銀座へ出てもいろいろ食うものあったからね（笑い）。川端君のうちが集合場所だったしね（笑い）。

**武藤**　そうでしたね。お母さんにはいろいろお世話になった。

**鈴木**　逗子のあとは八王子から学校に通ったわけだが、当時は新宿から高尾まで1本で行かないんだから。国電は立川止まり。国立から高尾が折り返しとなっていた。その列車も無蓋車で牛でも運ぶようなものだよ。棒にしがみついていたんだ。また、新宿からの電車も窓から乗り降りしたり、今の混むのとはわけがちがう（全員笑い）。要するに窓ガラスがないってこと。

**司会**　そんな状態でまじめに学校へ行ったのですか。

**鈴木**　学校だけは休まなかった。八王子を出る頃はまだ真っ暗、練習終わって帰る頃も真っ暗。往復2時間ずつでもへこたれなかったな。可愛いい女学生が2号車の2番目のドアから乗るなんて頭に入れていると結構楽しかったものですよ。学生時代の生活をひとことでいえば食い物で苦労したということだなあ。

**島田**　まったくそうでしたね。今日は何が食べられるか不安なまま学校へ行きましたね。


島田OB

**鈴木**　そばのすしなんてものもあった。台がシャリのかわりにそばで、その上にいわしの刺身がのってたやつ。早い者勝ちだから4時限目はさぼって並んでありついた。私は毎月名古屋に帰り、米を1斗（15kg）ずつ東京へ運んできた。実家が印刷屋だったから紙と物々交換で手に入

ったんですよ。

**武藤**　鈴木さんは奥の手があったからいいな。

**鈴木**　そのかわり名古屋から立ちんぼでデッキに乗り、リュックに米を詰めてつかまらないように東京に戻った。そんな時代だったからバドミントンをはじめたら面白くてね。……そういえば私は昭和20年の最後の徴兵検査を受けた。忘れもしない1月27日（といいながら徴兵検査通知書をおもむろに取り出す）（全員驚きの笑い）。

**武藤**　それは記念だ。大事にとっておいた方がいい。



終戦直後の池袋西口（昭和21年6月）豊島区郷土資料館提供

**鈴木**　汽車の切符が買えない時、これをみせるとすぐ買えた。3回使ったよ（笑い）。

**武藤**　私は学徒動員で入隊した時は伍長でした。豊橋の部隊へ入りました。

**鈴木**　私も10月に前橋の部隊に入ることになっていたのが、終戦で行かなくてよくなった。戦争にはいろいろな思い出がありますね。焼け出されて早稲田の下宿から品川まで歩いたり、辛いことが多かった。



川端OB

**川端**　私は銀座で生まれて私立の中学校から立教の予科に入りました。昭和20年のことです。当時の中学生は高学年になると勤労動員で工場で働かされました。私は門前仲町の日立の鋳物工場で働きました。戦時中は異常な世界で生活してましたから、今考えてみるとびっくりするようなことを平然とやってたりしたんですよ。空襲で亡くなった人たちをトタンの上で荼毘（だび）に附していながら、そのそばで弁当を食べたこともありました。人間というのも異常事態にはそれなりに対応してしまうものですよね。

上の兄貴が立教だったので自然に立教を受けた。戦時中で英語のテストはないだろうと思っていたら、英作文で「わが家」について書けと出たのには驚いた。仕方なく「ウチは広い」とか書いたような気がします。試験のあと聖路加病院で身体検査を受けて雪の中を帰ったことを覚えています。初めて立教のキャンパスに入った時の印象はすごく明るい雰囲気だったことですね。ユリのマークの予科帽はかっこうがよくて女学生にはもてた。学校より銀座を歩いたも



昭和25年当時の池袋キャンパス

んです。

**武藤**　もてたんだよね。

**川端**　でも足もとはゲートルまいてましてね（笑い）。

**武藤**　教練みたいなかっこうだ。立教の角帽、予科の丸帽はよその学校よりかっこうよかったな。

**島田**　予科帽は蛇腹がありましてかっこうがよかった。

私は川端さんの1年あと、昭和4年の生まれです。学制改革の波をもろにかぶった年代です。中学4年の時に戦争が終わり、昭和21年に受験したのですが、いろんな学校を受けました。戦地から帰ってきたオッサンのような人がたくさんいる中で、中学4年で受験するのだから年の差が5～6歳以上あった。こわい人ばかりでしたね。

立教の理科専門学校に入り、学部の時に経済に変わりました。戦争中は駒込に住んでいましたが、ご多分にもれず焼け出され、板橋に移りました。当時の生活はきびしかったですね。金がないしアルバイトに精を出しました。学校は休まなかったですが、午後3時から11時まで米軍基地でアルバイト。GIと組んでガードマンをやりました。給料は結構よかったのですが、何かものたらなかったところで出会ったのがバドミントンでしたね。

### 和気あいあいでスタート
### 部員の年齢差は8歳

**司会**　食べ物もなく混乱したその時代にどのようにしてバドミントンが広がったのですか。

**武藤**　よろしいですか。（おもむろに身を乗り出す）

昭和21年の10月頃と記憶してますが、当時のスキー部のキャプテンだった山本洋さんがぼくらの同期のスキー部員の村上君を介してラケット4本、シャトル20個、ネットを寄贈するといってきた。そして、このスポーツを学内で広めろと村上君を通じてぼくのところに話が持ちこまれた。

立教は伝統的にスポーツの1番バッターが多いんだ。バスケット、アイスホッケー、アメリカンフットボールとね。アメリカのスポーツの草分けになったのは、牧師さんがアメリカからもってこられたからなんだ。ぼくがどこのスポーツクラブにも所属していないからやれというわけだ。この山本さんというのが、まさに戦前の立教ボーイそのもの。派手やかな人で、終戦直後だっというのにオートバイで学校へ来るような人だった。

この道具を手に入れた私は、同期の人たちに見せて歩いて、まず鷲塚君と中川君が賛同してくれた。それから部員を募集しようと、学食の中に手書きのポスターを貼り、次に学食前の藤棚にも貼ったら、まず川端君、そして瀬川君、[illegible]入ってきた。

ラケットを手に入れてから1カ月もたたないうちに、クラブとしての旗上げができたわけなんだ。でもその中にはスポーツ経験者がひとりもいなかった。何はともあれ、予科の若い人を入れないことには部にならないし、学部の年寄は組織をつくり、予科生が選手になった。

**川端**　私はたまたま銀座を歩いていたら、運

を話してやりました。法政もそうですよ。

**鈴木**　学連の委員長は最初が慶応の六角さん、次が明治の梶間君、3代目を私がやった。

**武藤**　慶応は先にはじめていたから、先輩として尊敬しながら明治とまず手を組んだ。定期戦を始めようと金を出し合ってカップを作った覚えがある。その時の渉外担当は、立教が鷲塚、武藤で明治が梶間君だった。定期戦は立教から誘った。22年に始まった。




昭和24年9月秋季リーグ打合せの時、立教、明治、法政の幹部（於：法政大・飯田橋校舎）　法政大学OB中野博吉氏提供

**松崎**　明立定期戦のカップはその当時のものですか。やたらと古いんですよ。

**武藤**　明立定期戦は続いているのですね。

**松崎**　通算58回かと思います。

### リベラルをモットーに活動

**武藤**　50年というのはやはりひとつの歴史だと思う。草創期から充実期、強い時代、下落期、低迷期、復活期となるわけですが、強くなると強くするための選手集めに走るし、考える方もわれわれの時代とはちがうものになってくる。

上級生、下級生を区別してしかめっ面で相対するようなことはしなかった。強い時代の人たちが、うぬぼれだけで終わってしまっているかもしれない。学生生活の重要なことは、それぞれの人が自分の考えを持って生きることだと思う。そしてその考えを、後輩の人たちに語ることができたらいい教育になると思うな。

**司会**　現役の選手たちは高校時代に経験はあるものの推薦で入っているわけではないですから、実力的に1部、2部で戦える状態ではありません。しかし、3部に昇格しようと意欲的に取り組んでいます。

**鈴木**　1人でも傑出したのが出てくると全体のレベルが上がるんだ。ぼくらの頃は村松君が横浜のYMCAでやってたから、下級生でもみんながプレーをまねてうまくなった。次は玉越、白木となるんだ。

**司会**　草創期のクラブは、他の学校とくらべてどのような特徴があったのですか。

**島田**　立教の場合は、チームを作ろうという意思のもとに先輩がまず固まってくれて、和で集まってきた。技術的には慶応にとうていかなわなかった。

**鈴木**　たしかにかなわなかった。イスマイル選手や広田選手から1点取って喜んでたんだから。それも2ゲームで（笑い）。

**島田**　15-0、15-0がよくありました。

**司会**　実は鈴木さんから昭和23年当時の新聞をお借りしています。日刊スポーツ新聞です。

ご自分の名前が載っていたので残されたのではないかと思います（笑い）。

**島田**　これはすごい。懐しいですね。私も「立教島田のトリッキーなプレイは賞賛に価すると書かれたもんですよ。残念ながら残っていない」

(笑い)。

**川端**　この記事にはぼくの名前がない。試合に出てないとしたら鈴木さんがはずしたんだ(笑い)。

**鈴木**　いやいや川端、瀬川組はそれなりの評価をしてましたよ(笑い)。

**司会**　ところで当時の部活の中で上級生が下級生をしごくといったことや、いじめは本当になかったのですか。

**島田**　ないです。今日お集まりの方の中で私が一番下ですが、本当になかったですよ。

**鈴木**　初めてバドミントンやる者ばかりで出発点が同じだったし。

**武藤**　歴史をつなぐことを考えた時、死ぬまでバドミントンをやっているのなら、何年卒は誰々と意識しているでしょうが、多くの人は卒業するとクラブから離れ、監督やOB会の役員でもやらないと、青春の思い出としてのバドミントンだけが残るようになると思いますね。

**島田**　クラブがスタートした時から多少変わったとしたら、私らの時代からでしょう。あることをきっかけにピシッと筋を通すことがありました。

**松崎**　お話を伺っておりますと、草創期の皆さんは紳士であり、わが部ができた経緯を知って意外に思う面がありました。我々の時代の方がむやみになぐられたり、罰をやらされたりしていたわけです。私は部を作られた方々が兵隊から戻られた人たちなので、それで伝統になったと思っていました(笑い)。体育会とはこういうものだと(笑い)。


松崎OB

**島田**　それはないですね。

**武藤**　実はねえ、そういうことがいやになって学校ではスポーツを始めたのですよ。軍隊ではないクラブ活動をね。そういうことは避けようというのが基本ですよ。軍隊や教練や勤労動員で、ばかばかしいことをいやというほど経験してますよ。

**島田**　クラブの目標は何かというと、とても難しかったけど、慶応を倒すことだった。そこに向いてました。

**武藤**　たしかにそうでしたね。でも私は部としての活動を、他のどこよりも先にやったことを誇りに思ってますよ。ぼくが大事だと思うのは組織です。機構というものを作っていくこと。プレーのうまいまずいよりも、まとまって斉々と動いていけることが、大学スポーツのあり方だと思うんですよ。学生時代だからこそできることだと思いますね。

**司会**　今日は50年前を思い起こしていただきながら、どのようにして部がつくられたか、どんな活動を続けてきたかを語っていただきました。

このあと強い時代へとつながれてゆくのですが、強い時代の立教は高校プレーヤーからみるとあこがれの学校から、しだいに敬遠したいすごい部活動の学校になっていたように思います。ところが草創期はそうではなく、リベラルで自由闊達な創造的なクラブ、運営であったことを教えていただきありがとうございました。

Chapter-2

# 天才監督と黄金期

## 1955-1960

昭和30年～昭和35年OB

# バドミントン部に在籍して本当に良かった

白木　靖男
(昭和30年卒)

岡谷の道場、浜名湖、横浜の蓮光寺、高岡などなどでの、楽しくも苦しい合宿生活が、昨日のことのように思い出されます。中でも岡谷からボートで上諏訪への縦断中悪天候に見舞われ、方向がわからなくなって恐しかったこと、急な石段登りやマラソンなど、特に印象深い思い出です。

顧みますと、私が入部した当時は、諸先輩にお叱りを受けるかもしれませんが、運動部とはほど遠い同好会程度のものでした。

それが、若くして他界した同期の有馬英三君のひとかたならぬ情熱と努力によって、バドミントン界のトップに君臨できるようになったもの、と言っても過言ではないと今でも思っています。

マネージャーとして、またプレーヤーとして、体が悪いのにわがままな私を引っ張ってくれました。彼には感謝の気持で一杯です。健在であれば、経営者としても立派に成功していたと思います。

過日、力石君の代の人たちに、山形方面の旅行に誘っていただきました。とても楽しい数日でした。本当にありがとうございました。バドミントン部に在籍していて良かったとつくづく感じました。

私も現在、30代、40代の人たちと仕事をしています。加齢により体力は衰えますが、できる限り頑張りたいと思っています。

# 「打倒慶応」から世界への道

佐藤　芳朗
(昭和31年卒)

関東大学リーグがスタートしてからの5年間は慶応のためのリーグ戦といっても過言ではなかった。「打倒慶応」がわが校にとって大きな目標であり、目標達成のための苦闘、工夫が新しい歴史をつくることになる。

昭和25年に玉越、26年に白木、有馬に続き、27年には佐藤、山崎、尾崎、金居、服部等高校の時から活躍していた選手達が入学し、常勝立教の土台をつくることになる。昭和28年には宿願のリーグ優勝を果たし、インカレでも団体戦、個人戦と制し、黄金期へと入る。

「打倒慶応」のリーダーを努めた佐藤芳朗OBに

当時の取り組み方などについて語ってもらった。(聞き手：小宮好雄)

――インターハイ(全国高等学校バドミントン選手権)は昭和25年のスタートですが、佐藤さんは優勝校の出身ですね。

**佐藤**　横浜の関東学院高校が出身校で、第1回、2回と勝ったわけだが、自分が活躍したわけではない。競技を始めたのが高校2年からだから高校3年の第2回大会の時、ダブルスで出場したくらい。当時の選手としては背が高い方だったので、立教がそれに目をつけて受験してみないかと誘いがあった。入学してみると同期に高校時代からの経験者や、大学から始める仲間まで10名を越すメンバーが揃った。当時の慶応は4年生の広田さんはじめ強い選手で固めていただけになかなか歯が立たなかった。

――　慶応を破るための特別な練習がありましたか。

**佐藤**　1年生の時は団体戦、シングルス、ダブルスとも2位。くやしい思いばかりだった。このくやしさがバネになり、自分自身を練習に向かわせたと思う。2年になり、強い後輩達が入ってきて、初めてリーグ戦に優勝することができた。当時の練習は、あちこちの体育館を借りて歩くジプシー生活で、横浜の神奈川体育館や麹町の小学校、王子の体育館とまわったもので、一定の場所ではできなかった。メンバーが毎日練習するわけではないので、練習の時は必死だった。折角コートに入ったからには、長い間コートを占領したかった。ゲームで負ければ出なければならないし、出れば壁打ちしかないのだからね。コート練習が少なかっただけに真剣な練習になったわけだ。練習日でなければ、自主練習といってトレーニングをするか、出身高校へ出かけて、高校生を相手に自分の新しいプレーを開発したり、学校の仲間ではできない練習もお互いにやっていたのではないかな。

当時から社会人になっても続けていたのは、家に帰ったら、どんなに遅くても毎日ランニングとなわとびをやること。自分の生活リズムの中に入れてしまったことかな。

――　いうのは簡単ですが、なかなかできることではないですよ。わたしなんか断続的でしたね。ところで昭和29年に日本が初めてトマス杯(第3回)に参戦したわけですが、選手として目が世界に向いていたのですか。



昭和28年 全日本大学選手権出場選手（後列左から4人目が佐藤OB）

**佐藤**　1年生か2年生の時だと思うが、ニュース映画で偶然バドミントンのゲームシーンが出てきたんだ。多分全英選手権ではなかったかと思う。衝撃的だったよ。海外のプレーヤーを初めて観たわけだろ。その時はいつかは海外でやってみたいなあくらいの気持ちだった。

当時は海外に出かけるには外貨の割当てがなければ実現しなかった。それが3年生の時に第3回大会アジア予選1回戦香港戦に岡、杉田、武田、上田、望月(立教)とともに選手として出場したわけだが、選手は全員学生だった。

香港へ出かけて初日はシングルス2試合、ダブルス



昭和29年トマス杯予選（香港にて、大会会長と握手しているのが佐藤OB、左から杉田、望月OB武田、上田、佐藤OB、岡）

2試合すべて負けてしまった。負ける理由はあった。まず道具がちがう。こちらのラケットはオールウッドにナイロンを張ったもの。向こうはスチールシャフトにシープを張り、その上使用球は水鳥のR.S.Lだから打球感が違う。さらにコートは経験したことのない石の床だから、初体験ばかり。夜スポーツショップでラケットを仕入れ、翌日の試合で使ったら、いい勝負になり2日目だけをみれば3-2で勝ったんだ。結果は6-3で負けたけど、今度は勝てると思ったよ。

―― 次は3年後の第4回大会ですが、この時は監督に川端さん、選手は佐藤さん、片石さん(故人)、永井さんの立教勢に慶応の越川さんですね。

**佐藤**　コーチの伊藤さん入れて総勢6名でギリギリの編成だった。1回戦はセイロン(現スリランカ)と当たり、コロンボに出かけて9-0で勝ったが2回戦のタイ戦は外貨割り当てがなく棄権となってしまった。情けなかった。

―― 日本は第5回大会は最初から参戦せず、第6回大会に参加するわけですが、昭和39年5月に東京でインターゾーン、引き続きチャレンジラウンドと開催されるわけですが、その背景やコーチとして参加された裏話は？

**佐藤**　小宮だって知ってるだろう。選手として出たんから。

―― プレーヤーとして知ってることは限られてますよ。うまいもの食わせろとか練習は休みにしろとかだだをこねたのは覚えてますが…

**佐藤**　確か昭和38年だと思うが、I.B.F(国際バドミントン連盟)が東京開催を決定したわけだ。協会には金がないわけだから、文部省に補助金を申請したら、日本が出場できないような大会には出せないといわれ、何が何でもゾーン予選を突破しなければならなかった。

監督の川端さん、コーチに佐藤、選手が永井、小宮、板垣の立教OBに、堺(早大OB)、宮永(慶応OB)のメンバーで、勝てそうなアメリカゾーンにエントリー



昭和33年 第3回アジア大会（東京）
日本協会本田会長（後列左から3人目）と日本、タイ台湾の代表
（前列左端が佐藤OB、後列右から2人目が川端OB）

した。情報が少ない中で、昭和38年3月の小宮の全英、全米選手権の出場経験を生かすことに賭けたようなものさ。その時も金がないから事前に根回ししてメキシコ、カナダ、アメリカとぶつかることを想定して転戦することにしたわけ。

羽田出発から帰国まで約40日間の遠征だったが、その間にカナダ選手権、全米選手権にも出場したし、インターゾーン出場権も得られたのだから、結果オーライというものの、内心は薄氷を踏む思いだったよ。

―― 選手も自覚はしてましたよ。勝たなければ帰れないというプレッシャーはきつかった。日本に帰った時にはインターゾーンに備えるよりもトマス杯は終わったというのが正直なところでしたね。

ところで最近の日本のバドミントン界について感じられることはありませんか。

**佐藤** 寂しいね。根性論をいうつもりはないが、勝つ近道はないと思うんだ。どの時代もプレーヤーにとっては技術とともに基礎体力の養成が必須条件だと思う。コートに入った時の集中力、勝とうという意欲、追い込まれた時にふんばれる気力、すべて練習に裏打ちされているんじゃないかな。オレはこれだけやってきたんだと思えるものがあるのか…。筋力トレーニングだけでは解決できないものがあるような気がするな。

次に感じるのはプレーが型にはまりすぎていはしないかということ。個性的なプレーヤーが育ちにくい。指導者として何を伸ばす、自分として自分のプレーを見つめられるのか。

気持ちさえあればプレーヤーは強くなれると思う。やらされる練習ではなく、自分に課したことをこなしていく毎日の積み重ね、また時間を生かす工夫。好きなら乗り越えられると思う。

――貴重なお話をありがとうございました。

# 学連だけの4年間

**野村 昌宏**
(昭和31年卒)

「お前は学連をやれ」と鬼のマネージャー、おっちゃんこと上村さん(故人)に言われたのは1年生の後半、正月過ぎの頃だったと思う。

バドミントンは中学3年から始めて、一応球は打てたが、同級生には本職がごろごろいてとうていレギュラーになれるわけはないしと、学連委員を仰せつかった次第。一般入部部員でもいばっていられる役回りだし、練習も適当にしていればいいと考えた。上級生の員数不足から早くなった役付きだが、部内では下級生でも学連に出れば、他校の上級生の委員と対等に付き合えるなど良い経験をさせてもらった。

レギュラーでもないのに、インターカレッジは神戸・仙台・京都・札幌と4回とも参加できたのも、学連委員の役得と感謝している。プレーしたのは学連に出

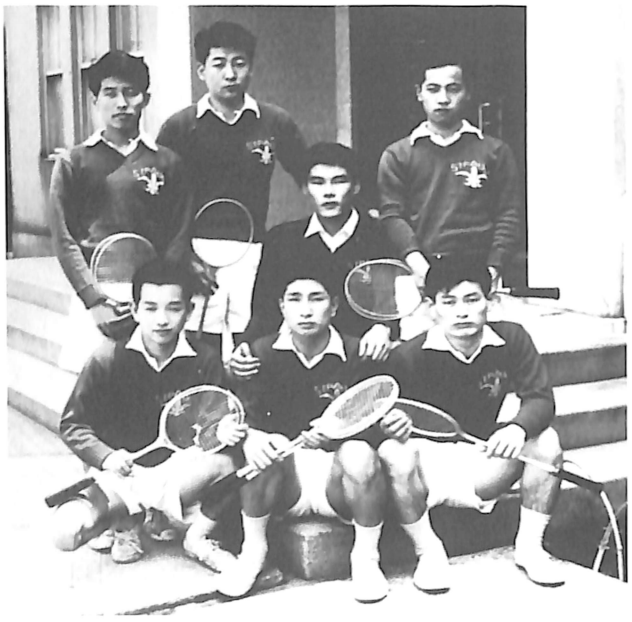


昭和28年全日本大学選手権において、ついに「打倒慶応」なる
(トロフィーを受け取るのは故有馬OB)

る前の神戸だけで、ダブルス1回戦で負けて、すぐ逃げだして京都に遊びにいったのを覚えている。仙台では初優勝、京都では慶応との決勝での逆転勝ち、札幌では川端OB会長夫人の娘時代のういういしい姿など、楽しい思い出を数多く持たせてもらった。

学連事務所は、当時お茶の水にあった体育協会(現在の日立製作所のところ)内にあり、ちょうど開通した地下鉄丸の内線で毎日のように通った。お茶の水駅の近くの喫茶店ポンブラン(今はない)に入りびたっていた。慶応・竹尾、法政・相原、勝俣、明治・七尾など他校の委員の方々の名前を懐かしく思い出すことができる。

ランキング上位に立教勢がひしめいていた時で、インカレの組合せで同志討ちにならないようシードを決めるのに徹夜で苦労したことや、関東選手権では自分も1回戦ぐらい勝つためにと他校から勝てそうな相手を供出してもらったり、学連委員同士で試合をしたりと苦楽ともどもの思い出がある。



昭和31年卒業OB(前列左から古畑、佐藤、野村、後列左から山崎、一人おいて故尾崎OB、金居)

部内の思い出はやはり合宿のことになるが、1年の時の岡谷での赤痢騒ぎ、4年の時の諏訪湖一周マラソンは走らずに下見の時と本番の伴走と自転車で二周したことなどが懐かしい。

こうして思い出をたどってみると、部も学連もまだまだ黎明期でおおらかな良き時代であったと思う。

良き時代に良き友人、良き先輩、良き後輩と巡り会えたことに感謝する。

# 創部五十年 往事汀々至忘却
# 我徒不望栄光 唯望継承

力石 潔
(昭和32年卒)




昭和28年、全日本学生選手権、川端監督と各選手(左から新倉、山崎、佐藤、川端監督、力石、望月)

# 創部50周年にあたり

望月　文雄
(昭和32年卒)

創部50周年にあたり、原稿を依頼され、筆を持って考えたら自分の人生も半世紀にわたって生きてきたことを確信し、感無量の境地になっております。

思えば昭和28年入学し、32年卒業までの4年間は学業? に明け暮れた。短かかったけれど、今思い出せば自分の人生のなかで一番思い出のある時期であったと思うし、有意義な時期であったと思えてならない。原稿を書きながらその時々の思い出と、思い出に関わった人々の顔が走馬灯のように思い出されます。今さらながら自分の人生が温かくご支援いただいた多くの仲間の温かい友情により、現在の小生があることを思い出しながら筆をとっていることを、まずもって、皆様方にお知らせし、本文に入らせていただきます。

これから申し上げる学生時代とは言えば、すでに40年も経過し、昔の話になると場所も日時も明快に記憶しているわけではなく、自分ではつい昨日のような気がすることも、一昔前のことだったりする事柄が多いため、つじつまの合わない事柄も多々あることをお断りさせていただきます。

当時の思い出のなかで今でも思い出されることは、試合の思い出より合宿等同じ釜の飯を食った仲間との出会い、交流、仲間と一緒に体験した苦しみ、楽しみです。今でも当時の仲間と会うと共通の話題になるのは、入部早々の横浜での合宿に始まり、浜名湖、栃木、諏訪湖等々、共に楽しみ、共に苦しみ、自分の根性を涵養していただいた場所や、意地悪? な先輩等の思い出が今でも脳裏に残り、共通の話題にはこと欠かないことです。バドミントンが上手になることより、いかに根性を持ってことに当たるかを体をもって鍛えてくれた先輩諸氏に感謝? (当時はブッ殺したいほど憎かった→これも同期の共通話題)しながら、当時の思い出のなかで、今でも私自身のなかで脳裏に残っている事柄をご披露させていただきます。

合宿生活で必ず思い出されるのは、同期の佐藤劭君(若くしてガンで他界)のことです。浜名湖合宿の帰り熱海で下車し、合宿での垢を流して帰ることを急遽同期の皆で決定し、熱海大衆温泉プール風呂(混浴→これが目的?)での入浴中でのこと。

佐藤君は一人潜水し水面から首を上げたところは若い女性の真ん前でありました。そこの場所からしばらく動かなかった仕種について同期一同、今でも集まるたびに話題となります。つまり佐藤君＝熱海温泉プールの思い出話となります。彼は若くして他界し、もう少し人生の楽しみを味わってほしかった人物だけに思い出があるのかも知れません。

また諏訪湖周辺に家族と旅行するたびに家族に話す、合宿生活での諏訪湖一周(約20km?)の思い出があります。夏の合宿故、炎天下のなか、体から汗も出なくなり皮膚の表面は塩で真っ白。途中水も飲めずに、体をいじめることが目的? の合宿生活でした。

今思えばよく体がもったと申せますし、体をいじめることに挑戦できたから腕が上がったとも言えます。

そして進級することにより、後輩をいじめる楽しみ?を覚え、自分の体をいじめることに挑戦しなくなったときから、つまり挑戦を強要されなくなってから、私のバドミントンの腕は落ちる一方であったことも、これまた事実でした(早くから日本の頂点に立ったことの満足感もあり)。

また私が最上級生の栃木での合宿で、夕飯時に新1年生の永井君(昭和35年卒)がいないことに気がつきましたが、理由は昼間の練習怠慢の罰で、隣接しているグランドを走らせていたことをすっかり忘れていたしだい。当時はあまり気にしていませんでしたが、後年本人から言われて以来、そんなしごき方をしていたのかの反省の上に立ちながら、記憶に残っていることの一つです(実際は本人を強くしたいから自分の納得する手段、方法でしごいた結果)。

私が在籍していたころは全国敵なしの時代でしたが、私は個人戦ではそれなりの戦果を挙げていたと自負しておりますが、どうも団体戦では先輩達の期待を裏切ることがあったようです。

2年生のリーグ戦で、同期の新倉君の敗戦で対慶応戦に敗れ、その年のリーグ戦優勝を逸したことで、二人とも敗戦の責任を取らされ、坊主頭にさせられたことなどは、同期の集まりの時に必ず話題となります。当時は学帽必須の時代でしたので町を歩くときはごまかせましたが、帽子をとることが苦痛でしたし、私にとって悔しさナンバーワンの思い出と言えます。

新倉君などは、この時の先輩をブッ殺したいと本当に思っていたようで、先般同期会に白木先輩のご参加を仰ぎ、その話をしましたが、本人は坊主になれと言った当事者だったにも関わらず、すっかり忘れておりました。

しかしどんなことでも笑い話でものが言えることが同期会の楽しみであり、毎回同期会に参加のゆえんでもあります。



昭和28年、仙台における全日本学生選手権祝勝会

また団体戦での苦い思い出だけではなく、いつまでも団体戦の印象に残る思い出として、京都でのインカレ団体決勝戦(対慶応)は、いまだに脳裏から離れません。ダブルスに連敗し、シングルス戦トップの場面に直面し、誰もが敗戦を覚悟したとき、先輩(白木氏)、今は亡き有馬氏の祈るような私への眼差しに発奮し、前日の個人戦準決勝戦で敗れた岡選手に勝ち、以下シングルスを連取し、優勝した思い出は有馬、白木両先輩の笑顔と、ダブルスで敗れた後輩の加藤君が私に喜びのあまり抱きついてきたこととともに、今でも脳裏に焼きついています。

学生時代は、全国大会を含め全国津々浦々各地に旅行させてもらったことも、今は亡き両親の経済的援助もあったればこそと感謝しております。その数ある中で札幌で、行われたインカレで片石(故人)、加藤両君の実家にごやっかいになり、無事大会に優勝したことや、その際監督の川端先輩が奥様を見初められ、現夫人との逢瀬のため我々を見捨て? 我々選手だけで帰京させられたこと。その帰路、青函連絡船上(当時は連絡船しかなかった)で寝冷えし高熱を発し、青山学院大の小野寺君の実家(実家は盛岡で医院開業)に2、3日ごやっかいになったこと等、短い部生活上でのいろいろな出来事の思い出が、その場所場所で沢山残っております。

また、当時のバドミントン部は今の部同様経済的に苦しく、練習場やシャトル代等の捻出に歴代マネージャーの方々は大変ご苦労されておりましたが。時代の変遷のなかで、当時バドミントン部主催で永楽倶楽部等でダンスパーティー(一流バンド出演で一晩千人近く)を開催し、部員皆が割り当てでパーティー券を売り歩き、大勢の皆様においでいただき部の財源が大きく潤ったことなど、いまなら考えられない昔の良き時代の思い出も残っております。(パーティーに



昭和28年全日本大学選手権会場にて、立教・同志社両校メンバー
(前列左から3人目が望月)

若い女性が大勢来ていただいたのが楽しみの本音でした)。

また、昭和30年前後の我が国バドミントン界は、ようやく遅ればせながら世界に進出の機運が出始めたころで、日本バドミントン界初のトマス杯予選(対香港)で佐藤先輩共々、海外試合一期生として海外で戦わせていただいた。コートからスタンドを見上げると、横の切れた洋服からスンナリした足が出ていたのが気になって試合にならなかったこともありましたが、結果は国際球(水鳥)に対する経験不足(プレーの内容がまったく異なった)で惨敗でした。

当時香港は対日感情も悪く、日中でも単独歩行危険といわれたことや、現地YMCAの方のご案内で食べた中華料理の味はいまだに忘れません。また日本領事館の心温まる領事官邸での夕食会や、香港YMCA主催の香港大学生との懇談会で、現地学生に日本の学生はなぜ英語ができないのかと言われて恥ずかしい思いをしたこと、乗った飛行機がプロペラ機(ジェットは当時なし)が古く、故障が多いと驚かされ出発したこと、帰路台湾に寄り帰化台湾の方(日本人)にお世話になったこと、対日感情の問題で台湾憲兵隊による警護のなかで模範演技をしたこと、ホテルの部屋にバナナ山盛り(当時では考えられない)が配られたことなどなど、いろいろなことがつい昨日のように思[illegible]

しかしながら、この初の海外戦を契機として我が国バドミントン界全体が、木製ラケットからスチールラケットへ、シャトルが鶏から水鳥に変わり、以後毎回トマス杯に参加し、その何年か後には女子ユーバー杯で世界一になったことを知っている人が今何人いるか? 時代の変遷は早いもので、自分も、バドミントン界に少しはお役に立てたのではないかと自画自賛しております。

たまにテレビでジャパンオープンの試合を見ることがありますが、世界のトップレベルと我が国との格差は当面広がりこそすれ縮まらない、と危惧しております。

何年か前に、我が国バドミントン界の再生について話す機会(雑誌社の主催、永井君、小宮君等同席)がありましたが、その時私みたいな人間はコーチ役には向かないのではないか? 理由は皆逃げ出すからと言われ大笑いしたことがあります。列席した永井、小宮両君は、私の現役の頃のしごき方を話していたのですが、私の今までの人生の生きざまで、苦しい時、体でしか体験できない根性優先の考え方の古い人間を、現代の合理主義の方々は理解できないのかなとも思いました。どんなスポーツでも、体験した者だけがクリアできる実践論に理屈はないと思っています。スポーツ競技の苦しさは、体験した者だけが理解できるもので、その苦しみの限界、判定は自分がするものではないとも思っています。自分の苦しみ、努力よりもっと苦しみ、努力している人は沢山いる。ちょっと有名になると天狗になる……。スポーツはタレントではないと思っております。

つまり、自分の生きざまを他人に束縛されることにより自分の進歩があると考えております。もちろん、本人のやるという意思が最優先することは言うまでもありま[illegible]私たちの時代は先輩絶対の時代であり、理屈、言い訳無用でした。それがよい意味での反発を生み、そこから負けまいとする反発心が競争心を生み、次なる挑戦へのステップの基礎となり、当バドミントン部の黄金時代を築いていったものと確信しております。私は古風な人間かも知れませんが、この風土は正しいと思っております。

問題は、やらせる権限をどこでどのように使うかで相

手の受け止め方が決まると思っております。理屈抜きにまず実践することが、いまの時代に必要ではないか、そんな時代に憧れております。

今ではバドミントンをやってて本当に良かったと思っていますし、私を取り巻く素晴らしい仲間を誇りに思っております。

人間元気なときはどうでもよいですが、卒業して40年、歳をとるにつけ毎年同期会を行うようにしています(実際は仲間に同期会をするように強制的に頼んでいるのですが)、バドミントン(喜怒哀楽)を通じて、共通の話題を持つ者同志が集まって、若かりし昔は異性の話、2～3年前は年金の話、今は孫の話。でも元気な同期生の顔を見るだけで生きている楽しみを感じる今日この頃です。また会う日まで元気でいることが同期会の約束ごとです。

まだまだ書きたいことが沢山ありますが、思いつくままのまとまりのない文言でご理解できないことも多々あったことをお詫びし、併せバドミントン部創設以来半世紀にわたって携わって来た方々のますますのご健勝と、若くして他界された方々のご冥福をお祈りします。

また50周年誌創刊についてご尽力されている方々のご苦労に感謝し、次なる100年誌の土台を築くことを願望するとともに、現役諸君のさらなるご活躍を期待し、筆を置かせていただきます。

# 忘れられぬ思い出

新倉　和男
(昭和32年卒)



昭和28年5月、関東大学リーグ宿願の初優勝(神田・国民体育館)



昭和30年、第6回全日本大学選手権、札幌立教会による祝賀会(後列右から2人目が新倉)

時の経過はまことに速いもので、いつの間にか卒業後40年も経ってしまった。

しかしいつまで経っても、バドミントンの部生活を通じ、現役時代苦楽を共にしてきた同僚たちとの友情は今でも続いているのである。

われわれ32年卒業の天海、漆山、小西、力石、望月の5君に私を含め6人の同期生は、いつからかははっきり記憶にないが、必ず毎年1回、近くの温泉への一泊旅行が恒例となっている。会えば、やはり共通の話題である現役時代の思い出話に花が咲くのが常である。

この同期会、一昨年(1995年)11月の山形蔵王温泉への旅には、初めて川端会長や白木先輩のご参加を得てなおさらのこと、昔懐かしい記憶がよみがえり、時の経つのを忘れるほど楽しいひとときを過ごしたものである。

その際には、山形市在住の昭和36年卒板垣OBにも観光地へ案内してもらいお世話になった。

さて、現役時代の嬉しかった思い出といえば、何といっても昭和28年春季関東学生1部リーグ戦で、宿敵慶大を破って初優勝を遂げたことである。

この年の全日本大学選手権にも初優勝を果たし、当時の素晴しい先輩や同僚たちと喜びを分かち合った記憶が昔の写真を見ていると、つい最近の出来事であったような錯覚に陥るのである。

この後も、後輩たちの努力によって全日本7連覇が達成されたのは、我が部の歴史が示すとおりである。

昭和30年8月の選手権は札幌で開催され、3連覇目となったのであるが、喜んでばかりもいられない。実は今だから話せる困った出来事が起きたのである。

試合を終えて、その夜は札幌立教会の皆様方に祝勝会を催していただき、翌日意気揚々と札幌を後にすべく、木箱人の優勝トロフィーを持って駅のホームで汽車を待っていたのである。

当時は旅客機など飛んでおらず、東京までは2日がかりの長旅である。汽車を待つ間疲れたので、同僚の望月君と不謹慎にもついこの木箱を置いて腰掛けたのである。するとその直後バリバリという音をたてて、ふたが真っ二つに割れてしまい、2人ともももんどり打ってホームに転倒したのである。

帰ってから箱を直せばと思い、念のため中を開いてみると、何とトロフィーの女神ブロンズ像の足がポッキリと2つに折れているではないか。持回りトロフィーのため、来年は返還しなければならず、思案の末、帰京後何日もかけて本物に似ているブロンズ像をやっと探し求め、付け換えたしだいである。

現在この優勝トロフィーはどうなっているのであろうか。思い出すと今だに気がかりな出来事ではあった。

さてこの思い出多い札幌大会でもう一つのエピソード、それは会場の放送係をつとめていた素晴らしい美声の美人女性がいたが、この女性こそ、この大会に我々チームを引率した川端現会長の京子夫人である。めでたいことではあるが、そのいきさつについてはあまり知らされていない。諸兄のご想像にまかせたい。

過去の戦績はともかくとして、ともに部活動を通じて築かれた先輩と後輩、そして同期の仲間同志といった縦横にわたる強固な素晴らしい人間関係は不滅であり、創部50周年を機にいつまでも大切にしていきたいものである。

# バドミントンとの出会いと楽しい仲間たち

天海　正樹
(昭和32年卒)

入学はしたものの、学校と下宿の往復だけで友達もなく、むなしい学生生活を送る日々がつづいていた時期がありました。

大学時代を通して、何か今後の人生に役立てるようなことはできないかと考えました。

中学、高校2年までバスケットをやっていた経験から、何か運動を通してそのチャンスがあればと考えました。

当時の知識として、バスケットは全国トップクラスのレベルで、自分などとうてい及びもつかない存在でした。同じクラスにヨット部の部員がいて何回となく入部をすすめてくれました。が、海なし県で育った私にとって不安があり、断りつづけました。

そうこうしているうちに、当時はやり出したバドミントンという競技があるが、まだ歴史も浅いし羽根つきの親分ぐらいにしか考えていなかったもので、まったく簡単な気持で入部を決意しました。

競技の知識もまったくなく、当時のバドミントン部の現状などわからぬまま入部した私にとって、全国トップクラスの選手がごろごろいる集団だとは、予想もしていませんでした。

ラケットも一度も握ったことがなかった自分がはずかしく、かといってすぐ退部するのも男気がなさすぎますし、すべて忍の一字で耐えるほかありませんでした。

ハイレベル集団のトレーニングたるや、並のものでなく想像をはるかに越えるものでした。リーグ戦優勝はもとより、札幌で行われたインカレでの団体・個人戦各タイトルの奪取など数え切れないほどの喜びの連続でした。

しかし私にとってこの喜びよりも、連日行われたトレーニングの方が強烈に脳裏に残っております。このトレーニングを通して力強いチームワークが育まれ、またとない生涯の友ができました。

プレーの練習よりもランニングを含めた体力づくりがより強烈でした。全員によるランニングでは、時には西に向って哲学堂方面まで、また時には女子大生を意識して? 目白通り、明治通り方面へ出かけました。佐藤先輩や後輩の故片石君などマラソン選手顔負けの走りで、ついて行くのがやっとでした。さすがに全日本を制覇するような人の体力は並はずれのものがあり、感心させられました。

ある寒い途中からミゾレまじりの日、神宮外苑までの往復を走ることになりました。どうにか神宮までたどりつきホッと休みましたが、急に体が冷えたため、足にケイレンを起こし走れなくなった人が出てしまいました。

たまたまその場を通りかかった元ボクシングフライ級世界チャンピオンの白井義男氏とカーン博士の目にとまり、君達は何部の選手かと聞かれ、これほどまでのトレーニングをするのかとおどろかれ、学校まで送ってくれたことを思い出します。

夏の諏訪湖での合宿では、湖一周のマラソントレーニングが行われました。ちょうどその日は30度を軽く超すような暑い日で、アスファルト道路が日射の強さでやわらかくなっており、想像以上の苦しいトレーニングでした。

その他久里浜、浜名湖鷲津、宇都宮での合宿と、体力づくりを主体としたトレーニングは数え切れないほどありました。卒業して40年にもなりますが、当時のことが手に取るように思い出されます。

わずか4年間の短い期間でしたが、この苦しみの中から生涯の友ができたことは、私にとって大きな財産となりました。

最後に故中川先輩、三谷先輩、土村先輩、有馬先輩、瀬川先輩、尾崎先輩、佐藤劭君、片石君のご冥福をお祈り申し上げます。



昭和31年夏、久里浜における合宿

# 片石君の想い出

加藤　正則
(昭和33年卒)

片石との付き合いは、今から遡ること47年、昭和25年北海道の札幌私立北海中学から始まった。今でこそ東京と札幌の地域格差は情報網、交通機関の発達からまったくと言ってよいほど感じられなくなっているが、当時は札幌から見て内地・東京はあらゆる面で都会的であり、我々道産子はまったくの田舎者であったように思う。

当時マイナーなスポーツのバドミントンも雪国北海道では、けっこう盛んに行われていた。私は中学3年からバドミントン部に入部していたが、ある時校内バドミントン大会が開催され、その時優勝したのが片石であった。彼は卓球部に属し、卓球でもすでに相当有望視されていたが、我々は早速今で言うスカウトということになり説得の結果、部員に仲間入りしたのである。

昭和26年北海高校に入学した我々仲間の中で、片石はまさに彗星の如く現れたという言葉がピッタリの感じで、どんどん頭角をあらわしていった。学校の体育館は天井が4メートルくらい、あとは梁がめぐらされているという大変お粗末なものであったが、そういう中で彼は素晴らしい特技を身につけた。

梁の間を通さなければならないことからクリアーのコントロール、天井が低いためドライブの多用、それにスマッシュ、いわゆる悪条件をバネにどんどん腕を上げ、2年の時すでに全国に名を知られるようになり、3年の時には片石を中心に山形でインターハイ、四国



北海高校時代の故片石OB（左）と加藤



昭和30年8月、仙台

高松国体で念願の優勝を成し遂げたのである。

昭和29年片石とともに立教大学へ入学したが、当時慶応大学とはまさに熾烈な戦いが行われていた。また学内でも佐藤、望月先輩をはじめ多くのライバルが目白押しであった。当時4年であった今は亡き有馬先輩のダブルス理論(強いシングルスプレーヤー2人を組ませるよりもコンビネーションを重視する)のテストケースとして片石、私のペアが誕生し29、30年と全日本総合で2連覇を果たしたのである。片石は31年にも永井と組み全日本総合3連覇し、32年には板垣(隆)と組んでインカレを制覇、またシングルスにおいても30年に全日本総合、32年にインカレを制覇、まさに全日本のトッププレーヤーとして活躍したのである。

私の感ずるところ、彼があと5年遅く生まれていれば、日本のバドミントン界は変わっていたのではないかと思う。なぜなら5年後であれば彼は確実に実業団のどこかに入り、著しく進歩した道具で練習も豊富に重ね、もっともっと活躍したであろうと確信するからである。

バドミントン以外のことで言えば、彼は幼少の頃から父親が毎朝日課として唱えていたお経を聞いているうちに覚えてしまい、事あるごとによく、そのお経を聞かされたものである。また歌謡曲にいたっては玄人はだしで、彼が唄いだすと、うっとりと聞き入りいい気分になったものである。

社会人になってからもバドミントン同様仕事にも完全燃焼し、昭和48年8月26日、前日まで元気にしていた彼は心筋梗塞で37歳という考えられない若さで逝ってしまったのである。なんとも残念なことであった。私の青春時代をこの上ないものとしてくれた彼に心から感謝し、改めてご冥福を祈るのみである。



昭和30年、全日本選手権ダブルスで優勝(故片石OB(右)と加藤)

# 粋でシックな丸坊主

折井　利彦
(昭和33年卒)

関東学院六浦高校バドミントン部員であった私は、1年先輩の新倉さんに、当時の立教式練習法でしごかれた。シューズから汗が溢れてくる、2対1の果てしない特訓である。思えば新倉先輩はその時の、立教大学バドミントン部そのものであった。

当時は食料難時代、空腹を抱えての日常で、甘食といわれた1個10円のパン、百匁(375g)15円の焼きいも、1杯30円のラーメンが練習後の楽しみでもあった。

昭和29年「粋でシックな立教の学生さん」と唄われた、その立教のバドミントン部員となった。粋でシックな大学の新入生、片石、加藤、花岡、井桁、私は、その春の合宿初日に床屋に連れていかれ、丸坊主にされた。

連れていったのは、有馬、金居の両先輩であったと思う。先輩から床屋の主人に号令がかけられ、いっせいにバリカンが入った。

寒々とした頭の粋とシックにはほど遠い、1年生部員の誕生である。

合宿は横浜山の手にある蓮光寺の宿坊で、練習は市電にのり神奈川体育館に通った。横浜は坂の多い町で、外人墓地、フェリス女学院、港の見える丘が蓮光寺の上手にある。練習前のランニングは起伏の多い所が選ばれた。隣で走っていた花岡が、突然クジラのように、さっき食べた朝食を吹き上げた。前を走っている者に届かんばかりの放物線を描いている、が彼はそのまま走った。今でも思い出す強烈な闘争心がそこにあった。

当時の合宿は、米持参である。1日4合、7日で約3升(約4kg強)を要した。大がま、大鍋から青筋の巻いている白いドンブリとお椀に、御飯と味噌汁をよそうのは1年生の任務であった。御飯は1杯のみ、味噌汁はお替わりありで、1年生は上級生の食事中、お替わりの味噌汁承り係となる。鍋の中味の残量が気になる10分(実際は4、5分)であった。

「フケメシ」という混ぜ御飯の名称があった。これは憎い先輩の御飯に、頭のフケをかけて供する腹いせ、もしくは復讐で、現場を抑えられない限りもっとも安全、かつ愉悦に満ちた赤穂義士的行為である。我が部、忍従の合宿史に「フケメシ」の事実があったか、どうか、古いことはもはや都合よく忘れてしまった。

我が最も尊敬する2年上に、野村、古畑の両先輩がおられる。

お2人が3年生、私が1年生の時、2度の合宿の折に受けたご恩は終生忘れることはない。ドンブリ飯の3分の1を毎食時、わけ与えてくれた「一飯の恩」である。

3年生といっても練習後の空腹に変わりはなく、合宿の食事風景を思うたび、そこにはお2人をいつも当てにしていた餓鬼としての、私がいるのである。

夏の合宿は、浜名湖の中村さん宅を宿舎とし、練習は対岸の鷲津の体育館に通った。ランニングは湖岸

の田畑の中を1年生10名程を先頭に、ファイト、ファイト(FIGHT)と列の前後で声を掛け合いながら走った。

レギュラーでない部員も遅れず走っていた。そんなランニング中、足の速いキャプテンが側を駆け抜けざま、「紙ないか! 紙、カミ」と紙の持ち合わせを問いながら、再度にわたり走行集団を追い抜いたり戻ったり、切迫した様子であった。

誰かが息を切らせながら、カミの用途をたずねた。バカヤロー「糞だ、糞だ」と怒鳴られ、誰もが紙の必要性の差し迫っていることを実感した。

昭和29年コンパクトなティッシュペーパーなど世にはなく、鼻紙はランニングの時に汗にぬれて使いものにならないため携行せず、誰も期待に応えられなかった。我が部員は真夏の太陽に焙られ、汗を流しながらさらに走った。しばらくしてキャプテンが我々を追い抜いていった。先程より軽々と走っている。ははあキジ撃ちがうまくいったな、と安心した。キャプテンは、何らかの方法で危機を打開し、カイケツのための時間を取り戻して、勇姿を我々に見せてくれたのだ。浜名湖畔の夏畑は、茂った緑がのどかな風景であった。

中村邸の蔵に白木、有馬さん(蔵は夏でも涼しいからか)、3年生以下が母屋に寝泊まりした。カヤ、布団蒸し、村の共同風呂、浜名湖のカニ、いちもつを露出して舟で寝ていた漁師、等、思い出は尽きない。おおらかな中村さんやご家族には迷惑をおかけした。

春、秋のリーグ戦、春、夏の合宿、秋のインカレが終わると納会となる。会場の「あらい」はすき焼き料理屋で、飯田橋駅から6、7分歩き、神楽坂を少し上がった左手にあった。荒井、新井のいずれかの屋号であったと思う。

いつごろからこの「あらい」が納会の指定場所になったのか、起源を調べていないが、多分昭和26、7年頃ではないかと推測され、その頃の先輩にお尋ねしたいと思っている。縦長の座敷の奥に床の間があり、優勝カップが並べられ、床を背にして恐いOB諸先輩が居並んでいた。

昭和29年度納会は、鷲塚 主司、鈴木旭、川端昇市、瀬川多七、寺内秀輿、島田肇、亀山博、三谷恭通、本田義生先輩等で、上座から順にOB、4、3、2、1と年次順に座る。

先輩の挨拶、激励、川端監督の叱声、白木主将、有馬主務の成績報告、来期に臨む決意表明この間、約30分、現役は正座して神妙にしていなくてはならない。日頃のトレーニングに正座の項目はない。合宿、遠征先の宿で叱られるとき正座するが、頭をペコペコ下げながらしびれた足を浮かせたり、ずらせたり工夫もできる。納会の正座の時間と、しびれの度合いは演説するOBの員数に比例する。厨房から下煮のすき焼きの匂いがただよってくる。膝からつま先はシビレで感覚が麻痺状態、鼻腔も悩ましき匂いにシビレて激励演説の効果は少ししかなかったように思う。スピーチも女性のスカートも長い時代であった。

ビールで乾杯、あとは清酒……先輩ににじりより「お願いします」とお酌する。これは今も昔も変わらぬ光景だが、その頃の我が部にとって大変貴重な存在の、芸達者な瀬川浩先輩がおり、御座敷唄を上手な節まわしで唄ってくれた。

'さのさ' '新内' '都々逸'はては変え唄が、合唱形式で手拍子と共に始まる。'ヨサホイ節' 'オッピョ節' '川村女学園の唄'等、等である。

このとき覚えた唄が、社会人になってから随分役に立った。持つべきは良き師、良き先輩である。私は

酒好きで、飲めといわれて困ることはなかったが、当時は下戸の部員に飲酒を強制する風習はなかったように思う。それでも随分飲まされたが、一気呑みなどという贅沢な風俗はなかった。納会が意気高く盛り上がり、やや無礼講に近い状態になる頃、再び緊張したときがくる。

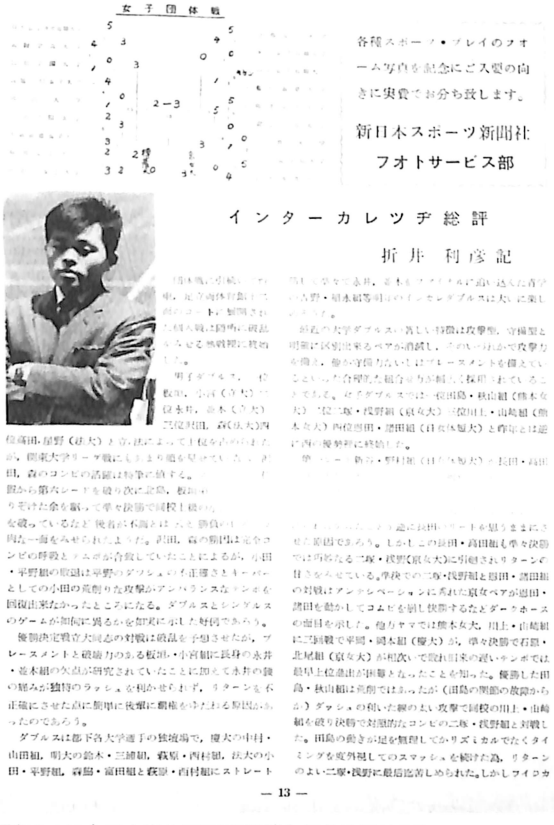
OB、現役が肩を組み、応援歌「セントポールシャイン」、「征け立教健児」、寮歌「茨路超えて」、校歌「芙蓉の高嶺」を声を限りに歌う。

1年生も春、夏の合宿や、神宮球場での野球応援など、折りあるごとに歌い覚えたこれらの歌は、納会で余すところなく発揮されるのだった。

私は昭和29年の1年生である。それから43年が過ぎ61歳になった。川端、本田、有馬、野村、力石先輩の後継者として学連の運営を経験させてもらった。卒業後第4代監督を拝命し、OB会運営のお手伝いをして今日に至った。

OB会員名簿にはこの間、鬼籍に入った方々の名前が数多くなった。いずれ私も十字架印会員となるが、それまでは我が母校バドミントン部の歴史を見続け、微力を尽くしたい。

私の昭和29年1年生は、私のこれまでの生き方であり、これからの生き方に続くものである。



女子団体戦

各種スポーツ・プレイのフォーム写真を記念にご入要の向きに実費でお分ち致します。

新日本スポーツ新聞社
フオトサービス部

インターカレツヂ総評

折井利彦記

— 13 —

昭和34年全日本学生選手権優勝を伝える折井OB
（「月刊バドミントン」昭和35年2月号）

# 信念をもって基礎体力と精神力を

花岡　牧夫
(昭和33年卒)

当時選手は練習する体育館もなく、今日は横浜、明日はどこへやらの日々が続いていた状態で、トレーニングも大変厳しいものだった。当時の有馬監督は、日本人が外国人に比べ著しく筋力が劣ることを知っていて、選手に筋力アップを競い合わせていたのではないだろうか。

近年スポーツ界では、身体の故障で選手生活を断念するケースが多い。「無事是名馬」と言われるように、優秀な競技者は心身ともに健全でなければならない。故障するということの要因としては、食生活その他いろいろなことが考えられるが、先ず第一は基礎体力の不足ではなかろうか。

日本人の体位は年々向上してきているが、基礎体力を外国選手と比較すると劣っていると思えるし、これでは世界の檜舞台での活躍は望めない。

スポーツ選手に最も必要なのは基礎体力であり、当時のバドミントン部の合宿等におけるトレーニングは、とても現在では考えられないほどハードなものであったが、これが基礎体力の養成に大きな効果をあげたはずである。基礎体力が十分に備わっていれば、技術面の吸収においても早い。その反面いかに天分があろうとも、基礎体力のない者は、体のバランスが崩れ故障へとつながってしまうのである。



昭和32年秋、リーグ戦優勝。前列左から2人目1年生板垣(隆)が、4-4からの最終戦で慶応の江井を破る殊勲をあげた。
(板垣の右が花岡)

現役諸君も、目の前の勝利ばかりを望むことなく、一生できる基礎体力を養い、次の世代への土壌をつくっていくことが肝要ではないだろうか。この基礎体力の養成は、指導者にとっては忍耐が必要であり、また選手にとっても苦痛を伴うものである。しかし、「自主性」という甘い言葉で妥協することなく、強い信念を持って徹底的に鍛え上げることが、本人にとってもプラスになるはずである。

これが必ずや将来の糧となって、悔いのない選手生活を送ることにもつながることと思う。

また、バドミントン選手に不可欠な精神力も、基礎体力を養うことを通じて自然に体がおぼえてくるはずである。精神力とは、いかに肉体的苦痛を克服するかにかかっているので、現役選手もがんばって早い時期に上位にあがることを切に望んでおります。

# 錆びたナイフ

浅野 久
(昭和34年卒)

創部50周年を迎えるのだと記念事業実行委員から連絡をいただいた。あらためてバドミントン部の歴史と伝統を感じた。諸先輩ならびに後輩達の努力の賜物であろうと思う。

小生は高校時代は野球をしていたが、大学に入学した安堵感で学生生活の目的意識がうすらぎはじめていた。

もともと学問とスポーツと分けて趣味を選択すると、進学のための勉強の苦しさの反動もあり、何か運動部に入ろうと決意した。

欲ばった考えでハードなスポーツではないものを物色したところ、あった。ハネツキみたいな楽なスポーツが。バドミントンである。 悲しいかな素人の考えはまったくあてがはずれ、入部してみると、全国ナンバーワンの強さを誇る強力なクラブで、諸先輩は全国でも名だたる人ばかり。

さて、練習は学校から神宮球場まで走り込み、帰りに千歳橋の階段でダッシュ。ハネツキとはとんでもない間違いで、スマッシュした時のシャトルの速さときたらプロ野球速球投手の投げるボールよりはるかに



昭和33年春合宿(静岡県富士市)。最終日恒例のマラソンに出発するところ(自転車に乗れるのは4年生だけ)

速く、200キロを超す。キャンパスのベンチでの腹筋でも尾てい骨がすれてパンツに血がにじむ。コートでラケットの素振りをくりかえすうちに指から血が流れる。

先輩たちは何なくトレーニングをこなしていく。先輩のなかには何回もくりかえしトレーニングをさせる人もいる。足がつった時など水をかけ、足の指を逆に折ってひどい目にあった時もある。練習をサボタージュして裏門から逃げたあくる日、部室に行く時の体裁の悪さ……。

いよいよ合宿練習に入ることになった。小生は夜の休みのひとときにとウクレレを持参した。ところが創部以来練習に必要な物以外にとんでもない物を持ち込んだ奴はいない、と先輩達には怒られるどころかあきれられてしまった。

バドミントンは風を特に嫌う。真夏のコートは窓が開けられない。当時クーラーもなければ涼しい避暑地などは行かれず、鎌倉や下田と暑い所ばかりの記憶しかない。

当時は誰も生活の余裕などなく、避暑地に設備が整っているところがなかったのであろう。厳しい合宿生活にも楽しみがあった。夜の食事のあとのひととき新入生を1名ずつ上級生の部屋に呼びつけ面接をする。

(イ)男になったのはいくつの時か。(ロ)どこで男になったのか等々。現代このようなことをしたら新聞ざたになること間違いない。

それでも上級生に絶対服従であったなかで、「合宿でこのようなことをする必要はあるのですか」と真剣に抗議をしてくるものがいたが、それが妙に楽しく夜のひとときを過ごしたものだった。

それも3年生、4年生になってからのことで、下級生の時は悲惨なもので、加藤先輩などトレーニングの時など鬼のごとくシゴキをするので心の中で「殺してやるぞ」と思ったほどでした。

新入生の時の4年生は佐藤キャプテンはじめ野村、古畑、吉田各氏で、さすが最上級生は貫禄があり、1年生などは子供扱いで大変やさしく、一度もお叱りを受けなかった。

このような部活動で、なぜ4年間やめずに続いたのかと自分自身でも不思議に思うが、厳しい先輩、優しい先輩、皆さんが後輩に愛情を持って接してくださったからだと思う。

現在、ささやかながら会社を運営をしているが、日本一、最強チームのメンバーの方とは名選手としてだけでなく、チームの運営のマネジメントとしても各々が力発揮されていることを感じる。

このメンバーのそろった企業なら繁栄まちがいなしだと常々思いつつ、鼻歌で合宿や練習のあい間に皆が歌っていた裕次郎の「錆びたナイフ」を口ずさみ、青春時代の1ページを思い出すのである。

# 出会い

永井　栄一
(昭和35年卒)



昭和32年、全日本学生選手権5連覇(高松にて、後列左から3人目が永井)

小学校の頃は、スポーツといえば野球くらいしかなかった。昼休み・放課後は毎日野球ばかりしていた。将来はプロ野球選手かなと思ったりもしていた。

中学校に入って、軟式野球部しかないことから入部する気もなくなり、毎日学校・家の往復で2年が過ぎた。3年の夏休みも終った頃に「バドミントンをやらないか」「何だそれ」「一度練習を見に来いよ」。友人に誘われるまま見学に行くと、ラケットを渡され、握り方を教えてくれ素振りをさせられた。これが入部だという。だまされた。

高校になってからは練習、練習、それも素振りと壁打ちが多かったように思う。1年生から2年生になると、ようやく本格的な練習が始まったような気がする。学校が終わるといったん家に帰り、軽い食事をしてまた学校に来て練習をする。夜の10時、11時になることはしょっちゅうだった。望月・力石両先輩が非常に熱心(?)に、そしてやさしく(?)指導してくれたお蔭で全国一になれた。

大学に入りバドミントン部の一員になり、試合にも、それも国内だけでなく海外にも遠征するようになった。いろいろな人々との交流も数多くあり、人的な付合いが他大学の同学年だけでなく先輩・後輩にも広がっていった。バドミントンをやっていて良かったとつくづく思う。それも伝統ある立教大学バドミントン部のOBということに、最近は誇りさえ感じる。いろいろな出会いがあったからこそ今日があるのだと思う。

部が出来て半世紀ということだが、この時期に立ち合えることができてうれしく思う。

現役諸君もこれからの1世紀へ向けての第一歩を踏み出し、後輩から後輩へと伝統を継承していってほしいと切に願っています。

立教大学バドミントン部のさらなる発展を期待しております。

# 今でも思い出される哲学堂と千歳橋

並木　伸裕
(昭和35年卒)

私がラケットを握るようになったのは、横浜の大鳥中学2年の時にバドミントン部が創部されたのがきっかけだった。

予備校化した学校の雰囲気の中で、運動部に入ることにはかなりの抵抗があったが、当時の教頭先生が力強く「文武両道」を説いてくれたおかげで入部のふんぎりはつき、今では大変感謝している。

横浜は、YMCA等で早くからバドミントンが普及していたようで、近くの緑ヶ丘高校や関東学院等からは多数の全日本級の選手を輩出していた。

緑ヶ丘高校へ進んでからは杉田博先輩（横浜国大）をはじめ多くの方々のご指導を得て、技量も上り、一丁前のつもりになっていた。しかし、立教はそんな甘いところではなかった。

鬼のような佐藤、望月、片石さんをはじめ、足に羽が生えているほうな素晴らしい先輩が多勢いらっしゃ



昭和34年、全日本選手権（長野にて、最前列左から2人目が並木）

った。そして同期に永井、後輩に板垣、小宮とこれまた前者に劣らぬ猛者が顔を揃えていた。合宿の時などいくらしぼられても音をあげないこれらの人達ほど恐ろしい仲間はいない。

今でも、哲学堂や千歳橋付近を通りかかると、当時そこで繰り返されたダッシュやうさぎ跳び、いつ終わるとも知れぬ腹筋や腕立て伏せに、今日こそは脱落すまいと悲壮な気持で歯をくいしばっていたことを思い出す。

力不足だった自分が、気づいてみると立教の仲間以外恐くない、などと思えるようになったのは、これら第一線の選手との競い合いとともに、学連や主務の仕事を見事にこなし、たえず励ましてくれた瀬戸、小宮、内山ら同期の友人によるところ大であったと思う。

最後に、私にとって一番の恩人は、故有馬監督です。創部50周年に当たり、あらためてご冥福をお祈り致します。



昭和33年6月、同立定期戦




昭和33年、久留米における全日本学生選手権入場行進

# 学生の特権をもった社会人の誕生

内山　巌
（昭和35年卒）

私が、バドミントンと出合ったのは、立教大学に入学して1か月ぐらいを過ぎた頃だっと思う。それが、私の学生生活を根底から変えようとは夢にも思わなかった

それまで、バドミントンは、お正月に家の前とか空地でよくやった羽根つきぐらいにしか考えていなかった。

静岡の田舎から東京へ出てきて、東京の大学に入って、都会人として何か自分なりの目的が見つかるだろうなどと、甘い気持で上京してきた田舎者には、東京の人がキラキラ輝いて見えたのはたしかだし、別の世界の人たちのように思えた。

今、考えればその時の自分は、憧れの立教大学の学生になったことを誇らしく思い、舞い上がっていたのかも知れない。そこで大失敗を演じてしまったのである。

静岡からいっしょに上京して来た友人と、彼の親戚に入学祝いで招待され、勧められるままに酒、ビール、ウイスキーを生れて初めてチャンポンで、自分の酒量もわからず、たらふく飲んでしまった。その結果が二日酔いというのか、三日酔いというのか、とにかく前後不覚に酔いつぶれてしまい、下宿に帰るどころか、その家に泊る結果になったしだいである。

それだけで終われば何んでもないことであるが、翌日が大学生活の初日であり、初めて大学の講義を受ける日であった。それは忘れもしない経済原論であったと記憶している。休むこともできず、山手線で新宿からなんとか池袋にたどり着いた。

池袋西口から学校まで歩くことも困難なほどの重症であり、タクシーを見つけ、「立教大学へ」と言ったら、運転手が、「歩いてもすぐですよ」と、けげんな顔で言ってくれたのだが、それどころではなく、車の中に倒れ込み、何とか教室にたどり着いた。

ところが、自分の席だと思っていた場所に、見知らぬ学生が座っているのではないか、その日の教科によって、教室を移動することを、すっかり忘れており、その学生に「君、ここは僕の席だから別の所へ行ってくれ」といったら、その学生が、「君、新入生だろう。新入生の教室は違うよ」と注意された。恥ずかしさのあまり、気分の悪いのも忘れて赤面してしまったのを今でも鮮明に思い出される。これが、私の学生生活の初日であった。

こんな見苦しい学生生活のスタートを切ってしばらく過ぎた頃、何気なく、例の汚い体育館をのぞいた時、そこでバドミントン部の練習風景が目に入った。シャトルを自由にコントロールしている姿を見て、大いに興味を覚えた。

大学に入ったのも勉強することが目的だし、大切だが、それ以外に学生生活の4年間を有意義に過ごさなければと、何かをさがしていた時だし、これなら自分にもできるかも知れないし、充実した学生生活が送れるかなと思った。

その時のバドミントンに対する印象からいうと、初心者でも何とかそれなりにプレーできるかな、思ったより体力を必要としないスマートなスポーツかな、技術的にはそんなに難かしくない等々何とかそれなりにものになるかな、というのがその時の感想だった。

しかし、この思いは入部して、何回か練習に参加した結果、自分の第一印象がいかに甘いかを、いやというほど思い知らされた。体育会の厳しさの中で、プレーヤーとしては、とてもそのレベルに達し得ないし、これから何を目標にクラブ活動を続けたら良いか、かべにぶつかってしまった。幸い先輩の配慮なのか、プレーでは見込みのない私に、別の目標、活動の場を与えてくれた。

それが、学生バドミントン連盟での仕事であり、活動になった。この日から今までの練習に参加する日々より、お茶の水の岸記念体育会館内学連事務所への出席が増え、池袋は立ち寄るだけで、むしろ校内でUターンの日々が増加していった。

学生というよりも学連に勤めているといったほうが当っていたかも知れない。学生という特権を持った社会人の誕生となった。その特権をフルに活用して、大いに楽しい学生生活になろうとは、その時は思ってもいなかった。

各大学から選抜された代表者の集まりが、バドミントンの普及のための諸活動と、大学バドミントンの発展のために活動することが目的で、具体的には、大会開催、運営を取りしきったり、そのためのプログラム作り、運営の資金集め等々と、全国の大学連絡網の中で、すべてを取りしきっていくという面白さを味わうことができた。

プログラム作りの中では、立教の利害を前面に出しての組合せへの圧力、駆け引き、根回し、その結果、上位独占で迎えた最終日のゲームを観戦できる何ともいえない安心感、満足感に加えて誇らしい気持は、これに関わった者でないと味わえない気持ではなかろうか。

普通の学生生活では経験できない種々の経験と、充実した有意義な学生生活ができたのではないかと思っている。

バドミントンに出会わなかったら、ただ勉強することに日々を過ごす青白い人間になるしかなかったかなと思うと、バドミントンに出会い、それで明け暮れた生活が、現在の自分を育ててくれたのではないかと改めて40年前を思い出し、感慨を新たにしているところである。

# 思いつくままに

瀬戸　喜行
(昭和35年卒)

### 余裕の時間は部活で

大学に入学して感じたことは、高校の頃に比べ通学に要する時間が、大きく増大したにもかかわらず、日常的には、むしろ時間的に余裕が生じたことであった。

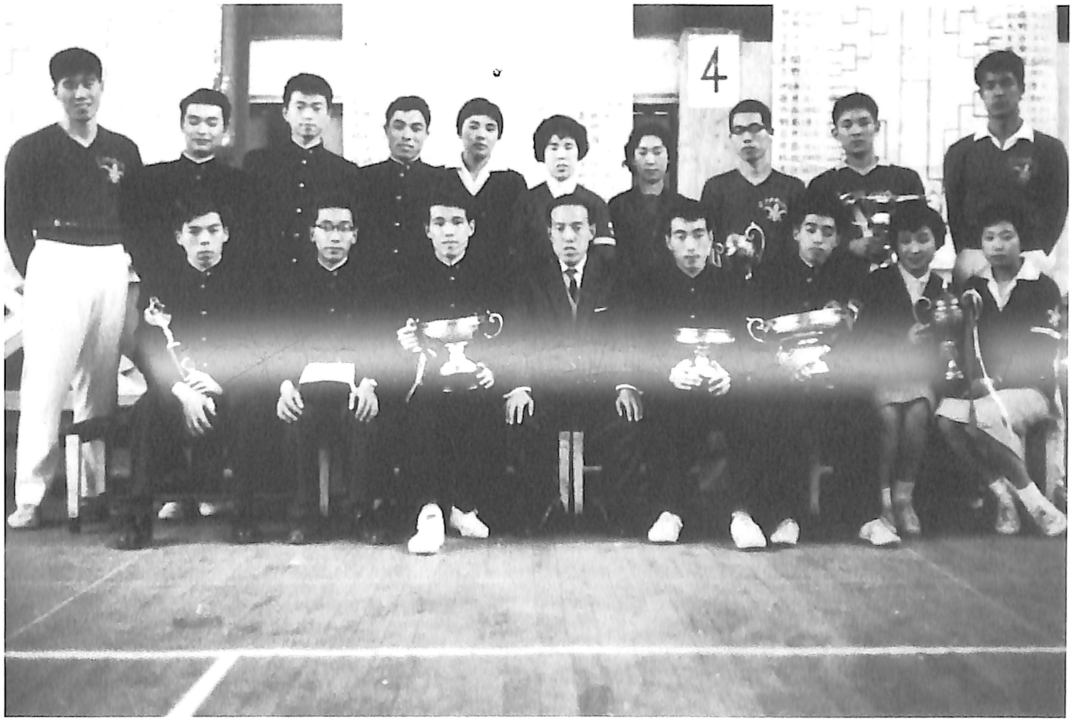
時間の余裕をいかに活用するかについて、種々の思いがあったが、結局のところクラブ活動に利用することが適当と考えるにいたった。

意中のクラブは高校の先輩がいるバドミントン部である。そこで、下見も兼ねて体育館の偵察を行うことにした。

### 体育館のこと

私は構内の案内を見て体育館の位置を確認し、現場におもむいてみて驚いた。なんと屋内プールのような建造物を改装した施設、これを体育館と称しているのである。しかも、おもいのほかフロアーは狭い。後になって知ったことであるが、体育館を共有するクラブは、バスケット、バレーボール、フェンシング、卓球などのほかまだまだあった。

いずれのクラブもホームグラウンドを持たない、いわばジプシーである。わが部歴代のマネージャー諸氏が、練習場の確保に奔走された苦労がしのばれ




昭和33年、全日本学生選手権で6連覇達成（久留米にて、後列左から2人目が瀬戸）

るところである。

### 部室のぬくもり

すでに私自身は、入部を希望していたので、入部の承認を受けるべく部室を訪れた。部室は、前述の体育館の1階とも地下ともつかない場所に位置しており、10人も入れば満杯となるような狭さだったと記憶している。狭いうえに明るさもとぼしい部室ではあったが、唯一の自慢は、スチーム暖房が設置されていたことである。

冬場の暖かさは抜群であったが、今にして思うと、これ多くの部関係者の人柄により、いつもぬくもりがあったのだと思う。

### 下級生の部員

部員として認知された私を待っていたのは雑用係のお役目であった。

体育会の下級生は、ことのほか多忙なものである。特に技術的な面がレベル以下のものは、ゲームがないだけにさらに忙しい。

上級生のお手伝いはもとより、試合があればその準備とあと片付け、試合中の雑用を一手に引き受けるわけである。

私が入部した昭和31年には、シーズンのはじめに全日本大会、その年の秋にはインターカレッジと、大きなゲームが東京で行われ、下級生にとっては例年になく忙しい年であった。

そして、多忙であったシーズンも終わり、ようやく2年生に進級する時期を迎えた私は、新入生の入部を期待する反面、わが部の人気からして過大な望みは失望につながるものと、自らを戒めてもいた。

ところが、新学期が始まると、思いがけないほどの新入生の入部があり、一気に大世帯となったため、部員会も一般の教室を借りて行うようになった。我々2年生は、急に偉くなったような気がしたものである。もちろん、2年生といえども下級生にかわりはないものの、なにしろ労力にはこと欠かなくなったので、雑用のお役目は、大いに軽減されたのである。

月日と共に退部者が生じ、OB会名簿に名をとどめているものの少なさが残念であるが、1年下の諸君には、少なからず助けられ、忘れ得ぬ思い出となっている。

その頃のわが部は、創部以来10年あまりも経過していたであろうか、部としての体勢も整い、規律なども厳然と根づいており、上級生の権限は絶対であった。したがって、無理がとおるような世界でもあったが、その本質は、団結と連帯にあり、これらは、伝統として引き継がれているものと確信している。

### 監督さんのこと

部員にとって、先輩の印象は強烈なものがあるが、個々の先輩方の思い出はさておき、最後に監督さんのことにふれてみたい。

私が部員当時の監督は、有馬先輩、通称オンマサンである。実に熱心な方で、部員会にはしばしば姿をみせられ、試合や合宿にも遠路もいとわず、必ず選手や部員と行動を共にしておられた。

若くして帰らぬ人となられたが、エピソードや話題のとても多い人であった。

# 優勝カップは数知れず

小宮　貞男
(昭和35年卒)

今よりはましな受験戦争をクリアして入学したのは昭和31年のことであった。あれもしてみよう、これもしてみたいと「自由な学生生活」を描いてキャンパスに通い始めた。

数日して高校の先輩でもある折井先輩から高校同期の瀬戸君ともども呼び出しを受けた。「小宮、瀬戸、関東学院六浦高校出身者はバドミントン部に入部することが義務づけられている。今日から入部せよ」との厳命である。

割り切れぬまま帰途につき、ぶつぶついいながらも「しょうがない。1年ほどやってみるか」との結論になった。ずいぶんと自主性のない判断ではあった。

バドミントンをやったことはなかったが、弟の好雄が同じ中学、高校でプレーヤーとして腕を上げてきていた時でもあり、関心はあったが、一緒にやるのはごめんだなと思いつつ入部したのを覚えている。

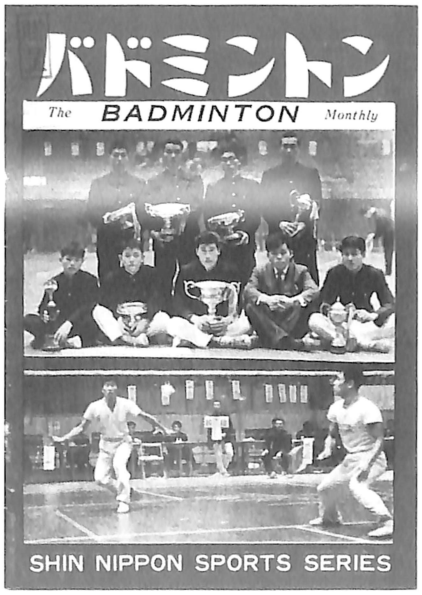
部生活も1年経過すると、一番苦しい時を通過したこともあり、その後の3年は比較的スムースにすごしたように思える。

当時のクラブは常勝チームであり、カップの数は数知れず、部室に保管するスペースもないことから1、2年生が自宅(下宿)に持ち帰り、試合や納会になると自宅から運ぶというやり方だった。

ところが、どの大会にカップがいくつ授与されているのか、そのカップの名前、誰が保管しているのかといったリストはなかったように思う。大会が近づくと「オレのカップの出番だ」とばかり持っていくといういいかげんな管理方法だった。大会直前になってカップ探しで右往左往したことも思い出す。

学生時代の数多い思い出に、入部当時監督をつとめておられた有馬さんに人を動かす秘訣、社会へ出てからのつき合い方など、いろいろと教えていただいたことがある。当時はカラオケなどない時代、社会人になれば宴席に出ることもあるだろう、その時には新人は必ず歌わされる、民謡のひとつやふたつは覚えておけということで大森新地に連れていっていただき、三味のリードで何曲か教えていただいた。

その後社会人となってから現在にいたるまでずいぶんと役に立った。まさに生きた教育といえるもので、今は亡き有馬監督に感謝すること大である。




昭和34年12月の全日本学生選手権のようすを伝える
「月刊バドミントン」(昭和35年2月号)

また、昭和34年にはマネージャーの役についたが、この年のインカレシングルスの決勝はとても見ていられるものではなかった。キャプテンの永井君と私の弟が対戦し、ファイナルゲームに持ち込まれ、双方が足をひきずりながらラリーを続けていたのである。

とにかく「早く終わってくれ」と念じていたことを思い出す。兄弟で決勝を争ったりした板垣(隆)君はどんな気持ちでゲームをやっていたのか、同じ兄の立場から聞いてみたいものだ。

最後にふしぎなめぐり合わせについて。

今から5年ほど前のこと。役員から応接室に呼ばれて出かけてみると、そこには板垣善憲君がいたのである。サブマネージャー時代にインターハイに出かけ、礼を尽くして立教受験をすすめた結果、入学した後輩である。

トヨタ自動車に入社した後、小生が勤めている愛知陸運に転籍してきた。現在はかたや板垣常務、こなた役員待遇との立場で、会社発展のため(?)熱心に仕事に励んでいる。

部活動の中でいろいろな出会いがあり、それがまた今は懐かしく楽しい。後輩のみなさんもクラブ活動を通じて交流の輪がさらに大きくなるよう念じてやまない。

# 有馬英三氏を想う

折井　利彦
(昭和33年卒)

歴史の節目を駆けぬけた若い英雄たちに、坂本龍馬や高杉晋作がいます。

さっそうとした彼らの行動や、思想は同時代の若者たちだけでなく、現在の人々にも身震いするような共感を与えたはずです。迫りくる30歳という短い生涯を予測したかのように、精一杯、賭けた情熱のおもむくまま、その時代に輝き、生きた志士たちでした。

我が部の昭和30年代に監督として活躍された有馬英三氏のなかに、まさに2人の維新の志士に通ずるなにかを見いだす人たちがいると思います。

有馬さんは昭和36年8月、30歳の若さで病のため亡くなりました。

氏はバドミントン愛好家の多い横浜に生まれ、旧制中学から新制高校時代にバドミントンを始めました。有馬さんが試合に登場し、勝者として記録されるのは、氏が昭和26年入学した年の第4回関東学生選手権です。左利きの2年生、玉越さんと組んでのダブルスで、当時の全日本チャンピオンである慶応の広田・小宮組を準決勝で破りました。

余勢を駆っての決勝戦で大接戦の末同じく慶応の小宮(弟)・岡組を破るという、大方の予想をくつがえす優勝でした。

ダブルスでは、時として力のあるシングルプレーヤー2人を組ませるより、コンビネーションの良いペアを

作ることで、足し算が掛け算になるという有馬哲学が、氏が手塩にかけたその後の立教のダブルスペアの育て方や、戦い方に生かされたのではないでしょうか。この時の体験が、氏の立教バドミントン人生のきっかけではないかと思ったりします。

私が入部した昭和29年、氏は川端監督のもと主務兼全日本学生連盟委員長でした。当時の我が部の目標は、一流の名選手をそろえている慶応大学にいかにして勝利するかでした。

昭和23年から関東学生リーグ戦、関東学生選手権が開催され、昭和25年からはインカレ（全日本学生選手権）が始まりました。

昭和27年まではまさに、慶大が学生バドミントン界をリードした時代で、有馬さんはまさにそびえ立つ壁、慶大へ挑んだのです。個人戦はともかくリーグ戦に勝つためのチーム強化に力を注ぎました。

昭和30年頃、川端監督は学生連盟推薦の理事として日本協会の仕事で多忙でもあり、氏は卒業後まもなく川端先輩に替わり、監督に就任しました。

有馬さんの脳には常にコートがあり、コートのキャンバスには部員のひとりひとりが描かれ、同時に戦う相手までがいきいきと登場するのです。氏はすでにひとりの部員となり技を繰り出し、相手の弱い所を探し、攻守の結果が現れるまで描ききります

描いたキャンバスは、大急ぎで現役部員のところに持ちこまれ、有馬哲学の理論で説明と説得が行われるのです。あえて氏への失礼を顧みずにいうなら、カリスマ性に富んだ氏の激しい思い込みを『私の意見は違います』と言える部員はいませんでした。

氏の創造した戦法が好結果をもたらしたとき、その感動と喜びは氏自身のものでした。昭和30年から、ようやく慶大に勝てるチームになりました。

昭和36年、氏が亡くなる翌年の昭和37年までが我が部の初期黄金時代で、まさに有馬監督によって育てられ、創造された戦史でもありました。

昭和29年には女子学生リーグが創設されました。立教に女子部が誕生したのは昭和32年で、2部に登録されました。昭和32年は女子1部6校、2部4校で、我が女子部は初陣、最下位でした。

有馬監督は女子部の強化にもコーチを派遣し、まず体力強化を図り、男子部員並みのトレーニングを求め、それは現在では想像しがたい過酷なものでした。氏は経験の少ない女子部員の、試合に臨む心構えを説き、体力に自信のついた部員には、無垢な闘志で、相手のランキングを無視させ勝利の味を会得させることでした。

結果、昭和34年秋季リーグ戦には、当時すでに3部までつくられた関東女子リーグ中、1部第4位にまで引き上げました。大学に入り、初めてラケットを握りシャトルをガットに当てる快感を知った部員は、有馬説法を体顕したのでした。女性好きな氏のグルメに付き合いながら、男子部員とはひと味違う指導を受けたと思われます。

氏により三味線の音色を知った私は、氏の女子部員との交流のポーズとして、新内、小唄、都々逸、特に民謡が重要な役割を演じていました。その道の通人を自負する氏の、大切な青春のひとコマであったのかと思うのです。

有馬監督に民謡を歌わせられた部員は、男女50名を超えましょう。

つるさんかめさんの「八戸小唄」松しまあのさあよう瑞厳寺いほどの「大漁唄い込み」「花笠音頭」「北海盆唄」「十日町小唄」「稗搗き節」「よさコイ節」おどがウチチュッタラタイガナイテクリュカ…「五つ木の子守

歌」…等々、合宿のときや遠征の時、監督に繰り返し歌わされ、知らずに覚え、いまこの唄を時に口ずさみ、氏を思う人がいるのではないでしょうか。

氏の青春は広範で、ひたむきな思慕は、この人からあの人へと月日と共に、うつろうのです。氏は恋を直載に語りませんでした。

氏は恋する人あるいは好みの人を、モナリザ、ヴィーナス、ジュリエットに仮託し、彼自身の心の中に昇華させます。その人が聞いたら、自分は女神か、と思ってしまうに違いないことを、独自のキャンバスに描き、そっと見せるのです。

氏はその姓の示すとおり顎の長い品の良い馬面でした。

時に思い起こす有馬さんの顔は、激しく叱られていた場面でも、顎の突きでた笑顔と大きな目玉なのです。

ホームスパンの上着、フラノ地のズボン、薄茶のバックスキンの靴が、やや猫背の氏を軽快に決めていました。

紙数が尽きました。

有馬さんへの想いは、氏が亡くなってからますます強く、懐かしく私の青春の思いにつながるのです。

在りし日の氏の面影は、あの時代の多くの方々の心に生き続け、語り継がれるでしょう。わが母校、そしてわが部に愛と誇りを育んでくれた氏に、創部50周年のこの年、あらためて心からの謝意を捧げご冥福を祈るものです。

# 座談会
# 『名監督・有馬英三氏を偲ぶ』

日時：平成9年1月25日（土）
場所：アムラックス　4F「ル・コント」
＜出席者＞

| | | | |
|---|---|---|---|
| 昭和33年卒 | 折井　利彦 | 加藤　正則 |
| 昭和35年卒 | 永井　栄一 | 並木　伸裕 |
| | 井口　久美子 | 秋山　令美子 |
| 昭和36年卒 | 板垣　隆房 | 牧　禊 |
| 司会　昭和37年卒 | 小宮　好雄 | |
| 記録　昭和41年卒 | 松崎　正門 | |
| 昭和42年卒 | 北村　登喜子 | |

**司会**　本日はお忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。先日、創部の頃の方々にお集まりいただきまして、大変興味深いお話を伺いました。今日は部の最盛期ともいえる故有馬監督の時代、ここにお集まりのみなさんが活躍された時代にスポットを当ててみたいと思います。なぜ立教大学が強くなったのか、有馬監督を偲びながら、お話を伺いたいと思います。

**折井**　有馬さんは、30年卒で私が29年入学だから正直なところプレーはあまり見たことはない。高校時代に立教にはいることを決めていたようだから相当の力があったということだろう。当時の記録を見ると、昭和26年の関東選手権のダブルスで優勝してるんだよね。29年卒の玉越さんと組んで1・2年生のペアで。玉越さんはその後かくかくたる戦績を残している人だから。


折井OB

有馬さんは「ダブルスについては俺はすごいセンスが、能力があるのではないか」という気持ちを持ちながら4年間過ごされたんじゃないかな、と思う。有馬さん自身がぜんそく持ちであって、あまりハードな練習をすると持病が出る。多分、実際の試合は1・2年生の時だけで、3年の後半から4年生はマネジメントで、4年生の時は全日本学生連盟委員長の立場から、後輩の面倒を見るということが中心だった。

**加藤**　その頃には優秀な後輩がどんどん入ってきているので必要ない、まーそんなこともあったんだろうな。


加藤OB

**司会**　折井さんの1年生の時には有馬さんはプレーなさらなかったんですか。

**折井**　そう、マネージャーと全日本学連の委員長。

**加藤**　白木さんがキャプテンで有馬さんがマネージャー。

**折井**　諸君もわかるとおり、1年と2年の差は家来と殿様みたいなもので、当時の1年と4年は子供とおじさんみたいなものだった。有馬さんという方は、我々1年から見ると偉い年老いた経験者、という感じだったな。

**井口**　まったく上の人かと思っていました。特に繋がりがない分、間があいてるから。


井口OG

**松崎**　有馬さんのダブルスには何か特徴があったのですか。

**折井**　面白いことにあの人はバックハンドにすごく自信を持っていた。当時、試合になると「バックハンドの有馬」って言ってね。フォアへ行きゃいいのによくバックで打っていた（笑い）。ま一確かにバックの方がコントロールが効くんだな。相手をよく見ててバックで相手を動かしちゃう。

**加藤**　当時から有馬さんは、バックはちゃんと親指を立てていましたね。今はみんなそうでしょう。私なんか当時はわしづかみ。指を立てられなかった（笑い）。だから有馬さんはバックがすごくうまかったんですよ。

**折井**　有馬さんは、バックで相手を動かす。フォアでどんどん前へ出ていく。相手を詰めて、ネット際まで出ていく。やっぱりダブルスプレーヤーだね。

**加藤**　我々が入ってきて、白木さんたちの出る幕がなくなった。有馬さんは2年までででしょう。



昭和28年全日本大学選手権に初優勝。NHK（ラジオ）の解説をする有馬選手

**折井**　白木さんが3年の時はもう試合に出なくてよかった。下に強いのが入ってきて、有馬さんは2年までででしょう、試合に出たのは。

**加藤**　28年頃から立教が勝ち始めるでしょう。我々が入ってきた頃から。

**折井**　この資料によると30年から立教がずっと勝ち続けているな。28年に初めて勝ってずっと勝っていた慶応に、我々が入った29年にはリーグ戦春・秋ともに慶応に負けてるな（笑い）。

**永井**　その頃の慶応のメンバーは誰がいる？


永井OB

**折井**　広田さん、吉原さん、石田さんとか、江井さんとか。28年、玉越、佐藤、山崎、望月、力石、新倉そういう方々が初めてリーグ戦で勝ってるよ。そして、インカレでも勝っているよ。



**小宮**　昭和30年から34年まで、春・秋ともに勝っていて、35年に法政に負けて36・37年に勝って、以後1部の優勝はないですね。有馬さんが[illegible]監督になられたのは何年ですか？

**折井**　31年じゃないかな。30年は川端さんが監督で、31年には川端さんはすでに日本協会の理事になっておられた。

### なんと女子部の創設者は有馬さんだった

**折井**　ところで女子部の創立は何年？31年？

**秋山**　31年の秋。1部だった。1部しかなかったの（笑い）。

**井口**　当時の1部は慶応、日女体育短大、日本女子大、青学でしょう？それから、なんか衛生大学？看護婦さん？かなんかの。


秋山OG

**秋山**　歯の技工士かなんか？あったわね。

**井口**　1部、1部と威張っても1部しかなかった


昭和32年の4月女子部スタート
第1回女子合宿にも有馬監督は参加、有馬イズムをふきこんだ。

の（笑い）。

**小宮**　いや、32年3月25日に女子部誕生と書いてありますね。2部の最下位4位にいた。2部は8校あって34年の春に2部優勝、入替戦に勝って、1部に昇格。秋は1部の1位が日女体短大、2位が日体大、3位が青学大、4位が立教、5位が学芸大、6位慶応です。

**折井**　はじめ同好会ですぐ体育会に認められて、連盟に登録して試合に出たから1部になったと覚えていたんだな。

**加藤**　自分の都合のいいように記憶してるんだからなあ(笑い)。

**井口**　1部だったとばかり覚えていたわ。じゃあ最後に1部になったんですね(笑い)。

それで、私は何で女子部を創ることになったのか、それがわからないんですよ。

**折井**　女子部を創る前、30年頃からバドミントンをやりたい女性がいたそうですよ。石山さん、阿部さん？当時は男子だけだったわけだから、男子部に入れてほしいということだったわけよ。当時は男女席を同じくせず、という時代で立教が伸びていこうとする時期だったんで、先輩方が許さない。そんな軟弱なこと、せっかく強くなろうとする時に男女のことなどに気をとられちゃいかん、というわけよ(笑い)。

**加藤**　女子部創るのに一番反対したのが、若手OBの方々。自分たちが青春真っ盛りで、「現役の野郎が、なに女子部？なにをふざけやがって」って(爆笑)。

**折井**　女子部を一番創りたかったのは有馬さん。女性が30年頃から運動してるのになかなか認めてもらえない。当時、あの年代の人たちは勝たなきゃならないって言われてたから、現役も大反対だった。有馬さんは創りたかった。そこで、31年頃から有馬さんが根回しして、先輩の川端さんの了解を得て秋に別の部として始めたわけですよ。そのかわり徹底的にしごいちゃえって。


牧OG

**秋山**　最初の合宿に行ったとき、ずいぶんやめましたよね。あの上の年代の人たち。

**牧**　1日目は砂浜を走ったじゃないですか。鎌倉で海辺を走りましたよね。


昭和33年全日本選手権会場の石橋文化センターで故有馬監督を囲む男女出場選手

**井口**　私は2回目の諏訪の合宿が大変だったの。走らされて、とにかく走らされて、ご飯が食べられなくって。お医者に連れってもらったの。

**折井**　男子の言うとおりの指導でやれるか、同じように練習していいのか、ということのだめ押しをしたうえでやるということになったから、すごかったよ。ついてこれない人がいたらそれでいいのかって、「いい、やります」って。すごい執念だったよ。

**井口**　走るのが大変で、プレーやるまでにはいかなかったの。合宿は大変だったけど、男子が華やかなときだったから何かと得をして、インカレについていくと最初に敗退しますよね。そうすると観光旅行させてもらったり。九州のインカレだったわね、向こうにいる先輩に食事に連れていってもらったり、ベンツで案内してもらったりしたの。男子はひとつも行かないのに。

**司会**　その時は有馬さんは一緒なの？

**井口**　もちろんそうよ。最後は応援しましたよ。試合は中抜けして（騒然となり記録できず）。

**牧**　ナイトクラブかなんかに、連れてってくれましたよね（騒然となりまたまた記録できず）。

**折井**　今思うと女子部の監督は別につくるべきだったな（爆笑）。

**司会**　ところで女子部ができてから、有馬さんの男子部にかける時間と女子部にかける時間はどちらが多かったんですか。

**加藤**　それは100%女子部ですよ（爆笑）。

**並木**　そんなことはないですよ。僕らの頃、32、33年頃力を入れていますよ。ずいぶん指導受けてますよ。

**折井**　有馬さんは、1日24時間のうちに多分、18時間はバドミントンを考えていて、そこに青春の思いがあって、バドミントンを通した女子部であり、バドミントンを通した女性への思いがあったと思う。その他には芸者に非常に関心があった。

**加藤**　あの人は照れ屋で直接女性に声をかけられなかったからな（爆笑）。

### 芸者の置屋に非常に関心があった

**折井**　いや、そうじゃなくて。置屋のしきたり、芸者のマナー、太鼓、三味線ね。一見さんを入れ



昭和33年11月全日本学生選手権福岡大会にて（前列左から山本（辻田）、牧（吉武）、有馬監督、黒川（二瓶）、後列左から秋山（渡辺）、井口（上野））

ないのはなぜか、玄関に塩を盛ってあるのはなぜか、とか。ただ単に芸者を待らせるのではなく「枕芸者にならないように芸事に精進しろ」とか、置屋のしきたりを話してやったりとか。置屋の世界に非常に興味を持ってたね。

**司会**　そういえば合宿の時、歌を歌わされて、その前に必ず一言ありましたよね。こういう場に出たときにこの歌を歌うと、それだけで初年兵は済むんだぞ、とか。

**折井**　あの人は自分で修得したことを論理的に相手に説明したがる。「口だけでは話はわからないじゃないの」て言うと、いろいろ連れて行かれたよ。

**井口**　神楽坂に一度連れていかれたわよね。それから、女子部に持ち歌を持て、って言うんですよ。『小さな竹の橋』と『花笠音頭』その歌を女子部は練習しておけ。って。『カイマナヒラ』も女子部の持ち歌だったんですよ。『花笠音頭』は踊りながら。今考えるとよくやったもんだ、って恥ずかしくなるわね（爆笑）。

**秋山**　有馬さんは亡くなられたのはおいくつだったんですか。

**折井**　30歳ちょうど。

**井口**　随分上に見えたわね。もっと上だと思っていたわ。

**折井**　あの人はこうすればいいと思うと、人の2倍も3倍もかけて考えるんだよ。考えたら集中的に考えるんだよ。考えたことを相手に伝えないではいられない。何かしたいと思ったらそれをすごく考える。1週間ぐらいそのことばっかり考える。ほっぺたつついても感じないくらい考える。考えたらそれを実行したい。だから多分、永井君なんかでもそうだろう。あいつに勝たせるのにはどうするか、考えたらもういてもたってもいられないんだ。接点があるとすぐに始まる。それは遊びの世界でも、プレーの世界でも一緒。結論に達したら動きが早いんだ、相手に有無も言わせないね。


並木OB

**並木**　僕らのことで言うと、OBや片石さんの反対を押し切って永井と僕のダブルスを組ませた。もし失敗すると自分にくるし、勝たせなければならないと思うから、いろんなことを僕は毎日呼ばれて言われました。夏休みに入ってね、そのことがわかったから6時頃から練習に行ってました。そうすると親父やお袋が「有馬さんから7時頃電話があって、練習に行ったって言ったら、そんならいいって言ってたよ」って。毎朝6時頃からYMCAに行ってたのかな。あれだけ言われてね。

**永井**　日本で唯一の大型ダブルスプレーヤーをつくるって言って。

**並木**　有馬さんのダブルスづくりの夢の被害者だ（爆笑）。


板垣OB

**加藤**　そういう意味では俺も同じ。有馬さんには感謝してますよ。当時は強いものと強いものと組んでダブルスやるのが普通だったから。それを前後衛のダブルスをつくるって、変えなかったからな。

**板垣**　私は1年の時何で加藤さんと組んだんですか。インカレに行く段になったら片石さんと組めってなったでしょう。片石さんと練習なんてあんまりしたことなかったですもんね。

**折井**　有馬さんはね、いつも言ってたことは4年間しかいないと。その4年間しかいない選手を、4年はいずれOBになる。だからフレッシュにするために新人を1年くらいで教育して、2年ではチャンピオンにさせるくらいにして、4年を負けさせる。こうはっきり言っていた。4年になる前に負けさせるか、4年になってから負けさせるか、いくらそいつが3年の時チャンピオンになっても4年では次のチャンピオン候補に負けさせる。それを心理的にでも組み替えてでも負けさせて、そして残る現役のペアをつくって、次から次へと回転させていかなくちゃならない。

**並木**　それは戦略ですよね。そういう考えを持ってたんですね。

**折井**　有馬さんは人柄がいいからはっきりと選手に言ってないけど、個人の感情とか希望とか、関係なし。たとえば片石と板垣を組ませておけば、片石はいずれOB、板垣はやり方を覚えればいいし、うまくやれがば勝てる。おまえが今日あるのはそれだよ（爆笑）。それに大型ダブルスもそれだよ。基本的には自分で描いた夢を選手にやらせたんだな。

**加藤**　それぞれが手足になって完成させた、ということだな。その場限りでなく、先を考えた戦略ということなんだな。

**折井**　それを裏付ける哲学というのは伝統が大事なんだと。勝ち続けなければならない。そのためのリサイクル。4年生は塵芥（ちりあくた）、1年生は金の卵。これをいかに育てるかをいつも考えていた。だんだん強くなって、うちの連中だけで準決勝を占めてしまうと、その時は下に勝たせる。

**加藤**　有馬さんになる前は、俺たちが決勝に出たら負けろって言われたもんな。俺はこんな性格だから冗談言うな、ふざけるんじゃない！（爆笑）スポーツにそんなのがあるか。当時は明らかにそうだった。

**折井**　それまでは自然に強い人が勝つのが当たり前、有馬さんは戦略でやっていたから。

**加藤**　有馬さんが生きていて全日本の強化をやっていたら変わってただろうな。

**司会**　有馬さんのうまさはペアの組ませ方のうまさでしょうね。考えて次の世代につなげる、長くつなげさせる、ある程度自信ですかね。

### 有馬さんの一言、私にとっての有馬さんとは

**司会**　ところで皆さんにとって、有馬さんという人はどういう存在でしょうか、どんな言葉が印象に残ってますか。

**永井**　私にとっては、大型プレーヤーとして「永井、ちょっと来い」って呼ばれて「並木と組めっ」て言われた一言ですね。「並木と組むんだから片石とは解消だ」ただそれだけ。「片石は少し不満[illegible]かまわん、俺が頼むんだからやってくれ」っていわれて、この監督は自分で考えたらやる監督なんだな、って思った。だから言われることは努力もしたし、遠征の汽車の中で紙の上で2人の位置をああしてこうしてって話したし、もうそう言われたんだから並木と2人でやるっきゃない。そういう意味ではっき

りした人、もうバッと説明なし。すごいですよ。

**加藤**　高校時代も片石と組んでいたので有馬さん曰く「シングルプレーヤー2人でなくダブルスプレーヤーをつくる」ということで、徹底的な訓練をさせられた。前・後衛で7：3か8：2、俺が前衛。典型的な前・後衛ダブルス、お蔭様で全日本優勝、そういう意味ですべて有馬さんの試験台にのって、私にとってはお蔭様でという感謝の気持ち。その後のマネージャーになった時もそんなもんだと思っていた。

**永井**　有馬さんは個々の気持ちをよくつかんでいたと思う。適材適所、人を見る目に長けていた。30前の若さにしては策士家、25〜26だもの。

**並木**　教わったことといえば、自分の考えを実現するために非常な思いを持っていた、ということだな。人をやる気にさせる情熱を持ってた、ということは素晴らしい監督だったな。僕は全日本に勝ったということは、大変なことでうれしいことだけども、自分でうれしいってあまり思ったことないんだよな。マラソンの有森さんじゃないけど、自分をほめてやりたい、1年生2年生ながらも大型ダブルスをつくりたい、その想いはわかる。でも現実があるわけだから、僕にはそのギャップがすごくある。それから連覇のために、個人の考えじゃなく、1年生と4年生を組ませる、卒業するとまた1年生と4年生を組ませる。大型ダブルスを組みたい、立教長期連覇のため、目的のために俺はよくがんばって達成できたな、ということはうれしかった。でも優勝してうれしかったという気持ちはなかったな。

**板垣**　有馬さんから一番教わったのはやっぱりあのハイバック。あれだと1発で打てますもんね。それまでは回り込んで下から打っていた。あれを教えてもらったのは夏頃じゃなかったですかね。私はシングルはそこそこでしたけど、ダブルスは1〜2回で負けていた。最後の高松のインカレで片石さんと組んだとき、試合前に言われたんですよ。1回も勝ってないって。永井さんと組めば問題なく強かったですよ、間違いないですよね。特に私はダブルスが苦手なんですよ。それで聖学院でよく教えてもらいましたよ。夜行って教えてもらったり、私は有馬さんからはなにもなかったです。まーあれからダブルスやれるようになりましたが、一つの契機でしたね。



京都清水寺にて故有馬監督と折井OB

**折井**　個人的な面から見ると、私の人格形成のバックボーンを創ってくれた人であると思う。策士とは思ってないけども、客観的にものを見る目がある。人を動かす方法だとか、組織するやり方とか、そういうことについてすごく教わった。3年の時に学連へ行けと言われたときは、実はすごく悔しかった。強いと思っていたから

な。でも有馬さんはこいつにはでかい仕事をやらせたいって思われた。今思うと有馬さんに人生の路線をしかれたような気がする。61歳の今まで21の時引かれた有馬路線を走って今日あるような感じだね。

**秋山**　直接有馬さんと接することは少なかったけども、有馬さんがいらっしゃらなかったかったら女子部あんな格好にならなかっただろうな、と思います。でも、今伺ってみると有馬さんてすごい方だなって思うけど、面白い方だったんですね。私たちが入学した頃は野球は長嶋がいて、バドミントン部は男子がすごーく強くて、どこに行っても特別の待遇でいい想いしかしなかったから、大学の4年間はほんとに楽しい4年間だったわ。お蔭様で。

**井口**　男子が栄光の時代だったので、有馬さんを通してほんとにいい想いをさせていただいたなーという想いですね。今考えたら、現在の大学生に比べるとなんて幼かったんだっろうって思う。右向けって言われたら右向いて、言われるままにこの歌を歌って言われると歌って。今だったらセクハラのようなことを何の抵抗もなく。付いていっていい想いをさせてもらって楽しかったな、ということだけなんですね。プレー面では何の貢献もしてないんですけど、曲がりなりにもキャプテンやらしてもらったので、時代を繋いでいったんだなーという想いはあるんですけど。

**牧**　私たちはもう部が出来上がってから入れていただきましたし、有馬さんのありがた味はあまりわからないんです、当たり前だと思っていたんです。だけど自分が卒業してしばらくしてバドミントンを振り返ってみたら、すごい方だったんだなー、誰かが一人で有馬さんのようなことをやるのは無理だから、みんなが少しずつ力を出し合って有馬さんがなさったことをみんなでやっていかないといけないと思います。

Chapter-3

# 転換期への序章

## 1961-1964

昭和36年～昭和39年OB

# 思い出されるのは苦しかった1、2年の合宿

大林　義和
(昭和36年卒)

春と夏の合宿は、毎回違ったところで行われるので、各地方の名所、旧跡等が見物できて楽しいはずなのに、最終日の練習が終わり、マラソンがすむと、すぐに帰京することになり、ほとんど観光をしたり、名物のうまいものを食べた、などという思い出はありません。

その中でも、たしか2年生の時、昭和33年、夏の会津若松での合宿は、唯一の例外でした。

朝6時の起床から夕方6時の練習終了まで、食事休憩以外、たっぷり12時間のトレーニングと、たまにバドミントンの練習で、くたくたの1週間。最初の3日間が過ぎるとあとは惰性で楽になる、と先輩はいうけれど、足腰のハリ、疲れはひどくなるばかり。やっと1週間が過ぎて最後の長距離走。これだけはマイペースで走れるので、気分的には楽な行事。でも東山温泉から白虎隊の墓を巡る坂の多いコースは、途中何度も嫌になる。

東山温泉中心街にかかっている橋を渡って折り返し、反対側の川沿いの道を帰路につくと、温泉街のはずれの頭上に『またどうぞおいで下さい』のアーチ これを見上げて、一緒に走っていた誰かと、こんな、しんどい所へなど二度と来るものか、と話しながら、白虎隊の墓を巡って宿舎の旅館へ帰りついた。

いつもなら、荷物をまとめて列車で帰京するのだが、今回だけはなぜか翌日の帰京。夕方全員でバスに乗り、再び東山温泉へ。川の真中に櫓が組まれ、昼間あえぎながら走った川の両岸の道にきれいどころの輪ができ、盆踊りの真っ最中。輪の外側を見物しながら歩いているうちに、『もう二度と来るものか』と毒づいたことなどケロッと忘れて、いつの間にか全員が踊りの輪の中に加わっていた。

1年生の時、体育祭での仮装行列で3等に入賞して電気スタンドをもらったこと、着替えの場所のことで、体育会の先輩に殴られたこと、リレーであの長島先輩、杉浦先輩と走ったことなど…。卒業して35年を経た今でも、1、2年生の時の苦しかった時代は、懐かしく思い出すが、楽をした3、4年生の頃のことは、あまり思い出せない。

創部以来50年間、強かった時代、また部員数が減り部の存続まで危ぶまれた時代等もあったと、聞き及んでおりますが、今後創部百年に向かって、その時々の状況に応じて少しでも上を目指して、ベストを尽くしていただきたく思います。

# 喜びも苦しみも凝縮されたそれぞれの合宿

小栗 和平
(昭和36年卒)

私が立教大学に入学したのは昭和32年のことであり、高等学校時代なにも運動部の経験のなかった自分は、大学に入学したならば何かスポーツをやるべく各部を見学した思い出がつい最近のように思われます。

馬術部、卓球部、フェンシング部、テニス部等入学した友人と見学し、最後にバドミントン部に決めることになった。理由は一番楽しいのではないかと単純に思ったからである。ところがこれが大変な誤りであった。しかし後には引けず昭和36年の卒業まで続いてしまった。

その間には新入部員として、練習と勉強との両立の問題、マネージャーとしての任務、その他数えきれないことが、山積していた。

今振り返ると背筋がぞっとし、鳥肌が立つ思いだが、しかし楽しいこと、嬉しいことも沢山あった。

たとえば、リーグ戦優勝はもとより、各大会の優勝、また個人的には優しき先輩、良き同僚、良き後輩に恵まれたこと、各地を試合、合宿等によって回ることができたこと、また主務の立場としては練習場の確保、キャプマネ会議における予算取り等思い出はいっぱいである。

現在は、あと1年に迫った60歳定年まで浜松カントリークラブに営業部長として勤務しています。その間に東京はもとより四国、大阪、名古屋等から先輩、同僚、後輩達がゴルフをプレーしに私を訪ねてきてくれたことも大変嬉しいことです。

今日、40年前を振り返って(当時の思い出を写真とともに)みることにする。

初めてバドミントン部に入部し部室に入ってまずおどろいた。上級生と下級生の格差、田舎者にとっての言語、薄ぐらい部室、そして初めての夏期合宿(場所は江之島海岸の宿)。

入学当時部に籍を置いた同級生は25人くらいいたと思うが、夏期合宿を終えた時点で、約半分になってしまった。合宿に入る前に、上級生から「トレーニングをしっかりやっておけ」といわれ、そのきびしさは聞いていたが、いかに合宿がつらかったかは想像にかたくない。

しかし半面、今に思えば大変貴重な青春の1ページであったと思える。1年生の秋行われた立教大学を中心とした板橋グラウンドでの運動会において、同級生全員で行った仮装行列に参加したことは楽しい思い出の一つである。

2年生の春期合宿は富士市で、夏期は会津若松、3年生の春期は久里浜、夏期は高岡

4年生の春期は山形、夏期は大垣で合宿を行った。それぞれの合宿に喜びも苦しみも4年間の部活が凝縮されていたように思われる。

また練習とトレーニングの続く毎日に、食欲は一般学生と異にし、食事の楽しみもあった。今思えば餃



昭和32年、体育会運動会1年生主役の仮装行列の様子。警官の衣装は手錠を含めすべて本物。
（前列長髪の女性姿が小栗）

子会館の餃子にチャーメン、30円の天どん、合宿時のどんぶりめし、北海道遠征時のサッポロジャイアンツ……。

そして遠征費をかせぐためダンスパーティーを高輪プリンスホテルで開催した思い出。今ここに筆を走らせていると次から次へ走馬燈のようにかけめぐってくる。

最後に皆様の健康を祈りペンをおかせていただきます。

皆様方にお会いできる日を楽しみにしています。

# バドミントン部で培った精神と肉体、そして多くの友人たち

安田　元信
(昭和36年卒)

私とバドミントンとの関わりは、高校進学時に誰にでも手軽にできるスポーツと考え、バドミントン部の門をたたいたのが始まりです。

最初は簡単そうに見えたのですが、非常に奥が深く、しかも想像以上に体力を要求し消耗するスポーツであるということを、自分の体で知りました。しかし始めた以上最後までやり通そう、そして青春をバドミントンに賭けてみようと心に決めました。

昭和32年、立教大学入学と同時に春のトレーニングに参加しました。トレーニングはランニングに始まり、最後は説教で終わるというパターンでした。今思えばその内容はスパルタ式とでも言うのでしょうか、精神的にも肉体的にも大変きついものでした。

立教から哲学堂公園までの10キロの道のりをランニング。途中目白で都電と競争ダッシュ、公園に着くとすぐうさぎ跳びと「あひる跳び」が待っている。

また、ランニングが終りミーティングでは、言葉づかいから態度挨拶にいたるまで細かく注意され、一人でも悪ければ連帯責任ということで、全員制裁を受けたものでした。怖かった先輩という印象が今でも強く残っています。

そういうわけで落後者も多数出たものでした。当初40数人の新入部員が一人消え、二人消え、卒業時には10人となってしまいました。私もみんなについて行くために、下宿先から豊島園まで夜ランニングを続けました。

自主トレの効果が出たのか落後することもなく、また日が経つにつれ体力がつき、自信もついてきました。

私も何度かやめようと思いましたが、あの時退部届けを出していれば、苦しかった練習や試合から逃れられても、今の自分は得られなかったと思います。こうした厳しい練習に耐えられたのは、先輩同僚後輩の激励があったからこそと思っています。

特に同期の皆さんと加藤先輩には大変お世話になりました。バドミントンを通して沢山の師に恵まれたことと、先輩や後輩の皆さんと現在もなお変わらぬお付合いができているということは、大変幸せなことと思っています。

また仲間や友人、そしてマナーや人生観を得られたことは、私にとって貴重な財産でもあります。実績のない私ですが、現在の自分があるのも立教バドミントン部で培った精神と肉体があったからこそと自負しております。

思い出は沢山ありますが、当時の立教は日本のトップクラスの選手が大勢おり、インカレを初め関東大学リーグ戦などほとんどの大会で優勝をしていました。そういう方々は卒業後では優勝カップやトロフィーが山のように並び、我々下級生が1個ずつ預かり、各自保管したものです。

神田の国民体育館で行われた春秋の関東大学リーグ戦。東神奈川での練習。久里浜や会津若松での合宿。国立競技場で開かれた体育会主催の大

運動会での仮装行列。慶応とのソフトボール大会等。また、アジア大会が日本で開かれ、バドミントンが初めてオープン競技として行われ、その準備や当日の外国選手の接待などを務めさせていただきました。たしか片石、永井両先輩が日本代表として活躍されたのを記憶しております。

六大学野球にも母校応援のためよく出かけたものです。長嶋先輩の7号ホーマーの新記録を外野席で拝見し感激したものです。

卒業して地元の銀行に就職し、バドミントンを通して沢山の人と知り合い、またそれが仕事上でも大変プラスとなったのは、紛れもない事実であります。しかし時が経つにつれてバドミントンとは次第に遠ざかり、野球そして今ではゴルフに熱中している自分です。

立教での学生生活は今でも忘れられず、上京の際は必ずなつかしい時計台の周りを散策しながら、昔を思い起こしています。

最後になりましたが、立教バドミントン部の50周年をお祝いし、今後のますますの発展と「常勝立教」の復活を心から期待しております。

# あの一戦……昭和35年11月、大阪

小宮　好雄
(昭和37年卒)

バドミントンを始めたのは昭和27年6月、横浜の関東学院六浦中学校1年生(12歳)の時。その後29歳まで選手生活を続け、数々の思い出を残してきた。不思議と勝ったことよりも負けた時のことを思い出す。よほどくやしかったからなのだろう。

なかでも鮮烈に思い浮かぶのは、昭和35年11月22日、大阪で行われたインカレ準決勝対慶応大学戦の[illegible]。この年は昭和30年から続いていた関東大学リーグ連勝記録が「10」でとだえた年。春、秋とも2位に甘んじていただけに、インカレ団体戦だけは是が非でも7連勝から8連勝へつなぐ必要があった。意地でも連勝記録を伸ばすべく練習も積んできた。また、リーグ戦の3複6単に比べ、インカレの2複3単は立教に有利であり、下馬評も高かった。板垣(隆)主将以下カップを持ち帰るために、団体、個人すべてのカップを大阪へ運んだはずであった。

ところが、負けたのである。小宮がシングルスで中村(智)選手に負けたからだ。

### 慶応大学中村(智)選手のこと

当時の慶応も陣容からみて2複3単の方が戦いやすかったはずであり、秘かに期するものがあったようだ。

ダブルス1対1のあと同じ3年生の中村(智)選手と対戦した。誰もがこれまでの対戦成績からみて小宮が勝つものと思っていたようである。しかし、中村選手の本当の力、ポテンシャルを知っていたのは小宮である。怖い選手だ。8回対戦していたが、中村が途中でゲームを投げ出したことは一度もない。他の選

手と闘う時とは様変わりとなる。

中村と小宮は横浜市磯子区に住んでいた。5キロとは離れていない。中村は関東学院高校を出て慶応に入った。入学時の因縁もあった。高校3年の時、単複とも県大会、関東大会、インターハイとも決勝で対戦し、運よくカップはすべていただいた。

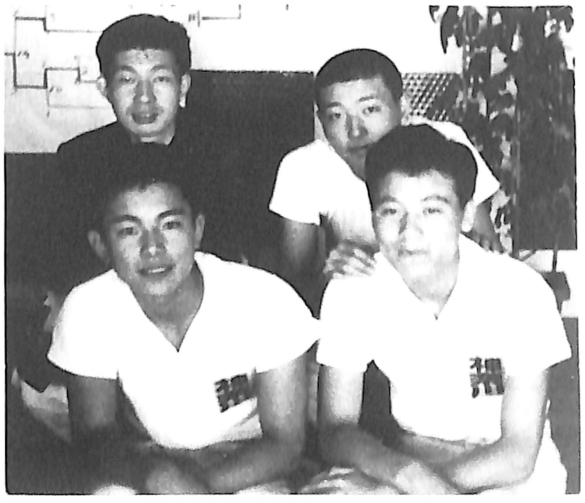
インターハイ個人戦表彰式の時、隣に立っていた中村が汗を流し、青くなって突然倒れた。貧血であった。「オマエがカップや楯を次々に持っていくのを見ているうちにわからなくなった」と後日語ってくれている。宿命のライバルの彼ではあるが、高校国体の時は頼もしいパートナーとなる。昭和31年、32年の兵庫、静岡国体では神奈川代表として連勝した。コートを離れればガールフレンドのことも話し合える良き友だった。

大阪中央体育館でネットをはさみコートに立った時、中村の顔はいつもの彼ではなかった。人なつこい笑顔が消えていた。ゲームが始まりスマッシュの打ち合い。高校時代からのやりとりではあるが、つなぎが長かった。中村が拾いまくるのだ。苦しくなり、しだいにゲームを急ぐことになり、ラインぎりぎりを狙う。はずれる。ミスが出て負けパターンとなった。負けた、中村に負けた、慶応に負ける、勢いを止められなかった。

それから5年後彼は大阪を経て、岐阜に転勤し、岐阜国体の地元選手として出場した。トヨタに入った小宮は隣の愛知県から時々岐阜の強化練習に参加。その折、すっかり貫禄づいた身体つきの中村は「大阪の時は勝ちたかった。一度でいいからオマエにな。それから後のバドミントンはおまけだよ」と笑って語った。

その後間をおいて昭和61年11月に横浜で再会した。昭和32年の静岡国体で神奈川代表として共に戦った鈴木敏勝君(明治OB)の通夜の晩であった。不慮の交通事故で亡くなった鈴木君を悼みつつ「健康がいちばん。たまにはいい酒飲もうよ」と痛飲したのを覚えている。これからは東京で一杯やろうと約し、何回も会う間もなく、平成2年7月今度は中村(智)が逝ってしまった。

これから楽しく飲めると思っていたのに……。



昭和32年静岡国体高校男子で優勝した神奈川県チーム
(前列左 小宮、右 故 中村氏、後列右 故 鈴木氏)

# 50歳の誓いは実行できないが

長谷川　陽一
(昭和37年卒)

私が初めてバドミントンと出会ったのは、小学校3年生の時でした。それは戦後東南アジアから帰国された方が、バドミントンができる広い場所を探し、私の通学している小学校の校庭で私の父(教師)とシャトルを打ち合っているのを見たのが最初でした。

その方の指導で、私でなく父が先に、バドミントン競技に夢中になり、69歳で他界するまで、愛知県バドミントン協会にかかわっていました。

このような環境は、私にとって良き機会でありましたが、なにか欠けることがあったと思います。数年後中学生になり、バドミントン部に勧誘され入部したものの、体育館もなく、校舎の間では、風に左右され、本来の面白さがなく、すぐやめてしまいました。

そして高校入学後、各部が新入学生の勧誘を競っている時、古い武道館で、バドミントンを練習している先輩を目の前にして、「風の影響を受けない建物の中で一度バドミントンをプレーしたい」と思っていました。私は、その日からバドミントンに熱中していきました。

高校、大学時代を通じて、いろいろと熱き思いがありましたが、今印象に残っているのは、イチニ、イニチと豊島園までのランニング、目白の急坂と階段駆上り、そして春夏の合宿猛トレーニングなど、終了したときの清々しさ、今でも忘れることができません。おかげさまで、体力は、人並み以上のものを授かったと感謝しています。

私の在学中の立教バドミントン部は常勝時代であり、特に最終学年の時、私の出身地名古屋での大学選手権で優勝できたことは一番の良き思い出となっています。

また卒業した年には諸先輩の協力もあり、五大都市大会バドミントンの部で優勝し、一員として参加できたことを誇りと思っております。





1年生は合宿前日に油井マネージャー引率のもと、ごらんのとおりの姿に（左から中村、小宮、長谷川）

社会人となってから、決して不運とは思っていませんが、職に恵まれず、現在勤務している会社に創業時から自分の全力投球に賭けてきました。

つねづね、50歳になったら再度バドミントン、を心の支えとしていましたが、自分の不注意から10年前、歩くことすらできなくなる事故に遭ってしまいました。

立教バドミントン部の後輩諸君も、数年前には非常事態がありましたが、よく頑張ってくれました。

私も必死のリハビリで、走ったり、跳んだりすることはできませんが、どうにかゴルフ1ラウンドは回れるようになりました。

残念ですが50歳の誓いは実行できません。

現役の諸君、君達は若い、なんといっても体力勝負の競技です。伝統の猛トレーニングで、今一度栄光の座に輝いて、青春の思い出をつくってください。

# 遊行寺合宿の失踪事件と偶然の再会

望月 昭
(昭和37年卒)

今朝は足腰が痛い。実は、裏磐梯へスキーに行って昨日帰ってきたばかりである。

行った相手が、昔、バドミントン部で一緒だったA君である。

今回、12、3年ぶりにA君と、2泊3日で檜原湖の近くのペンションへ行ってきた。行く10日ほど前に、12、3年前に買ったスキー靴を出してみたが、プラスチック製の靴がボロボロ崩れてきて、使いものにならなかった。

そのため、長男のスキー靴を借り、スキーも借り、その他着るもの一式も、長男と次男から借りての、オール借りものである。

しかし、スキーは楽しかった。からだが疲れても愉しかった。A君は、毎年つづけてスキーへ行っていたとかで、かなりうまくなっていたので、上級コースへ行った。一方僕の方は、しばらくぶりだったので、もっぱら緩斜面で滑った。帰りのシャトルバスに合わせて、場所と時間だけきめて、あとは勝手に滑った。腕が違いすぎるので、その方がよいと判断したからだ。

それにしても、バドミントンの友達は何十年経ってもいいものだ。ツーといえばカーだからだ。それと、今まで、大病もせずにこれたのも練習のたまものだろうと思っている。

練習といえば、思い出すのは藤沢の遊行寺での合宿だ。

あれは、4年の春の時だったと思うが、1年生のH君が昼間の猛練習がイヤになったのか、その日の夜8時頃に行方不明になってしまったのだ。結局、10時頃に砂浜で海を眺めているH君を誰かが見つけて、ことなきを得たのであるが。失踪直後は、随分あわ

てたものであった。

しかも、これには後日談がある。これは僕個人のことだが、あの失踪事件から、17、8年後、浅草蔵前のマンション前の道路で、息子とバドミントンをしていた時、通りかかった夫婦づれの男が声をかけてきた。

よく見ると、あの時のH君ではないか。相手も懐かしそうにしていたので、立ったままでちょっと話したが、卒業後、結婚した嫁さんの父親の墓参りに来たとのこと。この近くの寺に墓地があるので、今日は横浜の方から、都営地下鉄に乗ってきた、などと話していた。

それにしても、奇遇である。その時からも、もう20年ほど経ったと思うが、またH君の元気な姿を見たいものである。

# 足を大地につけ、一歩一歩前進を

浅見 征一郎
(昭和37年卒)

「なんでこんなにきつい、バドミントン部なんかに入ってしまったんだろう」と私は認識不足を悔やみました。が、良い思い出となりました。

立教中学の時は美術部、高校の時は魚釣部と趣味的な部に入り、気ままに学校生活をエンジョイしていました。大学に入り少しは身体を動かさなくてはと思い、正月の羽根つきぐらいの軽い気持でバドミントン部に入部してしまいました。

当時は、高校で活躍したバドミントンの強い選手を引き抜いて特訓をしておりました。その中に、今までまったくラケットを持ったこともない者が入り、レギュラーと一緒にトレーニングをし、コートに入り練習をしたのでしたから、それはもう私にとっては大変なことでした。

昭和37年卒の同期の仲間はレギュラーメンバーの小宮(好)君、長谷川(陽)君と一般部員は岩佐君、望月(昭)君、酒向君たちでした。

何しろ30年以上も前のことなので、記憶がうすれてきていますが、1年先輩には、板垣(隆)さん、[illegible]雲さん、石川さんたち、2年先輩には瀬戸さん、小宮(貞)さん、内山さんそして並木さん、永井さん(この二人は名コンビでいつも試合に勝っていました)たち、1年後輩には鈴木君、板垣(善)君、佐藤(次)君、長谷川(武)君たちです。

大学リーグ戦では、1部でいつも優勝しており、その頃がバドミントン部の全盛時代でありました。大学には自前のコートがなく、横浜の東神奈川にあるどこかの体育館によく通ったものです。コート練習がない時は学習院、川村学園方面、それから哲学堂方面へとマラソンをしましたが、私はいつも最後の方で先輩たちに迷惑をかけておりました。

3年生になると、(記憶が薄れて定かではないが)、全日本か関東学連の副委員長にさせられ、大会があるたびに各地へ行かせてもらい、他大学生とも知

り合いになり、多くの友人を得ました。

当時の写真があったのですが、我が家を建て替えの時アルバムが行方不明となったため、数枚の写真しか見つかりませんでした。写真を見ると昔のことが思い出され、月日の経つのはいかに早いか、「30数年前は皆んな若かったんだなー」とつくづく思われます。

一期一会を大切にして、創部50周年の次は80周年と、その頃は私も傘寿となりますので合わせて盛大にお祝いしたいものです。

平成9年は干支の丑(牛)年です。牛歩のごとく一歩一歩確実に足を大地につけ、バドミントン部が前進されることを切に希望します。



昭和36年11月、全日本学生選手権。全日本学連副委員長浅見(左)・マネージャー岩佐組が出場(名古屋金山体育館)

# 赤字を埋めたダンスパーティー

岩佐 俊二
(昭和37年卒)

私がバドミントン部へ入部したのは、昭和33年、一般部員としてである。

高校時代は、バレーボール、柔道と2つの部へ籍をおいていた。

大学に入り、勉強だけでなく何か運動がしたく、バドミントン部に入れば、少しは女性にもてるかなと、思い入部したが、しかし思い違いであった。

練習はきついし、部則は厳しい。例えば、学業においてもしかり。赤点1を取ると1年間頭を坊主にさせられた。私も1年間「ぼうず」をやりました。

当時の1年生のレギュラー部員は、小宮好雄、長谷川陽一、中村の3名、一般部員は5名、計8名、1年から4年までは総勢27名であった。

その頃のバドミントン部は、昭和30年からほとんどすべての大会において、優勝をするという立教大学の中でもNo.1の運動部であった。当時大学にはご存じのとおり、体育館がないようなもので、練習もままならず、ジプシー生活であった。特に一般部員は練習もできない状態であったので、自分たちで練習場を探して歩いたこともあった。

3年になり、サブマネージャーになったが、ジプシー生活のため予算がなく、赤字続きであった。シャトル代も払えない借金生活であった。このままでは倒産である。何とかしなければならない。先輩の方々に相談をし、ダンスパーティーを開くこととなった。特に、川端先輩、野村先輩、古畑先輩、瀬川先輩、小西先輩、折井監督を中心に話を進め実行するのは我々部員である。

会場は、バンドは、予算は……。学生である我々はやることなすこと、もちろん初めてである。

諸先輩と相談し、会場は高輪プリンスホテルに決定(古畑先輩の力)。

バンドは、渋谷にジャズ喫茶「プリンス」があり、当時ハワイアンが流行していた。喫茶店に行き、バンドのマネージャーと交渉、「ポス宮崎とハニーアイランダース」に決定。もう一つは、立教大学軽音楽部に頼み、2バンド編成であった。

会場は500名のところ、1500名分発行、完売する。1枚@500×1500=750,000。すべてうまくいった。しかし、当日会場は、いもを洗うような状態であった。

小宮と私は、当日の代金回収につとめ、チンピラのパーティー荒らしがあるため、回収した代金をボストンバッグに入れ、ホテルの前にタクシーを横付けし、一目散に自宅に帰った。大いなる黒字であった。女子部員も一生懸命、活躍していただいたので儲けの一部を渡し、男子部は赤字を埋め、無事黒字で卒業できた。

もう一つの思い出は、良い選手をいかに見つけだし、立教大学を受験してもらうか、今で言う、スカウト合戦である。

大学4年の時、小宮と私は高校の大会は、すべて見

に行った。北は青森、南は熊本まで、それは非常に大変な仕事であった。良い選手がいると、本人はもとより、学校の先生、家族まで会い、入部をお願いした。当時受験し、めでたく入部したのは、大竹、安沢、松崎といった精鋭たちであった。

書き出してみると、学生生活の中でけっこういろいろな経験をしたものだとつくづく感じる。今から思えばすべて懐かしい思い出である。



昭和35年、対慶応ソフトボール対抗戦。
バトミントンを離れた交流も楽しいものだった。

# 第6回トマス杯への参加

板垣 善憲
(昭和38年卒)

東京オリンピックが開かれた1964年は、日本スポーツ界の近代化にとって、一つの転機だったが、我が国バドミントン界にとっても、国際舞台で活躍する元年でもあった。

この年の5月、東京で第6回トマス杯世界選手権大会のインターゾーンが開催されることが決定した。しかし何よりも我が地元の日本チームが出場しないのでは興味が著しくそがれることになる。

そこで予選通過の可能性の高いアメリカゾーンにエントリー、ぜひとも勝たねばならない運命にあった。このため過去にない厳しい強化合宿を経てトマス・カップ日本チームが編成された。

日本バドミントン界の期待をになって川端昇市監督を中心として、佐藤芳朗コーチ・永井栄一キャプテン・前年の全英ベスト8の小宮好雄選手・板垣善憲選手(以上立教出身)・堺栄一選手(早稲田出身)・宮永武司選手(慶応出身)の7名という編成となった。

### アメリカゾーン予選

アメリカゾーン第1戦はメキシコで、トマス杯は初参加。メキシコは高地対策が必要ということで、試合の10日前に現地へ入り練習。最初はすぐ呼吸困難となり、休みながらの練習であったが、4、5日で環境に順応していった。

試合は9-0の完勝であった。

次にバンクーバーでカナダと準決勝。これも8-1の大差で勝ち、決勝進出。

決勝はカナダのビクトリアでアメリカと対戦。アメリカのNo.1巨漢のジンプールにシングルス2試合を失っ



昭和39年3月、トマス杯アメリカゾーン予選に出発する日本選手団
(左から 永井、佐藤コーチ、板垣、川端監督、小宮)

たが、他の7試合を厳しい戦いであったが勝利した。

各ゲーム内容は接戦の連続で一つ間違えばどうなったかわからない苦戦の優勝だった。勝因はアメリカ戦に最高のコンディションで望めたこと。さらに川端監督・佐藤コーチと選手5名が一丸となって戦うことができたこと。

第1日目の試合で3-1とリード。この夜は全員が極度の緊張感と興奮のためほとんど眠れず、第2日目の試合となった。しかし皆の勝利への執念と充実した気力により、勝利することができた。

優勝の瞬間は嬉しさで飛びあがり抱きあって喜んだ。日本チームは念願の東京でのトマス杯世界選手権大会インターゾーン進出の資格を獲得した。

### インターゾーンとチャレンジラウンド

アメリカ地区・日本、アジア地区・タイ、ヨーロッパ地区・デンマーク、豪亜地区・マラヤと決まり、選手権保持国インドネシアを迎えて世界の強豪が東京に集まった。

インターゾーン

マラヤ　2-7　デンマーク

日本　　3-6　タイ

インターゾーン決勝

タイ　3-6　デンマーク

チャレンジラウンド

インドネシア　5-4　デンマーク

日本のインターゾーン第1戦はタイで、第1日目、シングルスを2試合失い苦しいスタートであったが、得意のダブルスを2試合勝ち、翌日へ望みをつないだ。しかし、結果は3-6で敗れた。

初めて見る世界の強豪の見事なプレーに観衆は酔った。

また次のようなハプニングもあった。チャレンジラウンド第1日目のインドネシア対デンマーク戦で、外国人の観衆が騒ぎ、機動隊80名が東京体育館の囲りを警備するという事件が起こった。

当然翌日は運動面と社会面で大きく報道された。バドミントンに関する大きな記事が一般の人の目にとまったのはこれが最初であろう。

世界バドミントンにとって、最も歴史と伝統を誇るこのトマス杯大会が東京で開催され、チャンピオン争奪戦が行われたことは、我が国のバドミントンの向上に大きな財産となり、日本が世界への道を歩む栄光の第一歩を踏み出すことにもなったのである。

# バケツの水がこんなに旨いとは

鈴木　幸春
(昭和38年卒)

### バドミントンへの関わり

3人兄弟の三男坊の私が、聖学院中学へ入学したとき、次男はアメリカンフットボール、長男はバスケットボールをやっており、私も何かスポーツをしたいと思っていました。

2年になったとき兄たちに相談したところ、バドミントン部を勧められ、自分でもやるならバドミントン部と思っていたので即決し、長い付き合いが始まったのでした。

というのは、当時バドミントン部はアメリカンフットボールとともに、全国に名を馳せており、先輩たちをみると立教で活躍中の望月、力石先輩、高等部には永井、北島、小野岡さん、一級下には吉野、福永さんとキラ星のごとく上級生たちがおり、私も先輩のようになりたいと思ったからです。

### 始めたころの中学時代

中学2年になって入部し、1年間は放課後から下校時間までの約2時間、先輩の指導で意外に楽しい練習でしたが、3年になると練習環境がガラリと変わりました。

放課後から練習開始までの間のトレーニング、軽い食事をして待機、6時から9時までの夜間練習にはコワ～イ望月、力石先輩がコーチで指導、怒声・罵声の練習漬けの日々に変わりました。

### シゴキの高校時代

中学3年の時は、先輩たちの怒声・罵声は、私の頭上を通りすぎていきましたが、高校になるとそうはいかず、直接身に振りかかる機会が多くなり、学年が進むにつれ、当然のように怒声・罵声に加え、手の直接指導も加わるようになり、ピーンと張り詰めた中でシャトルを追いかけていました。

高校時代で特に印象に残っているのは夏の合宿です。というのは、前期の授業が終わったその日からインターハイを目指して校内で1週間泊まり込むのですが、練習日程は、朝6時のトレーニングから夜9時の練習終了まで息つくヒマもなく、特に昼2時から5時まで(あくまで予定)のトレーニングは真夏の炎天下、飛鳥山のグラウンドでのウサギ跳び・アヒルetc……「よし」の声がかかるまでやってろ(コーチの指導方針)、まさに地獄のシゴキでした(その時は鬼のような先輩をどんなにウラんだことか)。

しかし、この時代のシゴキが、人には負けないと自負できる体力が培われたものと今でも思っています。

それと、シゴカれているときは辛いけど、やりおえた時の何とも言えない充実感……今でも思い出せます。

### 立教大学バドミントン部に入部して

高校のときのバドミントンの環境から、当然立教大学でバドミントンをするものと自分勝手に思い、運良く入学し、インターハイ等で対戦した板垣君、佐藤君、長谷川君と同じ釜の飯を食うことになりました。

板垣君と初めて練習をしたときは強烈な印象を受けると同時に、インターハイで対戦して負けた原因がよく

わかりました。

大学時代には、試合に勝った、負けた等、いろいろ思い出はありますが、強く印象に残っているのは1年の夏合宿の時のことです。

確か初日だったと思いますが、朝から雨が降っていたため、室内でトレーニングをやることになり、腕立て伏せをこれでもか、これでもかとやらされ(失礼、指導され)、筋肉がパンパンに張って腕が曲がらなくなり、食事するにも箸と茶碗が1に持っていけず、特にトイレでペーパーの処理ができず……これには参りました。

また、体育館までは2kmくらいはあったでしょうか、ランニングで行くのですが、この日は雨が止まず、雨中をランニングで体育館に行き、ズブ濡れになったためシャツ、短パンをたまたまトイレの脇にあったバケツに絞りました(残り水もあったのだと思う)その後お決まりのトレーニングが始まったのですが、何せ真夏の雨後の閉め切った体育館のなかでのトレーニングですから、絞った雨水以上の汗が吹き出る状態でしたので、顔を洗うふりをしてバケツに溜まった水を飲んで……(あの旨かったこと)。後で佐藤君に聞いたら、「自分も飲んだ」といってました。

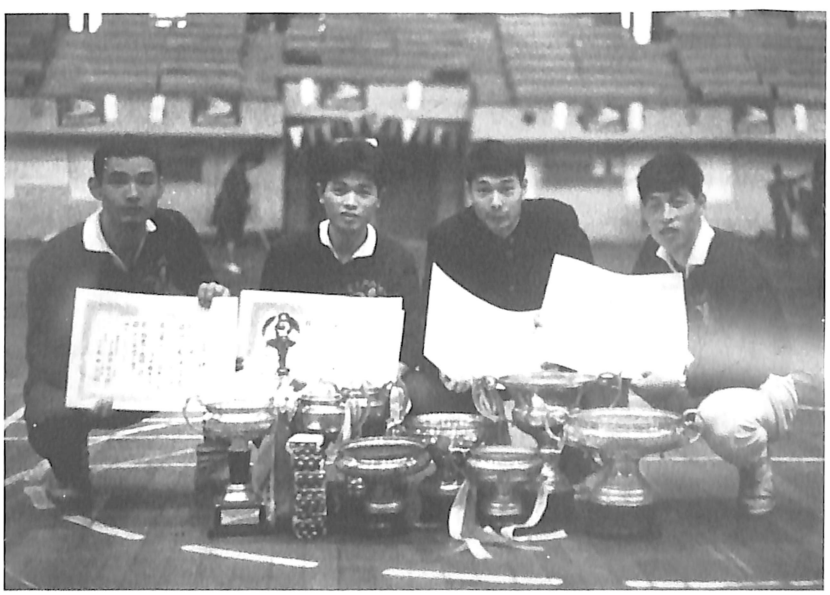
## 社会人になって

卒業後はバドミントンの縁で電電公社に入社し、10年間バドミントンに携わりましたが、実業団のイベントである実業団選手権大会で、毎年のように決勝まではいくのですが、小宮先輩、板垣君のトヨタ自動車に負ける繰返しの10年でした。

しかしこの時期は勝敗は別として、先輩や仲間と会えるのを楽しみにして励んだ10年でもありました。

## 健康のためにバドミントン

電電公社でバドミントンをやめてからはラケットは握っていませんでした。しかし7、8年前から健康のためにラケットを再び握りはじめ、地域のサークルで汗を流すようになりました。「どうせやるなら」といっては何ですが、試合は二の次、「当地の旨いものを食べる」のを目的にシニア選手権に参加して楽しんでいます。



昭和36年全日本学生選手権(名古屋)、団体・シングルス・ダブルスすべて優勝したのはこの大会が最後となった(左から 鈴木、板垣、佐藤、長谷川)

こうして振り返ってみると、いろいろな思い出がありますが、なぜか当時の辛かったこと、苦しかったことのほうが、より強烈に印象に残っているものですね。

今、部創立50周年記念誌の一編として拙い文章を書きましたが、「京教大学バドミントン部の出身でよかった」としみじみ思っています。

# 感謝の気持ちでいっぱい

佐藤　次之
(昭和38年卒)

ペンが進まない……

細かいことは忘れた……

もう長いこと関わりがなくなったなぁー

立教大学体育会バドミントン部卒業の身にとっては、忘れがたい「思い」がたくさんあるはずなのに……

エイホッ、エイホッ、突然に、2列になって走っているトレーニング風景が頭に浮かんだ。長く苦しいトレーニング、練習の連続、そして試合、遠征と合宿、とにかく家にいる時は少なかった。

トレーニングでは自分の限界に挑戦し、その限界を知ることができた。またさらなる体力、技術の向上にも挑んだことを思い出す。本当に強くなるには、先輩やまわりから指図されてやるよりも、自らが自らの向上のために、自発的に真に過酷なノルマを与え、クリアすることの方が大切であり、その努力によって体力や技術もより一層磨かれ、結果として勝利することが、より大きな心の満足を得られることも知った。

勝利の美酒も味わった。このことは自分にとって本当に大きな財産となった。いままでの辛いトレーニング、練習の苦労もぶっとんだ……勝つことの喜び……うれしい……自然と涙があふれでた。勝つためには何をしなければならないかを学んだような気がする。

もっともかたや、敗戦の苦汁はうんざりするほど、沢山経験した。

「コンチクショウ……」「今に見ておれ……」

くやしくて、くやしくて……でも不思議と涙はなかったなぁ……

そういえば、よく何かと根性、根性といわれた。

最後の最後まであきらめるなぁー

球に飛びつけー　このバカヤロー　何やってんだぁー

今でも記憶に鮮明に残っている。

ネバリにネバル……

社会人としても重要な心構えをお教えいただいた。

そういえば「一つ年上でも先輩は先輩、先輩は神様である」とお教えられ、ずいぶんと心の忍耐力が養われたと思う。

また自分は漁師育ちで、言葉が荒い……諸先輩からずいぶんとしごかれ、ようやく一人前になったような気がする。

ありがたいことです。

話は変わるが、当時は部にお金がなかった。

そこでお金を集めるために、先輩の方々の会社に幾度となくお訪ねし、無心したことを覚えている。さぞかしご迷惑であったことと、今にして思う。

さらに、今は大成功されているヨネックスの米山社長にも(当時はまだ小さな会社であったが……)シャトル代の面倒をよくみていただいた。

感謝、感謝であります。

一方、我々部員も牧原商店で、真夏の暑いなか汗

をぶったらして、中元用の荷造りのアルバイトをして、シャトル代を稼いだこともあったっけ……

いずれにしても、あんまりない知力と十分にあった体力をフルに使って、勝つことに挑戦した4年間、当時は長く辛い思いであったが、今にして思えば一瞬のできことである。しかし、この4年間で得たものは、我が人生の礎えとなったような気がする。

優しい先輩の顔、厳しく怒こっている先輩の顔、なぐさめてくれている先輩の顔、顔、顔

また、ともに苦楽を分かち合った同輩のニコニコした顔、機嫌の悪い顔、顔、顔

後輩の緊張した顔、コンチワースといった元気な顔、顔、顔

つれづれに思い出す皆様のお顔に、心から「お世話になりました。ありがとうございます」と感謝の気持ちで一杯です。

また、現役の諸君も、二度とない青春の晴やかな時、悔いのない心に残る良い思い出を沢山つくられるよう、精一杯頑張ってください。

7月5日、皆様とお会いできる日を楽しみに、ペンを置きます。

# 後輩よ、同級生を大切にし大いに議論してほしい

東条　義昭
(昭和39年卒)

中学校2年生の後半、ある日の夕方親父と一緒に、近所の空地へ連れていかれ、そこで初めてバドミントンというスポーツを知り、始めることになった。

それ以来、中学、高校、大学とバドミントンの選手として活動することになる。

大学に入ってすぐ、右も左もわからない東京で、部員を増やせと命令されても、四国からは大学に入ることは珍しく、同県人もなく、クラスにも顔を知った者は誰もおらず、大変困ってしまった。部員には勧誘できなかったが何ヵ月かたって同じクラスで友達ができ、卒業してもいまだに家族ぐるみで付き合っている。

しかし残念ながら、バドミントンを通じての同級生の友達がいない。

中学の頃にはまだバドミントンというスポーツが普及しておらず、部員も数名で同級生は1人、それも3年の後半には進学が主で退部してしまった。

また高校になると、自分の進路をはっきり決めてそれに向かって進んでいるし、多少自分のプレーが同級生よりうまかったせいか、上級生とダブルスを組まされ、3年生の時には一応県内でチャンピオンになったためか、キ[illegible]推薦された

大学に入ってからも同級生は1人、[illegible]で健康上の都合で休部し、それ以来卒業するまで1人で、独断と偏見でもって部を推し進めてきたが、いまだにそれが良かったか悪かったかわからない。しかし現在の部を見るにつけ、入試のむずかしさもさることなが

ら、この時から低迷が続いているのではないかと思う。

大学4年間、部を強くするのに精一杯だったが、同級生と恋愛論、人生論、酒を飲んでのバカ騒ぎ、また部のこと等も一緒になって議論してみたかった。それをできなかったことが一番残念である。

後輩には、同級生を大切にし、いろいろな角度から大いに議論し、自分をみがいてほしい。私のような寂しいバドミントン生活は送ってほしくない。たとえインカレでチャンピオンになっても、何か物足りない気がする。

ただ、先輩たちには大変可愛がってもらい、そして今の自分があることをこのページを借りてお礼申し上げたい。

最後に創部50周年にあたり、これからの50年への新しいスタートとしてこれからも頑張ってもらいたい。



昭和36年新人歓迎練習会、残念ながら新人は次々とやめていってしまった。(前列左端が東条、後列左から2人目が松下))

# 2年4か月で終わった競技生活

田中(松下) 邦彦
(昭和39年卒)

大学に入って3年目となった昭和37年7月の中旬、東条と私は、先輩より遅れて2人だけで東日本大会の札幌に向かった。

当時はまだ蒸気機関車で、煤だらけの真黒な顔になりながら、それも普通列車で十何時間もかけて北海道に向ったことを今でも懐かしく思い出します。札幌は朝晩は涼しく、東京のむし暑さと比べると非常に快適でしたが、なぜか食欲がなく、おかしいと思っておりました。

試合では法政の五味さんに負けたのですがこの試合が私の最後の公式戦となりました。札幌の大会のあと、見物もそこそこに各校のマネージャーと富山のインターハイの視察に行きましたが、ここで血痰を出し、結核にかかっていることがわかり、急遽帰京し入院するはめになりました。たぶん、父が前年に結核で手術をしており、それで私にうつったのだと思います。

2年4か月の、大学における競技生活を今になって思い出すと、リーグ戦10連覇をしていた時期で、えらいところへ入ってしまったなと思うこともしばしばありました。また、上級生との脚力、体力面での差はとてつもなく離れていて、その強化のため、怪我ばかりしていた足を引きずり、トレーニングに明け暮れた毎日しか思い出さず、精神的にも肉体的にも苦しい日々でした。しかしこの鍛練が、その後の1年半の療

養生活に耐える精神力を養ってくれました。

私が入院したため、東条は一人になってしまい、部内をまとめるのに大変苦労をしたと思います。また、彼は入学当時から疲労が重なると蛋白が下りてしまう体質だったため、たびたびドクターストップがかかっていました。しかし、一人になってはそれも無視せざるを得なくなり、現在の大病の要因になったことを思うと、この夏の出来事は私の人生を狂わしただけでなく、東条の人生にも多大な影響を及ぼしたことを、今でも非常に残念に思っています。

また、途中で挫折し、達成感なしに終わってしまった私のバドミントン人生を悔みました。

そして退院する時に、自分の人生は50年と定め、決して後悔しない生き方をしようと心に誓いました。

# 日本選手として初めて全英、全米に出場

小宮　好雄
（昭和37年卒）

昭和38年3月、ラケット5本とバッグをかついで羽田を出発。前後40日かけて全英選手権、全米選手権に出場した。成績は全英選手権がシングルスベスト8、全米選手権はシングルスベスト4であった。ここでは出場にいたる経緯、また現地でのエピソードを思いつくまま記してみたい。

## 金もなければ知恵もない。よくぞひとりででかけたものだ

昭和37年8月、ジャカルタで開かれた第4回アジア大会個人戦シングルス3回戦でインドネシアの至宝F・ソネビル選手と対戦し、1時間30分に近い接戦の末残念ながら敗退した。

ソネビル選手は、プレーヤーとしてだけではなく国際バドミントン連盟（I・B・F）の役員もかねており、彼の口から日本も強くなっている、トマス杯のインターゾーンチャレンジラウンドを中立国の日本で開催したら、との提案がなされたらしい。我々選手が知らないうちに昭和39年5月に日本でトマス杯を開催することが決まった。

開催国が出場できるならいざ知らず、4つのゾーン予選のいずれかをクリアーしなければ出られないわけだから、ずいぶん無茶な話である。昭和36年開催の大会には金もないとの理由から、予選すら出ていないのにである。当時の協会役員が若かったからやったことなのであろう。

世界のランキングがどうなっているのか、皆目わからぬまま、アメリカゾーンなら勝てるらしいとのことで決まったようだ。敵状視察というと格好がいいが、派遣者は小宮ひとりで、全英、全米に出場し各国の選手をさぐってこいとのご用命であった。ただし、協会に金がないから航空券は協会負担、滞在費はおまえが会社と話をつけてほしいとのこと。

試合に勝つ以前にやることがいっぱいある。トヨタ自動車にはラグビー部、野球部、サッカー部等体育会と同じくらいクラブがあるが、所属する協会から、突然きた要請にはさすがに会社も驚いた。幸い有能な北田マネージャーが会社とかけ合い、何とか了解は得られた。

それにしてもこのことはその後の会社生活に大変役立った。ことを始めるには計画があり、実行するための根回しはじめ、コンセンサスが必要であることを身をもって体験することができたからである。これは協会に感謝すべきか？

航空券、滞在費があっても不安である。予備費がない。これはオヤジに頼んだ。持ち出し外貨制限500ドルの時代で勝手に調達できず、ヤミドルを入手する以外に方法はなかった。レートはドル400円。すねかじりも入社1年目ということで許してもらった。当時の初任給17,500円からすると大変な額であった。

次に困るのが、現地の事情である。相手に理解してもらえるほどの口はない。食べる口のみである。職場の先輩が記者を通じ中日新聞（東京新聞）ロンドン支局長真野義人氏を紹介してくださった。ようやく出発までこぎつけるまでにはなったが、かんじんの練習もままならず、不安だらけのロンドン行きとなる。

### 番狂わせ！　初出場日本選手がシード選手を破る

これはロンドン・タイムスのスポーツ欄に掲載された記事の見出しである。

全英選手権は予選があり本選となるが、ソネビル選手からの情報で実力を認めてもらい、予選なしで本選に登録され、3回戦で第2か第3シードのボーチ選手（デンマーク）と対戦した。彼は直前のデンマーク選手権で当時世界NO.1の評価のE.コプス選手を破りチャンピオンとなっており、全英の優勝候補にあげられていたらしい。「らしい」というのは情報を知らないからである。ヨーロッパの選手名は、コプス、コベロ、ハンセンしか知らなかった。

試合会場はロンドン郊外ウエンブレーのエンパイアープールで行われた。大きな体育館でメインスタンドの中央席は白布のかけられたテーブルがあり、食事をしながら試合を観戦するという趣向で、当時の日本では考えられない光景だった。

コートは初めて体験するコートマットで、多分ゴム製のイボがついたものであったと思う。

このコートでスライディングキャッチを試みたところ、見事に薬指の皮がむけてしまい、血を流しながらのプレーとなってしまった。何とか3ゲームで勝ったものの相手が強い選手だったことを知ったのは、応援に来ていただいた真野さんから翌日のタイムスの記事を教えてもらったからである。結果オーライ。知っていたら勝ってたかどうかわからない。

準々決勝ではインドネシアのチャンピオン、タン・ヨー・ホクに負けてしまい、全英は終わった。

全米選手権は、東海岸ボルチモアで行われた。初日はホテルに宿泊したが、金も乏しくなり不安になっていたところ、ボランティアによるホームステイとなり、スティーブンソンさんのお宅に5日間お世話になった。

試合は全英に出場したアジア系の選手が出場しており、レベルは高かった。なんとか準決勝まで

出たが残念ながら力が尽きてしまった。

しかし「やれやれ終わった」との感は深かった。ロンドンでの練習時には、カナダチャンピオンのマクドーネルともゲームをしたし、アメリカ選手とは全英で対戦し、それなりに力を量ることができた。

「うまくやればアメリカゾーンで勝てる」と実感した。

## 忘れ得ぬ人々、真野さん一家、ウォン一家、スチーブンソン一家

西も東もわからないまま、40日の遠征をこなせたのはボランティア精神の旺盛な方々に支えられたからだといっても過言ではない。

真野さんには空港での出迎えから、試合の応援。カイロから転任されたばかりにもかかわらず、お宅で日本食をたびたびごちそうになり、ホームシックを乗り越えることができたのである。

その後昭和40年に出場した選手たちも大変にお世話になり、改めて深く感謝を申し上げたいと思います。

真野さんご一家とは、買ったばかりのボグゾールGMでドライブに出かけ、オックスフォードや、ドーバーの白い壁に案内していただいた。

ただし、真野さんは免許取得中とのことで、小生が運転したが、当時国際免許は持っていなかったため、無免許だったわけである。英国が日本と同じ左側通行なので支障はなく、お子さんからは「運転がうまいね」とほめられた。「自動車屋だからさ」とすまして答えておいた。

ウォン一家はロンドンに住むマレーシアの裕福な家庭で、テック、ジンという2人の息子はケンブリッジ・オックスフォードに通い、バドミントンプレーヤーとしても、マレーシア代表相当の実力があり、当然全英選手権にも出場していた。

練習会場のウインブルドンに居を構え、練習が終わるとおいしい中国料理をごちそうしていただき、夜中に市内のホテルにまで送りとどけてくれた。コンディションを整えられたのもこの方々のおかげである。

ボルチモア郊外に住んでいるスチーブンソンさん夫妻は、バドミントン選手だった人。ご主人は第1回トマス杯の選手で、奥さんも当時35～36歳ながらプレーヤーとしても現役で、当大会でミックスダブルスを組ませてもらった。

身長180cm近く、女丈夫そのもの。私がスマッシュを決めるたびに抱きかかえられほめてくれるのはいいが、前衛で仁王立ちとなり球のコースが読めないのにはまいってしまった。

この人たちは典型的なヤンキーで、親切この上ない。最初の日の朝食で、生の牛ひき肉とタマネギのサンドウィッチが出され、うっかり「うまい」といったら毎日その献立となり、困ってしまった。

最後に好きなものをごちそうするといわれ、レストランに連れていっていただいた。大きなロブスターを注文し、腹いっぱい食べ堪能、毎朝のひき肉にくらべ何とうまかったことか。

全米大会は毎日夕方6時頃から始まり、10時すぎに終わる。招待選手はその後ホームパーティに招かれるのはいいが、午前3時、4時まで続く。そして夕方から試合である。豪傑もいた。E・コフス選手である。朝までビールを飲み、女性とたわむれ、それでも優勝してしまう。世界にはとんでもなく強い奴がいると、しみじみ自分の非力さを嘆いたものだ。しかし、ここでもスチーブンソン一家が

熱烈に応援してくれ、すべて面倒をみていただいた。

この40日にわたるひとり旅は、苦労といえば苦労だが、大変いい勉強になった。プレーのみならず多くの生きた社会勉強ができた。行ってみればなんとかなるのだとのくそ度胸がつき、たいていのことには驚かなくなった。高校時代に旅の好きな先生から「ひとり旅は利口になる、2人旅は道化になる、3人以上はバカになる」ということばがあると教えていただいた。確か甲斐の武田家の指南役僧快川のことばだったと思う。まさにそのとおりの旅となった。

しかしこれができたのも、1年のうち100日以上も職場を留守にするプレーヤーを、励ましサポートしてくれた先輩、同僚がいたからこそのことであり、深く感謝する次第である。



米国ボルチモアでホームステイしたスチーブンソン家の長女リサ。
試合前のひと時一緒に遊んでくれた？

Chapter-4

# 新時代の始まり

## 1965-1974

昭和40年～昭和49年OB

# 私の人生を決めた運命の1日

泰　浩
(昭和40年卒)

立教大学合格したらバドミントン部に入部する。

これは受験の前から決めていた私の考えであった。いまにして思えば何とも無謀な思い込みであったわけである。

ともかく体育会系のクラブに入りたかったのである。

叔父は大学総務部長(当時)、兄も立教卒ということで情報にはこと欠かなかった。

『優勝』の味をあじわうことのできるクラブは…？

当時、立教の体育会の3Bは音に聞こえた強豪・名門のクラブであった。

ベースボール、バスケットボールそしてバドミントンの3Bである。

なかでも、あの長嶋さん(現・巨人軍監督)を輩出した野球部は、その後も伝統を脈々と受けついだハードな練習で知られていたし、また、バスケットボール部にいたっては、いくら海保先輩(東京五輪・ナショナルチームメンバー・身長170cm足らず…恐らく)がいたとはいえ、高さを要求される競技であるのはいうまでもないので、165cmそこそこの私は当然のごとくパス。

兄の親友(西谷先輩)がキャプテンをしていたアイスホッケーも一応考えてもみたが、試合の応援にいったりしてみると、とてもじゃないけどあれほど自在にスケーティングはできないな…と観念。

そこで浮上したのが、バドミントン部であったのである。

強いクラブというのはわかっていたが『たかがバドミントン……』。この認識が甘かった、というより当時は誰もがバドミントンは「女の子の羽根つき」程度にしか理解していなかったから無理もなかろう。

昭和37年4月8日は忘れもしない。この日は私の人生を大きく方向づけた運命の1日となったのである。

入学式の当日、キャンパスの4丁目にバドミントン部の新入部員募集のコーナーはあった、私は当初の予定どおり？迷わずにサインをした。そこには確か小宮大先輩もいらっしゃった。

そして、あの薄暗い旧体育館地下のジメジメとしたカビ臭い部屋に連れていかれ、幾人かの先輩たちと推薦入学で入部の決まっていた同級生を紹介されたのを覚えている。

さらに、4月15日から藤沢の遊行等で春期強化合宿があるから参加せよとの仰せ。

私は、右も左もわからぬままに合宿に加わった。いよいよ長ーいバドミントン人生がスタートしたのである。

学生生活の4年間は、文字どおりバドミントン一色であった。

だから、いまだに人から「卒業はどちらで？…」と尋ねられると、迷わず「ハイ、立教大学バドミントン部です」と自信をもって答える。

それだけバドミントン部には愛着があり、そして素晴らしい偉大な先輩諸兄に恵まれた、実績と伝統を誇るクラブなのである。

部活での4年間のなかでの思い出は、各種大会・競

技会への遠征や合宿への参加・納会・新人歓迎会が関東リーグ優勝祝賀会と重なり、今でいう急性アルコール中毒に陥ったこと。新人補強のために全国各地へのスカウト行脚、などなど書き尽くせぬほどある。

しかし、私のバドミントン人生のなかで、これ抜きでは語れないというのが、学連(学生バドミントン連盟)へ派遣されたことである。

1年生の6月、浅見先輩に連れられて日本体育協会(当時、お茶の水駅・聖橋際にあった)の中の日本バドミントン協会の事務所に同居していた学連に行ったのがはじまり。

それから、池袋←→お茶の水間の日参となるのである。あとから同級生に聞いたのだが、私の自宅がお茶の水にあると信じて疑っていなかったというくらい通いつめた。

2年生の時に、関東学連常任委員、3年生時には全日本学連の副委員長、4年生時に全日本学連委員長と、立教という伝統校のバックアップのもとに学連のエリートコースを進んだ。

この間に、日本体協の移転(お茶の水から渋谷へ)、東京オリンピックの開催といった歴史的なプロジェクトにも巻き込まれ、一方バドミントンの世界ではトマスカップ(男子団体世界選手権大会)が東京で開催され、日本代表チームの監督に川端大先輩が就任し、佐藤芳朗先輩がコーチに、永井栄一先輩がキャプテン、さらに小宮好雄先輩、板垣善憲先輩が主力メンバーとして加わるといった、まさに立教大学バドミントン部の面目躍如といったチーム編成であった。この大会に現役として大会役員に名を連ね、参加できたのは幸せであったし、そういった時代に遭遇できたというのも素晴らしいことであった。

学連での仕事というと、各種大会・競技会の企画、主催、運営、といったいわゆる裏方仕事で、体育館取りや組合せ(この組合せというのが曲者で、各校の学連担当の力関係や駆け引きが左右し、ひいては試合結果に微妙に影響を与えるのだ)、プログラムの作成、広告取り、ラケットやシャトルメーカーとの折衝、などが主たる業務であった。これが全日本学連担当となると北海道から九州までの各地区学連を傘下とした仕事内容となり、よりグローバルな考え方と行動が要求され、日本各地を飛びまわり学生バドミントン界の競技力向上のための企画や日本バドミントン協会運営への参加と連携、さらに国民体育大会などへ役員として出席するなど、学生の分際でありながら広範囲な業務を担当するもので、学業との両立はそれこそハードであった。

卒業後、家事の傍ら川端大先輩、佐藤先輩に従って、日本バドミントン協会の役員として、継続的にバドミントンに接し、海外遠征を初め多くの貴重な体験を得ることができた。

しかし、そのなかで培った経験や人間関係が、後の私の生活基盤に大きな糧となって生かされるとは思いもよらなかった。

現在、私は南国・熊本の地でバドミントン専門ショップを営んでいる。そして営業の傍らママさん、OLなどのバドミントン教室やジュニアの育成にも力を注いでいる。

今までに、私のジュニア・クラブから松尾知美、阪本雅子(八十東京の2名のオリンピック日本代表や、松田治子(三協アルミ・ナショナルチームメンバー)をはじめ、インカレ、インターハイなどで活躍中の多くのプレーヤーが巣立ち、今後も第3、第4の日本代表を生み出そうかとも考えている。

要するに、あの運命の1日以来、私とバドミントンは

二人三脚……というよりむしろ一体となって人生を歩んでいる。それもこれも、立教大学バドミントン部というバックボーンがあったればこそであることは言うまでもない。

立教大学体育会バドミントン部万歳!

立教大学体育会バドミントン部の未来に幸あれ!

# 4年間の異次元体験

安沢 武司
(昭和41年卒)

立教大学体育会バドミントン部の徒然(つれづれ)をここに紹介するというより、回顧し自分の体験を「記念誌」に残すのも一興と思い、綴ってみる。

この学生時代のバドミントン部の体験は、生まれてこの方経験したことのない異次元の体験であったと思う。30年経た今日に至っても未だ異次元の体験であったとの思いが強い。その体験もバドミントンだけやっていたわけではない? のだが学生時代の思い出は、なぜかクラブ活動だけが強烈な印象に残っているのである。断片的に思い出を綴ってみよう。

### クラブ合宿のこと

合宿といえば苦しいことではあったのだが、現在思い出すのは楽しい笑い話風の内容だけが残っている。合宿地も大垣、桐生、高遠、和歌山、三条と地名はよく知っているが、思い出は学年ごとに当然違ってくる。慣れというか、だんだんと学年を増すごとにすれてくるというか場慣れしてくる。これも大学4年間の短い体験なのに、強烈に思い出だけが残っているように思う。

たった1週間の体験に関わらず、思いが残るのはなぜなのか、同じ釜の飯を食った仲間意識からなのか、一つのことに一途に苦しい体験をした故か、未だなぜかわからないが思い出すのである。何もかも忘れて、いや、これしかやることがないという純粋無垢でやれたことは、いままで52年間の経験でもない体験であった。

1週間大声でわめきちらし、コートの広さを改めて感じ、自分の限界を知り、仲間のありがたさがわかり、生きている実感を味わったことなど、1週間の苦しいが充実感あふれる体験ゆえ思い出として残るのだと思う。

### キャラバン練習のこと

我々は現在のように決められた立派な練習場がなく、今日は高円寺、明日は新子安、川口、立教小学校等あちこちの体育館を借りて練習を続けてきたものである。

不幸であったとか、現在の部員が羨ましいという思いより、かえってそれを楽しんでいた節がある。移動する時間は大変であったと今は感じてはいるが、当時はさほど時間に制約されていた身分ではないので移動を楽しんでいたように思う。

現在と違いプレス器に入れた懐かしい木枠のラケットを細長いバッグに入れて持ち歩き、電車やバスを乗り換えて、歩いてよくあちこちの練習場に通ったものだと

今さらながら感心している。

### クラブと下宿生活のこと

新潟の田舎から出て来て、初めての親から離れての生活であるから、何事も新鮮なことばかりで好奇心の強い私にとってはすべてパラダイス、自由の天地のような4年間であったと思う。まさにこの点で大学4年間は、クラブ活動と同時に天が私にくれた特別の時間であったように感じている。この4年間に匹敵する時間は、その後絶対に訪れては来なかったと思う。

下宿場所も池袋、朝霞、上板橋の3か所を移り住んだが、残念ながら自炊生活は一度もやらなかったのが心残りだが、自分の成長に役立ったと思う。また、池袋の町も現在と比べてのんびりした町であった。

特に池袋西口は、東口の西武デパートと違って田舎の東武デパートがあり、駅を降りた所は未舗装で、雨が降れば地面は泥でドロドロとなり、ズボンの裾は汚れるし、屋台や古着屋、骨董屋、100円床屋等どや街の状態であった。現在から比べれば、ここが東京の町なのかと思うほどの場所であり、立教のハイカラな建物とのアンマッチを私なりに楽しんでいた。

### 同志社との定期戦のこと

試合の内容は全然覚えがないのだが、試合後の徹夜麻雀で予定の電車に乗り遅れたこと、同志社の同期の方に銀閣寺近くの下宿に泊めてもらい、京都の生活?に一瞬でもなじんだこと。試合後の京都の歓楽街に招待され、夜の部は同志社に惨敗したこと、など試合以外での思い出ばかりが残っている。定期戦が再開されるとのことだが、楽しい思い出に残る交歓試合となるよう祈りたい。

### クラブ活動の意義について

言うまでもなく、仲間意識の醸成と自分を見つけるための修行の場であったと思う。結局は人と人との出会いの場所で、本音で自分をぶつけ合う場は学園生活でもざらにはない。クラブ活動やゼミナールの活動等の小グループの活動でしか、人と人が心と心をぶつけ合う場はないのではないかと思う。

その意味で本当に意義ある学園生活を送れたのではないかと感じている。30年経た今でも良い時期に良い仲間と付き合えた幸せを感じ、心の宝石箱にしまえる大切な時代の一コマであったと、心から思えるのである。



昭和40年同志社における同立戦(後列左から6人目、中腰が安沢)

# 学生として、そして監督として

松崎　正門
（昭和41年卒）

## 挫折から成長へ

昭和37年、信州の片田舎に立教大学バドミントン部から勧誘が来た。

これが私の人生を大きく変えることになるとは想像だにしなかった。当時大学へ進学する者は少なく、まして私立の大学でバドミントンを主に学生生活をするなどとは容易に許される話ではなかった。しかしたまたま高校が進学校で、級友の多くが大学を目指していたのも幸いして、父、母はしぶしぶ了解してくれた。ようやく日本経済に発展の兆しが見えたとはいえ、どの家庭も貧しく、息子への仕送りは大変なことであった。

さて晴れて入学できた立大バドミントン部は、学生界No.1のチームで有名選手が揃っていてその練習は地獄であった。

とにかく必死であった。田舎プレーヤーがいきなり、日本を背負う選手と練習をするわけだからシャトルは見えない、足はついていかない、でさんざんな目にあった。

毎日先輩から叱責され、うさぎ跳びなどを中心としたトレーニングは本当に厳しく、同期の大竹、安沢と池袋駅の階段をよろけるように下りたものだ。足だけはみるみる太くなり、1年間でふくらはぎがたくましく倍に成長した。



昭和39年8月、伊那北高校における合宿（後列左端が松崎）

この時期にバドミントンプレーヤーとしての私のプライドはズタズタになり、自分ほどみじめな者はいないと思うほど劣等感にさいなまれ、練習後狭いアパートで暗い青春を過ごした。しかしこのことがあって私は成長したような気がする。もし私のバドミントン生活が順風満帆であったなら、きっと鼻もちならぬ男になっていただろうと思う。厳しかった部の生活が社会に出て大いに役立った。

卒業して20年後に、今度は監督として学生と接することができるようになるとは、あらためて立大バドミントン部との深い縁を感じるしだいである。

今日多くの諸先輩や後輩と、友人のようなお付き合いができることは、学生時代の苦しみがあったからこそと思う。たかがバドミントン、されどバドミントンであるが、こんなに色濃く私の人生に影響があるとは、若い時には考えられないことであった。

人間万事、塞翁が馬、齢い50歳を超えてようやくわかってきた気がする。

### 平成時代の監督

1989年3月、川端会長の事務所にOB諸氏が集まった。

席上、折井副会長が「我が部はつぶれそうだ。部員が一人しかいない」と話した。まさか伝統ある我が部がそんな状態になっているとは思わなかった。古い体育会の体質に学生が嫌気をさしているのではないかと思い、その主旨の意見を述べたことが、結局監督を受けることになった。

学生時代の練習に疲れた私は、卒業後バドミントンから足を洗い、仕事と酒の日々を過ごし、体はぶくぶくに太っていた。35歳から同期の鵜飼の誘いで楽しみとダイエットのバドミントンを始めたところ、だんだんとりこになって40歳代の全日本社会人で、2度も優勝することができ、学生時代の財産がこんなに遅く花開くとは、人生とは捨てたものではないと思えた。

さて監督を引き受け、早速我が部の再建にとりかかった。体育会の暗いイメージを払拭し、とにかく部員の募集に力を注いだ。その年4人、翌年には7人が入部し、少し明るい光がみえてきた。

その間、新任の堀内教授が学生やコーチを自宅に招いて食事会を開いてくださったり、OB、OG諸氏の全面的なご支援をいただき、学生も真剣に再建に取り組んでくれた。

おかげさまでその後順調に成績は上がり、6部、5部、4部優勝と目標の3部昇格も目の前となった。

現在の体育会は、どの部も部員の確保や教育に頭を悩ましている。体育会として何を教育し育成していくか難しい問題である。

激しい受験を乗り越えて入学した学生は、もっと楽しい時間を過ごしたいと願っているからである。上から厳しく管理し訓練するやり方は通用しない。学生の自主的なやる気と幸運にも素質ある経験者の入部によって、部の実績が決まるしだいである。その中で納得させ体育会的教育をどこまでできるか、辛抱のいる話である。

幸い我が部の学生は、やる気のある優秀な学生が多く、感謝している。学問だけでは学ぶことのできない忍耐、長幼の序、また立教の教えである人間の[illegible]を通じて学生の学ぶ点は多々あると思う。

栄枯盛衰世の常ながら、強く規律ある部への目標に向かって微力ながら努力していく所存である。創部50周年を迎え、我が部や体育会をもう一度見直し、美しい伝承があることを願ってやまない。

# 厳しく、忙しく、楽しかった裏方の4年間

鵜飼　良機
（昭和41年卒）

立教バドミントン部在部中になにをしたか、いろいろ思い出して見るのだが、際だったものはあまりないというのが実際のところである。というのも、個人的事情に加えて、私が一般部員であったからである。

一般部員というのは、特別推薦を受けて入部したバドミントンの実力抜群のレギュラー部員に対し、一般の入試で立教に入って入部した部員のことである。

全然バドミントンの経験がなかったわけではなく、中学校の時、部を作ってかなり熱心にやっていたのだが、その程度の経験はまったく役に立たなかった。私と同程度の実力の一般部員が同期でほかに2名いたが、試しにそのうちの1人と組んで、レギュラー部員1人を相手に2対1で試合をしたとき、こちら側が得たポイントは、2ゲームでわずか1点であった。

そんなわけで、一般部員は戦力としては全く期待されず、部ではほとんど練習というものをしないで、もっぱら応援団として声を張り上げていたのである。ただし、うさぎ跳びなどのトレーニングはレギュラーと一緒にやらされたのではあるが……

OB大会などで試合に参加させてもらっているが、その下地は現役時代のバドミントン部での練習にあるのではなく、大部分は中学校や区民体育館での練習にあるのである。

私は私なりにバドミントンを愛していたので、大学現役時代には母校の中学校(新宿区立牛込第二中学校)での指導にあたった。立教ばりのハードトレーニングが功を奏してか、数年を経ずして東京都大会において男子は3位、女子は優勝の成果を得た。特に女子はその後2年間、団体戦、個人戦のすべての優勝を獲得した。その時の選手は高校に進学しても活躍し、全国大会にも出場している。

そのかわり、審判はよくやった。リーグ戦、関東選手権等の大学生の大会のみならず、社会人の試合などにも駆り出されてやった記憶がある。卒業後に聞いたうわさ話によると、私の審判は厳しいので評判だったらしい。

1964年(昭和39年)に行われた"トマスカップ"(男子団体世界選手権)は、監督、コーチを含む選手団7名のうち5名までが立教OBという、まさに立教全盛を象徴する大会だったので特に印象深い。この大会では裏方を勤め、本部席の周辺を忙しく、また、楽しく走り回った。

その時聞いた忘れられない驚きを一つ。トマス卿が寄贈したというそのカップの価格がなんと1,000万円(1万ポンド)! なにしろ国産の小型車(ブルーバード、コロナクラス)が約60万円、大学出たての初任給が1万数千円、200～300万円もあれば立派なマンションが買えたという時代にである。3000円かそこらで何だかのカップを神田で購入したばかりだったので、驚きもひとしおだった。なお蛇足までに、当時1ポンドは1,000円、1ドルは360円だった。このことの方が若いOB・OGや現役諸君には驚きかもしれない。

# 息子と青春を共有できるうれしさ

加藤　寛
(昭和41年卒)

大学4年間における、バドミントンに対する思い出は、今、思い起しても、辛い苦しいことばかりでした。

というのも、私自身高校時代まったくの未経験のうえ、バドミントンの知識も単なる羽根つきくらいの認識しかなく、これほどに奥の深いものとは考えもせず、それゆえ、驚きの連続でした。

同期の7人のうち、レギュラー3人と一般部員4人の実力は、格段の差があり、トレーニングの厳しさに耐えかねて何度もやめようと思ったほどです。

しかし、同期7人の気持を思うとやめられない状況で、何となく4年間継続したといったところです。

卒業後30年、自分ではまだまだ若いと気負っていても、外見からも、内面からも初老の域にきてしまいましたが、学生時代のバドミントンとの関り合いは、気持ちの中で、セピア色にくすみ、そして、今は、バドミントンから遠ざかっていても、心から決して離れることのない青春時代の一コマです。

自分の子供が成長するにつれ、学校で運動をするようになり、それを見ているうちに、家族相手に、学生時代のバドミントンのことを話題にしていたのでしょうか。息子が、高校でバドミントンを始めた時には、驚かされ、また、それに対して悲しいかな、私には競技歴がないため、アドバイスもできず、歯がゆい思いをしたものです。

私と同じ大学に入り、同じ体育会バドミントン部に入部した時は、今時の子供が親の言うとおりになるわけでもなし、大学に入ってまでもまだ続けるとは思いませんでした。実績のない地方の県立高校では、実力もおおよそ想像できるもので、本人が納得のいく、悔いのない4年間を過ごしてくれればと思っております。

帰省した折に聞く話の中で、時代の移り変わりの激しさを感じ、また、懐かしさを感じています。

私と息子にとって、青春の1コマであるバドミントンを共有できたことに、私はうれしく思っております。息子にとっても、そうであってほしいと願っています。

# チョークで濁った水も旨かった

星野　義昭
（昭和42年卒）

## リーグ戦

先日、新座の立教大学体育館へリーグ戦の応援に行ってきた。折井先輩、加藤先輩、小宮先輩が応援にみえていた。

いやおどろき、おどろき……今の選手の応援は昔と全然違っている！　試合に勝つと応援の選手全員とジャンプしてハイタッチを繰り返し最後はオシリとオシリでハイタッチするのだ……これには負けた！

我々の時代のリーグ戦といえば、神保町近くの神田体育館ばかりで、両バックサイドに観客席が階段状についており、天井から明りが入ってくる3面だけの体育館だった。

1年生の時、同期の西野(インターハイ優勝者)がリーグ戦に遅れて来たため、試合後、2階のうす暗い廊下に1年生全員が正座させられ、2年生からぶん殴られたことがあった。「連帯責任」というやつだ。

## 合宿

とにかく1年生の時はしごかれた。大垣の夏の合宿は大変だった……。「2:1(ニーイチ)30分ノータッチうさぎ跳び体育館一周」

体育館は床がコンクリートのローラースケート場で、コートが10面は取れたと思う。うさぎ跳びは途中で休むとやり直し。たまったもんじゃない。一周してコートに入ると足はパンパン。すぐにノータッチまた1周、また1周……午前中ずっとうさぎ跳びをやっているようなものだ。

飛び込んでタッチすれば、うさぎ跳びはしなくてすむのだ。スライディングキャッチはうまくなった！　今でも地域の人々とバドミントンをやっていると時々スライディングのくせが出る。体で憶えたものは、瞬間的に出るものだと、我ながら感心してしまう。

2年生の夏合宿は長野の伊那北高校(現監督の松崎さんの母校)の体育館で徹底的にしごかれた。2年生になってもうさぎ跳びは変わらず、ノータッチ体育館1～3周！

当時はコートのラインを水でしめらせたチョークで後向きで腰をかがめて、一気に引いたものだ。全員がコート作りのプロであった。実にうまく引いた。

そんなわけで、体育館の角には、水とチョークを入れたバケツが置いてあった。うさぎ跳びで角を通過する時、チョークで濁った水をすくって飲んだものだ。しかし、そこへ行くと止まるからすぐにバレて、翌日から角のバケツがなくなり、がっかりしたものだ。

炎天下のグランドで自分一人走っていろと言われて、外のグランドを2時間近く(自分にはそう感じた)ランニングをやらされた。フラフラ走っていると一般部員の田中勝先輩が「星野来い」といってバケツの水を頭からかけてくれた。その時はあわててシャツから流れ落ちる水を吸ったものだ。あれはありがたかった。今でも先輩には感謝している。



昭和39年4月、懐かしと恐怖の哲学堂にて（前列左から2人目が星野）

小宮先輩が単身で海外遠征をして全英でベスト8に入り、その後秋山(中大卒)が全英で準優勝、小島(中大)がベスト4に入賞し、世界のトッププレーヤーの仲間入りをした。女子は横井(東条先輩の奥様)、高木・天野・後藤・湯木等々のユーバー杯優勝メンバーが育った。今思うとあの東京で開催されたトマス杯の影響が大であったといえる。

8名いた同期も、3年生の時は、伊勢、永田、須田、星野と4名になっていた。合宿は根性のない者をフルイにかける場のようにも思えた。あのフルイに引っかかって残った自信というものが、社会へ出た時、いろんな場面で変に自信になり、物事に対処してこれた気がする。

### トマス杯

1年生(昭39年)の時に東京体育館で男子の世界選手権(団体戦)、トマス杯が開催された。

初めてみる世界のバドミントンのすごさにびっくりした。インドネシアの英雄ソネビル、ダブルスの至宝タン・イー・カン、ウン・ブン・ビー組、全英単優勝者デンマークのコプス、ダブルスの魔術師コベロ、ハンセン(デンマーク)、タイの至宝チャナロン……日本は川端大先輩が監督、選手には永井栄一、小宮好雄、板垣善憲の3先輩、堺栄一(早大)、宮永武司(慶大)というメンバーだったと思う。

私は丸坊主でネクタイを締、線審を一生懸命やっていた。日本はトマス杯以降めきめきと強くなった。




第6回トマス杯ポスター（モデルは小宮OB）

# バドミントン部の誇りを忘れず前向きに

須田 孝夫
（昭和42年卒）

私は、中学1年からバドミントンを始め、高校、大学卒業後も現在に至るまで、いまだにバドミントンとは切っても切れない生活を続けています。

バドミントンとのきっかけはたまたま入部した中学が東京都の優勝校だったこともあり、それが縁で高校は名門校の聖学院、そして大学は立教大学と大変すばらしい環境に恵まれ、高校、大学共に日本一の経験をさせていただきました。

社会人となってもバドミントンメーカーに入社し、日本バドミントン協会の役員も兼ね、販促及び広報の仕事に携り、プロショップの店長を経て現在はスナックの経営に至っていますが、昼はバドミントンのインストラクターと国分寺バドミントン協会の理事長として相も変わらずバドミントン漬けの毎日を送っています。

なかなかお金は貯りませんが、好きなバドミントンに常に接することができて十分満足できる生活です。

私も今一つ根性が足りなかったせいで、トップに昇りつめられなかったことについては、今でも多少の後悔はありますが、トップになること以上にその過程における経験が私の人生に大いに生かされ、今の自分を支えています。

例えば、高校の全国大会の優勝もそうですが、大学



昭和40年7月 東日本学生選手権（札幌クラーク博士銅像前にて、後列左から2人目が須田）

1年の時の部全員の結束で勝利したインカレ優勝のいまでも忘れない感動、合宿での苦しさ等貴重な経験ができました。

コーチ時代にはこの体験をもとに、後輩たちに強くなること以上にクラブ活動の重要性、例えば先輩と後輩の縦と横の関係、礼儀を学ぶこと、また一つのことに一所懸命集中することが社会に出てどれだけ役に立つかを強調してきました。

私もそのお陰で立教大学バドミントン部の誇りを常に忘れず前向きに人生を送っています。バドミントンには本当に感謝しています。

# 人数は少なくても

立野　政昭
（昭和44年卒）

昭和40年春富山から状況、あこがれの立教大学バドミントン部へ。

当初、見るものすべてビックリ。はじめて下宿の大泉学園から池袋に行く駅のホームで人の多さにただ「ポカーン」としていたら、はじき飛ばされて乗り遅れ、次の駅で4年生の松崎さんが待っててくれてホッとしたものである。

バドミントン部には4年間在籍し、一番思い出すのは、やはり最初の合宿(夏季和歌山にて)である。その時は、初めての同志社との合同合宿で、人数も50～60名が参加して両校半々ぐらいであった。

当時、新入生3人(池上君、丸君と私)は立教流トレーニングについていくのが精一杯であった。同志社の2、3年生の脱走事件もあった。しかし、この時が一番大勢でにぎやかな合宿であった。

2、3、4年生となるたびに部員数が半減し、最後の年は、全員で8名(選手6名、マネージャー2名)になり、練習どころか試合にも頭を悩ますこととなった。慶応、早稲田、関東学院その他の合同練習に参加させてもらうなど、大変お世話になった。

また試合時には「一人でも欠けると……」との思いで、リーグ戦中は相撲部の道場を借り、全員一緒に寝泊まりして試合会場に行った。

他校の多人数がうらやましかったが、逆に少人数であることからよくまとまり、他校にはない応援も受けた。



昭和43年、トレーニング後のひと休み
（前列左から堀、立野、寺前、後列左から瀬戸、高橋）

在籍中初めて2位になったときは、全員で喜びの酒を飲んで騒いだ。

この当時は、ラケットの変革期(ウッドからカーボン)でもあり、当然トレーニングや練習方法も変化し、今日の幅広い年齢層にも受け入れられ、より大衆的なスポーツへ成長した時期でもあった。

後輩たちへ

部員は、結束し是非上位を目指し、長い伝統の1ページを築くべくがんばってください。

# お寿司で知った体育会の味

丸　保信
(昭和44年卒)

受験戦争を終え、軽く運動をしたいと思いバドミントン部の門をたたいたのですが……。同期の2人(立野、池上君)は、国体、インターハイの上位入賞者、先輩には、各大会の優勝者がいると聞いてびっくりしました。

いわゆる一般部員として入部したのですがトレーニングの激しいこと、激しいこと。ウサギ跳び、アヒル、ダッシュ等まともについていけず、いつやめようかといつも考えていました。

地獄の1年を乗りきると後輩が入ってきて、これがまた強い、強い(寺前、堀、瀬戸君)。レギュラーの2人は、さぞ悩まれたことでしょう。

1、2年生の夏合宿は、本当にきつかった。締め切った体育館での6時間の練習は、ダイエットにはもってこいのはずであったが……

4年でマネージャーになり、トヨタ自動車で合宿を行った時、小宮先輩に大変お世話になり、初めてOBの方と現役との交流を経験しました。

これがいわゆる体育会なのだとその時感じました。

お好みで食べたお寿司のおいしかったこと。小宮先輩ごちそうさまでした。

大竹、安沢、星野、須田、裏田、星野(弟)、剣持、各先輩、女子部の増田さん、並木さんお元気ですか。一度お会いしたいものです。



昭和43年 同立定期戦にて
(前列左から2人目が丸)

# 我が人生 バドミントンと共に

堀 幸矩
(昭和45年卒)

大学を卒業して早や26年もの年月が過ぎた。

学生時代のアルバムを懐かしく見ていると、これが若い頃の自分かとその容姿の変りようにただ驚くばかりである。

バドミントンの「世界」から離れてまだ間もない。と言うのも、昨年6月に26年間お世話になったトヨタ自動車からその関連会社に転籍となってからである。

トヨタ自動車在籍中は選手、マネージャー、監督そして部長を務めるなどバドミントンとの関わりの中で生きてきた。

現在の私自身があるのもバドミントンのお陰であり、バドミントンが私の人生においていかに大きな拠りどころであったかあらためて実感している。

さて、私の立教大学との出会いを振り返ってみると、中学時代に遡る。私の出身地の岐阜県で県協会が主催する強化合宿が行われ、そこで当時立教大学の長谷川陽一先輩(昭和37年卒)にご指導いただいたことがある。

厳しい朝のトレーニングや2対1のノータッチ即うさぎ跳びなど中学生の私にとって生まれて初めて体験する恐怖の1週間であった。

高校時代は岐阜国体(昭和39年開催)の強化選手の一員として、立教大学の夏合宿に2度ほど参加する機会があった。

初めて参加する大学の合宿、しごきとも思える厳しいトレーニング、会場と宿舎間のランニング、2対1など……。そんな厳しい練習の中にも上級生の下級生に対する優しさと一体感を感じつつ、若き高校生であった私は「立教大学バドミントン」の気風に憧れ夢と希望に胸を膨らませて進学した。

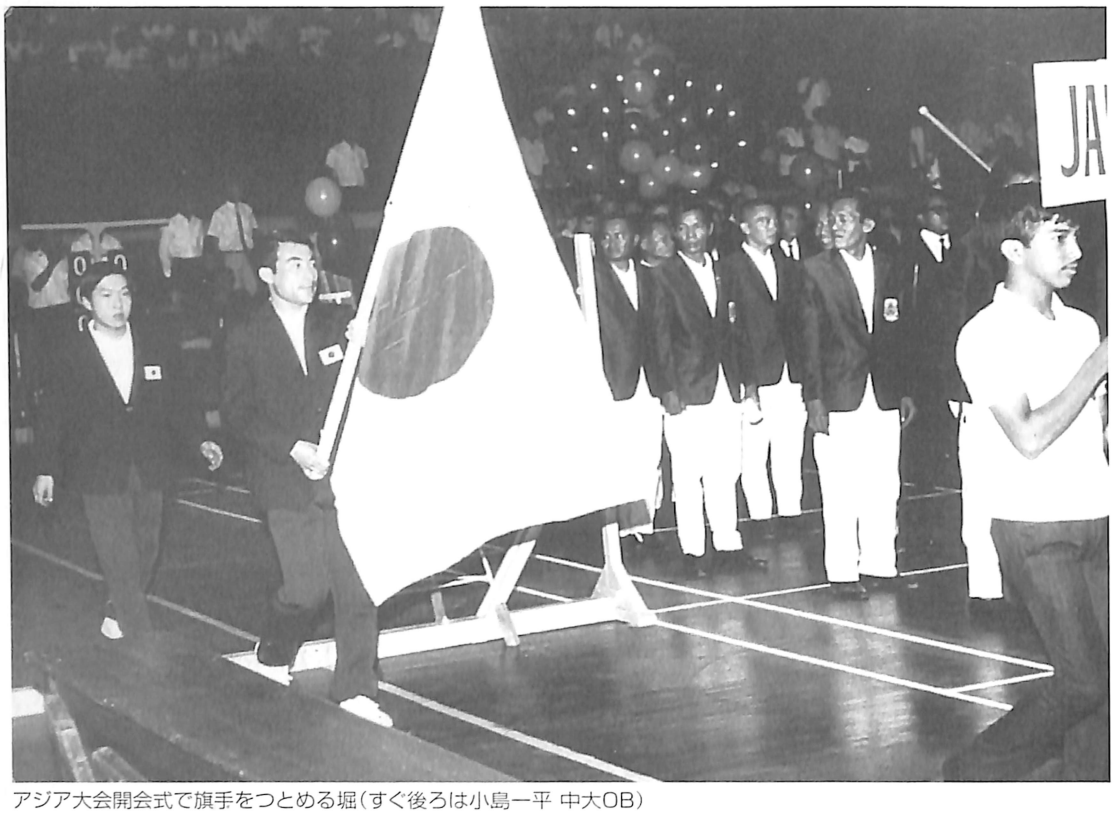
在学中は先輩諸兄の偉大な足跡にプレッシャーを感じながら練習に励んだ。諸先輩のご指導のお陰で海外遠征も2度ほど経験させていただいた。

私が4年の時の部員は総勢10名。有力選手も限られた中で、リーグ一部を維持するギリギリの戦力であった。

まさに、少数精鋭であり、誰一人として病気や怪我をすることは許されない状況の中、主将であった私が学生最後となる秋期リーグ、インカレを前にして体調を崩し大会に出場できなくなり、仲間に大変迷惑をかけたことが一番の残念無念であった。

そんな学生生活を送る中で、小宮好雄先輩(昭和37年卒)から就職のお誘いをいただき、トヨタ自動車へ入社。入社早々に足を怪我するなど不運が続き、短い選手生命であったが、今日の今日までバドミントンと共に歩んでこれたのも「立教大学バドミントン」のメンバーとしての「誇り」があったからである。

最後に「我が立教大学バドミントン」のますますの発展をお祈りする。



アジア大会開会式で旗手をつとめる堀（すぐ後ろは小島一平 中大OB）



昭和43年6月、国民体育館の階段状スタンドにて。このとき立教は学ランではなくJUN特注のスタジャンを揃えていたが、各校（特に女子）の評判になった

# バックスマッシュを打ちたくて

瀬戸 孝
(昭和45年卒)

## コミヤさんが来た

昭和38年3月、中学・高校(横浜の関東学院六浦)の先輩・小宮好雄さんが後輩の指導に来てくれた。4月には高校に上がる私たち中3もそのプレーを間近で見ることができた。小宮さんは、高校時代にインターハイで優勝したばかりか、立教大学でも数々のタイトルを手にしたことは、顧問の先生から毎日聞かされ、「小宮に一歩でも近づけ」とハッパをかけられていた。しかし、私にとっては「うちに遊びに来て、兄貴たちと麻雀をやっていたコミヤさん」だったから、そんなにすごい人とは全然思っていなかった(10歳年上の兄も立教のバドミントン部だった)。強いて言えば、中学1年の春せっかく30人も入部した私たち新人生を、たった一蹴りで5人に減らしてしまったことで、すごい人だな、と思っていた程度である。

その時の小宮さんで忘れられないことが3つある。1つは、Dというイタリック体のマークが付いたDUNLOPというブランドのラケットをいとも無造作に4、5本抱えていたこと。2つめは、ガチョウの羽根でできているという真っ直ぐ飛ぶシャトルを「これやるよ」とくれたこと。その頃はニワトリの羽根で、あちこちに曲がるのがふつう、しかも中学生は、ほとんどコルクだけになったのを使わせてもらっていた。RSLと書かれた長い筒に1ダースも入っていて、ふたの裏にはなにかいい匂いのするスポンジが付いていた。私たちは上級生に取り上げられないように、すぐに隠した。そして3つめは、頭上を飛び越していったシャトルを後ろ向きになって打ち返したバックハンドである。当時、わが高校では、バックハンドを使うことは「10年早い」といわれており、まして中学生がそんなことを真似しようものなら、ぶん殴られるかウサギ跳びをやらされるという一種の犯罪行為とされていた。したがって、かっこいい打ち方だなー、と思ったものの、試してみようとは考えなかった。

## 3冠王になったウラタさんの師匠はオオタケさんだった

同じ年の8月、山形県鶴岡でのインターハイに先輩たちに付いていった。そこで、新潟商業の裏田選手が、団体・ダブルス・シングルス全部優勝し、しかも「10年早い」はずのバックハンドを自在に操っているのを目の当たりにした。

「横浜に帰ったらすぐにバックハンドを練習しよう、なんといったってカッコイイもん」と決心したが、依然として「高1のクセに生意気だ」という先輩に隠れて、自己流で練習するだけであったから、いっこうに上達しなかった。

1年後の昭和39年8月、私のバックハンド史上運命の時が来た。高校3年の先輩[illegible]立教に入りたい」と言い出し、一種のセレクションという意味合いからか、長野県伊那における立教大学の合宿に参加することになった。私には関係なかったのだが、顧問の先生に「ついでだから1、2年生も鍛えてもらってこい」と言われ、泣く泣く同行することになった。本来ならインターハ

イから帰ってきたばかりで2、3日は休めたはずだったのである。

伊那に着くと、あのバックスマッシュの裏田さんがいるではないか。しかし、春にアキレス腱を切ったため、慣らし運転中ということで、華麗なバックハンドは見ることはできなかった。ところがガッカリしたのもつかの間、裏田さんよりもっとカッコイイ人がいたのである。顔はいいし、背は高いし、バックハンドからクリア、スマッシュ、ドロップ……。いったい誰なんだあの人は。その人こそ裏田さんの師匠で、日本一ダブルスの上手い大竹さんだ、と立教の人が教えてくれた。たしかに安沢さんと組んだダブルスはダントツだった。

「もう誰がなんと言ったって、バックハンドを練習するぞ」と決意し、それから半年後には、なんとかバックスマッシュも(まぐれで)打てるようになったのである。

### 忘れられぬ伊那の合宿

私にとって、立教大学バドミントン部というと、この高校2年の時の合宿が一番強烈に思い出される。

このときは、大学のレベルでは序の口にもならないように手加減をしてくれていたとは思うが、それでも私にとっては死ぬほどきつかった。岐阜の国体強化選手でたまたま参加していた堀君・杉山君に対しては、立教に入ってもらいたいという下心からか、ほとんどお客さん扱いだったのに……。それだけに、「ウチは材木屋なんだ」などといって話しかけてくれた伊勢さん、何かと面倒を見てくれた剣持さん、いくら疲れても笑顔をたやさなかった星野(弟)さんにはずいぶん励まされた。

### 少人数だからこそ

立教に入学しても半年はバドミントン部に入らずぶらぶらしていたが、これは自分の力では1部では通用しないと思ったことと、伊那の合宿でのイヤだった部分が強く影響していた(と自分に言い聞かせていた)。しかし、8月に青森県弘前でバッタリ会ってしまった小宮さんから「なんで入らないの、だらしねぇなあ」と言われ、本当は苦しいことから逃れたいだけだったことをはっきり自覚し、9月に入部することとなった。

このときすでに部員のうち経験者は私を含めて9人だけ。2年になると8人、3年では6人となり、3ダブルス6シングルスのリーグ戦を戦うのにギリギリの状態であった。そして、4年では、いわゆるレギュラー5人に一般部員1名を加えて1部を維持するのが精一杯であった。

しかし、このような少人数であったことから、旧軍隊的とも思える上下関係は完全に姿を消し、最低限の規範を守りながらの同じ仲間として過ごすことができた。少人数だからこそ試合にも出してもらい、最大の目標で



昭和43年同立定期戦にて(左から瀬戸、内野、河野、寺前)

あったバックスマッシュを試すこともできた。

また、バドミントンそのものも大好きになり、卒業後も杉田博さん(横浜国大OB)や小島一平さん(中大OB)と組むチャンスにも恵まれた。

1年上の立野さんと組んで関東学生3位になり、東西対抗とオールジャパンに出ることができたこと、東日本学生の帰り、当時厳格な規律で有名だった日本女子体育大学のメンバーと、日女の先生に隠れて登別温泉で合コンしたこと、同期の寺前君の下宿で牛乳沸かしで酒を暖めながら堀君と3人で議論したこと、等々思い出は尽きない。

しかし、「過去にこだわる者は未来を失う」。

新しい50年に向かって、イケイケ立教健児！ OBもOGも現役も！



昭和43年7月、東日本学生札幌大会の帰り日本女子体育大チームと登別温泉に向かう
（右から3人目がのちの世界No.1 湯木）

# 忘れられない下級生たちの支えと協力

高橋　宣
（昭和46年卒）

立教大学が昭和45年、関東リーグ戦1部から屈辱の2部へ降格した時、キャプテンを務めていたのが私でした。

当時、体育会の推薦入学はほとんど機能せず、一般入学者の部員がほとんどを占めていた。また、その中で期待していた新入生もけがのためまともな練習もできず、苦しい戦いが予想された。

私は、3年生の小柳・宮原両君、2年の谷口君をはじめとする下級生を多くレギュラーに起用してリーグ戦に臨んだ。が、結果は2部への降格。秋の2部リーグ戦で、1部復帰を期して戦ったが、ついにそれも果たせないまま卒業することになり、誠に残念、最上級生として、また、キャプテンとして不本意なシーズンを過ごすことになってしまった。

当時の部員の高校での経歴を見れば、そのまま1部のレギュラーとしてプレーできる者は少なかった。そのメンバーで戦わなければならなかったことで、2部降格もやむを得ない結果であったものかもしれない。そんな状況のなかで部員の退部問題もあり、一時的には先輩諸兄が営々と築いてこられた部としての存続も危ういと考えたこともあり、このメンバーとの調和を図ることに神経を割かなければならなかった。

そんななかで曲がりなりに1年間をキャプテンとしてやってこれたのは、この下級生たちの支えと協力があった賜物だと思っている。

最後に、自分自身が下級生の頃の上級生はたくましく、頼もしい存在であり、公私ともに大変お世話になったことを感謝したい。

また、立教大学のバドミントン部に在籍していたことは誇りであり、現役の諸君にもぜひ実りある学生生活を過ごしていただきたい。



昭和42年夏 高岡合宿最終日恒例のマラソンに出発する
（前列左端が高橋）



昭和45年 同立定期戦、高橋（左）と小柳

# バドミントン後の真の生きがい

谷口 寛
（昭和48年卒）

今年で46歳になりました。

今では、バドミントンとはまったく無縁の世界に住んでいますが、私の人生にとって、バドミントンは生涯忘れられないものです。

中学時代からバドミントンを始め、41歳でトヨタ自動車を退社するまでの29年間、ラケットと共に歩み、その仲間との汗と涙と感動の日々でした。

その中で立教大学での4年間は、チームとしては関東リーグ2部という中で、個人ではインカレに優勝し、アジア大会にも出場する機会に恵まれました。

立教での練習の後、夜のキャンパスでトレーニングをやったり、鈴木幸春先輩、星野義昭先輩のいるNTTで練習させてもらいました。

強くなるための練習環境として、当時の立教がどうであったか、今考えてもよくわかりません。しかし、1部リーグの大学にいたなら、いつもベンチを温めていたか、あるいは挫折していたかもしれません。私は、立教で学び、立教でバドミントンをやったからこそ、学生チャンピオンになり、日の丸を胸につけ異国のコートに立つことができたのだと思います。

大学卒業と同時に、小宮好雄先輩、板垣善憲先輩等のいるトヨタ自動車に入社し、「仕事とバドミントン」を、思う存分やらせてもらいました。38歳で課長昇進と同時に東京勤務となったことが、私の人生の転換点につながりました。

ヤマギシズムとの出会い。「ヤマギシズム特別講習研鑽会」の8日間の中で、今まで自分が最高だと思っていた価値観が、音を立てて崩れていきました。学生時代、そして社会人になってからも、自分が目指していた「バドミントンと勉強、仕事の両立」とは、両方とも他人より一歩先を行くことであり、競争の中で何とか自分だけは幸福になりたいという、本当に自分勝手なものであったのです。今はすべてを捨て、ヤマギシの考え方のもと、毎日を健康にすごしています。



昭和44年 同立定期戦（後列左から4人目が谷口）

# 全力をかけた後継者の育成と財政健全化

大内 進
(昭和49年卒)

私が、入部したのは、昭和45年4月でした。立教大学入学と同時です。

入学のガイダンスの本をよく読んでの入部でした。ひとくちで言いますと、スポーツをやりたかったのです。そして、バドミントンを最も簡単なスポーツと考えていました。高校時代は、汽車通学と進学校ということで、スポーツをやる機会に恵まれていなかった反動もあって非常にスポーツをやりたかったのです。4年間、バドミントンをやりましたが、予想以上にむずかしく、上達しないので困りました。

しかし、4年間、大学スポーツとしてバドミントンをやったおかげで、普通の学卒よりパワーがあったことを記憶しています。

大学卒業後、銀行に入社、22年間になりますが、大きな病気もすることなく、現在、勤務できるのも4年間、バドミントンをやったおかげと立教大学バドミントン部に厚く、感謝しております。

入社後のおもしろい話では、同期入社の者が、硬貨袋を2本(30kg)しか運べないのに、私だけいつも4本(60kg)を楽々と小さい体の割に運ぶので、先輩が不思議な顔で私を見ていたのが、思い出されます。現在では、2本(30kg)も無理で運べません。

現在、勤務している銀行員として感じるバドミントンの思い出としては、当時使用していた、2大ラケットメーカーのカワサキラケット(倒産)、ヨネヤマラケット(現在のヨネックス)と明暗を分けたことが、この20数年の間にあったことが、強く印象に残っています。ヨネヤマラケットが、世界トップクラスのヨネックスと成長したように、同じく、大きく成長した、同じバドミントン部に所属した方々も、数多くいるものと思います。

バドミントン部4年間(昭和45年～48年)では、2部優勝を3シーズン連続できたことが大きな思い出です。少数精鋭で、慶応・明治を激破し、青山学院との1部、2部入替戦は、思い出されます。

また、私たちの卒業後、2、3年は、2部を維持できたと記憶しています。これは、特に後継者の養成に力を注いだ私の努力の結果と自負しています。

大学卒業後は、バドミントンを含め、あまりスポーツはやっておりません。これは、勝利にこだわる、学生スポーツをやってきたことで、遊びになってしまう真剣味のない普通のスポーツは、つまらないということで、やれませんでした。

私の、バドミントンの個人の成績はよろしくなかったため、マネージャーとして、部の運営に当たりました。4年生の時、部員は、ピーク時20名位になったものの、退部する新入生も多かったため、入部と同時、1年間の部費と入部金を1万円、前納していただきました。心を鬼にして部費の徴収に務めた結果、部の運営費に余裕が出てきたことを記憶しています。

マネージャーとして資金の運用をして、お金の扱いを覚えたためか? 銀行に入社し、現在に至っております。この記念すべき創部50周年誌に寄稿できて幸いです。立教大学体育会バドミントン部よ永遠なれ!

Chapter-5

# 大いなる継承

## 1975-1984

昭和50年～昭和59年OB

# 努力すれば、できないことはない

岡田 哲男
（昭和50年卒）

私が、立教大学へ入学したのは昭和46年4月のことであった。

立教大学へ進学しようと思ったのは、高校時代同級生であった谷口寛の影響があった。谷口は、ストレートで入学しインカレなどで活躍していた。受験の年、谷口が自分の家に来て「立教大学を受験してみないか？」と私を誘った。その時の答えは、「もう、バドミントンはしないよ。立教大学を受験するかわからないなあ」であった。

大学は、関西にある大学を受験するつもりであったが、親戚が東京にあったことや、谷口の言葉が頭の片隅にあったこともあって、結局立教大学を受験し、理学部化学科に合格した。

合格発表の後、体育館に行くとちょうどバドミントン部の練習をしている谷口がいた。谷口に合格の話をすると、受験をすることは言っていなかったので大変びっくりしていた。

次の日から、一緒に下宿を探してくれたが、なかなか適当な所が見つからず、結局、谷口の下宿の近くに住むことになった。決めた下宿は、3畳の部屋でひと月5千円、今思えば大変安いものであった。

自分でもわからないが、いつのまにか立教大学体育会バドミントン部に入部していた。入学式もしないのに大学でバドミントンの練習をしていたのである。しばらく運動をしていなかったので、最初のランニングはきつかった。みんなが、グラウンドを3周する間に1周するのがやっとであった。

4月に入って春のリーグ戦に向け、2回の合宿をしたのを覚えている。1回目は、神奈川県の大和市であった。この時のキャプテンは宮原さんだった。4年生が宮原さん一人だったこともあったが後輩の面倒をよくみてくれた。この合宿には、瀬戸さん(昭和45年卒)や地元の高校生も来て練習をしたが、私はまだ体力がなかったため高校生に負けて悔しい思いをしたのを覚えている。私たちの時代の富山県のバドミントンレベルは高かった。富山県で優勝すれば、インターハイでベスト4または優勝できたからだ。

私が、バドミントン部に入部した時は、関東大学リーグの1部から2部に落ちて2部からのスタートだった。部員が少なかったこともあって、私はすぐレギュラーになった。私が、デビューした最初の試合はシングルスだった。この時は、優勝ができなかった。

リーグ戦が始まると、全員でのトレーニングはなく、強くなりたかったら自分でトレーニングしなければならなかった。私は、谷口と帰りが一緒なので、練習が終わったら二人でよくトレーニングをした。春のリーグ戦の自分の成績は、1勝4敗だったので悔しくて毎日トレーニングをしたのを覚えている。

下宿へ帰ると、すぐ寝たものである。時々だが、夜の7時に寝て一度8時に起きて目覚ましを朝の8時に起きられるようにかけ直して寝たことがあった。今思えば、おもしろいことをしていたものである。

夏休み富山に帰省しても、高校へ行ってバドミントンをしたり、ランニングをしたりしてスタミナをつけた。

9月になって、全員でのトレーニングが始まったが、今度は4月のような姿ではなかった。ランニングは、先頭にはならなかったがいつも上位に入るようになったり、フットワークも速くなったりして自分でも楽しかった。秋のリーグ戦から谷口とダブルスを組むようになり、ダブルスは全勝、シングルスは3勝2敗であった。この時2部で優勝したが、1部の最下位と入替戦では負けてしまった。在学中に2部での優勝を3回したが、3回とも入替戦で負けている。

大学での練習時間も変わっていた。体育会にはめずらしく、私と1年先輩の吉郡さんが理学部化学科に在籍しながらバドミントンをしていた。化学科は実験が午後5時まであったので、練習時間は午後6時から9時までが多かった。

今考えると、よくやったものだと感心させられる。4年生の時、キャプテンをしていろいろと勉強させられた。また、女子部との交流もあって、とても楽しい4年間であった。

私は、大学を卒業してしばらくは会社に勤務していたが、教えることが好きになり、教員の道へ進んだ。小学校勤務が長いのだが、上市中学に3年間勤務したことがあり、監督として全国中学バドミントン大会に2回出場し、熊本大会で男子団体3位、富山大会で男子ダブルスを日本一にしたことがあった。

平成8年4月から、朝日小学校の教頭になり楽しい職場にしようと努力している。どんな仕事をしていても、立教大学でいつも思っていた「努力すれば、できないことはない」という気持ちを持って、これからも頑張っていきたいと思っている。

# いつか部室の一番奥で着替えたい

深沢　政明
（昭和50年卒）

4年間の思い出としましては、多少記憶が薄れておりますが、さまざまなことが思い浮かびます。

思いつくままに列記しますと、

＊入部希望で部室を訪れた時の小柳先輩の貫禄十分の怖さ(後で聞いて納得)。

＊年2回の合宿によく耐えたこと。塩尻・山形・甲府・高萩、特に鈴木監督との鴨川の合宿で、腹筋を追加でやらされたこと。

＊青山学院で行った2軍同士の学校対抗戦の最終シングルスで、和田氏に文字どおりの奇蹟の大逆転勝ちをして、立教が勝ったこと。

＊女子部のコーチをさせていただいた時の一番の思い出は、あるリーグ戦で、栗田・大西ペアが、とても勝てそうもない相手ペアに勝った時の驚きと感激。

＊神宮外苑までのランニングの帰り道、脱水症状に襲われ、ふらふら明治通りを歩きながら、真剣に100

円玉が落ちてないか探したこと。ようやく、目白駅前の交番までたどり着き、水を飲ませてもらいました。それ以来、短パンのポケットにはいつも1000円玉が入っていました。

＊春、桜の下で酒盛りをしたこと。コップの中に桜の花びらを入れて飲んだ情緒。

＊先輩・後輩の下宿を泊まり歩き、麻雀ほか楽しい遊びをしたこと。お世話になりました。

＊同志社との定期戦で、狭い体育館の中で母校応援団に名前をコールされたこと。

書き始めると、次々に甦ってきて、とめどない懐かしさに胸が一杯になってまいりました。




昭和49年春 鴨川合宿にて

厳しい予備校生活から念願の大学生になり、さあ遊ぼうと思い、1か月が過ぎ、5月病に襲われ、叩いた門が薄暗くカビ臭い小さな部室でした。

「そんな細い体でできるのか」という先輩の言葉に対する反発と、自分から入部したプライド、そしていつか部室の一番奥で着替えたいというささやかな希望を持ち、なんとか4年間続けることができました。

当時体重50kg・ウエスト68cm、現在65kg・82cm

決して楽な生活をしているわけではないのだけれど……。

入部して初めての奥村先輩とのランニングで、もしかしたら道を誤ったかなとも思いました。こんなことしているより、可愛い女性とデートしている方が、よほど楽しいだろうと何回思ったことか。

今、当時にもう一度戻れたとしたら、同じ生活を選んだだろうか……あえて、答えは考えないようにします。多くの大切な思い出がありますから。

青春を謳歌させていただいた大好きな立教キャンパスを、ひさしぶりに訪ねてみようと思います。

また、先輩・後輩の皆様方とも疎遠になっておりますので、お会いできる日を心待ちにいたしております。

# 大きな財産、それはバドミントンで培ったふれあい

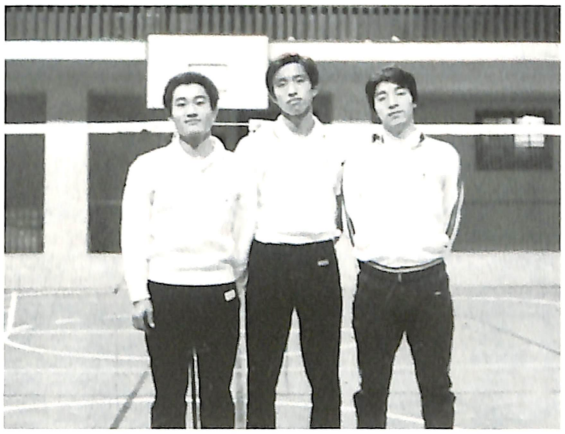
下平　勝久
（昭和51年卒）

私は、昭和48年に長島茂雄に憧れ、立教大学に入学しました。大学に入ったら体育会で、何か運動をしたいと考えていました。

しかしながら、いきなり、“バンカラ”の体育会に入るのは、ちょっとロマンがないと思い、最初は、アメリカ文化研究会という、英会話を習いながらアメリカ文化を研究するサークルに入部しました。その目的は、まず多くの友人を持ちたい(特に女性)と思ったことと、英会話も勉強したいと思ったからです。そのサークルでは、英語弁論大会で熱弁をふるったりして、約2か月所属しました。当初の目標であった多くの友人をつくることと、もともと得意であった英会話もマスター？ しました。

いよいよ、本来の希望であった体育会へと行くことになり、何がよいかと考えた結果、町内会では負けたことのなかったバドミントンを選びました。バドミントンを本格的にやることの難しさなど、まったく知らないで入部した私は、最初、村山先輩から、基本的なことをご指導いただきました。入部2日目か3日目の赤羽の体育館での練習の帰りは、疲れ果てて、駅の階段の上り下りにずいぶんと苦労したことを覚えています。

当時のキャプテンは、谷口さん。その練習の熱心さには感心させられました。練習前と練習後によくランニングをしている姿を見て、さすが、全日本学生チャンピオンは違うんだなあと思いました。また、スマッシュ練習の球拾いをしながら、受けさせていただいたスマッシュの重さにも驚きました。そんな凄い先輩のプレイを見ながら練習を重ね、下平選手は、目を見張る成長を遂げ、1か月足らずでかなりのレベルと思えたのです。



昭和51年卒の3人組（左から下平、鈴木、清水）

その成長度合いを試すべく、女子部のキャプテン長田さん(現若松先輩夫人)に試合を挑みました。結果は、コート中振り回され、へとへとになって、あっさりと1セットを奪われ、しかも2セット目は、バテバテでまったく動けず、戦うことができないみじめなものでした。このみじめさをバネに、気合を入れて頑張りました。

当時、大学からバドミントンをはじめた部員は、一般部員と呼ばれ、関東学生の試合の個人戦は、Aブロック(リーグ戦1部と2部のレギュラー選手中心)ではなく、Bブロック(リーグ戦3部以下の選手と一般部員中心)で戦っていました。私は、1年生の秋の新人戦

で、並みいる敵をものともせず、快進撃を遂げ、ベスト16まで駆け上がりました。本人はもとより、周囲も驚く躍進でした。

しかし、悲劇は、突然訪れました。ベスト16になって、有頂天になった私は、その晩大量のビールを飲み、翌日のベスト8を決める大切な試合に"下痢"の状態で臨むことになってしまいました。体にまったく力が入らず、結果は、惨敗。再びみじめな気持ちを味わいました。

2年が経ち、3年の春、下級生から上級生へと、これから「ちょっとリラックスできるかな」と思っていた時、新監督の鈴木幸春監督のもと、楽しい春の鴨川(千葉県)での合宿が始まりました。やさしい鈴木監督は、朝早く起きて、海辺の砂の多い海岸を、

「いい場所があったぞ」と、

早朝トレーニングの場として探してくださり、私達を鍛えてくださいました。当然、昼の練習においても厳しくご指導をいただきました。おかげさまで、食事は喉を通らず、体が受け付けるのは、水、牛乳等の水分中心で、効果的なダイエットをすることができました。この時を語るのに、面白いエピソードがあります。

夜、寝る直前の楽しい会話(登場人物:井上&下平)

井上「寝るのが怖い!」

下平「どうして?」

井上「寝ると、すぐ朝がくるんだもの」

下平「そうだなぁ……」

ここで、厳しくご指導をいただき、厳しい練習をしたことは、一生懸命やることの大切さを学ぶことができたと思います。今も、その精神は、人生の中で大変プラスになっています。熱心に指導してくださった鈴木監督、星野コーチ、須田コーチには、感謝の気持ちでいっぱいです。厳しい監督のおかげで、普通なら、少し手を抜いたかもしれない3年生、4年生のクラブ活動も、手を抜かずに充実したものとなったと思います。本当にありがとうございました。

私は、4年の時に主務をさせていただき、プレイングマネージャーとしてリーグ戦にも出場していました。ポイント'ア'ゲッターの私が勝つか負けるかで、本学の勝敗が決まる場面が多く、心は複雑でした。当然、勝ちたかったのですが、なかなか勝てませんでした。4年の秋のリーグ戦では、2部リーグ最下位でした。3部との入替戦で勝利して2部残留となり降格を免れました。就職活動をしながらのリーグ戦、3部との入替戦でした。ラケットを持ちながらの就職活動が懐かしく思い出されます。

私達のクラブは、貧乏でした。シャトルコックを買うのに、全員でアルバイトをしました。当時メーカーにお勤めの須田コーチにも、シャトルコックを安くわけていただいたり大変お世話になりました。貧乏でしたが、明るく、楽しいクラブでした。勉強はしませんでしたが、中国文化(麻と雀の成長についてetc.)の研究には熱心でした。

バドミントンを通じて培った諸先輩、同期、後輩とのふれあいは、今の私の大きな財産となっています。

# バドミントン部の4年間は今でも心の支え

桑田(清水)　正栄
(昭和51年卒)

昭和47年、私は立教大学に入学した。そして、入学式を待たずしてバドミントン部の練習に参加していた。

赤レンガ造りの、シングルス・ダブルスのコートがやっと取れる狭い体育館であった。しかし、初めてシャトルを打ったときのあの「パーン」、「パーン」という独特な響きが妙に心地好かった。

インターハイにも出場できなかった私に、当時のインカレチャンピオンであった谷口主将から勧誘のお手紙をいただいて、立教を受験し、幸いにも、社会学部に合格して、立大体育会バドミントン部での大学生活が始まった。

当時は関東学生リーグの2部リーグに所属していた。部員は他大学に比べて少人数であり、半数以上は大学から始めた部員だった。練習時間は他部との調整があって不規則であり、深夜11時まで及ぶこともたびたびあった。それから片道2時間余りも電車に乗って帰宅していった部員もいた。それだけに、コートに入ったときの各人は、皆、真剣そのものであった。おのおの自らの課題を持って練習をしていた。講義や実験の合間をぬって、一人一人黙々とトレーニングに励み練習に参加していた。少人数であった



さあ、これから練習だ

ゆえに、自分の役割を理解して、それを果たそうとしていた。

幸にも、1年生の頃からリーグ戦に出場することができた。1、2年の頃は、メンバーにも恵まれ、2部リーグで優勝し、1部との入替戦も経験することができた。

しかし、3年生になると、しだいにリーグ戦では苦しい戦いを強いられて、私が主将を務めた4年の秋には、とうとう最下位となり、3部との入替戦を経験することとなった。

後半の低迷時期には、OBも積極的に練習に、合宿に参加していただき、ご指導・ご協力をいただいた。大学から始めた部員にとってはなかなかキツイ練習の毎日であったと思うが、皆、一様に当時の状況に危機感を持って練習に取り組んでいた。

リーグ戦での初勝利の感激、試合より宴会が盛り上がった同立定期戦、明立定期戦、インカレ、苦しかった合宿、練習後に皆と通った雀荘etc、私の、「立大バドミントン部」での思い出は尽きない。

このように、"1部リーグに復帰する"という私の当初の目標は達成されないで終わった。しかし、卒業後20余年たった今も、「立大バドミントン部」の先輩・同僚・後輩達と共に過ごした4年間の学生生活は、重量感と満足感を与えてくれる思い出としてよみがえってくる。そして、今までの私の心の支えとなっている。

# 過渡期の立大バドミントン部

井上 龍
(昭和52年卒)

1973年(昭和48年)6月、私は関東大学リーグ戦1部、2部入替戦に1年生としてわけもわからず出場していた。後から考えれば名誉なことだが、ただ単に選手層が薄かっただけであった。

私が入部した当時は、かつての日本のバドミントン界の草分けであり、幾多の名選手を輩出した名門立教がかろうじてその面影を残すべく、1部の下位または2部の上位で踏みとどまっていた時代であった。

しかし、スポーツ選手に対する優遇制度も廃止され、バドミントン部のみならず体育会各部が、低迷衰退していく真っ直中であり、1年坊主の私がすぐに試合に出場できたのも幸せなことではあったが、前途多難を予想させるものであった。

それでも私が4年となり主将を務めた時の戦力と比べると、1年生で入部した時の戦力はたいしたものであった。人数は多くはなかったが、一様リーグ戦出場者のほとんどがインターハイ経験者であり、それなりの試合ができたからである。

1部、2部の試合は会場として区立体育館を使用し、レベルも高いし非常に活気があり、応援合戦も見ていて面白いものだった。ところが、3部以下となると各大学の体育館を使用するため、会場の問題、参加校数の少なさ等でもう一つ盛り上がりに欠けた。この差はとてつもなく大きかった。たとえていえば脚

光を浴びるJリーグと日陰の身であるJSLリーグとの差のように。

4年生の春(昭和51年)に私たちは2部で最下位となり、入替戦で一橋大学に3－4で負けて3部降格となった。ある程度覚悟していたとはいえ、負けた後、がっくりしてしばらくベンチに座ったままだった。秋には3部リーグに出場して、学生としての競技活動を終えた。

立教の歴史の中でも、最初1部リーグの選手と試合をし、2部リーグで低迷するも1部、2部の心地良い雰囲気を満喫し、最後は3部リーグで試合をし、上部リーグとの落差を味わうという、とても幸せで不幸な経験をしたのは、私たちだけじゃあないかと思う。

これにはOBも危機感を抱き、2年生の時、成績向上のため指導にあたるべく、鈴木監督、星野、須田両コーチという強力メンバーがそれぞれ就任された。

就任後の合宿は厳しかった。千葉県鴨川、長野県塩尻、山梨県甲府etc.いろいろ行ったが、今私が実業団チームの監督で、いまだにバドミントンに関わっているのも、こういった合宿でしぼられたお蔭であると感謝している。

学生時代に勉強した覚えはほとんどない。思い出は立大バドミントンに所属していた生活に関わるものばかり。試合後飲みすぎて2部優勝の賞状をキャリーバッグごとなくしたり、合宿にてやはり酔ってしまって、一緒にいた女の子がSOSを出したり(こめんね!)、いろいろあった。

でも、やはり一番記憶に残っているのは、「いい試合をして、いい結果が出た後、一人で自分を褒めてやる時の心地良さ」と、「いい試合をしても、いい結果が出なかった時の口惜しさ」だった。

4年生の春、関東大学選手権シングルスで初回戦、1年生とはいえ前年インターハイチャンピオンと対戦した。何とか勝った。自分も少しは強くなっていたんだなと思った。

その日夕刻、アパート(下宿のような)の近くの魚屋で海老と白身の刺身を買い、すぐ前の酒屋で日本酒を仕入れて、暮れていくあたりのいい感じに浸りながら、一人冷や酒で乾杯した。

嗚呼、あの日に戻りたい!

# ある初心者のシャトル日記

伊藤 要三
(昭和52年卒)

これは入部して初めて"シャトル"という言葉を知った、ある男の独白です。

朝6時、起床。7時前には家を出て、1、2時限目の講義に出席(千葉の僻地に住んでいたため、大学まで2時間近くかかりました)。文武両立を掲げ、とにかく意地になって朝一の講義に顔出ししていました。

昼休み、一人で"協和銀行コース"をランニング。というのも、バドミントン初心者の私にとって、ランニングでトップになることが唯一自己の存在証明でした。走り終えるや学食名物"百円のカツ丼"をかっ込み、ジャージに学ランで午後の講義に出席—休講時や気分の乗らない時には"文芸座"に代わることもありましたが—当時としては、比較的マジメな学生でした。

午後4時半、いよいよ部活の開始。ただし体育館はまだ使えません。取り決めがあり、平日使用できるのは原則として昼休みと3時半以降、つまり12時～1時、3時半～5時、5時～6時半、6時半～無限大という4つの時間帯でした。当然のことながら"体育館"を確保しようとすると遅い時間帯になります。特に2年生の[illegible]は、この"6時半～"の時間取りが本当に好きでした。ほとんど定番だったような気がします。

午後6時半、やっとラケットを手にして練習。ただし、ここでも未経験組の私たちは"声出し"専門、「ガンバローゼイッ!」。家にたどり着くのはいつも11時過ぎでした。この生活を4年間続けると—もっとも徹マンで同期のI宅に泊まることも多かったですが—さすがに心身ともにタフになります。(お陰さまで社会人になってからも早起きと肉体酷使はさほど苦にならず、今でも毎朝5時起きして通勤、使い減りしない存在として非常に重宝されています。)

そういう私も4年になると、ついに第3ダブルスでリーグ戦出場。ただし、グリコのおまけ、出ると負け。お恥ずかしい限りですが、公式戦には勝った記憶がありません。諸先輩の方々のような"栄光の歴史"ではなく、まさに"敗北の歴史"。当時、レギュラー組6名のうち2名が未経験者という陣容でした。人員を含め、それだけチーム事情が苦しかったという実例です。

それでも今振り返ると、あの"4年間"が鮮烈に甦ります。ノータッチでのうさぎ跳び、膝が笑った恐怖のプッシュアップ、声を張り上げたリーグ戦での「あと1本!」。コートを離れれば「パブエリート」のジンパック、「老月」の氷オレンジ、「理学部」の何とも落ち着けた薄暗いトイレ。そのいずれもが今はなつかしい想い出です。紛れもなくそこに私の青春がありました。そして、語り合える仲間が—麻雀のカモも—いました。"戦友"とでも言ったらいいでしょうか。いい4年間を過ごさせてもらいました。

卒業して20年。立教に、バドミントン部に、仲間たちに、改めて「ありがとう」と言わせていただきます。セントポールに栄えあれ!

# 人生を変えた伊藤先輩の言葉

鈴木 宏
(昭和53年卒)

私が大学を卒業して、早いもので、もう20年になろうとしています。でも不思議なものですが、立教大学の、あの小さな体育館での練習、トレーニング、そして本当に、苦しかった春、夏の合宿などなど、昨日の出来事のように思い出されます。

大学4年間のバドミントン部での思い出はたくさんありますが、一番印象に残っているのは、トレーニング中のランニングの時だったと思います。まったくバドミントンを知らなかった私にとっては、高校時代からの経験者たちとの練習は、本当に、きついものでした。考えてみれば、当時2部で活動していたのですから、練習もトレーニングも、初心者にとっても、経験者にとっても、きびしいのも当然だったのでしょう。でも、そんな練習の中でも、ランニングだけは、一生懸命頑張れば、上位の方で走れる位置にあったのです。

私が1年の時の夏の暑い日だったと思います。神宮コースからの帰り、もうすぐ立教大学に着くという時だったと思います。あと2人くらい抜かすと1番になれるという時に、本当に疲れていたせいか、少し力が、ぬけたようで、その瞬間、[illegible]でしょう。「今日は、この順位でいいや」と思ったのです。

しかし横を走っていた、伊藤先輩に、「鈴木、お前も苦しいだろうが、先頭を走っているやつの方が、もっと苦しいんだぞ、スピードを落とすな!」と、怒鳴られました。

この言葉は、自分にとって大変大きな意味のあるものでした。自分に甘えたら、進歩もなんにもなくなってしまう。それは、バドミントンもトレーニングも、もちろん生活においても、同じなんだ、ということを言ってくれたのでしょう。

その言葉が、心の中に強く残っていたからこそ、同学年の仲間たちが、一人やめ二人やめ、結局一人きりになってしまっても、頑張れた理由だったと思います。

正直言って立教大学バドミントン部の歴史においては、たいした戦績も収めることができない学年でしたが、私にとっては、歴史のあるクラブを、少しでも、影ながら支えた一人だと思っています。

最後に、監督さん、コーチ、上級生の皆さん、初心者の私を、我慢強く指導してくださって、本当にありがとうございました。

# 想い出の「体育館」

曽我 之雄
（昭和54年卒）

立教大学体育会バドミントン部創立50周年おめでとうございます。

振り返れば、20年前大学3年生で主務をしていたときに、創立30周年パーティに現役として招待していただいたことが、いまだに記憶に鮮明に残っております。

大学を卒業して社会人になると時の過ぎるのは早いもので、もうあれから20年も経ったのかと思うと信じられません。しかしながら、立教でバドミントンをしていた4年間の記憶というのは、いい想い出も苦しい想い出もいまだに忘れることができないほど、立教大学体育会バドミントン部は私の人生に少なからず影響を与えてくれたことに、今さらながら感謝するしだいです。

さて、先般あるきっかけで立教の新座キャンパスを訪問する機会がありました。時間もあったので、新座キャンパスをゆっくりと見学することができましたが、そこには現役時代に熱望していた「体育館らしい体育館」がありました。

新座キャンパスの素晴らしさもさることながら、この体育館には絶句しました。

現役時代、池袋キャンパスの体育館はコートが2面しかとれず、下級生の間はシャトルを打つ時間もなく、ただひたすら大きい声を出して素振りをする毎日で、もっとコートがあれば自分もシャトルを打てるのにと考えながら、トレーニングばかりしていた苦しい想い出が頭をよぎりました。また、3年からは、2年間主務をしたこともあり、他部との体育館の取り合いに全精力を費やし、練習時間の確保に苦労したことが思い出されました。

入部した頃、諸先輩方から、当部は過去において素晴らしい実績を残しているクラブであることを教えられましたが、こんな体育館でどうして強かったのか、本当に不思議に思いました。高いサーブが打てない、ハイクリアーが打てない体育館で先輩たちはどうやって上手になったのだろうと……。バスケット部もバレー部もフェンシング部もあって、1日2時間しか練習できないのにどうして……。しばらくすると、体育館で練習できないから、トレーニングやランニングばかりやっているのだとさえ考えるようになったものです。

上級生になってこの疑問は薄れてきましたが、やはり「体育館らしい体育館」がほしいという気持ちは、主務で練習時間に頭を悩ましていただけに、ますます強くなっていったように思います。

卒業後、仕事中心の生活になり、こんなことはすっかり忘れていましたが、今になって考えると、想い出の池袋キャンパスの体育館が教えてくれたのは、サラリーマン生活の中でも要求される「与えられた環境の中で、最善・最大の結果を生み出す」ことだったのではないかと感じます。

いずれにせよ、あの体育館は鮮明に学生時代の想い出として私の心の中に深く刻まれ、自分の気がつかないところで無意識のうちに心の支えになって

いるのだと思います。今さらながら、立教大学体育会バドミントン部に、そしてあの想い出の「体育館」に心から感謝いたします。

末筆ながら、素晴らしい体育館で練習ができる現役諸君の活躍と、立教大学体育会バドミントン部OB・OG会のますますの発展をお祈り申し上げます。

# 立教、それは私のほうれん草

植竹　明彦
（昭和54年卒）

挫折が私と立教の最初の出会いだった。建築士を目指した大学受験が失敗し、180度転換した相手はもうどこでもよかった。そして、とりあえず立教の観光学科になった。これが私の人生の哲学「凡なる非凡」の始まりだった。

たまたま家の庭先で得意だったと勘違いしたバドミントン。キャンパスの勧誘に誘われるままに入部。女なんかに負けるわけがないとタカをくくって挑んだ相手に完敗。何となくバドミントンの奥の深さに惹かれたのか4年間通してしまった。振り返れば「観光」、「バドミントン」、「おかしやさん」、「プライベートクラブ」、「おもちゃやさん」と私の40年間はまさに“Minority”とのかかわりの連続であった。

立教を出た私は、不二家というところに10年ほどお世話になった。ここでは立教の先輩が結構いて、ずいぶんかわいがってもらった。

実は大学4年の頃から大久保にある(財)スポーツ会館というところに顔を出し、以来20年近くもそこの友羽会というクラブで、バドミントンは今も週1回のペースで続けている。毎週水曜日の夜が練習日なのだが、入社1年目から水曜はNO残業DAYと決めて出向いていたのだが、物理的に不可能な時期が2度ほど訪れた。

1度目は米国留学の2年間。これは不二家でふと思い立ち上司に提案したのだが、ほとんど恐喝の世界であった。「米国に行かせなければ会社を辞める」と言い張って、結局2年間の大学院生活が始まった。最初の1年間は本当に大変だった。はっきり言って英語が通じない。加えて持前の自尊心から失敗してはいけない、恥はかきたくないという観念が支配して最初は失敗の連続だった。

ここで役に立ったのが、あの立教での地獄のような合宿生活であった。あの肉体的、精神的にもどん底の経験があればこそ「こんなことで負けてたまるか」という気持ちが湧いてきて、何とか無事2年間で卒業できた。

2回目は最近のことで、不二家から西武百貨店を経て、トイザラスという会社に移ってからのことである。5年ほどお世話になった西武から、カテゴリーキラーのトイザラスに移ってすぐに研修を名古屋で3か月行ったのだが、この間名古屋鉄道の井上先輩のところで週1回練習をさせていただいた。研修後、地区部

長みたいなものになり、名古屋と京都担当になったため、約1年間名鉄の体育館に通うことになった。井上先輩には、とてもお世話になった。

振り返って見れば、すいぶんと理不尽な経験を4年間もしたものだ。1年の時は2部から3部に降格になりその責任を取って全員丸坊主。私は試合にも出ていないのにいったい何の責任なのか。合宿の時ミスをすると監督の手がくるりと1回り。体育館ウサギ跳び一周である。学ランを着て「チワッス」とやって、やれやれやっと卒業かと思いきや、OB会ではただの酔っぱらいのオジサンに「あのなーおまえなー」と意見される。

ラベルもレベルも違う実に混ざった人達のクラブ。実はこれが今までの私の人生を支えてくれた原点であった。感謝。

# ここでやめたら負けだぞ！　おまえ！

薗部　秀之
（昭和55年卒）

たしか大学の入学手続きのときだったと思いますが、職員の方と1対1でお話をする機会があり、その方から「高校ではバドミントンをやってたの！　だったらぜひ体育会に入ってね」と突然言われ、大変驚いたことを記憶しています。あとで知りましたが、運動をやっていた新入生のリストがあり、その中には私のような何も戦績のない者の名前まで載っていたのでした。当時の立教は、野球をはじめとして体育会の戦績が振わなかった時代でした。

入学後ブラブラとキャンパスを歩いていて、声をかけられたのは応援団の方でした。いろいろとお話を伺い、「どうも違うな。このままじゃいけない」と思い、とっさに「私、バドミントンをやっていましたので、そちらに行きたいと思っています」と言うと、「わかった。それでは知っているやつに言っとくから」という返事。

その知っているという人と初めてお会いしたときに「君知ってるよ、とにかく練習を見にきて」といわれ、あの懐かしい池袋の体育館に行くと「今度入部した新入生です」と紹介され、「違います。見に来ただけです」とも言えずに、先輩の方々から自己紹介をされてしまい、気がついた時には「よろしくお願いします」と言ってしまっていました。これが私の入部のきっかけです。

4年間の学生生活のほとんどがクラブ中心となることとなった(最初は本当に休みがなかった！)私の忘れることのできない事柄と言えば……「なげかわしや！創部以来初めての3部降格！」。入部直後の春のリーグ戦で2部から降格となり、応援しかしていなかった私達には何がなんだかわからないまま「全員坊主になって気合を入れ直す」事態に遭遇しました。

秋のリーグ戦でも2部復帰が果せず、次の年の春の

リーグ戦で4部に降格した私達に対し、「君達は勝つなんてことは考えなくてもいいから、とにかく伝統をつないでくれればそれでいい」。先輩達のもって行き場のない気持ちが、言わせた一言でした。

実は正直なところ当時これには相当まいってしまいました。「本気でそう言われるのなら存在の価値などない」と思い、やめてしまおうかと何度考えたかわかりませんでした。こんな「グレた気持ち」をどこかに「しまいこんだ」まま、残りの3年間を過ごすことになりましたが、なぜやめなかったのかと考えると、ある先輩に言われた「ここでやめたら負けだぞ！おまえ！」の一言でした。

勝たなくてもいいと言われた人間がなぜ？　と今でも不思議なのですが、勝てないと言われた集団の中にいる私の「せめて負けない」選択だったと今では懐かしく思いだされます。

こうして何とか続いた4年間が過ぎ、OBとなってしばらくしてから、部員が1人しかいない事態になったと聞き、「何とか途絶えずにつながってほしい」と思う自分に、あのときの先輩の言葉を重ね合わせてみますと、当時とはまた別の思いがいたします。

個人としては「4年間」という限られた時間を、それぞれにつなぎ合せた結果として「今日の立教大学バドミントン部が存在しているのだ」と考えるとき、同時に「部が存在していることによってのみ、過去もまた存在できるのだ」と、いまさら至極あたりまえのことに思い至るのであります。

# 4年間

金子　真人
（昭和56年卒）

**昭和52年春　1年生**

立教大学入学。高校時代やっていたバドミントン、大学ではどうするかなと迷っていた。学生課の遠山先輩にも相談した。

結局、入部は4月の終わり頃だった。高校の体育館の天井が低く、高いところでやりたいと思っていたが、その夢はかなわなかった。当時の体育館は、天井は低く狭くコートが2面しかなかった。

入部の時立教は3部だった、リーグ戦は東大の体育館で行われた。印象に残っているのは、応援合戦がすごく家に帰っても興奮していて、なかなか寝付けなかったこと。それと東大の人のプレー。フォームはお世辞にも華麗とはいえないが、コースと攻め方がうまくだいたい勝っていた。この時明治大学も3部だったが、優勝して2部に昇格していった。我が部は6位、入替戦出場0－4で埼玉大学に負け4部に降格

オフの時、横浜でショップを開いていた小島一平さん(中大OB)に、立教でバドミントン部に入部しましたと話したら、「昔サックス紺のセーターに憧れた」という話をしていただいた、すごい部に入ったんだと思った。

### 昭和52年夏

夏の練習が始まった。毎日暑い練習が終わると、池袋駅近くのローレンという喫茶店で1年生仲間と数時間涼んでから帰った。

代々木のオリンピック村での合宿。場所もよく、先輩、大先輩大勢きていただいた。私は高校からの経験者ということで、いつも第1コートでご指導をいただいた。あのときの練習のおかげでだいぶ上達したわけで、当時の先輩には感謝してもしずぎることはない。

ただ疑問に思うことが1つある、練習は2：1で1がノータッチをとられるとウサギ跳びをするルールだった。私はずいぶんウサギ跳びをしたが、2のほうにはいるとその分先輩に対しても容赦なくノータッチを決めた。本心「ざまあみろ」と思っていた。ところがある日、ノータッチを決め、当時3年でエースの中島先輩がウサギ跳びをしている姿を見ていて気分壮快であったとき、岡田先輩が私に言った。「おまえもやれ」、その後自分で決めてもウサギ跳びをすることになってしまった。

### 昭和52年秋

リーグ戦結果4部6位、入替戦でも負け5部降格。

### 昭和53年春　2年生

5部でのリーグ戦結果は2位。この時監督がリーグ戦に、場にきてくださった。ちょうど私と植竹先輩のダブルスをやっているときにこられたのだが、試合が終わると監督に2人呼ばれ、体育館の隅に連れていかれた。あまりにひどい試合で、監督が怒り殴られるのかと思った。ところが監督の口から出た言葉は「これが立教のバドミントンかと思うと情けない、怒る気もしない」。ふと監督を見ると目に涙があった。我が部の重さを感じた。

### 昭和53年秋

この年入部した新人達の活躍、4年生中島先輩、植竹先輩の頑張りにより4部優勝、そして3部昇格。(この年リーグ改正があり各部6校から3部は12校4部は24校になり我が部は4部での再出発だった。)

### 昭和54年春　3年生

また負けた、3部で6位入替戦も負け4部降格。あがったり下がったり忙しい。

### 関東学生個人戦

Bブロック3位。Bブロックではあるが参加人数が多い分、その後の自信になった。

### 昭和54年秋

4部優勝、入替戦では東京理科大学に0－4で負け、昇格はできなかった。

### 昭和55年春　4年生

主将となり3部復帰を目指す。リーグ戦は順調に全勝優勝。メンバーは揃っていて助かった。3年の有賀、関山、上田、武井、飯島みんな活躍してくれた(飯島君は翌々年の方が活躍したと聞いている)。2年の松下、彼は同学年一人だけだったががんばり屋だった。そして同期の坂野。彼は努力家で4年になってレギュラーを勝ち取り、ここ一発の勝負の時は頼りになった。主将としてオーダーはいつも一人で決めていたが、坂野には多少実力差のある相手でもかまわず当てた。だいたい期待にこたえてくれ、我が部に勝利をもたらしてくれた。北村千晴、我が部始まって以来

の女子マネージャー。男だけのクラブで大変だったと思うが、いつも明るくしてくれて助かった。

入替戦。相手は東京経済大学。よく知った大学でオーダーも絶対の自信をもって出したところ、なぜかこのオーダーだけは避けたいと思っていた最悪のオーダー。目の前が暗くなるとはこのことを言う。しかし皆にはそうは言えない、「よし、オーダーはバッチリ。4－0でいこう」。しかし、戦いはもつれ3－3で最後のシングルス関山。彼はがんばり、最後に相手のスマッシュが右サイドラインを割った。このスマッシュが切れていくのは今でもしっかりと瞼の後ろに焼き付いている。入部した年の3部から5部まで落ちていった悔しさとともによく覚えている。

昭和55年秋

リーグ戦結果3部5位

入部したときと同じ部で卒業でき、ホッとした。

最後に

立教大学体育会バドミントン部でバドミントンをした縁で知り合えた人々に感謝したいと思います。

今私は銀行に籍を置き、サラリーマン生活を送っています。縁があり、銀行バドミントン部の部長をやっています。そして東京銀行団の理事もやらせていただいています。もうラケットを握っても思うに任せませんが、今後も何らかの形でバドミントンに係わっていけると思います。


執念の3部カムバック

2シーズン連続優勝

東経大を見事逆転

関東学生バドミントン入替戦

4部

3部復帰を伝える「立教スポーツ」

# 新しい息吹きをもったバドミントン部への期待

関山 浩
(昭和57年卒)

創部50周年おめでとうございます。

今から20年前の昭和53年夏に創部30周年のパーティーが開催されましたが、私はその時には4月に入学したばかりの1年生として出席しておりました。まだ、この部がどのような歴史のある部であるかということさえ理解しておらず、ただ、ただ、OB・OGの方々の数の多さとパーティーの盛大さに驚いたのを覚えています。

当時の部の成績はリーグ戦ごとに降格するという厳しい状況で、春のリーグでは5部の2位でした。私は

レギュラーなど考えることもできず、コートの外で声を出すのが役目でした。秋のリーグでブロック制になったため、4部1位となり、入替戦の後、3部へ昇格しました。私は2年の春から出場させてもらいましたが、3部と4部の間を出たり入ったりという不安定な成績で、入替戦は6度も経験しました。

思い出すのはどうしても1年生の時のことが多いのですが、特に当時の主将であった中島先輩は強く印象に残っています。バドミントンをこれほど厳しく練習する人に会ったのは私にとって初めてでした。基本練習でさえ数回、試合をしていただいたのはたった1度だけでしたが、この1年の時の練習が4年間、続けられた基になっていると感謝しています。

練習後、体育館で中島さんを中心に始まる恒例の酒盛りは本当に楽しいものでした。

私の同期は全員で6人おり、この年代では人数に恵まれた期でした。したがって、1年の仕事もかなり分担できましたが、それが油断になったのか、どういうわけかペナルティもよくやらされました。ただし、すぐ下の期が松下君1人だけなので2年になっても1年と同じようなものでしたが……。

苦しかった日々も楽しかった日々もよき思い出として、これからも残っていくと思います。立教大学バドミントン部に深く感謝するとともに、50周年を機に新しい息吹を持ったバドミントン部へと発展することを願い、OBの一員として応援していきたいと思います。

# バドミントン部万歳！思い出すままに

有賀　和美
（昭和57年卒）

### 出会い

昭和51年8月、全国高校総体(インターハイ)会場にてバドミントン部の先輩に勧誘されたのが、私と立教大学体育会バドミントン部との出会いである。長野県のレベルは低く、監督、コーチもなしで練習していた高校時代を考えれば、団体全国ベスト16は立派だったと思う。

勉強はまったくしていなかったので立教大学はとても無理、一浪後初めて受験した。歴史を感じるレンガ造りの校舎、チャペル等田舎者の私にとって、ぜひこの大学に入ってバドミントンをやりたいと強く思った。しかし、予備校時代もパチンコ、ボウリングと遊んでばかりで、模試での合格可能性は最後までほとんどなかった。ところが幸運にも法学部に合格。何か縁を感じた。

### 体育館

入学式の翌日、体育館に案内してもらう。これが大学の体育館なのかとたいへんがっかりした。天井の低さは高校の時はもっと低かったので気にならなかったが、サイドの狭さには、慣れるのに時間を要した。約1年半バドミントンから離れていたので体力がなく、トレーニングもきつかったが、入部早々コートに入れてもらい、また最初のリーグ戦から単複出場。頑張ったが5部2位

であった。(当時は6校ずつ13部くらいまでだったと思う。)

### 入替戦

4年間春秋8回のリーグ戦で入替戦がなかったのはたぶん2回だけである。結局4年間3部と4部を行ったり来たり。試合は数多くすることができて良かったが、降格した時は悲しかった。

### 練習

高校の時は、前述のとおり自分たちだけで気ままに練習していたため、上級生になると羽根打ちばかりでトレーニングはほとんどしなかった。

したがって、大学に入って下級生の頃は練習がきつくて何度もやめたいと思った。でもやっぱりバドミントンが、また、クラブの仲間が好きであったので、何とか乗り切ることができた。3年からは体力もだいぶついてきたので、練習もつらいながら楽しく感じるようになった。大学4年間で試合中足をつった記憶がない。高校の時は日常茶飯事であったのに。

### 主将

前主将の金子先輩から主将に指名された。はたして自分でやっていけるのかと不安だらけの中、春季リーグ戦3部6位、入替戦敗退4部に降格。秋季リーグ戦、4部優勝、入替戦1回戦に勝ち、2回戦の茨城大。

4年間の数多くの試合の中でこの時の単複2試合が、自分としては一番の試合であったと思う。気持ちも本当に充実し、主将としての責任を果たすことができたのではと思う。しかし、残念ながら2－4で敗退、4部残留で最後の試合が終わってしまった。悔やしかったし涙も出た。この時の思いは一生忘れないだろう。

### 友

立教大学体育会バドミントン部での4年間一緒に過ごした友達には、特に感謝の気持ちでいっぱいだ。試合に勝って笑い、負けて泣き、最近は会う機会もないが、一生の友達である。

関山(副将)

アキレス腱断裂も克服し、部を引っ張ってくれた。ダブルスのパートナーとして関東学生(Bブロック)3位。

武井(主務)

マネージャーとして活躍。ミスジャッジに対して猛然と主審に文句を言ったことが記憶に残る。

飯島

初心者からレギュラーになったのは立派。一番の努力者。試合に出るために大学5年生にて卒業。

上田

きれいなフォーム、どっしりとした足腰。本気でやれば、もっともっと強くなったのでは……。よくいっしょに酒飲んだなあ。

榎本

ダブルスは好きだが、シングルスは嫌い。両方好きだったらさらにレベルアップしたと思う。それにしても独自のダブルス論の持ち主であった。

みんなとまた温泉一泊旅行したいものだね。

### 最後に

創部50周年を迎え、過去の全盛期から現在に至るまで、多くの人々によって続いてきている立教大学体育会バドミントン部。時代も移り変わり、これからの[illegible]現役ひとつとなって存続していくことを願って、思いつくまま書いてきたが、ここで終わりとしたい。

立教大学体育会バドミントン部、万歳!!

# あの時の水よりもおいしいビールには出会っていないが

松下　一成
（昭和58年卒）

卒業して丸14年になる。大学でというよりもバドミントン部で過ごした4年間の3倍以上の期間、今の会社で勤務していることになる。

私の場合、高校からバドミントンを始めたのだが、お世辞にも強いとはいえず、県の大会などで目にする上手な選手のプレーを見るにつけ、あまりのレベルの差にただただ感心するばかりで、別世界の出来事のように思っていたものだった。もう少しぐらいはうまくなりたいというのが大学で体育会バドミントン部に入った動機だったように思う。

昭和54年に入学・入部したが、1年の夏には、早くも同期の2人がやめてしまい1人になってしまった。部にあって何が辛かったと言えば、練習の苦しさよりもやはり同期のいない孤独感、疎外感が最も辛かった。

上級生になるにしたがい、若かったせいもあるのだろうが、必要以上の責任感からか気持ちにゆとりもなく、我ながらずいぶんと無理をしていたように思う。話はそれるが、1年後輩の星君が平成元年に亡くなったことは、とても残念でならない。彼の物事に



昭和57年11月 同立定期戦
（前列左から 松下、飯島、中列左から 山崎、流、遠藤、小池、後列左から 大森、石田）

こだわらない非常に明るい性格とその笑い声、そしてやや横に立派な体格は、今でもはっきりと思い出すことができる。ご本人だけでなく、一人息子を亡くされたご両親もいかばかりであったろうと思われる。ここで改めてご冥福をお祈りする。また同期のいない私としても、当時を語り合える数少ない人間であっただけに一段と寂しく感じられる。

4年間で1番うれしかった思い出は、4年生の春に入替戦に勝って3部に昇格した時のものだ。8回のリーグ戦のうち3部で4回、4部でも4回、入替戦を6回経験し、上がったり下がったりの4年間だった。入替戦では、一つ上級の有賀先輩らにご迷惑をかけた試合もあり非常に申し訳なく心苦しいのだが、最後の締めくくりをいい形でできたと思っている。

今もあるのかどうかはわからないが、池袋の西口公園の横手に"桃太郎"という飲み屋があってそこで祝勝会をした。最後に胴上げをされたのだが、それまでの苦しかったいろいろなことが、すべてこの瞬間のためにあったかのように感じられたことを憶えている。



昭和57年11月 同立定期戦後の懇親会

同期がいないことで、部の責任者を経験することができ、そのことで集団を動かす難しさや面白さを学ぶ貴重な体験をさせてもらった。そのこと自身、ずいぶんと自分を鍛えることができたと思うし、そのことが今の自分を作ってくれていることは間違いなく、感謝もしている。ただそれと引き替えに失ってしまったものもあるような気がして、あれで良かったんだと自信をもって言い切れないのも正直なところだ。

何はともあれ、一つのことに純粋というよりも単純に打ち込んでいた若い頃が確かに存在していたことが、今はとても懐かしく感じられる。社会に出て経験することになる、多くのいろいろな人間の思惑で渦巻く会社暮らしとは異なり、ルールによって公正に戦うことが保証された、単純明快なとても心地よい世界だったように思える。ただ打ち込んだという割にはたいして強くもなれなかったが、自分のできる範囲の中でそれなりの努力はしたと思っている。

最近のビール業界はアサヒビールが絶好調のようだが、そういえば前記の"桃太郎"は、取り扱いがアサヒビールだった。実は私が1年生の時の新歓コンパもその"桃太郎"だった。あの頃のアサヒビール自体がまずかったこともあるのだろうが、無理矢理飲まされたビールがおいしいはずもなく、そのせいか飲むには飲むのだが、かなり長い間いま一つビールがおいしいものだと思えずにいた。

しかし30歳も半ばを越えて、心身のあちらこちらが傷んで薬が必要になるにしたがい、百薬の長である酒(ビール)がおいしく感じられるようになってきた。特に汗をかいた後のビールは格別である。ただ残念なのは、学生の頃、練習でくたくたになった後にがぶ飲みしたあの水道の水よりもおいしいビールにまだ巡り会えないことなのだが、皆さんはいかがだろうか?

# つれづれなるままに

石田 俊司
（昭和60年卒）

## 苦しかった同立戦

1年生の冬、同志社大学で同立戦が行われましたが、入学以来初めての遠征で気分はウキウキ!! 試合内容はすっかり忘れてしまいましたが、試合後、河原町を皮切りに京(みやこ)大路の夜を満喫し、日本酒を湯呑み茶碗でぐいぐいあおってしまい、翌日は頭を上げることのできないほどの二日酔、当時4年生飯島先輩の付人として行動をともにしていましたが、私は午後まで寝たきりで苦しんでいました。

午後になって、飯島先輩に「外の空気を吸ってくると楽になるぞ!!」と言われ、重い体とバッグをひきずりながら外出しました。

「どちらへ」と聞いても教えてもらえず、もうろうとした意識の中、気がつくとラケットを握らされ同志社大学のコートに立っていました。吐き気をこらえながら練習をしたのをいまだに忘れられません。

汗をかいたのが良かったのか、二日酔からは立ち直りましたが、いざ再び京都の夜へと思った時には、飯島先輩は琵琶湖方面へと消え去ったところでした

## 辛かった日大夏合宿

2年生の夏、鈴木監督のご尽力で、日本大学(1部リーグ上位)の合宿に参加することができました。高校時代の旧友・後輩たちと一段レベルの高い練習を経験することができ、大変有意義なものとなりました。



同立定期戦を終えて

なかでも合宿最終メニューの"地獄の2対1・1時間"が思い出深く、これは通常の2対1の練習でノータッチ、サーブとサービスレシーブ時の1本目のミスを犯した時は、2の方が即座にペナルティー(うさぎ跳び・腕立て伏せ・腹筋・背筋等)を1つ課し、それが終えてからプレーを再開するという厳しいものでした。

はじめのうちは大した負担にはならないのですが、30分を過ぎたあたりからボディーブローのように効いてきて1ラリーごとに体がどんどん重くなってきて、時間の過ぎるのが遅く感じてたまらなくなってきます。残り15分になると意識はもうろうとしてきて、ペナルティーを終えてコートに立つと日大の1年生にラケットとシャトルを握らされ、すぐにサーブを打つとまたフォルトを犯し、ペナルティーという感じでどんどん深みにはまっていった自分を、薄れゆく意識の中でかすかに記憶しております。いうまでもなくこの練習は私が卒業するまでは合宿の名物にしてしまいました。


日大の合宿に参加して

### うれしかった新人戦団体優勝

2年生の秋、3年生で編入してきた流さんを加え、2年生小池・田中・私、1年生遠藤・大森・高塚で関東学生新人戦に臨みました。

我が部は3部リーグ以下中心のBブロックに参戦しましたが、1、2部リーグの2軍等も参戦しており、当時の戦力では上位進出はかなり困難な状況でした。

しかし、試合を経るごとに1年生も試合慣れしてきて、チームに勢いがつき、あっという間に決勝戦となりました。相手は日本体育大学。試合内容は第1ダブルス「流・石田組」で勝利、第2ダブルスは「遠藤・大森組」が健闘むなしく惜敗、最後のシングルスは流さんが見事に相手エースを退け、夢にまで見た優勝の栄冠を手にすることができました。この優勝は各メンバーの自信と誇りとなり、大会を通じて一段とたくましくなったように思えました。

### 楽しかった映画出演

3年生の春、午後の練習を終えて体育館の外に出ると、いつもより人通りが多く、雰囲気が違うなと思ったら、薬師丸ひろ子がガードされながら歩いているではないですか。そうです映画『探偵物語』のロケを行っているではありませんか。

友達を介しエキストラとして出演することになり、いくつかの場面に登場しています。一番わかりやすいのは犯人が罪を告白する場面の後方で、なぜか屋外でバドミントンをしている面々が私達です。形はどうあれ、今は亡き松田優作と共演したことは自慢話のひとつです。

### 暑かった東日本大会

4年生の夏、就職活動もかえりみず、東日本学生選手権大会に参加、開催地は札幌ということで、試合よりも夜のすすき野にひかれつつ遠征に臨みました。

メンバーは3年生の遠藤、大森、高塚、2年生の宮野尾という精鋭？　5名で参戦しましたが、個人・団体戦ともに勝ち抜いていくと4回戦あたりで1部リーグの選手に阻まれ、惨敗を喫してしまいました。

宿泊は経費節約ということで、遠藤君の伯母様の家にお世話になり、歓待していただきました。この場であらためてお礼申し上げます。

一方もう一つの目的地“すすき野”はというと、あまりの歓待で単独行動ができず、満喫というところまでは至りませんでした。

帰京と同時に遠藤・大森の両名は池袋北口へと消えてゆきました。



東日本学生選手権にて

### ちょっぴり寂しかった最終戦

4年生の冬、大学生活最終戦となった明立戦(於立大)は2－5で敗れてしまいましたが、最後の第4シングルスは明治大学主将で私の中学・高校の後輩でもある鰐川君と私という演出を試みました。お互い4年生ということもあり、全盛時のようなスピード・パワーには欠けるものの、互いの学生バドミントン生活を噛みしめるようにプレーしていました。試合には勝ちはしたものの今まで“よく頑張ってきたな”という満足感と同時に、“これで終ってしまったんだなあ”という寂しさの入り交じった、妙な気分でした。

以上思い出すままに書き綴ってまいりましたが、辛いことも楽しいことも若さにまかせて精一杯取り組んでいました。その自己表現の手段として「バドミントン」というスポーツを選んだことを後悔はしていませんし、立教大学体育会バドミントン部を誇りに思っています。

現役の諸君も結果を恐れずに、力一杯自己表現して自分流のバドミントンと我が部を築いてください。

最後に、充実した大学生活を送らせてくれたバドミントンの仲間たちに感謝するとともに、我が“立教大学体育会バドミントン部”のますますの繁栄を祈念して結びとさせていただきます。



最後の明立定期戦

Chapter-6

# 部室の灯は輝く

## 1985-1996

昭和60年～平成8年OB

# 大森君の指紋

遠藤　敬志
（昭和61年卒）

バドミントン部を卒業？　して、12年が過ぎようとしております。当時は、すべてに緻密な高塚君と、時間に遅刻しない大森君(迷う時間も含め1時間前には、つくようにしているため)の2人と仲良く4年間を過ごしました。当時の4年間が、私の人生の支えであることはまちがいありません。

今回は、その時のことで「大森君にスポット」をあて、1冊の書物として出版することにします。題は1996年のベストセラー、グラハム・ハンコック氏の『神々の指紋』より付けさせていただきました。

〈はじめに〉

登場人物は、実在しますが、事実であるかどうかは、本人に聞いてみてください。ただし、本人が忘れてしまっている可能性は十分にあります。

〈第1章・デビュー〉

石田さん(1年先輩)に「スポーツ刈りになんかしなくてもいいんだよ」と言われ入部しましたが、私たち、3人の頭は、夏合宿をむかえる頃には、すっかり、短くなっていました。そんな、夏合宿で事件はおきました。

出来のよろしい私達は、1日の練習が終わり、洗濯を済ませ、もう一歩も動けない状態なので『近代麻雀オリジナル』を読んでいたのです。

そんな時、当時の主将松下さんから、「ミーティングやるぞ」と言われ「何だよー」と思いながら、畳の部屋へ集合したところ「やんや、やんや」のお叱りを受け、3人ともすっかり意気消沈してしまったのでした。

その時、事件はおきた。

シーンと静まり返った部屋の中「ブッッ」とぬけるような、クリアーな爆音とともに畳を伝わる震動。そう、大森君が、やってしまったのです……。その後大森君が、どうなったかは、割愛させていただきます。

〈第2章・3つの指紋〉

期末試験が近づいたので、「そろそろノートのコピー集めるか!!」と忙しくなりかけた時、大森君がうれしそうに言いました。「ぼく、授業にでてるから、コピーさせてあげようか」と。

半信半疑でノートを見てみると、ノートには不思議な3つの特徴をみることができた。これを「3つの指紋」と呼ぶこととし以下列挙してみます。

・第1の指紋　シャーペンの字がにじみ、シミとなって、さらに紙がゴワゴワになっていた。

・第2の指紋　ノートの上に、長短のうすい線が何本も見られる。

・第3の指紋　ノートの折り目に、折れたシャーペンの芯が数本、発見された。

この「3つの指紋」の謎を解明すべく、私は、大森君の授業風景に潜入を試みたのです。私は、期末というのに教授の顔を見るのは、初めてだったので、「初

めまして、よろしくお願いします」と心の中で思いながら、大森君の調査に入っていきました。

講義を受けている大森君は、教授の子守歌の中、すでに睡眠状態に入っていましたが、ノートは開かれ、シャーペンは、しっかりと握られていたのです。そして、3つの謎(指紋)は、即座に解明されたのでした。

・第1の指紋の解明　「よだれ」の跡であった。大森君は、講義が始まると睡眠状態に入ってしまうので、口から「よだれ」がたれていたのである。

・第2の指紋の解明　シャーペンを持ったまま、書く体勢のまま、睡眠状態に入るため、前後に揺れる時などに、線が引かれてしまうのだ。

・第3の指紋の解明　これは、第2の指紋が、さらに深い状態に陥った時おこるのだが、力が入りすぎるとシャーペンの芯が折れ、ノートの折り目にはさまってしまうのだった。

つまり、「第2の指紋」の強度が増したものが、「第3の指紋」であったことになります。

そにて、さらに、ここに明かす衝撃的な事実が、ノートにあらわれない「第4の指紋」としてあげることができます。「第3の指紋」がさらに強度を増した時、つまり、力が入った時「ブッッ」という、あのクリアーな音がおき、勉学に励む仲間に多大な迷惑をかけた事実であります。

当然、大森君が、この講義の成績が「C」であったことを付け加えておかなければなりません。

〈第3章・玉子事件〉

バス停で「王子行き」のバスを待っていたところ、ベンチに腰掛けていた先輩に、大森君がうれしそうに言った。「バスは来たんですが、タマゴ行きです???」と。

そう、大森君は、「玉子」と「王子」の違いが理解できなかったのでした。

〈第4章・時計事件〉

夕方の練習が終わり、頭が麻雀になっていた時、事件は起きました。

石田さん(1年先輩)が、おっしゃった。「大森〜、麻雀いくぞ〜、今何時だ〜。」大森君はうれしそうに答えました。「8時半です」と。部屋の中はシーンと静まり返り、緊張は極限に達した。

「なぜか？」

この日の練習は、6時に終わったので、8時半になっているわけはないからである。私は、勇気を奮い自分の時計を見てみた。「6時40分」であった。

そう、大森君は、時計の見方を知らなかったのである。「長針と短針」を逆に読んでしまったのであった。



左から遠藤、石田、大森

〈むすびにかえて〉

彼と付き合った4年、私は人生を遠回りしたような気がします。多大な影響を受けた彼の他のエピソードは『大森君の指紋2』で次回ご紹介することといたします。

最後に大森君が、「時間を守る男」であることを再度付け加えておくことといたします。

# 忘れられないあの日

大森 康裕
（昭和61年卒）

## 入部した日

中学校・高校とバドミントンをやっていたので、大学でもバドミントンをやりたいと思っていたのですが、「体育会」というと厳しい練習と、恐い先輩というイメージがあったため、入部しようかどうか迷っていました。

新勧でごったがえしている四丁目通りの一画に位置する「体育会バドミントン部」と書いてあった受付に思い切って声をかけてみました。

「あのー、すいません、バドミントン部に入りたいんですが……」と声をかけると、体の大きなニコニコした方がでてきました。星先輩でした。

「学食にカツドンでも食べに行こう」といきなり一食に連れていかれ、カツドンをおごっていただきました。

カツドンを食べながら星先輩は「今度、練習においでよ。練習といってもゲームだけでトレーニングはやらなくていいから」と大汗をかきながら説明していらっしゃいました。

そして受付にもどると、女子部の先輩からチョコレートをいただきました(たぶん橋本先輩と荒先輩だったと思います)。

なんていい人たち、なんていいクラブなんでしょう。大好物のカツドンとチョコレートを食べさせていただき感動した私は、バドミントン部に入る決意をしたのでした。

## はじめての練習の日

はじめて練習に参加しようと体操着に着替えて体育館の前で待っていると、星先輩より上級生であろうおふた方がいらっしゃいました。主将の松下先輩と飯島先輩でした。

飯島先輩は私に近づいてくると、私の体を上から下、下から上へとなめまわすように見たあと、「お前はマンモスだ」と、近くに落ちていた竹の棒を拾い、私の体を刺しはじめました。

「いきなりそんなことをしたら、やめちゃいますよ」と主将の松下先輩が助けてくれました。しかし、そのとき私はこれから恐ろしいことが、起こるような胸さわぎを禁じ得ませんでした。

## 夏合宿で2：1を1時間やった日

合宿の最終日に2：1を1時間やることが、決定しました。2：1で1がノータッチで決められた場合、うさぎ跳びコート1周や腕立て10回といったペナルティを2が指定するというもので、日大の合宿から取り入れた行事です。

そして、ついに私が1でコートに入る順番が来て、相手が飯島先輩と石田先輩であることが発表になったとき、目の前がまっ暗になりました。

なぜならこのお二人は私をいじめるためなら、合宿の最終日で体が疲れていようと残っている力をすべて出しきる方達だと知っていたからです。

飯島先輩のハチマキには「死んでもらいます」、石

田先輩のハチマキには「おまえはもう死んでいる」と書いてあり、恐ろしい気合いが感じられました。30分経過後、足が動かなくなり40分を過ぎた頃がピークでした。そのあとは勢いだけでなんとか1時間持ちこたえました。

2：1終了後完全燃焼された飯島先輩は体育館の入口で、大の字になって熟睡されたのでした。

# レギュラーにはなれなくても

村島　実
（昭和62年卒）

私が大学に入学したとき、クラブ活動を、バドミントンにするかゴルフにするか迷っていました。当時私は、両方とも趣味でやっていたのですが、どちらかというと、バドミントンの方に興味が引かれていました。だから、バドミントンをやるなら、体育会で一所懸命やって、ゴルフなら、同好会で楽しみながらやりたいと思っていました。

ただ、体育会の運動部の練習のきつさや、自分は、高校で運動部にはいっていなかったので、体力のないことはわかっていたので、体育会バドミントン部にはいるのは、少し悩みました。けれども、せっかくの大学生活で、何か自分でやりとげることができたと納得できるものを持ちたいと思い、体育会バドミントン部にはいる決心をしました。

しかし、やはり1年のときは、夏の強化練習、合宿と、体力的に大変きつい思いをしました。でも、人間続ければそれなりに慣れるもので、2年、3年と学年が上がるにしたがって、体力もだんだんついてきて、1年の頃は、マラソン競走でいつもビリだったのが、4年の頃には、いつも中位から上位にはいれるようになりました。

けれども、バドミントンの技術の方はあまり上達せず、残念ながら、最後までリーグ戦のレギュラーにはいることはできませんでした。それでも、4年の最後のリーグ戦で、自分は試合に出られなかったけど、自分がバドミントン部にいた4年間で、一番良い成績の3部リーグ2位になれたのは、とてもうれしいことでした。

もう、バドミントンからまったく離れてしまった現在、思い返してみると、プレーヤーとしての良い思い出はないけれど、4年間部活を続けられたおかげで、心身両方とも強くなることができたと思います。これは今の私にとって、大きな財産となっています。

# 良きライバルとの4年間

柴　公人
（昭和63年卒）

もう13年も前になります。高校を卒業して受験の渦の中から抜け出してみたら立教に入学していたという感じで、4年間でいったい何をしたらいいのかわけもわからず東京に出ていきました。でも、大学時代にしかできないことをさせてくれた、大学の時に俺はこれだけやったんだ、と今思えるのは立教のバドミントン部で4年間過ごせたお蔭だと思います。今でも月に1回やるかやらないかですがバドミントンを楽しんでいます。

どうしても真っ先に思い出すのは、方言で言えば「ごしたかった」「さんざやった」トレーニング、練習のことです。唯一部内で勝てそうだったランニングではどうしても尾崎さんが抜けなかったこと、夏の強化練習ではランニングの後石田さんが「今日はバレーボール」と言うのがうれしかったこと、遠藤さんのおかげで縄跳びがうまくなったこと、宮野尾さんのダッシュは果てしなかったこと、渡部のジャンプ、体育館では2：1でノータッチを山ほど取られて大ウサギをやったこと、池袋駅の階段の上り下りがつらかったこと……そんなことばかりが目に浮かびます。

今同じことをやれといわれても、もう決してできないと思います。先輩方からは「まだ軽いよ」と言われそうですが、4年間の練習は私の自信になっています。もし私が入学してきたとき立教が1部だったら、たぶん私はバドミントン部に入れなかったと思います。でも私にとって幸いにも在学中3部だったおかげで、伝統あるクラブでバドミントンができたことは幸せだったと思います。


昭和59年9月 今市での合宿

1年の時には10人ほどいた同学年も4年間続いたのは渡部、小林、宇佐美と私の4人でした。他の3人は神奈川県からの自宅通いで、私だけ寮生活をしていました。学食のご飯がうまいと言っていたのも、私だけだったと思います。渡部、宇佐美は立教のイメージにふさわしく、行動も活発でスマートだったような気がします。また、1年の夏合宿の時、脱水症状のため救急車で運ばれながらも、まったくめげなかった小林には今でも頭が下がります。良きライバルのおかげで悔しかったり、楽しかったりの4年間だったと思います。

私たちの卒業した後、しばらく部員数が少なくて苦労したようです。後輩たちの苦労の一因を作った責任を感じます。それにしても、先輩、OBの方々には大変お世話になりました。特に、4年のとき主務だ


昭和60年夏合宿

った私はOBの先輩方にだいぶごちそうしてもらったものです。現在監督をなさっている松崎先輩は伊那北高校の先輩ですし、私の後輩も活躍しているようです。今後もますます立教大学体育会バドミントン部がご活躍されますようご期待いたします。

# 思い出すのはランニングでの一喜一憂

宇佐美　正彰
（昭和63年卒）

大学を卒業して約9年になりますが今でもバドミントン部時代の夢をよく見ます。

不思議にラケットを握っている場面ではなくて、朝目覚めたら練習に遅刻しそうな時間である夢と、合宿や強化練習でランニングに出発するときの夢がほとんどです。

私は子供の頃から持久走が苦手で、高校時代もランニングをさぼってばかりいましたから、大学時代、練習の始めに行われるランニングに特に苦労したせいだと思います。

練習が始まって準備体操、ストレッチと続きますが、その次のランニングが近づくにつれ徐々に緊張感が高まってきます。

ストレッチが終ると主将の先輩から「集合」の号令。続いて「ランニング」、そして「銀行」とか「学習院」、「護国寺」等とその日のコースが告げられるわけですが、ここでまず一喜一憂します。当然短いコースなら嬉しいわけです。

ランニングでは初め皆一緒にゆっくり走り、途中からフリーになって競争になります。その地点に至る手前数十メートルのところから、これから始まる苦しみへの予感、最初に飛び出すべきか誰かについていくべきかとの迷い、今日は何位でゴールできるかということへの不安等々に再び緊張感で胸が高鳴ります。

ゴールする順位により、例えば最下位だったり先輩より遅れたりすれば、当然ダッシュやウサギ跳びのペナルティが課されますから、フリーになってからは必死で走るのですが、それでもやがて集団から遅れ、さらに私がリードしていたはずの人達に抜き去られていってしまう時、「後ろにはあと誰がいたっけ」「今日はどれだけペナルティが来るだろうか」と新たな心配に足取りが重くなっていったものです。



昭和62年3月 今市での春合宿

さて、そんな私ですがランニングで良い思い出がひとつだけあります。

遂に最上級生になった強化練習の初日、苦手なランニングも年を重ねるごとに地力もついてきており、私は秘かに首位を狙って居ました。1年生の時からトップグループを走り、当時抜群に速かった同期の柴君に勝つには、彼が田舎の実家から上京してきたばかりで、東京の排気ガスにまだなじめないはずの練習初日、この日しかないと思っていました。

私は一気に引き離すつもりで飛ばしましたが、彼も3年間の東京暮らしで排気ガスにも慣れてしまったのか、まったく遅れないのです。目論見違いで勝負は拮抗しました。

途中何度かあきらめかけましたが、結局いつになく私も頑張り、その日は最初で最後の1着でゴールにたどり着きました。

速い人にはご理解いただけないかもしれませんが、この1着は私の4年間の部活動の中でも、かなり思い出深いものとなりました。

ところが困ったことに、いつも夢に見るのは憂鬱な気分で走り始めるあの場面なのです。



昭和62年12月納会において

# 創部40周年のクラブ唯一の現役

川底　宏至
（平成2年卒）

「創部40周年のクラブ唯一の現役」。この10年近く私が自分の学生時代を称するのに、むしろ好んで使っていたフレーズである。そのクラブが50周年を迎えるという記念誌へ寄稿という折に触れ、自分自身にとっての立教大学バドミントン部とは何だったのか振り返ってみたいと思う。

昭和61年、高知県私立土佐高校を卒業後、1年間の浪人生活を経て私は立教大学へと入学した。もともと中学時代からバドミントン一筋であったこと、また高校時代のチームメイト・ライバル高校のメンバーが、それぞれ1人ずつ現役で1年前から入部していたこともあり、入学式を待たずに練習に参加させていただいた。浪人時代の1年間のブランクはあったが、何とか1年生の春からリーグ戦にもレギュラーとして出場でき、確かそこそこは活躍できたと記憶している。入部当初から、想像以上の練習の厳しさを感じてはいたが、ほどなくそれが大学の体育会というものであること、また特に自分が所属しているクラブは、日本の学生バドミントン界のかつてはトップであったことを知り、意を新たにしたものである。

そんなことで、春秋のリーグ戦を中心に私の大学バドミントン生活は過ぎていき、後輩も数名入部してきたのだが、それ以降諸先輩方はもちろんのこと、私自身にとっても非常に辛い日々を送ることになってしまったのである。つまり部員数の激減、最終的に1年上の2名の先輩が引退した時点で、現役が私1人のみ、というくだんの事態となったわけである。

思えば中学2年生からバドミントンを始め、監督・コーチのいない環境でインターハイ・国体等にも出場でき、入学した大学でもすぐ上の先輩がもともと旧知の同級生という、非常に精神的に楽な環境で過ごしてきた私にとって、それはまさに初めて自分がうまくなるということ以外の試練であったように思う。

立教大学という世間的には華やかな部類に入る中において、一部のメジャースポーツ以外の体育会各部は、皆同様の悩みを抱えており、かつ、そのなかで体育会の本質である「勝つこと」を追求することの難しさもまた、痛感していることと思うのだが、当時の事情はそれ以外にも原因があったのではないかと今さらながら推察する。つまり「私自身」の問題である。当時はただ単に「強くなるために厳しい練習を積むことは当然だが、ちょっとレベルを考えずにやりすぎたのか」ぐらいにしか考えていなかったが、問題はむしろ私の「仲間意識」もしくは「仲間意識を高揚させる意識」の不足ではなかったかということである。

自分自身の反省について、未だにそれを糧にして自分の人格が完成されてきたとはとても思えないが、少なくとも当時の事態が、私に変革を求める何かをもたらしたことは事実である。そして、それが現在ビジネスマンとして毎日を送る中での指針のようなものになっていると自分では考えており、そういう意味でいえば、私の大学でのバドミントン生活も自分自身に

とっては大変有為であったと確信できるのである。

とはいっても、私の卒業後、忙しい中、部員の確保に始まり、その強化にもご尽力いただいた松崎監督はじめ諸先輩方にこの場をお借りして深謝するとともに、私以降のOB、現役の諸君にも合わせてお礼を述べさせていただきたい。

私はといえば、入社した会社で仲間に恵まれ、いまだに現役として実業団の一員として「楽しく」「勝利」を目指す毎日を送ることができている。これも1人きりになってもやはりバドミントンというスポーツを愛し続けたおかげかと、最後の最後で自己弁護してこの拙文を終わりとしたい。

# 悩み、試行錯誤を繰り返した輝やける時代

飯島　伸仁
（平成5年卒）

創部50周年を迎えるにあたり、時代の一コマとして私の在籍した平成元年から4年までを振り返りたいと思います。

平成元年の秋に私は入部したのですが、当時川底先輩が4年生で、2年生の山崎先輩と1年生3人しか部員がいませんでしたので、池袋の天井の低い体育館で女子部と一緒に練習していました。2年生になり新入生が入部して、10数人に増え、やっと団体戦に出られる体裁が整ったのも束の間、その年のリーグ戦で6部に落ち、まさにどん底といった感がありました。

それ以来何とか一試合でも勝って、上位の部へ復帰すべく、卒業までの毎シーズン力を尽くしましたが、団体戦を勝ち抜いていくだけの戦力を充実させることが難しく、5部復帰を果たすにとどまる結果に終わりました。

OBとなってあらためて、自分の在籍していた頃を振り返ると、監督が松崎監督に代わり、新座に新しい体育館ができたりして、部の長い歴史の中の位置づけとしては体質の転換期だったように思います。体育会本来の上下関係の厳しさよりも、私たちに重要だったのは全員が部活動をすることを楽しむということであり、そういう意味でも部としてのイメージは、以前とは違ったものになっているのだろうと思います。

苦労して大学に入ってまでする部活動って何だろうと思ったときに、バドミントン部が好きでなければ、皆やめてしまうのではないでしょうか。私は、もう一度昔に戻って部活をするなら、関東大会までいった中学時代より、むしろ大学でなかなか勝てなくて、部員全員で悩み、試行錯誤を繰り返しながら苦労した時代に戻りたいと思います。

部としての成績はとんだ落ちこぼれでしたが、共に苦労を分かち合えた部員の皆に出会えたことは部活動を続けて良かったと思います。

現役の皆さんも、部活動を好きになってください。そして、楽しい思い出をたくさん作ってください。ますますの活躍を期待しています。

# 走れバドミントン部

丸山 泰史
（平成6年卒）

バドミントン部が創部以来50年を経るとのことだが、卒業してまだ3年しか経ていない私は、正直なところ、その歳月の重さを実感としてとらえることができていない。また、3年という年月は私の心中に学生時代を懐かしむ気持ちを想起させるにはあまりにも短い月日であり、当時を慕うような気持ちも抱いてはいない。ただ現役を離れ、バドミントン部に携わる多くの諸先輩方とお会いする機会が増えたことにより、バドミントン部が部長、監督、OB、OGをはじめとした数多くの方々の、多大なるご尽力の上に成り立っているという事実を、現役の当時よりも強く実感できるようになった。ここに現役の時に示すことができなかった感謝の意を改めて述べさせていただきたいと思う——ありがとうございました。

この原稿を書くにあたって私は、バドミントン部が創られた50年前の1947年がどういう年であったのかを知ろうと思い、埃をかぶった歴史の教科書を紐解いてみた。そして、その年は太宰治が「斜陽」を発表した年であることを知った。

この小説がバドミントン部とどのような関係があるのかと思われる方もおられるかも知れないが、ご心配は無用、もちろん関係はない。ただし、私にとって『斜陽』という言葉はどうも気になった。業績がふるわず、衰退していく産業のことを斜陽産業と呼ぶように「斜陽」という言葉は、時として衰退の意味を示す。栄枯盛衰、あらゆるものは人であろうが、組織であろうが、その時代によって栄えもするし、衰えもする。バドミントン部もまたしかりであり、50年という歴史の中においては、1部リーグにて連続優勝していた時代もあれば、6部リーグにて優勝できなかった時代もあった。私の目に「斜陽」という言葉が目に止まったのは、言うなればバドミントン部の「斜陽の時代」であった6部の時代に現役としてプレーしていたからなのではないだろうか。

別に、私自身そのことについて恥じる気持ちはいっさい持ち合わせてはいない。この当時のOBの座談会の内容を読んでいただければ分かるように、私たちは私たちの時代なりに精一杯やっていたのだし、戦績においては、確かに斜陽の時代であったかも知れないが、バドミントン部の活動という面においては人数も集まり出したこともあって、日の出の勢いとは言わないまでも、それなりに明るい兆しを見いだしながら活動していたという自負もある。

価値観というものは人それぞれによって違うと思うし、また、価値観というものは、その人が置かれている環境あるいは状況といったものによって大きく変わってくると思う。私がプレーしていた頃の各部員が抱いていたバドミントン部に対する価値観と、諸先輩方が抱いていた価値観、さらには、今の現役が抱いている価値観はそれぞれ違うであろう。しかし、各世代が心の根底の部分で同じ価値観をバドミントン部に対して抱いていたからこそ、バドミントン部は創部50

周年の日を迎えることができたとも言えるのではないだろうか。

太宰治は『斜陽』を発表する7年前に、彼の有名な『走れメロス』を発表している。その小説の中で、愛と誠を胸にあらゆる困難や誘惑を退け、自分の身代わりとなって処刑死を迎えようとしている友のもとまで走り続けたメロスは、悪名高き王に対し人間の心に宿る信実が、決して空虚や妄想ではないということを証明するのである。メロスは小説の中で次のように語る。――「友と友の間の信実は、この世で一ばん誇るべき宝である。」

私は、立教大学体育会バドミントン部がこれからも、信実を抱きながら、走り続けていくことを信じている。がんばれバドミントン部、がんばれ若きメロスたち。

# なぜ、バドミントン部に入部したのでしょう?

西島 次朗
(平成6年卒)

私は、立教高校時代フェンシング部に在籍をしており、大学進学後も当然のごとくそのままフェンシング部へ入部しました。入部したと申しますか、入部するしかなかったような状態でした。入学式当日、クラス名簿を掲示してある、1号館脇へ向かったところ、そこにはすでに、フェンシング部の先輩が待ち構えており、自分でクラスを確認することすらできませんでした。クラスごとになされてガイダンス中に配られた体育会のアンケートの記入もその先輩がしました。それ以来、新勧中で賑やかな学内では、ボディーガードのように付きまとい、サークルはおろか、ほかの体育会からの勧誘も見事に断わっていただきました。今の言葉にすると、まさにストーカーです。

私自身としましては、何か他のスポーツをやってみたいという気持ちと、高校時代からずっと同じメンツに囲まれるのではなく、新しい交友関係を築きたいという思いがありました。当時のフェンシング部は、立教高校からのメンツ以外の人はいませんでした。そんな中、私の代に初めて外部(立教高上がりの連中が、受験して入学してきた人のことを呼んでいました。今考えると何か嫌な言葉ですが)のフェンシング経験者が入部を希望していました。フェンシングの団体戦は3人1チームであり、高校時代の友人と外部の人と私の3人で新人戦に出られるようになるから、ぜひ入部してほしいとその外部の彼に頼まれました。フェンシング自体は非常におもしろいスポーツであったので、そこまで言われたらしようがないと入部を決意しました。ところが私が入部した途端、その彼がいきなり退部しました。してやられました。私がやめるときにも、やめるのだったら代わりに誰かを入部させろと言っていましたから。

そうこうして夏が終わるころまで、退部のための交

渉を続け、ようやく他の体育会への転部のみ認めてもらいました。私自身サークルは考えてなかったので、すぐに合意しました。

さて、それでは何をするかと考えると、具体策がありません。ホッケー部や水泳部など、立教高の連中からの誘いがありましたが、なかなか決まりませんでした。そんな中、高校2、3年時代の悪友である丸山氏との再会がありました。そして、バドミントン部に入部しました。なぜ、バドミントン部へ顔を出したのか、どうして入部を決意したのか、そのあたりの記憶がほとんどありません。体育会のフレッシュマンキャンプで、向かいのテーブルに丸山氏の隣に座っていた、とんねるずの木梨憲武に似ているバドミントン部の先輩(山崎さん)は、いい人だなという記憶があっただけです。中学、高校時代もそうでしたが、いつも入部はあっさりしています。

こうして、大学時代良き悪友に囲まれ、楽しいバドミントン部での大学生活を終えました(今市合宿での手の凍るマラソンと高橋氏のオールショート以外)。さらに、そこから人生の伴侶まで見つけ(ちょっと臭い言い回しですが)させていただき、内輪のこぢんまりとしたものでしたが、司会：會澤氏、仲人抜きだったので紹介：丸山氏、受付：島田氏、運転手：長瀧氏、歌：高橋氏、まとめ：田中氏というバドミントン部オールキャストでの(女子部の方もお世話になりました。特に森屋さん)、非常に評判の良い結婚式を挙げることができました。この場を借りて御礼申し上げます。また、ご報告遅くなりまして申し訳ございませんでした。また、長女にも恵まれました。こちらも合わせてご報告させていただきます。

いろいろなことがあって現在に至っております。私が、なぜバドミントン部へ入部したのかは分かりませんが、結果オーライということにしておきましょう。

# どん底脱出の原動力となった“上へ”の気持ち

高橋　幸二
(平成6年卒)

立教大学バドミントン部の歴史の中でどん底をみた者は数少ないと思う。6部リーグ中の6部転落。栄光の時代を築きあげてきた諸先輩方に対する申し訳ないという思いもありましたが、「勝つ」ための練習が結果を出せなかったことの悔しさでいっぱいでした。

しかし、これ以上下はない。それまでは残留するという消極的な気持ちが強かったが、それからは、優勝そして昇格という前向きな姿勢になっていきました。

私が入部した時、上級生はわずか4人で、リーグ戦出場のための6人にも満たない人数でした。サークルから人を借りて頭数をそろえ、必死に生き残りをかけていました。

その年、私を含め入部者は7人になりました。練習

場も池袋から新天地新座キャンパスに移り、新たなスタートを切りました。入部当時部は5部。もうこれ以上下にいってはならないというところまできていましたが、新入部員の私達の力は足りず、6部降格となってしまいました。

昇格を目指して頑張った夏合宿。そして秋季リーグでは惜しくも2位。自校開催の春季リーグで念願の6部優勝5部昇格。上へという気持ちが、どん底を脱出する原動力となりました。

どんなものにも栄枯盛衰があり、私達は部存続の危機という場面に直面しました。私達が、バドミントン部の新たな歴史を創る一歩になったんだと(自分では)思っています。4年間のつらく楽しい思い出は、卒業後の人生の心の支えになっています。

また、素晴らしい諸先輩方と知り合うことができたことも、大きな財産だと思っています。初めての納会で酔って横になった私を踏みつけたユーモアあふれる先輩が、全日本優勝経験のある人だと知ったのはかなり後のことでした。そのような方々と知り合うことができたのも、長い歴史を持つ立教大学バドミントン部だったからでしょう。

すでに新たな世代へとバトンは渡りましたが、このバドミントン部がさらに長い歴史を続けていけるよう、これからも小さいながら力になっていきたいと思っています。

# 自分という人間の核をつくってくれたのはバドミントン部

田中 尚
(平成6年卒)

1990年4月某日、赤レンガの5号館の教室の中で、大学生活という未知なる出会いに高ぶる気持ちとはうらはらに、緊張した面持ちで座っていた自分に、スーツを着たとても新入生には見えない30男が声をかけてきた。高橋幸二だった。彼は自宅が同じ川越だったこともあり、一緒に帰ることになった。

「へー、高橋君は、高校でバドミントンをやっていたんですか」

「ええ、そうなんですよ。一応部長をやっていましてね」

初対面同士の間につきものの、妙に固苦しい言葉づかいと、あたりさわりのない会話を交わしながら彼の話を聞くと、この男は体育会のバドミントン部というところに入部を決めていて、すでに入部もすませてしまっているというのである。

大学生活といえば、テニスサークル＝楽しそう、コンパ＝ますます楽しそう、ゼミ＝大変そう、卒論＝ますます大変そう、という2元的なイメージしか持っていなかったので、大学に3日間ぐらいしか来ていないのに、これから1500日近くを送る大学生活の中心を体育会活動に決めてしまっている目の前の男を驚き、反面うらやましく思いながら見ていた。

しかし、自分でも期することはあった。漠然とだが大

学ではスポーツに打ち込みたいと強く思っていた。皆さんは『キャプテン』『プレイボール』という野球漫画をご存知だろうか。41歳で夭逝したちばあきおという作家が描いた作品である。名門青葉中の2軍補欠だった主人公の谷口タカオが、弱小野球部であった墨谷二中野球部に入り、ひたむきな努力とどんな苦境に立っても決してあきらめず勝利を信じて最善を尽くす行動力と精神力で、次々と名門野球部をうち負かす、その頃全盛だったスポ根漫画とは一線を画した素晴らしい漫画である。

話がバドミントンではなく野球の話になっているが、私は野球をやったことがない。勝利を目指して自分の体を痛めつけることもいとわず、黙々と練習に励み、自己の精神力・体力を鍛えるスポーツというものに強いあこがれを持っていたのである。

中学・高校からバドミントンが毎日の生活で、立教大学においても名プレーヤーとして数々のご活躍をされた先輩OBの方々には大変失礼、至極恐縮この上ないことだが、あえて言わせていただくと、自分にとってはスポーツだったら何でも良かったのだ。たまたま同じクラスだった同級生高橋幸二に誘われて、見学に行って出会ったのがバドミントンであり、バドミントン部に過ぎなかったのだ。

……と入部した当初はそう思っていた。しかし時が経つにつれ、己れのヘボレベルで言うのもなんだが、華麗なフットワーク、多彩なショットの数々、体力はもとより頭脳プレーを要求されるシングルス、ペアとのコンビネーションが奥深いダブルス……等々バドミントンの魅力に取りつかれてしまった。

誰かが言っていた「バドミントンは生涯スポーツである」。本当にそのとおりだと思う。自分も週に1回、仕事場の裏の体育館で楽しむバドミントンの汗を流している。またクラブ活動を振り返ると、様々な経験が現在の自分という人間の核の部分を形成したと思っている。

# 平成8年卒業・オレたちのバドミントン部

三井　邦雄　小林　敦哉　相田　敏広　桑山　洋典
（平成8年卒）

1. 名　前　　三井　邦雄
2. 得意のショット　レシーブ
3. 苦手なショット　サーブ
4. 好きな言葉　　順道制勝
5. 後輩へのワンポイント・アドバイス
   "より高く、より速く、より前で" シャトルをとらえること
6. 思い出
   ・4年の最後の秋季リーグ戦で、4部昇格を決めたこと(その時の胴上げは、本当に気持ち良かったです)
   ・新人戦Bブロック複ベスト8に入ったこと
   ・春合宿中に、後輩の気遣いにより、誕生日を祝っ

てもらったこと

【追記】

我々平成8年卒業の仲間は、就職後(勤務地の関係上)離ればなれになったが、声を掛け合い、皆で集まり、毎年男女仲良く旅行に行っています。

また、OBとのつながりも途絶えることなく続き、バドミントンはもちろん、宴会や麻雀といったおつきあいもあり、おかげさまで、幅の広い、様々な人との出会いを体験させていただいています。

それだけ立教大学バドミントン部に所属してよかったと、皆が思っています。

1. 名　前　　小林　敦哉
2. 得意のショット

相手のタイミングを狂わせる、ハエのとまるスマッシュ

3. 苦手なショット　全部
4. 好きな言葉　　人生楽ありゃ苦もあるさ
5. 後輩へのワンポイント・アドバイス

・明るく、楽しく、元気よく……時に厳しく!!

・部費はきちんと払いましょう。

6. 思い出

大うさぎ、炎天下の芝生ダッシュ、8の字、シャトル拾い、筋肉痛、足のウラのマメ、合宿の打ち上げ、松村さんち、藤田さんち、練習後の肴加菜屋、遅刻、新人戦ベスト8　　井さんと愉快な仲間たち……。

1. 名　前　　相田　敏広
2. 得意のショット　稲妻ジャンピングドロップ
3. 苦手なショット　フォア前
4. 好きな言葉　　みんな仲良く
5. 後輩へのワンポイント・アドバイス

部活で培った友情は、社会にでると宝物になります。

6. 思い出

4部に昇格したとき、三井を胴上げしたこと。

1. 名前　　桑山　洋典
2. 得意なショット　　クリアー、ドロップ
3. 苦手なショット　　スマッシュ(打つも返すも)
4. 好きな言葉　　ま、なんとかなるでしょ!
5. 後輩へのワンポイント・アドバイス

・シャトルが床につくまで勝負は決まりません転がってでも追っかけましょう。

6. 思い出

・3年春　対順天戦

秋　対工科大戦

明立定期戦

・4年春　ウィニング・ショットのネットイン・ドロップ

# 座談会
# 『部室の灯を消すな』

日時：1997年2月15日（土）
場所：アムラックス4F「ル・コント」
＜出席者＞
平成2年卒　川底宏至、二谷伸子
平成5年卒　飯島伸仁
平成6年卒　丸山泰史、田中尚
平成7年卒　渡辺篤夫
平成8年卒　三井邦夫、桑山洋典
部長　堀内　昭教授
監督　昭和41年卒　松崎正門
司会　昭和37年卒　小宮好雄

平成元年に伝統ある我が部は、4年生川底君ひとりになった。
まさに廃部寸前となったわけである。そこから現在まで再建に努力した若き面々に集合していただき、心境を語ってもらった。
（それぞれの自己紹介を行っているところに、飛び入りで昭和53年卒の鈴木宏氏が参加。）

**司会**　今回50周年記念誌を発刊するにあたり全員参加の原稿を募集しました。その中で座談会を企画し最も危機であった時代もメモリーする必要があると思い、若き面々にお集まりいただきました。当時を振り返り50周年を期に新たなる躍進の一歩にしたいと考えています。まずなぜ部員が1人になってしまったのか、そのへんからお聞きしたいと思います。

**川底**　私は昭和61年に入部したのですが、1年生は3人入り、土佐高時代の仲間嶋崎君、中谷君、などが入部して結構レベルが高く、秋には3部2位になりました。2年の時には新入部員が7名入りましたが、練習がきつかったのか結局残ったのは経験者の細貝君1人になってしまいました。

私の同期は1年から2年になるまでにみんなやめてしまいました。原因は上級生に経験者が多く、初心者がついていくには大変であったからだと思います。3年になったときには新入部員が入らず、春のリーグ戦は4年生2人、3年生1人、2年生1人、と総勢4人で出場することになりました。

しかし秋のリーグ戦の時には、頼みの2年生の細貝君も練習に出て来なくなり、とうとう私1人になってしまい、一番辛い時期となりました。

**司会**　やめていった原因というものはどこにあったのでしょう？

**川底**　我が部は勝つための集団である、という伝統のもとに厳しい練習をしていたので、初心者を拾い指導するとい


川底OB

う気持ちはまったくなかった。またその一方で、立教のキャンパスは華やかなため、体育会とのギャップに苦しんだ結果ではないでしょうか。

**松崎**　ひとつには厳しい練習についていけなかったことと、体育会というイメージが暗く、せっかく実力で受験をパスしたのに、なんでこんなに厳しい練習をしなければならないのか、という矛盾に悩まされたのではないかと思います。


松崎監督

**司会**　昭和30年代は、体育会に入ると実技免除で単位をもらえたため、一番簡単そうなバドミントンに入ってきた学生が沢山いました。

しかし現実には、一般部員という名前で呼ばれ、ほとんどコート練習はできませんでした。

**川底**　4年生になった春の合宿は、私1人になってしまい、ほとんど自分の練習はできず、女子のコーチをしていました。

**司会**　男女の合宿はいつごろから？

**二谷**　私が1年のときは一緒にしていました。練習内容はまったく別でしたが、人数が少なくなったことがその理由だったと思います。


二谷OG

**司会**　堀内先生がバドミントン部の部長に就任されたのはどういうきっかけだったのでしょうか。

**堀内**　じつは1、2の部から部長を打診されながら、土日が教会の仕事等で忙しいため、お断りしていたところへ、当時の体育会長の伊藤先生が堀内さんにぴったりの部があると推薦してくださったのです。それがきっかけで平成元年の2月にOB会副会長の、折井さんと学生部の伊藤さんから部の状態を伺い、引き受けることにしました。


堀内先生

その後部員は川底君1人であることを聞き、その春の勧誘を頑張るようにOB会に依頼しました。そして、2年生山崎君、小川原君、上原君、秋は飯島君が入部してくることになり、なんとか形になってきました。

**堀内**　この頃から体育会の雰囲気も変わりはじめ、同好会的になってきましたね。男女一緒に練習したりというわけで、体育会の持つイメージはなくなってきたような気がします。また新入生の中でバドミントン経験のある学生に聞いてみると、高校時代にやったスポーツ以外をやってみたいと言う学生も多くありません。体育会には厳しいというイメージが強く、新入生は入部を拒否してしまうようでした。

**松崎**　私が思うに、部員がいなくなってしまった原因は、かつての「栄光の立教」の夢を捨て切れず、現実とかけ離れた指導や考え方に問題があったような気がいたします。

そこで私は、とにかく部員確保のため入部した学生には、バドミントンを好きになってほしい、好きになれば上手になる、勝てるようになるんだ、という考え方で学生の自主的向上心を高めるためのモチベーションに力を注ぎまし

た。そういう意味では川底君の時代から我が部は大きく転換したと言えると思います。

**川底**　当時、監督の考え方を聞き、私の仕事はとにかくつないでいくことにある、と認識して、新入部員にご馳走したりアルバイト先を紹介したりで、大変でした。そして、夜の練習が終わったあとは全員で食事をしていました。

**飯島**　私は高校時代は1年間バドミントン部に在籍していたものの勉強が忙しいという理由でやめてしまいました。そこで、大学では思い切りやってみようと思い、入部したわけです。


飯島OB

**堀内**　大学のクラブは、部員がいなくなった時点で新入生の勧誘ができず、部を続けていくのが困難になります。


堀内先生

その意味で川底君が1人になっても頑張ってくれたことは、きわめて大きな功績だと思います。

**司会**　相撲部は現在どうなのですか。映画『しこふんじゃった』のモデルになりましたね。

**堀内**　何とか持ちこたえて頑張っています。数年前は柔道部から選手を借りたり、レスリング部と交流したりして努力していました。

また、最近は女子マネージャーの希望者もふえて、体育会の様相も変わってきています。先ほどもお話しましたが、男女が一緒の練習、合宿は当然になり、厳しくきつい体育会のクラブには入部してきません。山岳部などはその点で大変苦労しているようです。

**司会**　それでは、平成元年以降に入部した方々にその当時の心境を聞かせてもらいましょう。

**丸山**　私たちの同期は8名入部し、その時はそんな過去の苦労はまったく知りませんでした。雰囲気も良く、これならレギュラーになれると思い、頑張りました。


丸山OB

**松崎**　入部した時の丸山君はほとんど初心者でしたが、熱心に練習したおかげでずいぶん強くなり、6部優勝の原動力になったわけです。

新座にできた新体育館のおかげで初心者の参加を含め、全員で練習できるようになったのは、とてもありがたいことです。OB、OGのご協力に心から御礼申し上げたい気持ちです。

**田中**　私は、高校の時は美術部に入っていましたが、大学ではスポーツをやりたいと思っていました。そして、同じクラスの高橋に誘われたのがきっかけで練習を見に行きました。これならついていけそうと思い、仮入部したわけですが、そのまま今日にいたっています。


田中OB

**渡辺**　私[illegible]入部したのですが、結局4年までにたった1人になってしまいました。かなり強い人もいたのですが、それぞれ自分のやり


渡辺OB

たいことがあったのかやめていってしまいました。原因は何だったのか特定はできません。

**桑山**　私の場合は、高校2年の時から続けてきたバドミントンを続けようと決めていました。大学の体育会はものすごい人ばかりというイメージがありましたが、実際には雰囲気もよくこれならやれると思いました。


桑山OB

**三井**　私も高校時代からやっていましたが、逆に大学では他のスポーツをと考えていました。結局はバドミントン部を選び、4年の最後の秋のリーグ戦でようやく4部に昇格し美酒を飲むことができました。その時は、本当にバドミントン部に入ってよかったなと思いました。


三井OB

**松崎**　廃部寸前まで追い込まれたバドミントン部を、必死で守り抜いてくれた皆さんのお話を伺うことができました。こうして新しいかたちで部が再興できましたのは、何といっても堀内先生のおかげだと思います。ご自宅まで学生やOBをご招待いただき、それによってお互いに親睦をはかることができたことは、部の再建に大きな力となりました。かつての栄光の立教バドミントンを夢みるOB、OGは多いことと思いますが、なんといっても現役とOB、OG、の心の交流がなくては実現できるものではありません。昨年（1996年）から、長い間途絶えていた同志社大学との定期戦も再開しました。どうぞ若きOB、GOからのご支援を心からお願いするしだいです。



Chapter-7

# 一人歩きめざして

1959-1968

昭和34年～昭和43年OG

# 昭和33年・久留米・ニモツミツカル

井口(上野) 久美子
(昭和35年卒)

立教男子の栄光の時代に、女子部も便乗同行させていただいたインカレでした。

秩父宮妃殿下ご臨席の開会式で、プラカードを先頭に行進入場した時の写真が残っております。

団体・個人戦とも、優勝しかない男子の面々は、試合に向けての調整に神経をとがらせて、練習場と宿の往復の毎日でしたが、女子部は、参加することに意義ありの気楽さで、試合に臨んだものでした。



昭和33年11月 全日本学生選手権開会式の行進

## 目のとび出した話

試合の最中、今でこそ珍しくない光景ですが、コンタクトレンズを床に落としてしまったというより落ちてしまったのです。

「すみません、めがねが落ちてしまいましたので、タイムお願いします」とタイムをお願いしたと思うのですが、後になって、目が落ちたと言ったとか言わないとかの語り草になってしまったようです。審判の方は、きょとんとして、何が何だかわからず、何度も同じことを説明しても納得がいかず、最後まで、あっけにとられたままの顔が、今でも忘れられません。

それもそのはず、昭和33年といえば、コンタクトレンズは、まだほとんど普及していない時で、私も、めがねの不自由さゆえに、順天堂のコンタクト室を知り、いち早く使用しはじめて、間もなくのことだったのです。

やっとタイムをいただき、踏みつけないように、まわりの方の協力を得て、床をはいずりまわってのレンズさがし、運よく、無事見つけることができました。

背中に視線を痛いほど感じながら、はやる気持で、レンズを口に放りこみ、汚れをしゃぶりとり、目玉に「チョン」とおさめて、試合再開。その間、どのくらいの時間が経ったのか、無我夢中の中断時間でした。慌てるやら、恥ずかしいやらで、試合のことはまったく覚えていない大失敗の思い出話です。

そんなこんなで、女子の試合は早々に終了、男子の決勝試合の応援までの空き時間は、福岡在住の立教先輩の方々にも、いろいろとお世話になり、観光地

めぐりなどなど……で楽しく何日かを過ごさせていただきました。

肝心の、男子部のインカレ制覇は、もちろんのことでした。

「ニモツミツカル」ユイ

いよいよ、11月28日、16時50分博多発の特急「あさかぜ」で帰京のため、タクシーで駅に乗りつけました(ちなみに、当時の特急料金－1000円、乗車券、三等学割－1460円でした)。

さて、列車に乗りこむ段になって、タクシーのトランクに、カバンを入れたままだったことに気がついたのです。あの時の胸につきささる「ズッキン!!」。今でも鮮明に蘇ります。

1日遅れの帰京組の男子部のマネージャー油井さんに、後始末を託して、車中の人となりましたが、すっかり気がめいって、しょげかえっていたようです。

発車後1時間半位が経った時、車中に電報が入りました。

「ニモツミツカル」ユイ

タクシー会社に連絡をとり、奔走してくださったのでした。あの時「あさかぜ」で受け取った、うれしい電報は、大切にアルバムに貼ってありました。

2つの大失敗を、一人で演じて、まわりをきりきり舞いさせてしまったことで、しばらくは、会わせる顔がない申し訳なさでいっぱいでしたが、今となっては、懐しい懐しい、思い出のページとなっております。

改めて振り返ってみますと、女子部も、昭和32年に活動をはじめて、今年で40年を迎えることになるようです。

延々と、現在に至るまで、後輩がよくぞ、青春の情熱で、つなぎ続けてくれたものと、感慨無量です。

現在、情熱を傾けて、後輩の指導に努力してくださっている監督の松崎さんを中心に、伝統ある、立教バドミントン部の発展と、栄光立教の復活を祈念して止みません。



昭和32年春 下諏訪での合宿




昭和33年 同立定期戦(立教体育館前にて)



昭和32年8月 下諏訪での夏合宿

# 体育館

牧(吉武) 禊
(昭和36年卒)

入学願書を提出しに、初めて立教を訪れた時、体育館に行ってみた。そこではバレー部が練習していて、活気があふれてはいたが、美しいチャペルや、素敵な赤レンガの時計台からは想像もできないほど小さくて、暗くて、お世辞にもきれいとはいえない所だった。多分これはバレー部の練習場で、立派な体育館がきっとどこかにあるにちがいない、という楽観的な期待は裏切られ、学校中さがし歩いても、そんなものはどこにもなかった。



昭和32年 第1回同立戦にて(後列左から2人目 折井監督)

この小さな体育館を、体育会の各部が使用するので、使える確率は低く、練習場を求めて、あちらこちら、遠くは神奈川の方まで行ったり、「コーチいたします」と、近くの女子校へ押しかけ、その高校のバドミントン部員と一緒に練習したりもした。

立教小学校の体育館をお借りして練習することができるようになったが、同立定期戦など、対校試合はいつもあの体育館で行われた。

1年生の時は、リーグ戦に出場させていただくのが嬉しいと思うよりも、苦痛を感じる方が強かった。特にダブルスで負けた時は、パートナーに申し訳なく、つらかった。

足を引っ張りたくない、上手になりたい、強くなりたい、という一心から、同級生と二人で、朝、授業が始まる前に、あの体育館に通い始めた。

地下にあった男子部部室に行かれる方達皆さんが「オッ、やってるな」と声をかけ、学生服を脱いでラケットをとり、教えてくださった。

休みの時には「今度は故郷に帰らないから、これはコーチさせていただき料」と見事なリンゴの差し入れ付きで、教えに来てくださった方もいらした。

今は、新座に立派な体育館が建てられたが、感謝の気持と、素晴らしい思い出を沢山つくってくれた、あの小さくて暗い体育館がとても懐かしい。



昭和32年 第1回同立戦 同志社にて




昭和35年 初勝利した同立戦（前列左から3番目が牧）

# 1年生の思い出—いつも持ち歩いていた道具一式

青柳(井出) 陽子
(昭和38年卒)

大学生になったらテニス部か馬術部に入ろう、と思って受験勉強に励みました。

念願かなって立教生となった年、ちょうど皇太子(現平成天皇)ご成婚に当たり、ご婚約が発表されると「テニスコートで実った恋」とマスコミが書きたて、たちまちテニスブームとなってしまいました。

私はそんなにヘソ曲りの性格とは思いませんが、ブームには乗りたくなかったので、テニス部以外の運動部にしようと心変りしているところに、高校の先輩でもある吉武さんに声をかけられ、形は違うけれどラケットを握るスポーツには変りないとバドミントン部への入部を決めました。

ちなみに馬術部の方は、校内をデモンストレーションしているのを見て、カッコは良かったのですが、馬上の部員があまりにも上に見えて、あそこから落ちたら大変とあっさりあきらめがつきました。

バドミントン部に入部はしたものの、はじめてラケットを持ったのですから、シャトルがラケットに当たりません。ラケットは空を切るばかりで、米つきバッタのように前に落ちるシャトルを拾う動作の連続、手にマメはできるし、肩は痛くなるしでしたが、たまにまぐれで当たってシャトルが飛ぶとうれしくなって頑張りました。

間もなく春のリーグ戦が始まり、試合の応援に行って、ラリーの応酬の激しさ、速さにびっくりもし、感激しました。そして前期が終り、夏休みに入り、合宿となりました。

合宿前のトレーニングのつらかったこと、2日目は体中が痛く、特に階段の下りは悲鳴なくしてはとても歩けませんでした。合宿先は富山県の高岡で、男女合同の合宿でした。高岡に向かうべく列車に乗り込み、荷物を棚の上にあげるのを男子部の先輩がやってくださったのですが、私たち1年生のラケットを見て「アレ!! 木のラケットだよ」とさも珍しいものを見たかのような驚きの声を出されました。先輩にとっては木のラケットなんてオモチャだったのでしょう。

合宿の細かいことの記憶はさだかではありませんが、運動部の合宿をはじめて体験し、1日中練習というハードスケジュールに緊張も手伝って、帰る頃は意識もうろうでした。それもそのはず、帰宅して熱を計ってみると39度3分あったのです。でも、知らないことって凄い、寝込みもせず、誰にも迷惑をかけずに帰ってきた自分をほめてあげたい気持でした。

私たちの次年度は新人生が入らず、2年間奴隷生活(先輩に1年は奴隷、2年人間、3年仏様、4年神様と教えられました)すなわち、荷物の運び役をやりました。

女子部は部室もなく、専用の練習場もなく(日頃は立教小学校の体育館を使用させていただいていましたが時々ジプシーになりました)、いつも2面分のポールとネットとシャトルを自分の練習道具と一緒に持ち歩いていましたから、クラスの友人から「家出?」とからかわれていました。

1年生の時の一番印象残っていることは、新人戦に出場し、先輩のよき指導のおかげで3位になれたことと、小宮先輩を羽田空港にお見送りに行ったことです。

当時はまだ海外旅行が夢のような話で、1ドルが360円、1人500ドルしか持ち出せない時代に海外遠征に行くなんてなんと凄いことと、同じ部に所属していることを誇りに思い、感激したことを憶えています。

最後になりましたが、創部50周年おめでとうございます。



昭和34年 高岡における夏合宿（女子部員と滝沢コーチ、高岡大仏の前で）


昭和38年 同立戦にて（左から 海内、沼田、谷口、井出、篠塚、佐藤、丸田）

# 暖かく豊かな人の輪

佐原　美子
（昭和37年卒）

先日、仕事の関係で37年ぶりに久里浜の地を訪れた。かつて、三崎行きのバスが人待ち顔で止っていた京浜急行の駅前は、今やバスのロータリーと化し、若干素朴さを残しているとはいうものの、駅周辺はビル街となり、すっかり様変りした街並みに今さらながら歳月の流れを感じる。

入部して初めての合宿地となった久里浜。横須賀市体育館での練習風景が懐しく脳裏に甦る。

学生時代、"何かスポーツを"と気軽に入部したのがバドミントン部女子同好会。もともと運動神経に長けていたわけでもなく、部員が少なかったこともあってか、わずか1年弱でマネージャー役を仰せつかり、上級生二代にわたり仕えることとなる。

当時の練習場は立教小学校の体育館。春・夏休み時に行われる合宿は学外のため、キャプ・マネの仕事は、まずは体育館探しから始まる。

過日、昔のアルバムを開いていると、中から昭和34年春季合宿時に発信された文書が現われた。黄ばんだワラ半紙に書かれた保護者あての協力依頼書である。発信人は当時3年生で主将の上野久美子九軍と主務、佐原美子。この文面がなかなか面白い。

"……当初予定していた久里浜が希望校多数でとれなくなったため、鎌倉市営体育館へ変更せざるを得なくなり、合宿費用が少々高くなるのでご了承いただきたい。"とある。4月1日から6日間にわたり実施された一人当りの合宿の総経費はなんと3900円也。特に興味深く感じたのは、その明細である。

| | | |
|---|---|---|
| 宿泊費 | 1泊 450円× 6日 | 2700円 |
| 交通費 | 往復 | 240円 |
| コート代及びコーチ2名負担金 | | 560円 |
| 米　代 | 1日　70円× 6日 | 420円 |

昭和34年といえば、わが国の高度成長以前の時代で、三種の神器——テレビ、電気冷蔵庫、洗濯機がもてはやされた頃でもある。テレビのカラー化は昭和39年の東京オリンピック以降のことであり、30年代前半は、ようやく世の中が落ち着いてきたとはいうものの、未だ戦後の影から完全に脱しきれない時代であった。修学旅行でさえ、米持参もしくは米代が要求された当時の時代背景を考えると、合宿に米代が計上してあるのもうなずける。昨今の飽食の時代には想像もつかないことであろう。

当時の学生は、旅行といえば年1～2回の学割使用の貧乏旅行がせいぜいで、バドミントン部の名のもとに、同志社大学への遠征、高岡・桐生での合宿、大阪でのインカレ等、種々経験できたことは、学生生活の中でも貴重かつ楽しい思い出である。

社会人として今日なんとか役割をまっとうできるのも、諸活動を通じ、在部中に培われた協調性・耐久力・責任感の賜物といっても過言ではあるまい。

しかし私自身、バドミントン部本来の良さを実感できたのは、むしろ社会人になってからといえよう。諸先

輩方から頂戴したさまざまなご協力・支援関係。それはスポーツを通じて育まれた“人の和”、人間関係でもある。“立教”という土壌から生まれ出た暖かく豊かな人の輪、これこそバドミントン部発足50年の財産にほかならない。

「50周年」の節目を迎えた立教大学体育会バドミントン部、21世紀へ向けさらなる発展を、OGの一人として心から祈念するものである。



昭和34年 同立定期戦（前列左から2人目が佐原）

# 海外で役立ったバドミントンの体験

豊田(佐藤) 恵子
(昭和41年卒)

ありあまる若さを立教小学校の体育館で発散していたのはフレッシュマンのころ。それからの立教での4年間は部中心の生活。

東京オリンピック開会式当日も練習日——ラケット片手に正門前を歩いていたとき、真っ青な空に描き出される五輪のマークをまぶしく悔しく見上げ複雑な心境。

部室、練習、試合、合宿、診療所、遠征、学連が主なる生活。ただただがむしゃらに動き、理論的体系的に研究することがなくて、コートのなかでバタバタとシャトルを追っているのみ。うまくなるわけがないと今にして残念。

大垣での逃げ出したいと本気で考えたつらい苦しい合宿。早朝ランニングの久里浜、水をタオルに浸して隠れて渇きをいやした富士、恨めしくも頼もしく思えたコーチの板垣さん、松下さん、松崎さん。自分のことしか考えられないような苦しいときに本当の優しさをさり気なく示してくれたマネジャー ヌマ。逃げることなくりんとしてみえた先輩のコロチャン、綾子サン、鮎川さん、オシノ、ヌマ、オリーブ、タニ。30年近く経ってもあの若さのままに記憶。

やさしい先輩に慰められ、ほだされ、練習後の不二家のあんみつとミルクホールの特大プリンにひかされ、しっかりものの丸チャン、米山、沢井、金子、塩谷 等後輩に諫められ、支えられやっとのことで、栄光ある立大バドミントン部を終了。

卒業してしばらくはコートを見るのもイヤ。

が、海外に出る機会を得、ラケット持参。イギリスの地方都市ノッティンガムは"チャタレー夫人の恋人"のD.H.ロレンスの生まれた炭鉱の街。ここでは金曜日に高校の体育館が開放され、仕事帰りの人たちがゲームを楽しんで和気あいあい。その輪に入れたのも部活のおかげと感謝。

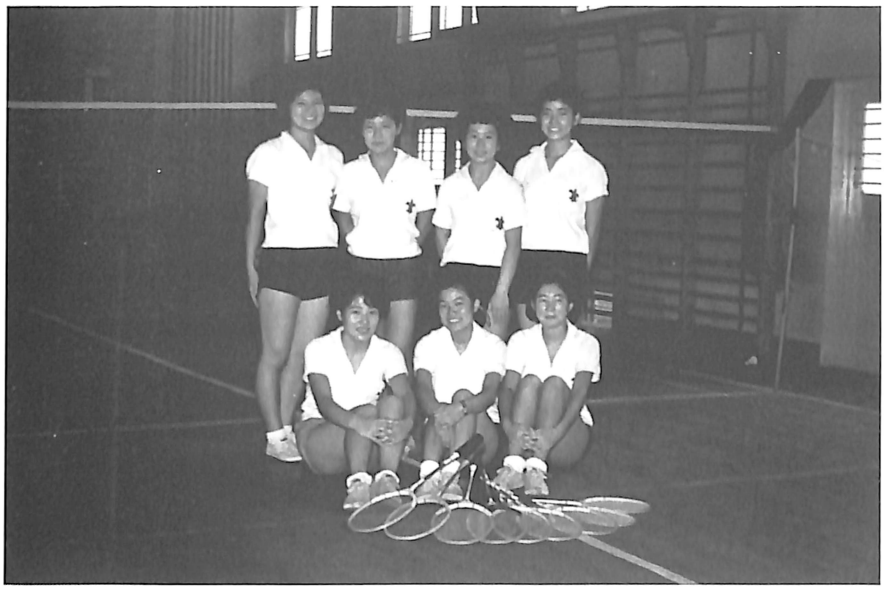
アメリカに住んでわかったことは、バドミントンは、まだマイナーなスポーツということ。93年のアメリカンズカップはロサンゼルスの郊外で開催。世界一流選手のスピードある白熱した試合は、素晴らしいの一言。観客が少ないのを幸いに、ヒーローのごとき選手の人たちと話ができ、少々興奮。

それは仙台での大会の板垣さん、鈴木さん、東条さん、大竹さん、安沢さん等の試合と折井監督、同期の男子部員(松崎、鵜飼、田中、木村、加藤、飯塚)を懐かしく思い出させました。

そして今はハワイの住人。ハワイ島のコナには、バドのコートは見当たりません。ここはビルフィシュトーナメントとトライアスロンのメッカ。今年も1500人の世界の鉄人達が暑さの中、タイムを、完走をめざして水泳に自転車にマラソンにと挑戦。その姿は、まったく感動的でした。

立教のバドミントン部4年間の体験を通して、スポーツの素晴しさとつらさを知りました。観客としてスポーツをより深く味わえることもバドミン

トンのお蔭と思っています。



昭和38年 立教小学校体育館にて（前列左から佐藤、川喜田、海内、
後列左から丸田、篠塚、谷口、沼田）

# 回想―辛かったけど堪能した3年間

小林(桑原) 延枝
(昭和38年卒)

私は家庭の事情で3年間しかバドミントン部に在籍することができなかったのですが、学生時代を振り返ると、バドミントンで終わったような思いがします。

大学に入って初めて運動部に入り、運動部の厳しさを知り、肉体的・精神的に鍛えられ人生に大変役立っていることを実感します。

思い起こしますと、まず合宿です。私は、高岡・九十九里・桐生と行きました。

高岡の時は、1日目か2日目に足を痛めてしまい、ただ高岡に行ったということしか残っていません。

それから、桐生は宿舎と練習場が離れていて、冷たい風の吹く中を歩いて行ったこと、宿舎の近くに小高い丘があって登ったことで、肝心の練習のことはあまり頭にありません。

何といっても九十九里の合宿です。ここへは2、3回行っています。宿舎は自衛隊の宿舎だったと思います。大きな一部屋で、何となく落ち着いた気分になれなかったような気がします。練習は厳しく、毎日フットワークの練習をさせられフーフー言いながら足がついていかず、最後に足がもつれて倒れてしまったのを思い出します。

亡き有馬監督さんが「とにかく倒れるまでやれ」とおっしゃった言葉がいまだに私の脳裏に残っています。でも、この言葉が私の人生に大きな役割を果たしてくれています。辛いことにぶつかった時、いつも思い出し“よし”と思い頑張る気持ちを引き起こしてくれます。そして監督さんの顔が時々思い出されます。

その他、いろいろな所へ練習に行ったこと、練習の後、三原堂であんみつやトコロテンを食べて、練習の辛さを忘れ、先輩の方々と歓談したことなど懐かしく思い出します。

さて、試合の方はというと、私は新人戦に出場しただけです。青学のかなりうまい方に当たってしまいましたが、第1セットに勝ち、第3セットに持ち込んだのを覚えています。

応援にはよく行きました。いつも先輩の意気込み、鋭さ、粘り強さに驚き圧倒され、ピリピリなさっている姿に試合の大変さ恐ろしさを覚えました。だから勝った時の笑顔、喜びがあったのだと思います。先輩の方々が強かったので応援のしがいがありました。本当にご苦労さまでした。

こうしてクラブを堪能させていただき、3年の時には会計という役をやらせていただきましたのに、3年間で退部いたし本当に申し訳ありませんでした。そのうえこうしてOG会にも入れていただきありがとうございます。

50周年記念事業の成功をお祈りし、実行委員の方々に深く感謝の意を表したいと存じます。

また、今後のバドミントン部の発展をお祈りいたします。

# じゃじゃ馬がんばっとるなー

佐川(篠塚) 栄子
(昭和40年卒)

バドミントン部創部50周年おめでとうございます。

あの軽いシャトルが若者の間を行き交って半世紀。そして今もなお元気に飛び交っています。歌やファッション、はやり言葉などは時間とともに消え去っていくのに、立教バドミントン部が今なお若い世代に受け継がれていると思うと感無量です。

さて、私とバドミントンとの出会いは小、中、高校時代、運動とはおよそ縁がなかったけれど大学という環境の変わった場所で、何か運動をやってみたいというあこがれで運動部を選びました。テニス、バレーボール、スキーみんな達者な経験者が多く、とても素人の私には入り込む余地はありません。今でこそオリンピックの種目にもなっているし、テレビにも写りニュースにもなりますが、当時は、ほとんどマイナーのバドミントンなら少しは何とかなるのではないかと思い、軽い気持ちで入部したのです。ところが見るとやるとでは大違い。それから汗と涙の青春物語が始まったのです。

立教小学校の体育館を借りての練習(もちろん線引き、ポール立て、ネット張りは手作り)、久里浜での春・夏の合宿練習、大垣、京都での同志社大学との合同合宿練習、同立定期戦、仙台へ、大阪への遠征旅行など、苦しさの中にも仲間と旅をするような楽しみのある部活動を経験することができました。そして、当時全日本チャンピオンの高木選手、諸田選手、高橋選手とも一戦を交えることができたのです。"おーい、しの!心臓に毛がはえとるぞー""じゃじゃ馬がんばっとるなー"コーチ、先輩、仲間たちの心のこもった声援で4年間過ごすことができました。

それからはや30数年経ち、現在はボーリング、ゴルフ、水泳と、持ち前の心臓で挑戦しています。私はこんなに体を動かすのが好きだったのかなと、改めてうれしくなってしまいます。このエネルギーのもとは、やはり大学時代のバドミントン部のあのハードといわれているうさぎ跳びやかえる跳び、ダッシュ、マラソン等のトレーニングのお蔭かと思います。

そして大切な仲間のいる運動部の空気を、少しでも吸っていてよかったなと思うこの頃です。



立山にて（左から 丸田、谷口、篠塚、佐藤、沼田、海内）



昭和39年3月の春合宿、久里浜体育館の前で

# 私とバドミントン—今も楽しんでいます

鈴木(谷口)　嘉代子
(昭和41年卒)

立教に入学した時、中・高、仏教系の学校で過ごした私には、その、のびのびとした校風が新鮮でした。そうだ運動をしよう!

それまで身体を動かす事は日本舞踊ぐらいで、スポーツには縁がなかった私には、バドミントンは西洋羽根つきぐらいの認識しかありませんでした。入部してもすぐにはなじめず、翌年、仙台のインカレに参加した時、当時破竹の勢いだった男子部の試合を見て、ハードだけれど面白いスポーツなんだと初めてわかりました。

合宿、大阪インカレ、同立戦と遠出をする度ごとにチームメイトとの絆が深まり、これがスポーツクラブの良さなのだと思いました。

中でも大垣の合宿はキツかった。同志社との合同だったので人数が多く、馬跳びの馬数の多いこと、跳んでも跳んでも終らないし、真夏の蒸し風呂のような体育館では、基礎練習等々、打っても打っても返ってくるハイクリヤー……。とその時誰かがころりところがった。同志社の友だった。キツイのは私だけではなかったのでした。

そして大垣駅を隔てた向側にある宿まで帰るのに、疲れきった私たちはいつものように迂回せずに、遂に入場券を買い、汗だらけのシャツに短パン姿で、駅構内をつっきってしまったのでした。恥も外聞もなく、ただ早く宿につきたい一心でした。その時飲んだ宿の清水のおいしかったこと、今では忘れられない思い出となっています。



昭和37年8月 大垣における同立合同合宿

こんなにキツイ思いをした合宿の後が続きません。何しろ今のように至る所に体育館がある時代ではなく、私たちは立教小学校の体育館(2コート)を週4時間借用していました。まずチョークでコートのライン引きをしてから練習、そして復元と正味練習時間が少なかったのでした。今の家庭婦人が週10～20時間練習している状態に比べると、のどかな時代でした。

こんな私たちに輝かしい戦績はありませんでしたが、一応2部を維持して卒業しました。

ところが切れたはずのバドミントンとの縁が、20代末に主人に教えたことにより再びつながりました。しかし私の方は子育て期間に入り、その間に主人の方は着々と基礎固めをし、30代後半からやっと一緒にやるようになった時にはすでに遅し、追い越されてしまいました。

地域でクラブを運営し、息子2人を連れて親子でバドミントンを楽しんだ時代、ミックスダブルス(夫婦の部)で万年3位だった時代、等々。長男が市内中学大会シングルスで準優勝した時はそのまま続いてくれることを期待しましたが、残念ながら大学まではもたず、今では親たちだけが地域のクラブを細く長く運営しています。

我が家では私よりも主人の方が指導員をしたり、日本リーグやジャパンカップの審判員をして、バドミントン界に多少お役に立っているのが現状です。これからも、健康のために、夫婦でバドミントンを続けていくだろうと思っています。

# 風呂敷・立山・ジョンF.ケネディ

北村(丸田) 登喜子
(昭和42年卒)

学生時代から使い続けて、今でも使っているものがある。何でも捨てないで大事に使うので「長持ちの丸田さん」と社内でも有名であるが、さすがに30年以上も使い続けるにはそれなりの理由がある。

昭和38年4月、熊本の田舎から上京した私は右も左もわからず、立教の何となく都会的な雰囲気にのみ込まれていた。口下手で愛想がなく、やや人見知りもする性格で、どうやって学生生活を送ろうかと不安な気持ちが一杯。話をすると方言が出てしまうし、着るものもあまり持っていない。5月のゴールデンウィークまで、東京の生活に慣れることに精一杯であった。

6月1日「入替戦・2部に落つ」と私の日記は始まっている。

6月2日「歓迎遠足・北鎌倉、すばらしい1日であった」と書き出している。

5月末に女子バドミントン部の部室を訪ねた。高校時代に少しやっていたし、クラブ活動をそろそろ始めようと軽い気持ちでのぞいたのである。部室は大きなテーブルが真ん中にあるだけで何もなく、女性が一人で本を読んでいた。

「あのー女子バドミントン部の部室はここですか」とこわごわ声をかけると、やや高めの声で元気よく「はい、そうよ。何かご用？」「あのーバドミントン部にはいろーかと思って……」とつい言ってしまうと「文学部？ アラ、あたしも日文よ」ニコニコッと笑って親しく語りかけて、「E組？ F組？ まー私も仏語なの」何だか一人で楽しそうにはしゃいでいたのが、今思えば



昭和41年 明立定期戦（明治大学にて、前列左から2人目が丸田）

谷口さんであった。私はそのペースに巻き込まれながらも、同じ日文という親近感を感じていた。

しばらくして2人の先輩が気ぜわしく現れ、入口から声を揃えて「ここにいたの？　困るのよ……」と早口で、責めるようにしゃべり出した。谷口さんはその言葉を制するように言い訳をし、私を紹介した。キャプ・マネの篠塚さんと沼田さんであった。一瞬緊張していた雰囲気が急になごみ「どちらにお住まいなの？」などと質問攻めにあい、かしこまって返答した「ごめんなさーい、遅くなっちゃって」と飛び込んで来たのが海内さん。「恵子、今日はあまり時間ないの」と佐藤さんが現れる。最後に楚々として登場し、にっこりほほえみかけたのが川喜田さんであった。

その日は春のリーグ戦がすみ、入替戦を控えての大事なミーティングの日であった。ちょっとのぞいたつもりが、すぐメンバーに加えられ、部員になってしまっていた。

翌週、体育の授業で使う胸にRIKKYOと大きく書かれたユニフォームとシューズを持って、初めての練習に参加した。紙袋に入れているのをすぐ沼田さんが見つけて「こんなふうに風呂敷に包んでバッグに入れるといいわよ。風呂敷は持ってなーい？　よかったら私が持ってきましょうか？」と言って、次の練習時に持ってきてくださった。長野カントリークラブの風呂敷か、今でも私の出張の必需品となっている。

入替戦での敗戦、涙を流す上級生に何と慰めていいかわからず、心底から悲しめない自分にとまどう。

7月末、同立戦で京都へ行き、比叡山に登る。京都から黒部へ、立山へ登って富山へ。上級生の行く所へはどこへでもくっついて行った。

秋、大阪でインカレ。四国まで足を伸ばす。高松のユースホステル、龍河洞から高知へ。足摺岬から戻る途中ですれ違った人が「ケネディが撃たれて死んだ」と教えてくれた。ユースホステルに走って帰ってテレビを見た。「1963.11.22.ダラス」あの映像が何回も流れていた。

私の大学生活1年目は、バドミントン部に入部したからこその楽しい思い出で詰まっている。6人の先輩にお会いしたことが、私の人生を豊かにした。今でも、このめぐりあいに心から感謝している。



昭和40年11月 全日本学生選手権にて42年卒の4名(京都市体育館にて)



昭和41年 新入生を迎えて

# バドミントンで得た宝物

谷田(沢井)　秀子
(昭和42年卒)

立教大学のバドミントン部が(当時男子は日本一でした)どんなものか知らず、そのうえ運動とは縁のなかった私でしたが、クラスの友人に誘われて、何となく入ったのでした。

体育館に行くと、一人の男性がそばにきて、ただひたすら、ラケットを「振れ振れ」と素振りをさせます。

「えっ、なんかとんでもないところに来ちゃったかな」という思いでいっぱいでしたが、何となくさぼるわけにもいかない雰囲気で、来る日も来る日も素振りをさせられました。

後にその男性が、東条さんという、シングルで華麗なプレーをする、強くてコワーイ方だと知りました。

大竹さん、安沢さんのダブルスも胸のすくようなプレーでした。男子部にはそのような有名な先輩がいらっしゃいました。

女子部のコーチをしてくださった、男子部の松下さんは、それはそれは厳しい方でしたが、とってもハンサムで、やめるわけにはいかなくなってしまったのです。

合宿は、それまでの私の人生で経験したことのないほど厳しいもので、「ちょっとタイム」等ということは、決して許されません。「トイレに行かせてください」と許可を得て、トイレの中でしばし休憩……ところが、「まだかー」と鬼よりコワウコーチが女子トイレにまで入ってくるんです。

グラウンドを何周か走らされ、走ることの苦手な友人が、グラウンドに大の字になって、バターンと倒れても、朝のランニングで気分が悪くなってオーバーに訴えても、コーチの目は厳しく、まったく同情してもらえませんでした。

合宿のある日、ダブルスを組んでた友人が、馬跳びで、コロリコロリところぶのです。どうしたのだろうと思ってましたら、夜中、ウーン、ウーンとうなる始末、さすがのコーチも心配され、病院へ、足の親指がはれあがり、化膿していたのです。

そんなにまで頑張る友人たちに引っ張られ、バドミントンは、ちっとも上達しなかったのですが、どうにかくっついていきました。

コーチの松下さん、本当にお世話になりました。ハンサムなだけでなく、とっても大人で、頼もしく、人間として尊敬できる方でした。ところが、20歳くらいの世間知らずの私は、恥ずかしい気持もあって、感謝の意をお伝えすることもなく、お別れしてしまいました。改めて、ありがとうございました。

女子部は、すばらしい先輩に恵まれていました。キャプテンの篠塚さん、次のキャプテンの谷口さん、沼[illegible]浦内さん、恵子さん、どなたも包容力のある、美人でやさしい方たちでした。

時々お家へ伺ってご馳走になりました。風邪ぎみですと言うと、風邪ひきにはこれが効くわよーって、熱い熱いくず湯を作ってくださったり、秘伝の玉子焼(おいしかった)や玉子豆腐等々作ってくださり、下宿の

身には嬉しく、甘えることばかりでした。

授業が終わると部室へ、板を打ちつけた山小屋風の部室でしたが、必ず、どなたかがおられ、ホッとしたものでした。

卒業後、お会いしてない先輩もおられますが、いつでも、あの優しい笑顔で迎えてくださるでしょう。

同級生は、キャプテンの丸田さん、米山さん、金子さん、塩谷さん。彼女たちとはタマに会います。どこでめぐり会った友人よりも、心を開くことができる私にとっては宝物です。いわば、裸の付き合いをしてきましたから、安心しておれます。何でも話せます。こんなことを書いたら、遠くにいて、タマに上京しても、会える時間も作らないで……と叱られそうですが、これは本心です。

バドミントン部で、かけがえのない友人たちと過ごせたことが、私の学生生活の最良の思い出です。



大学キャンパスにて（前列左から 沢井、大原、後列左から 海内、丸田、沼田、谷口）

# 女子バドミントン部存続の陰に私あり?!

脇(堀部) 晴代
(昭和43年卒)

自活する能力を身につけて就職したいと決めて、自分で探して入学した3年制の商業英語専門学校を夏休みで退学し、翌年立教大学の法学部に入学しました。

それは、大学への曖昧な憧れと、弁護士になりたいという動機があったからです。ですからサークルも当然に法学研究会というものを選び、演習やゼミで判例を読んだり、論理の展開の仕方などを学んでいました。そんな学生生活の中で、以前から民俗・考古学関係に興味があったので、博物館学講座を履修しました。

忘れもしない大学2年の秋、同じ講座をうけている足立(旧姓米山)さんから「バドミントン部に入らない?」と誘われたのです。

たまたま、私のクラスは体育会に所属している学生が多く、私の親しくしていた友達も女子バスケット部で、私も、その部室によく出かけていたりして、女子だけの運動部も楽しそうだと思っていました。

高校・大学と男の中に1割ぐらいの女という生活が続いていたこと、そして、弁護士をという志をもちながら、法律関係の授業が面白くなく……文章は読めるけど、そのことが、どこにどのように機能するのかが、理解できずにいたのですが……意志薄弱言い換えれば移り気な私は、バドミントンをやりながら勉強しようと自分に都合よく納得させ、なぜ勧誘されたか、深く考えもせず入部したのです。

なんと、その時2年生でプレーする部員がゼロのため、1年生2人は、もう退部したいと言っている状況で、しかも、リーグ戦を戦うためにもメンバーが一人足りない、という知っていたら絶対入部しなかった。つまり廃部寸前という危い状態だったのです。

というわけで今ならありがたくて感謝、感謝なのですが、どうにかしてルールを覚え早く試合に出られるようにと、毎日のように練習練習だったのです。途中で入部したから、こんなに練習させられるのか、と思いつつ、なんだかやめられなくて、ズルズルと女子バドミントン部員になっていきました。

そして、自動的に一人しかいないので主将となった年のリーグ戦は歴史に残る悲惨なものでした。春最下位、入替戦負け、秋最下位、入替戦負け、一挙4部に落ちました。しかし部員は皆ベストを尽くしたし、男子部も誠心誠意コーチをしてくださったのです。練習場がなくて北区の体育館や大学の体育館を早朝使ったり懐かしい思い出です。共立女子大学のそばの神田体育館に男子リーグ戦の応援にいったりしたこともなつかしく思い出されます。あの時いつも乗[illegible]都電も今はありません。

練習疲れの居眠りに負け、司法試験[illegible]とんでもない、卒業式寸前まで就職がきまらず、やっとの思いで就職しました。今、健康体操としてバドミントンを楽しんでいるのは、大学時代があったからこそと思っています。



昭和41年 同立戦、立教において（前から2列目左端が堀部）

Chapter-8

# 継承の糸はつながった

1969-1988

昭和44年～昭和63年OG

# 切れかかった糸がしっかりつながった

高橋(斎藤) 啓子
(昭和47年卒)

卒業して25年経ちました。バドミントン部50年の中ほどの4年間をあのキャンパスで過ごしたのでした。遠い思い出を探すためにアルバムを開くと、先輩、チームメイト、そして自分、若い顔々が笑ってポーズをとっています。でも、楽しい思い出は薄い記憶の中、なぜか苦しみ落ち込んでいた自分を思い出すのです。

大学に入学してすぐに入部、やさしく頼もしい先輩方に励まされながら楽しいクラブライフが始まりました。しかし、2年生になって気がついてみると、3年生、1年生が1人もいません。当時、どの大学も学園紛争の真っ最中、我が母校も校内デモ、総長団交など学生運動が活発化し、とうとう大学は封鎖され、キャンパスには学生がいなくなってしまいました。

私自身は、実家の都合もあり、週2回の練習(立教小学校体育館)に出るのがやっとで、部員勧誘もままなりません。どう部活動を維持していったらよいか、暗い気持ちでオフに入りました。さて、春合宿は? 3人でどう練習する? 先が見えませんでした。新入生が入らずリーグ戦に出場もできなかったら休部するしかないのだろうか、「主将」の責任の重さを痛感させられました。

その後、男子部高橋主将の英断のお蔭で、男子部の合宿に参加させていただけることになりました。朝のトレーニングから夜のミーティングまで、さぞうっとうしかったことでしょうが、私達にとってはこのうえない幸せでした。

不安を抱えての新年度、4人の新入生が入りました。そのうえ、2年生も1人。彼女達を絶対離さない、の思いを胸に隠して、精一杯の笑顔と上級生としての威厳を持って活動をスタートしました。

切れかかった細い糸はしっかりと次代につながれ、太くより合わされていきました、元気な後輩達に、感謝、感謝。



昭和44年 春合宿、寺前コーチを囲んで(後列左端が高橋)。



昭和43年12月 女子部一同



昭和43年の同立戦にて女子部一同



昭和49年の同立戦、同志社にて（斉藤（左）と松野）

# 仲間たち、それは私の貴重な財産

畑(栗田) 寿子
(昭和50年卒)

バドミントン部創部50年を迎えるという通知をいただき、今さらながら私自身卒業して20余年を経ていることに驚いています。

あの明治時代の古き体育館での練習のことや、環六経由の練習後のランニングのきつかったこと等を思い返してみては、よくできたものと思うし、辛くて厳しい合宿を乗り越えられたことが、その後の人生で何事にも立ち向かう強さを作ってくれたように思います。

バドミントンを通じての生活が、私の立教大学での学生生活の重要な一部を形成していることはいうまでもありません。

そもそも私がなぜバドミントン部に入部したのかを思い返してみるに、大学2年の必修の体育がバドミントンで、その時の教授が当時女子バドの顧問の中村教授で、2、3度「バドミントンやってみない」という優しい言葉についふらりとしている時、たまたま同じ独文科の庄野さんに「教授にこういわれているんだけど、どうなの」と聞いたのがきっかけでした。

それまではバドミントンを羽根つき程度にしか知らなかったし、ましてあんなにハードな競技であることを知っていたらきっと入部しなかったと思います。無知であることも手伝い、ほんの軽い気持ちで体験入部をしたのが、忘れもしません夏合宿の一週間前のトレーニング開始からでした。

その時コーチをしていた男子部の奥村先輩はじめ部員のおせじに乗せられて、つい妙高での合宿についていった結果、入部することになり、残りの大学生活はほとんどバドミントン中心の生活になってしまいました。

あの合宿での思い出で最後の晩の打ち上げコンパのことがあります。ちょっと一杯飲んだのですが、その頃はお酒の一、二も知らずでしたので、飲むにつれいい気分になり、「水が飲みたい」といったら渡されたのがジンが90%でライムが10パーセントの水(?)で飲んだら即ダウン。幸い、アルコールに強い体質でよかったと思い出してもドキッとします。

それ以来なんです、私がアルコールが飲めるようになったのは……。

私と同学年の仲間は他に4人おり、それぞれ個性の強い面々でしかも絶対に主張を曲げない強さがあり、よく体育館近くの第一食堂で練習の前後に軽食を取っては、けんけんごうごうと意見を戦わしたものです。他の学年は割とおっとりだったのに私達だけなぜにピーチクパーチクだったのでしょうか。

入部後わけもわからないままに同立戦そして新人戦があったのですが、初めのころの試合だったからか印象深く残っています。初戦の同立戦ではスムーズに点を重ね、あと1本という時になかなか取れず、開いていた差が1、2ポイントにまで迫られてやっと勝ったことで試合の難しさを痛感したものでした。

それに続く新人戦では、大西さんとペアを組んで、

1、2回戦と思いがけず勝ち進み、4回戦の準々決勝には志村の板橋体育館から江戸川体育館に変わったのでした。その体育館のあまりの天井の高さに圧倒され、体育系大学に負けたのでした。試合のかけひきも知らず、ただがむしゃらに動きまわり、飛んで来たシャトルを相手側に必ず返すということしか知らない単純で純粋な行為が良い成績を引き出してくれたんだと思います。

また返すがえすもいまだにくやしいのが、4年になる前の春合宿の前日に盲腸になり手術をしたために一番充実していた時期を無駄にしてしまったことです。

私自身、体力的にも精神的にも一番良かった頃でしたので、大切な試合にも出れず部員に迷惑をかけたことで何度退部を考えたかわかりませんが、仲間の言葉で最後まで在籍させてもらったのでしたが、この寄り道により貴重な教訓を与えられました。

今その仲間と久し振りに会っても、当時と同じ気持ちに戻れるのは、辛い練習や楽しい思い出を共に経験したからでしょうか。たしかに定期戦とかでの華々しい成績もなかったけれど、印象深い試合や、これは絶対勝てないといった試合をひっくり返した時とかの思い出として残っている試合はいくつかあります。

部員の大方は大学からバドミントンを始め、もしもっと早くから基礎をしっかりと身につけていたらきっともっとうまくなれただろうにと残念に思うこともありましたが、その戦績を別にすれば、今も親しく交際できる友人を得ることができたのは大学時代の貴重な財産と思います。今後の部員の活躍を期待してやみません。

# 大きなピンクのバラの花束をありがとう

鈴木(中嶋) 久江
(昭和53年卒)

私の青春の1ページであったことは、まちがいありません。あんなに必死になって、白い羽根を追いかけたことが、なつかしく思い出されます。

もともとスポーツ系でなかった私が、大学入学と同時に体育会に入ったのですから、それはたいへんでした。トレーニングも最初はついていけず、上下の人間関係もなじめず、どうして4年間続けられたのか不思議なくらいです。

でも、今思い出してみると、あの頃やっていたことが、社会に出てからずいぶん自信となって役立ったのです。残念なことは、私の学年が女子一人だったので、今、連絡をとれる横の学年が誰もいないことです。4年間一緒に過ごせた友人がいたら、きっと貴重な財産となったことでしょう。

体育館の練習時間どりをしたり、卒業時に大きなピンクのばらの花束をくれた下級生達は、どうしてい

るでしょうか。いろいろと、私に忍耐してくださった上級生達も、どうされているでしょうか。なつかしく思い出されます。

# いつまでも忘れない

## 昭和55年・56年卒業部員一同

語り尽くせない思い出がいっぱいの、クラブの生活。いつまでも忘れられず、そしていつも話題になる話を少し紹介します。

### 立教通り "吉野屋の牛丼"

オープンしてから気になっていた牛丼屋。クラブが終わって体操服のまま入った。みんなで汗かいて、タオルを首にまいて……お皿に盛ってある生卵が妙に気になった。味は忘れたけど、思い出は残った。絶対来いと言われて一人遅れて来た、1年下の○○は恥ずかしくなかったのかなあ。(女子は牛丼屋になんて入れなかった時代のこと)

### 合宿 "上田山荘"

その① 「○○コーチの『オムライス食え!』」

昼食のオムライス……「食べないとダブルスを教えない」との一言。うす焼き卵の中にびっしりつまったライスは食べても食べても減らず、くずすほどに増えてくる。——つらかったよね。

その② 「あぁ、あそこが——」

練習の厳しさに根をあげずに頑張りはしたものの、しだいに疲れはたまり、身体のそこかしこに痛みが走る。その中で○○は「あぁ、あそこがかゆい——」。その言葉に○○現役コーチは「ドキッ!」。私達は笑いころげ、もっと疲れたのだった。

### 合宿 "検見川"

その① 「いかないでぇ、コーヒー牛乳」

東京駅から1時間足らずで着いてしまう"新検見川駅"そこから歩いてどれほどだったか……東大検見川グランド。名前も重かったが、練習も重量級。近いということもあって、先輩諸氏が大勢いらっしゃった。気合いが入ってしまった女子部鬼キャプテン。私達の小さな楽しみ、『コーヒー牛乳』を、時間外までも禁止にしてしまった!!

その② 「HENSHIN(変身)」

卒業したての○○コーチ。本当は素晴らしい選手だったであろうに、私達と寝食をともにして、こんなに変わってしまった。

1、恥ずかしそうに照れながら、こわばった笑みを浮かべて、「サインは、グーー!」をしてしまった。

1、ゲーセンのモグラ叩きで、ハッスルしすぎて、指から『血』を出した。

いずれの時も、私達は、笑いをこらえるにもたいへん

苦しかった。

(小川陽子・林(西岡)史恵・猪狩(原野)美佐江・関口真澄・本間かよ・渡辺(小川)由美子)



"立教ギャルズ"大活躍

実力で三部返り咲き 女子バド 女卓

女子バドは準優勝！

"馬に失恋"

馬術部 山田 晴久

"あっぱれ裕山" 空手部

念願の個人優勝飾る

急特 女子バド

一時停止

3部準優勝を伝える「立教スポーツ」(昭和54年10月)

# 思い出すこと—赤い階段と黄色い壁

増澤　みどり
（昭和62年卒）

忘れもしない強化合宿。朝のジョギングに始まって、ストレッチ、素振り、フットワーク、ノック、ゲーム、ダッシュ、そしてカニ、アヒル、カエル跳び、手押し車などの筋トレ……。

長い1日の練習を終え部屋へ戻る途中、ふらふらになった私達を待ち受けていたのは、今市青少年スポーツセンターのまっ赤な階段とまっ黄色の壁であった。その階段と壁の色は、これでもか、これでもかと言わんばかりに、「元気を出せいっ」と迫ってくる。目はチカチカ、頭はクラクラだ。壁に向かって、「もうこれ以上がんばれないよ」と言ったのは、きっと私一人ではないだろう。

ようやく部屋にたどり着き、部屋着に着替える。ふと見ると、宮下(旧姓佐々木)潤子先輩はまっ赤なスウェットの上下、そして私のスウェットは、上下ともにまっ黄色。誰からともなく、「まだ階段にいるみたい」の声。部屋にいても落ち着かない、大ひんしゅくなのであった。

それから皆に「壁」と言われ続けた私は、合宿のメニューも順調にこなし疲労もピークに達した頃、

「先輩、私、壁になりますっ!!」

と黄色いスウェット姿で黄色い壁に張り着いた(心の中で、「もう体育館には行きませんっ」)。すると宮下先輩は、

「じゃあ、私は階段になるわ」

と赤いスウェット姿で赤い階段にしゃがみ込まれたのだった(写真)。



そしてあれほど「もう疲れた。このまま壁になって練習なんかしないぞ」と思っていた私も、翌朝になるといそいそと壁からぬけ出し、いや、ふとんからはい出て、朝のジョギングへとむかうのであった。

足元をぬらす草の露、ひんやりとした澄んだ空気、緑の木々をおおう靄、小鳥のさえずり、虫の声、皆の足音、白い息、雲間から眠た気に顔を出す太陽。大きく深呼吸。今日も一日頑張ろう……。

大きくみえた先輩の背中、後輩の真摯な瞳。

勝利の喜び、惜敗の涙、辛勝の安堵、完敗の惨めさ。気力、ねばり、努力、勇気、闘う心、冷静さ。すべ

てが終わった後のさわやかさ、充実感、達成感、そして反省。

楽しい語らい、皆の笑い声、一つに合わせた心。私達を見守る時計台、ひそひそ話のする図書館、蔦のからまるチャペル、鈴懸の道に吹く風——。

すべてが昨日のことのように思い出されてなつかしい。

# つらかったけど楽しかった

小副川(吉野) 由樹子
(昭和63年卒)

大学に入ったら、運動部に入りたいと思っていました。

そのわけは、高校まで文化部しか経験がなかったので、大学で「運動部」というものを経験しておきたかったからです。運動部初心者が体育会なんて、慎重な人には信じられない行為でしょうが、私も友人の誘いがなかったらそこまではしていなかったと思います。でも、誘われるままに入部し、「立教ーファイト!」をやってしまいました。ですかなぜバドミントンかというと、理由はありませんでしたが、ただ興味があったことは確かです。

高校時代にバドミントンにとりつかれた男の子がいまして、

「見るのとやるのでは大違い。ほんとにおもしろいんだよ」

と、熱心に話しているのを小耳にはさみ、とても印象に残っていました。やり始めればその気持ちがよくわかりました。繊細にして大胆。技巧に富んだ芸術的なスポーツでした。しかもこんな一流の先輩方がいらっしゃるクラブとは……

運動部を経験したことのない私にとって、練習がきついのはあたりまえ、でも自分にできることを一生懸命やろうと、ウォーミングアップやストレッチも真剣にやりました。ランニングも好きではありませんでしたが、今では会社で陸上部に在籍、市民ジョギング大会にいっしょに参加するなど、あのころの経験により自分の活動範囲が予想以上に広がりました。

本当にバドミントン部での経験はいろいろな場面で意味がありました。いろんなスポーツを見に行ったり、オリンピックや駅伝をテレビで見たりしますが、もしも友人からバドミントン部への入部を誘われたときに躊躇し、自分には無理だと断っていたら、世の中のおもしろいことの半分(それ以上かもしれない)は理解できないでいたかもしれません。ゲーム中の勝負をかけた場面の緊張、緊迫した中でのスポーツマンの心理、体の動き、団体戦での連帯感など、経験(へたなりに)したからこそより深く興味をもって見ることができます。

スポーツといえば「健康」と同じ意味だと思っていましたが、そうでもないということにも気づきました。何

ごとにも限度があり、健康に結び付けることもできるけれども健康を害する危険性もあり、それをコントロールするのがスポーツマンであったりスポーツ愛好家であったりするのだと。鍛練と栄養と休養のバランスが非常に重要ということに気づかされ、それが会社での自分の仕事(労働安全衛生や健康作り施策の考案)にも役立てることもできました。

マイナスイメージの点では、合宿によく行った日光方面には、いまだに心理的に足を運べないということがあります。古い漫才師が「それはちょっと日光の手前だね」なんていうのを「いまいち」(今市市)とわかって笑ってしまった自分にもちょっと悲しいものがありました。

また、プロ野球選手の海外でのキャンプインと聞くと、何も知らなかったころには楽しい(キャンプファイアーでもありそうな)ことだと思っていたのが、何か胃がしめつけられるようなこみ上げてくる感情がある自分に変わってしまいました。

合宿のつらさは半端ではありませんでした。上級生の時には上級生のつらさもあったのですが、不思議とこんな時には下級生だった時のことをまず思い出してしまいます。やはり先輩にかわいがられながらも厳しくしてもらった時のことが、きっとありがたかったからだと思います。

そしてそのつらかった合宿を乗り越えて、最後までやり通せたことは大きな自信につながっていきます。そんな経験をさせてもらったバドミントン部のスピリットは自分自身の中でいまでも活発に活動し、大きな影響を与えています。

これからも、何かの縁で飛び込んできた若い人たちに、つらくて楽しい、よい経験をしてほしいと願うばかりです。

# 思い出すのはラケットの匂い

飯塚(賀茂) 由美子
(昭和63年卒)

振り返れば早いもので、大学を卒業してから10年もの歳月が流れてしまいました。

大学時代といって思い出すのは、まずバドミントンのラケットの匂いです。そして汚なかった部室や、狭い体育館、部の友人の下宿に泊めてもらったこと、老月のからあげ定食等。

私がバドミントン部に入った理由は2つでした。1つは親切な先輩方からの勧誘のお電話をいただいたこと、もう1つは自分自身、高校時代にバドミントンを途中でやめてしまったことが心残りだったからです。

実際に入部してみると、練習内容はとても厳しく、特に夏合宿は夕方になるともうへとへとになっていました。でもその時皆で聴いたユーミンや、佐野元春の歌は忘れられません。

試合では、2年生の時の明治との定期戦で接戦の末勝てたことがなんといっても一番の思い出です。

その後、どんどん後輩が入部してきて、自分で練習のメニューを考えたり、いろいろ頭を悩ませました。また、ゼミの合宿と試合が重なった時、教授に合宿に遅れる旨をお願いしたら、「僕は学生は勉強が中心と思っているから、良いとは言わない。君が選択したことに対しては仕方がないけどね」と言われてしまい、すいぶん迷いました。結局試合に出ましたけれど。

バドミントン部の生活を通して人間関係もいろいろ学びました。それは今の職業人としての生活にも、とても参考になっています。

最近でもたまに家族や友人とバドミントンをすることがあります。そんな時にはなぜか夢中になっています。

Chapter-9

# 新時代への扉

1989-1996

平成元年～平成8年OG

# メイクイーンと男爵イモ

野津山 まり子
（平成元年卒）

蔦のからまるチャペル。ベンチで語らう学生。まさに絵に描いたようなキャンパス生活。しかし、その脇を掛け声をかけながら走り抜けていく小汚い集団の中に私はいた。

体育会女子バドミントン部。私の体育会のイメージは、ジャガイモで例えるなら、スマートで粒ぞろいの"精鋭メイクイーン集団"であった。

しかし現実のそれは、不器用でデコボコな男爵イモ集団だった。勝つ事を一番に考えていた私は、実は、何度も学校の練習をさぼって他大学の練習に行ったり、他大学への編入をたくらんだりした。しかし結局最後までクラブに残ったのは、私も男爵イモでこの集団に心地よさを感じていたからかもしれない。結局、芽が出ずに、納得できる結果をつかむことができず、苦い思い出が残った。

月日が流れ、再びラケットを握る気になった。メイクイーンに憧れていた学生時代を懐しく思いながら、旬を過ぎた男爵イモは、今、楽しむバドミントンを学習しつつある。


立教スポーツ新聞 (第67号)

女子バドミントン
二部
決めた
ウイニングショット

あれよあれよと言う間に女子バドミントン部が創部以来初の二部昇格、エース野津山を中心に下級生の活躍も光り、少数精鋭で戦い抜いた。一方負けじと硬式庭球部も二部復帰東大とのリターンマッチは本学の圧勝でおわった。

創部史上初
30年
―野津山加入で5部から2部へ大躍進!―

二谷(文2) 村田(社2) の成長が入替戦 勝利につながった

二部昇格の原動力となったエース野津山

息つく間もなく
三部優勝

リーグ戦2部2位
戦力充実!!
来年こそ
総合優勝だ
―フェンシング部―

テレビ東京杯
王者
日

2部昇格を伝える昭和62年6月の「立教スポーツ」(喜びのあまり「創部史上初」と誤ってしまった)

# 立教バドミントン部から得たもの

二谷 伸子
（平成2年卒）

中学生の時、自分だけの力で、勝ち負けをはっきりつけられる個人競技がやりたくて始めたバドミントンだったが、立教でのバドミントンは、団体競技のこわさと面白さを経験させてくれたと思う。

私が在籍していた時代は、人数も少なく、リーグ戦にも何度も出していただいたが、ベンチの応援と、チームの勝負がかかった緊張感は、ときには自分の実力以上のものを引き出してくれることもあった。反対にプレッシャーでボロボロの試合をしてしまうこともしばしば……。

個人戦での敗戦は、自分が悔やめばすむが、リーグ戦はそうはいかない。チームメイトの頑張りを、自分の負けがフイにしてしまうのだから。大事なところで負けてしまった時には、ベンチに戻るのがつらかった。もちろん勝った時の喜びは、その分大きいものだった。

幸い、リーグ戦優勝、入替戦に勝っての昇格を経験させてもらい、自分が試合に出ていても、いなくても、勝利を分かち合える仲間がいることが、一人のときよりずっと嬉しいということを知ることができた。本当に貴重な経験だったと思っている。

そして、一緒に苦しい合宿を過ごしたり、昇格を喜んだり、時には、レギュラーを争ってライバルになったり、ダブルスのパートナーとして叱咤激励してもらったり、そんなふうに4年間を過ごした仲間とは、仕事が忙しかったり、家庭を持ったりして、会う回数こそ少なくなったが、今でも付き合いは続いている。

いい仲間にめぐり合わせてくれた立教バドミントン部に感謝している。

# 今、思うこと—成長させてもらった4年間

長谷川 千秋
（平成4年卒）

大学を卒業してもう5年。つまりバドミントン部を引退してから5年ということになる。早いものである。それでも私は社会人になった今もバドミントンとつながっている生活を送っている。立教でバドミントンをやっていて本当に良かったと思っている。もし、やっていなければ今の自分はいないだろう。

私が立教大学バドミントン部に入部した時、自分の学年は1人、1つ上の先輩はいないという部員難の時代だった。だが、強い先輩方に囲まれて厳しいながらもたいへん充実したクラブ生活を送ることができた。

2つ上の先輩方と行った4人の合宿は忘れることができない大切な思い出だ。2年生までだったが本当に充実していた。関東学生の大会でダブルスベスト8をとった時が一番輝いていた時期だったと思う。

えらそうなことを言うようだが、後半の2年間は、プレーヤーというより後輩達のコーチのようだった気がする。別の意味でいい勉強をさせてもらった。絶対自分は負けられない、後輩にぶざまな姿を見せられないと思いながら過していた。勝った負けたの思い出はそれほどないが、良い先輩と後輩達に囲まれて成長させてもらった。同期がいなくて寂しかったが、体育会の他の部の同期に囲まれ、本部の仕事もし、楽しい時をすごさせてもらった。

今私は、某メーカーでバドミントン用品を売っている。バドミントンをする機会はあまりないが、大好きなバドミントンの仕事をしている。いつか後輩達にラケットもシューズもシャトルも買ってもらえるようがんばっていきたい。そしてそれで後輩達が勝っていってくれれば最高である。

いつまでも立教大学バドミントン部に入部して良かったと思えるように、立教大学バドミントン部に恥じないように、大げさだが生きていきたいと思う。これからもいろいろなことがあると思うが、この4年間の苦しかったこと、楽しかったこと、勉強したことを思い出しながらがんばっていきたいと思う。

# 大きな変化の時期に貴重な体験

和田 陽子
（平成5年卒）

私の現役中、女子部は2部から3部、4部と降格し、以来4部優勝、3部昇格を目標としていましたが果たせず、心残りのある引退となりました。

しかし在学中の4年間はまた、大きな変化もあった時期で、体育施設や部室棟も整えられ、何より入部当初男女合わせても12名(4年生が引退し、1名が退部すると、新入生が入部してくるまでの間はマネージャー、初心者を1名ずつ含む7名となりました)という状況だった部員も、卒業前には倍以上に増え、活気が出てきたのを感じたことを覚えています。

また、私にとってはバドミントン部は学校生活の中心にあり、いくつかの貴重な体験をさせてもらった場、これからも大切にしていきたい先輩・後輩関係や友人達を得た場となりました。

その時、その代で、部員はそれぞれの目標を持って活動し、また変化していくのでしょうが、一方で、バドミントン部がこれからも受け継がれていき、部員にとってのよりどころであり続けてほしいと思っています。

# 崖っぷちの新勧活動

鈴木 道代
（平成5年卒）

卒業して4年——。現役の後輩達から送られてくる毎月のたよりも、かなりの数になった だいたいは「拝啓」で始まる文章を読み、それから練習日程を見るのだが、春だけは違う。まず、部員名簿を見るのである。

私がはじめての新勧活動を迎えた2年生の春、我が部はまさに「冬の時代」であったといっても過言ではないだろう。

部員3名。そのうち、私がマネージャーであるため、プレーヤーは3年生の先輩1人と、同級生が1人。春季リーグ戦に出場するために、何としても1年生の力が必要だった。

監督をはじめ、諸先輩方も非常に心配してくださった。ビラを配り、体育会アンケートから名前を書き写し、声をかけ……。

四丁目の桜が美しいあの時期に、それには目もくれず、とにかく1年生だけを追っていた。「せめて夜桜でも……」。それどころではなかった。文字どおり、電

話を「かけまくっていた」からだ。そして入部した1年生は4人。ほっとしたのと同時に、本当に嬉しい気持ちでいっぱいだった。

春がめぐりくるたびに、あの怒濤のような忙しさ、「崖っぷちの新勧活動」がよみがえり、なぜだかとてもなつかしくなる。そして、名簿で新人生の名前を見ると、安心してしまうのである。

新座体育館のコートが寂しくないように、いつもたくさんの声が響きあっているように、そのことを願ってやまない。

# ピカピカの床と水銀灯

森屋　利夏
（平成6年卒）

新キャンパスが完成した1990年(平成2年)に入学した私たちは、4年間の体育会活動を新座で過ごしました。

大学での授業が終わった後(自宅から直行の場合もしばしばでしたが)、家路に急ぐ人たちを乗せた電車に乗って20分、駅から体育館まで徒歩20分の道程を、週の半分以上通っていました。

日暮れて、窓に車内の様子が映る電車から降りて、体育館に着くと、ピカピカの床や水銀灯の明かりがまぶしかったのを覚えています。

50年の間に練習風景は、諸先輩方が過ごされた頃と比べてずいぶん変わったことと思います。おそらく体育会に対して、そして部活動に対しての考え方も変わってきていると思います。これからの50年間はもっと速く変わっていくかもしれません。どんどん変化して、より面白い活動になっていることを期待します。

# バドミントンをやりたい気持ちがメラメラと

西島(山口) 日登美
(平成6年卒)

私が立教大学に入学したのは平成2年、新座キャンパスが完成した年でした。

私は中学校・高等学校とバドミントン部に所属していましたが、大学でもバドミントン部に入るとは思っていませんでした。大学の体育会系というものは私にはとうていついていけないと思っていたからです。しかし体育会バドミントン部に勧誘され、体育館へ練習の見学に連れていっていただくと、メラメラと"バドミントンをやりたい"という気持ちが高まってきました。

私の入学当時、女子バドミントン部の部員は3名でしたが、練習中は厳しく、それ以外の時はとてもアットホームな雰囲気があり、すぐに入部を決意しました。

部員が少なかったため、入部直後に春季リーグ戦にも出させていただきましたが、結果は3部から4部への降格という諸先輩方には大変申し訳ない結果となってしまいました。

ここから始まった立教大学での私のバドミントンは、"3部昇格"ということを目標にして、毎日練習に励みました。3年の頃は女子部主将も務めさせていただきましたが、卒業するまで"3部昇格"の目標を達成できずに立教大学でのバドミントンは終わってしまいました。

私は個人戦で良い成績を残すことより、立教大学という名を背負ってリーグ戦で昇格していくことが"立教大学体育会バドミントン部"のためだと思っていたので、その夢を達成せずに卒業したことは今でも心残りです。

卒業して3年が過ぎようとしていますが、今年に入って立教大学バドミントン部の同期とバドミントンをするようになりました。私も数回参加しましたが、とても楽しく、学生の時よりもリラックスして余裕をもってプレーできました。学生時代とは別の楽しみ方をすることができました。

学生の頃と変わっていない点は、今でもバドミントンのプレーをテレビで見たり、電車の中でバドミントンラケットを持っている人などを見るとメラメラと"バドミントンをやりたい"という思いが心の底からわきあがってくることです。

これからも立教大学体育会バドミントン部で学んだこと、そしてバドミントンを通じて今でも仲の良い同期を大切にしていきたいと思っています。

# この1勝もあの1勝も、同じに重い

池田 道子
（平成6年卒）

はたと、バドミントン部の頃のことを思い出そうとすると、次から次へと浮かび、何を書けばよいのかわからなくなってしまいます。

その中で、私自身の試合での3番勝負を挙げてみます。

第1が、1年生秋の関東学生戦のシングルスで、4回戦までいけたこと。何とか勝てるものなのだ、と自信になりました。授業をぬっての体育館通いも、楽しかった思い出です。

第2が、3年生の時のリーグ戦。会場がはるか彼方の茨城大会。リーグ戦初の宿泊付きとなりました。ここでのシングルスで、フルセット、セッティングぎりぎりまでやって、勝った試合です。

第3が、4年生秋のリーグ戦。直前のアクシデントで、2年生の藤田さんと3日くらいの練習で、ダブルスに出た試合です。この時は4勝することができました。この試合をやりながら、引退目前にして、ダブルスって、こう攻めればいいんだ、と何か見えた気がしました。

私の場合、4年間、レギュラーと控えの繰り返しでした。あと1人に勝てれば出られるのに、と悔しがったこともありました。今思えば、先輩にも同期にも、思ったことを言って、可愛げのない子だったかな、とも思います。でも、大学時代というのは、いろいろなことを主張できた時期だったような気がします。

4年間、バドミントンをやってこれたのは、自分の頑張りもありますが、恵まれた環境にいたのだと思います。家の事情で、体の故障等で部をやめていった部員が幾人かいました。彼ら彼女達の1勝も、4年間やり通した人の1勝も、バドミントン部には、同じ重みを持っているのだと思います。

私が現役時代にノートに描いていた漫画を見つけました。当時の思い出がいっぱいつまっていたので寄稿します。

# 私のバドミントン部

坪　宏美
（平成8年卒）

1. 名　前　　坪　宏美
2. 得意のショット　　ドロップショット
3. 苦手なショット　　クリアー
4. 好きな言葉　　風の吹くまま、気の向くまま
5. 後輩へのワンポイント・アドバイス
   ・部活動は、大学時代しかできないことなので、一生懸命頑張ってください。
6. 思い出
   ・4年の最後の秋季リーグ戦での、横国大とのダブルスの一戦。

Chapter-10

# 新たなる50年へのスタート

## 男子・女子現役部員

〈学年は寄稿時の1997年1月現在〉

## 50周年のもつ重みについて

4年
島崎　慎一

バドミントン部が創部50年を迎えることができて本当にうれしく思います。自分がバドミントンを通して充実した学生生活を送ることができたのは、多くの先輩方の努力のおかげだと思います。心の底から感謝の気持ちでいっぱいです。どうもありがとうございます。

50年というのは、実際自分が22歳なので実感がわかない年月の長さなのですが、ただ、これからの社会を担う自分たちは、ここで考える必要のあることがあると思います。それは「なぜ今、創部50周年を迎えるのか」ということです。偶然50年前に、バドミントン部を創部したということはないはずです。

52、3年前、バドミントン部が創部される以前は、多くの若者が兵隊になりました。そのことを、昔のことだと割り切るのもひとつの考え方だと思いますが、それなら50周年を記念する価値はないと思います。

自分には今、ありがたいことに多くのお年寄りの方と話をする機会があります。話をしてくださるのは、90歳のおじいさんであったり、85歳のおばあさんであったりするのですが、話をしているときに、ハッと気づかされることがあります。それは自分が現在生きている環境、ひいては、新座の立派な体育館でバドミントンができるということは、当たり前のものではないということです。

「口に入るものは何でも口に入れた」「空襲でこどもが死んだ」、さらっと、あるおばあさんは言います。でも、自分には重たい言葉です。自分が自分勝手に生きているのが恥ずかしくなります。

話は大きく飛んでしまった感があるのですが、自分が言いたいのは、50周年というのは50年という時間が流れたから自然に達成できたのではなく、50年という年月を人間が創り上げてきたから達成できたのではないだろうか、ということです。

だから、バドミントン部が無事50周年を迎えることができて本当に誇りに思うし、これからの1年1年のために微力ながらも協力していきたいと思います。

## 思い出の地『新座体育館』

1年
吉田　亘

立教大学に入学した時、体育会バドミントン部に入部しようとはまったく考えていなかった。理学部では、続けていけないと思っていたからである。ただ、高校に引き続きバドミントンをやろうとは思っていた。大学入試に追われ、ろくにできなかったからである。こんな状況の中、入部の決意に至ったのには、2つの理由がある。

まずその1つが、バドミントンサークルがなかったことである。実際には、非登録団体としてあることを知らされ、迷ったりもした。しかし、活動場所が常にある点でこちらを選んだ。ただ、この理由は決意の決め手にはならなかった。強いて

言えば、揺るがす程度だった。実は、もう1つの理由によって、ほとんど決めてしまったのである。それが新座体育館である。

僕は、新座で生まれ新座で育った。小学生の時は、よく立教高校の中で遊んだものである。当時、新座体育館はもちろんない。水泳部と野球部が昔のままである他は、ほとんど単なる草原だった。まるで大学が高校の一部に、おまけとして存在しているようだった。だからこそ、恰好の遊び場となっていた。

さらに、学校の帰り道でもあった。近道ということで、よく通っていた。しかし、今思えばほとんど寄り道に近かったような気がする。

中学生になると、部活動など忙しくなったことから、遊ぶことはなかった。小6でサッカーをしたのが最後となった。

そして、高校生の時に新座体育館ができた。立教高校ではなかったが、家から見えるので気になっていた。ついにあの思い出の場所がなくなると思うと、なんだか悲しい気がした。ところが、この時新たな思いが芽生えていた。それは、立教大学に入ることであった。あの新座体育館に入ることであった。僕が体育会バドミントン部に決めたのも、新座体育館でやれるからである。ただ家から近いのではなく、思い出の場所でやれ[illegible]

入部した時、こんな気持ちで続けられるか心配だった。たしかに、授業の面でかなり苦労した。やめようかと何度も考えた。しかし、家と体育館の近さに助けられ、最後まで続けることができた。3年の時に主務を成し遂げられたのも、この理由が大きいと思う。しかし、その原動力は、思い出の場所でやれる誇りではないか。事実、いつでも目を瞑れば昔の情景が目に浮かんできた。どんなに辛いことでも、憧れによって貫き通せることを学んだような気がする。

他の大学に比べ、かなり立派な体育館。こんな施設を十分に使用できるバドミントン部は、今後さらに発展していくものと思われる。そんな部を、これからも応援していきたい。思い出を忘れないためにも。

## 出会い～そして、今～

3年
**大崎　武**

なぜ私は今、バドミントンをしているのか。理由などない。「バドミントンというスポーツが好き!」ただ、それだけだと思う。

私が初めて新座体育館に“立教大学体育会バドミントンぶうっ!”なるものを訪れたのは、♪高校三年せ～い、ぼくら～はなればなれに……(失礼っ!)高校3年の晩秋のことであった。

文学部の「指定校推薦合格者だヨ　全員集合!」に参加するべく上京していた私は、空いた土曜日の入[illegible]理由のため、独りで新座体育館へとやってきた。躊躇しながら開けたDoorの向こうには、「四国の過疎地帯の中学校か?」と思わせるほど少人数のバドミントン部があった。

「すいませ～ん、あの、見学させてください」。

おそるおそる入っていき、私が推薦で立教に決まった旨を伝えると、男の先輩が粗末な木の塊を出してくれた。どうやら椅子のつもりらしい。この先輩がプレースタイルがマニアック（人物も少々、いやかなりマニアック）なことで有名な某桑山洋典氏である。

この時私はある噂を耳にする。「福岡からも一人、推薦で入ってくるらしい」。福岡といえば、強豪ぞろいの九州の中でも特に強い県である。入部即エースを狙っていた、というより確信していた私にとって、この事実は大打撃であった。この人物が“気は優しくて、へなちょこ野郎（うそ）”大西徹である。

ちなみに入部即エースの野望に燃えていた私だったが、入部すると私の前に一枚の厚い壁が立ち塞がった。フットワークの速さとプレーがいやらしい（人物もいやらしいっ!）ことで有名な、三井邦雄氏である。「ベルリンの壁」は崩壊したが、「ミツイの壁」は、氏が引退するまで破ることができなかった。

こんな風に（えっ？どんな風に）「兄貴のような」（大西談）先輩方に教えられ、「弟のような」（大西談）後輩たちに支えられ、「六つ子のような」（大西の理論でいくとそうなるが、君たちは『おそ松くん』か？）同輩たちに囲まれて、また、「両親のような」（持論!）OB・OG諸先輩方に見守られて、私は有意義な学生生活を過ごしてきた。

特に何のとりえもない私だが、バドミントンをしている時だけは輝いていられる（思い込みが甚だしい）から、そして何より、バドミントンが好きだから、私は社会に出てもきっとバドミントンを続けていくことだろう。

## 体育会バドミントン部での存在

3年
古屋　周作

私が、バドミントンを始めたきっかけは、ドライブに魅せられたからだ。速くパンパンと打ち合う姿が気になってしまった。

中学・高校とバドミントンを続けてきたが、自分自身のバドミントンに納得がいかなかった。というよりは、自分自身の頑張りに納得がいかなかった。もっと頑張りたかった。勉強もバドミントンもしっかりやり果たしたという実感が自分の心にまったくなかったからである。

だから、立教大学体育会バドミントン部に入部した。

入部して以来、唯一の目標が「レギュラー取り」だった。そう、だったのである。

「レギュラー取り」を目標にずっとやってきた。やってきたが、自分自身が強くなったという実感がないままに、2年の秋には立教大学体育会バドミントン部は5部から4部へと昇格した。

昇格したことは、非常にうれしかった。しかし、昇格した部の中で、「自分自身が強くなった」、「自分自身が部の昇格に貢献した」という実感がわかないままの昇格に何か憤りを感じた。そのような気持ちのまま、大学生活の半分が終わり、3年になってしまった。

3年になり、主務という仕事を任され、正直、自分自身の部の中での存在位置がどのようにあるべきか、悩んだ。自分が、部の中でどのような「仕事」をしなければならないのかを「やらなければならない仕事をこなしながら」考えた。

答えが見つからないまま、夏の強化練習に入った。「主務」という立場と「プレイヤー」という立場とのどちらに重きを置いて部の中で活動し、どのように部に対して貢献すればよいのかを悩んだ。

強化合宿のときには、自分が何とか「レギュラー」を取るために、「主務」という立場をまったく忘れ、練習の方に気が取られていて、「主務」の仕事をしっかりこなすことができなかった。こなせなかった仕事のほとんどが、マネージャーにいってしまい、負担を大きくしてしまったことは確かである。しかし、その分、実力があがったのかもしれない。

その結果として、秋季リーグ戦では、入部して以来の目標であった「レギュラー取り」を達成することができ、リーグ戦に出て、勝つこともでき、部も優勝することができた。しかし、残念ながら、3部昇格は果たせなかった。

リーグ戦が終わって、3年は、最後の試合の4年の春季リーグ戦を残すのみとなってしまい、しばらく[illegible]いろいろ考える時間ができた。

その時に、思うのが、やはり、「自分自身の部の中での存在位置」であった。冷静に考えて、「自分の存在位置は、まず主務であり、そしてプレイヤーである」。それが、結論であった。

そして、主務の存在位置は、「部員全員がバドミントンのみに集中できる環境を整える」ことであり、プレーヤーの存在位置は、「自分自身がレギュラーをはって、リーグ戦で勝利する」ことであると考えた。

その2つともを満たす共通項が、「4部優勝3部昇格」である。

自分自身が自分自身の頑張りに納得するためには、「部員全員がバドミントンのみに集中できる環境を整え」、「自分自身がレギュラーをはって、リーグ戦で勝利」し、「4部優勝3部昇格」する以外にないと思う。

残された時間は、あと4か月しかない。したがって答えも、4か月後には出てしまう。だから、自分自身に納得できる結果を出すために、今は頑張っていくしかないと考える。

## 私とバドミントン

3年
**大西　徹**

私がバドミントンに出会ったのは、高校生になった時である。小・中と野球部に所属していた私は幸か不幸か野球の名門校に入学してしまった。「レギュラーとして試合に出たい」と考えた私は大好きな野球を断念し、あまり練習が厳しくなさそうな種目を選んだ。それがバドミントンである。その時の私の心の声は、「羽根つきぐらいオレでもできるさ」であった。

学校の授業の放課後、体育館を訪れ、扉を開いた時、私の目に飛び込んできたのは福岡県のトップレベルの選手が織り成すドライブであっ

た。はっきり言って私はその場で凍った。そのスピード感に。ところが私は何を思ったのか、というよりは何も考えず入部してしまったのである。

次の日から私の想像を越えた厳しい練習が始まった。素振りと声出しの練習、あとは走るだけの、バドミントンをやらせてもらえない日々が約半年続いた。チームから見ればインターハイを目指す学校に、未経験者は戦力外であった。3年生が引退し総部員数が9名となり、やっと毎日コートに入れてもらえるようになった。9名中、未経験者は私を含めて2名。また推薦生が4名いた。

そして1年間、チームの底辺を経験した。試合会場ではベンチにも入れず2階からチームメイトの応援をしたが、地区大会ではレギュラー温存でも圧勝して勝ち進んでいくチームメイトの姿が目に焼きついた。

結局、高校3年間1度も公式戦には出場できなかった。プレーヤーとしての野望は持ちつつもチームの目標であるインターハイ出場を達成するため、副将に抜擢されて2軍の総まとめ役に徹した。……つもりである。だがなぜかバドミントンがやめられなくなった。理由はわからない。ただバドミントンが好きになった。

大学が決まってからの私の野望は再び目覚めた。「レギュラーとして試合に出たい」と。入学してすぐ私の野望は達成されたが、試合で負けまくってチームに迷惑をかけた私は、「出場するだけでは意味がない。勝って初めて意味がある」と痛感した。

もうすぐ大学のバドミントン部も引退する。大学生活の8割、9割が部活だった気がする。喜怒哀楽すべてあった。高校・大学の部活を通じて成長もした。教訓も得た。これから先、"部活"は引退するが何らかの形でバドミントンというスポーツはやっていきたい。一生付き合えるスポーツに出会ったと思う。

## 体育会バドミントン部への入部

3年
**権田　謙一**

バドミントンに出会ってから、今年で7年目になる。競技としてのバドミントンを知らなかった頃は、バドミントンなんて女の子がやるお遊びくらいにしか見えなかった。というのが正直な気持ちだったのを今でも覚えています。

しかし、この考えは、実際にバドミントンをやっている人たちに言わせれば、全然違うと答えるのは、容易に想像できるだろう。私としても、ゲームの中でラリーが続いている時の運動量は、最も激しいスポーツの部類に入ると、実際にバドミントンを始めてから、つくづく感じました。

私がバドミントンを始めたのは高校からだが、特に強い人がいたわけでもなく、学校内のクラブ活動の域を出るほど盛んでもなかったので、高校3年間でそれほど実力はつきませんでした。このことは、大学でもバドミントンを続けて、もっとうまくなりたいという気持ちの要因の1つになりました。

しかし、立教大学に入学した当初は、サークルでも入ろうかと迷っていました。体育会バドミントン部への入部のきっかけになったのは、たま

たま最初に声をかけてきた同じ物理学科の高尾君に、バドミントン経験者だと話したら、一緒に入部しないかと誘ってくれたことでした。今思えば、他のサークルや体育会を見てから決めてもよかったかもしれないが、もっとうまくなりたいという気持ちがあったので、すぐに入部しました。今でもこの時の、選択はこれでよかったと思います。

体育会バドミントン部に入部して、まず最初に高校の時と違うと思ったところは、年2回、春と秋にリーグ戦があり、そのリーグにも1部から6部まであることでした。

私が入部した頃は、立教大学は5部でしたが、95年秋季リーグ戦で優勝して4部に昇格し、96年秋季リーグ戦で4部優勝を勝ち取るほど、部は強くなってきました。3年生の時点で、私は6回のリーグ戦を経験してきました。リーグ戦ではレギュラーではなかったので、ほとんど応援する立場で、レギュラーとの実力の差が開いていくという焦りもあったが、実際に応援する時には、そんなことは関係なく、ノドが痛くなるまで応援しました。仲間が勝った時には、自分のことのように嬉しかったし、負けた時には、とても悔しかった。リーグ戦の時には、まさに部一丸となって試合に臨むという表現がふさわしかった。

このような気持ちを味わえるのは体育会[illegible]らこそではないか。これがサークルなら、また違った経験を得られるかもしれないが、同じような気持ちは味わえなかったかもしれない。体育会でのこの経験は学生の時にしか得られないものである。いつか学生時代を振り返ってみた時、良かった事も悪かったこともひっくるめて、懐かしい思い出になると思う。

# 体育会バドミントン部と私

3年
**村田　将史**

「バドミントンなんで遊びでやっとればええやん」と友人に言われ、何も言い返すことができなかったバドミントン——これほどマイナーな響きのスポーツはないだろう。しかし、バドミントンほど見た目以上にハードで、奥深いスポーツもまたないであろう。

私がそんなバドミントンと、スポーツとして出会ったのはもう3年も前のことである。私はこれまでバドミントンを羽根つきとしてしか理解していなかった。それではいったいどうしてバドミントンを始めようと思ったのであろうか。正直、その理由は自分でもはっきりわからない。

私は自然と体育会に入ろうと思い、自然とバドミントンに興味を持ち、自然と入部していた。まさに自然の成り行きであったように思う。ただひとつ言えることが、練習を見に行った際に、三井先輩をはじめ相田先輩等、いろいろなキャラクターの先輩方と接し、バドミントン以上に先輩に魅力を感じたことである。

今考えると、これが私が入部した直接の要因かもしれない。

現在の立教大学体育会バドミントン部は、非常に家族的な部である。

学年ごとの垣根がいい意味で低く、先輩・後輩を問わず平気で冗談が言い合える。また、部

員それぞれに分別が備わっており、練習は練習で個々に集中できる。まさに私の考えるうえで理想的な部であるように思う。しかし、家族的であるがゆえに、現在いろいろな問題も抱えている。でも私は何の心配もしていない。何の心配もしていないというのは少し言いすぎかもしれないが、何といっても私達は日々の練習を通じて互いの結びつきを深くしているのだから。

早いもので私も今年で4年生になる。就職のこと、将来のことなど、いやがうえにも考えてしまう時期である。そんな中で、ふとこれまでのバドミントン部での3年間を思い出すことが最近増えた。私はこの3年間で、本当にさまざまな経験（主に挫折？）をし、その度に自分を見つめ直してきた。今となればすべてがいい思い出である。そして今、その経験を通して自分自身が成長したとはっきり言える。私は、これから大学を卒業し社会に出ていくわけだが、バドミントン部で得た経験は必ず役立つことと思う。まあ社会に出る前に就職活動が待ち受けているわけだが……。

その就職活動の件であるが、私にとって就職活動は不安なことに変わりはないが楽しみなものでもある。自分の希望する業種・企業なりに就職することは、私の中で大きな目標であるが、何よりも一番大事なのは自分の納得のいく就職活動を進める、ということではないだろうか。

私はバドミントン部で得た経験を生かし必ず自分の納得のいく就職をつかみ取ろうと思っている。みんな頑張ろうな。

最後になるが、今あらためてバドミントン部に入部してよかったと思える。バドミントンを通じ、加藤智浩、高尾哲夫といったすばらしい友人と巡り会えたことを感謝したい。

私はまだまだ未熟な人間だが、これからも彼らをはじめさまざまな人間に刺激され、時には引っ張ってもらって、大きな強い人間になりたい。私がこの伝統ある立教大学体育会バドミントン部の歴史の一部になり、何らかの力になれたのであれば光栄である。

## 己れの中の1つの The End

3年
**加藤　智浩**

Thrive on challengeチャレンジを糧にして、成功を勝ち取る——。NFL（プロ・アメリカンフットボール）のトップスター、ムーンのこの言葉が自分に妥協心が生まれ出ようという時に痛烈に胸をつきさす。

チャレンジなき者は、今すぐフィールドを立ち去れ。闘争心なき者は、うちに帰って今後の身の振り方でも考えろ。そんな叫びが自分にぶつかってくる。

自分とバドミントンとは、つねに絶対的な存在である。バドミントンを奪い取った自分は考えられず、自分という存在をなくしたバドミントンも考えられない。

しかし、最近自分の中に確立されていたこの考え方が変わりつつある。

つまり、バドミントンに対して「クール」に接するようになってきた。自分にとって絶対的な位置に存在しなくなり、それに代わる自分を向上させるものを見つけることができたためである。

だからといって、バドミントンを見限ったわけではない。今の自分の中にある勝利への執念、耐えることから学べるもの、己れを磨くことから得られるもの、そういった自分の財産というべきものをバドミントンからいただいたことを感謝している。

あらゆるスポーツにおいて同じことが言える。「困難に身を置き、チャレンジする精神を最高に高めたうえで、得ることができる大いなる成功は誰にも汚すことができない自分の財産である」と。

バドミントンにチャレンジする自分という人間を客観的に観察すると、とてもはがゆく感じたり、もっとうまくやれるだろかと感じたりして、どうすべきか悩んだりする。

しかし、そんな不器用な自分を見捨てようと思ったり、情けなく思い半ばあきらめようと考えたことはない。それどころか、自分ながら「かっこいいぜ」とか「自分らしくしていいじゃない」といった具合に前向きに考えたりしてしまう。

生涯を通して、自己の中に目芽えるきっかけとなる「もの」を得る時期というのは、数少ない。その時を逃がしてしまったら、二度と出会えないかもしれないし、再び出会うチャンスをつかむことができるかもしれない。実際には、自分自身気づかぬまま時を過ごしてしまうことが多くある。

高校時代にバドミントンに出会って、大学生活4年間で得たもの、またこれから得るだろうというものは尊大なるものであると受け止めている。

立ち止まったままでは、人は何も得ることはできない。チャレンジする精神をもって前へ前へと突き進むことができたら、必ず何かがその先にある。

バドミントンはもう卒業である。次のステップにもある果てしない困難に立ち向かうため、もう卒業すべき時だと己の中に認識した。

# 私とバドミントン

3年
**高尾　哲矢**

私がバドミントンに出会ったのは、中学校の部活動の練習を見た時が初めてでした。それまでは、遊びぐらいでしかバドミントンをやったことがなく、バドミントンがスポーツとして成り立っているということさえ知りませんでした。

また、私はもともとぜんそく持ちで、子供の頃から体が弱く、運動はあまり得意ではありませんでした。そしてその時は、バドミントンというのは、それほど激しいスポーツではないと思っていてそんな気持ちから、バドミントン部に入部しました。

しかし、いざ入部して練習が始まると、コートに入れることはほとんどなく、毎日筋力トレーニングやマラソンばかりでこれで、あまり運動をしていなかった私には、とても厳しいものでした。また先輩もとても恐く、その当時は、練習をするたびに、早く退部してしまおうと思っていました。そうこうしているうちに、3年の先輩達が引退し、やっとコートに入ってシャトルが打てる時期になりました。そしてその時に初めてバドミントンというもののおもしろさを知り、だんだん夢中になっていきました。そしてそれから2年間と

ても楽しく部活動に取り組み、そこそこの結果も残して中学でのバドミントン部の部活動を引退しました。そしてこれからもバドミントンを続けていきたいと思いました。

しかし、自分の入った高校にはバドミントン部がなく、家から学校までが遠かったということもあり、部活には所属せず、バドミントンは、たまに中学の時の部員達と遊び程度にやるぐらいで、体はだんだんなまっていき、ぜんそくの発作もたびたびおこすようになってしまいました。

そして、大学になんとか受かり、大学では何をやろうかといろいろ考えました。そして入学式の日に、あるサークルに勧誘されたのですが、たまたまそのサークルの出店の前に体育会バドミントン部の出店があり、何となくその出店を訪ねてみました。そしていつの間にか入部していたという感じでした。

しかし高校の時に体がなまりきっていて、中学の時のバドミントンの経験はまったくといっていいほど残っていませんでした。はじめは筋力トレーニングなどの練習の厳しさについていけず、かなりつらい部活動でした。しかし先輩はいい人ばかりで、同年代の人もいい人ばかりだったので、ずっとこの部活動を続けていこうと思いました。

そして気が付いたら、もうすぐ4年間になって引退がすぐ目の前という日になっていました。今までを振り返ってみると、レギュラーには遠い存在でしたが、とても充実した部活動だったと思えます。この部活に入って本当によかったと心からそう感じます。もう残りの練習も少ないですが、最後まで気を抜かず練習にはげみ、気持ちよく引退の日を迎えたいと思います。

## 私のバドミントンに対する意気込み

2年
**加藤　治**

私がバドミントンを始めてから5年が経ちます。その間、何度もやめたいと思ったことがありました。しかし実際にやめなかったのは、部の諸先輩方や、仲間たちに励まされてきたからだと思います。

1週間のつらい合宿は、部の雰囲気をひきしめ、リーグ戦への意気込みを強めました。そして部の団結力を強め4部昇格という、念願の目標を果たせたことは、私の大学生活の中でかけがえのない思い出となりそうです。しかも、バドミントン部創立50周年にあたってこのような快挙を成せたことで、花を添えられたことを大変嬉しく思っています。次の目標である3部昇格に向かって、一致団結し、慢心することなく、努力を重ねていきたいと思います。

体育会で部活を続けていくことは、大変なことかもしれません。特に一般の人が思い浮かべる、「大学生は遊びまくっている」というイメージからは大幅にずれていると思います。

たしかに、大学生活は学校生活の中で、一番自分の思いどおりの生活ができる時期です。「社会に出る前の猶予期間」であるとも言われています。学生たちには、自分の生活を自由に組み立てられるという、いままでの学校生活になかった自由が与えられるのです。この自由が、実は

一番やっかいなものであります。この自由は「すべてを自分で決め、そのすべてに責任を持つ」ということなのです。この自由を受け入れることは大変難しいことだと思いますし、4年間を有効に使うか無駄に浪費するかは自分次第なのです。

私は、この4年間を有意義に使うにはどうしたらよいのか考え、あえて体育会に入りました。

大学生活は誘惑の多いところです。周りにはサークル活動やバイト、その他で楽しそうな友人達がたくさんいますし、飲み会などの誘いもきます。その誘いも断って、新座へ部活にいくのはハッキリ言ってつらいものがあります。

夏休みや春休み、旅行にも行かずに連日部活にでるのは憂鬱になる時もあるし、ついさぼってパチンコにでも行ったほうが楽しいのではと思うときもあります。しかし、部活に出るとそんな考えは吹き飛んでしまいます。部活中の真剣そのものの練習風景を見ると、いままでのなまけ心はなくなり、バドミントンに集中してしまいます。

私はバドミントンが大好きです。世間では卓球とならんでややマイナーなスポーツという印象を持たれがちで、オリンピックでもあまりテレビ放送されませんでした。しかし、これほど奥が深く、バドミントンには技術を磨く楽しみがあります。今までできなかったショットができた時の喜びは、普通に生活していては決して味わえないものがあります。私はこの喜びを味わうために地道な努力を積み重ねているのかもしれません。

大学生活もあと2年となりました。今年は幹部学生としての自覚を持って、残りの部活を全力で頑張ろうと思っています。

## 今、バドミントンについて思うこと

2年
**伊藤　信昭**

私が初めてバドミントンと出会ったのは、高校に入学してからでした。まだどのクラブに入るかも決めていなかった私でしたが、バドミントン部を見学した際に（ちょうどその時はダブルスのゲームをしていたのですが）そのスピード感あふれるラリー、2人の先輩のコンビネーション、そして何より先輩方がとても楽しそうにプレーしている姿を見て私も興味を持ち、やってみようと決めました。それからもう4、5年たちますが、私は立教大学に入学し、縁あって今このように体育会バドミントンにお世話になっております。

大学生活とは、今までの生活の中で最も自由な時間を持つことができ、そして自分の興味のあること、あるいは挑戦したいことに対して、その可能性や機会が最も多く与えられている時期であると私は考えます。しかし、自分で何かをやろうとすることは、ただ人から与えられたことをやるよりも、エネルギーを必要とし大変なことです。たえず不安感と焦燥感がつきまとうものです。そのため自由という名のもとに他方でこれを放棄してでも他人との同一性を求めがちになり、自己主体性がなくなってしまう面も持ち合わせています。その結果、何もせずにただ過ごしてしまうことになりかねません。

このように大学生活は、エーリッヒ・フロムの言葉を借りて言うならば、「自由の多義性」が内在

しているように感じられます。そんな中で、私は4年間を充実した生活を送るために、何か一つのことに挑戦しようとあれこれ悩みました。そして、バドミントンを再びやろうと決意しました。自分の可能性に挑戦してみたかったからです。

大学でのバドミントンは、今までに私が持ち得ない考え方を教えてくれました。それは、とても構想力に富み、創造性や意外性のあるもので、私が高校3年間で作り上げたバドミントンというものの概念を180度変えるものでした。あらためてバドミントンの奥の深さを感じ、今では当初よりもさらにうまくなりたいという気持ちでいます。

他方で大学のバドミントンは、たしかに肉体的、精神的強さや、技術の向上を促してくれますが、特に私が感じることは、いろいろな方々と接する機会を与えてくれるということです。

OBの皆様をはじめ、多くの人と知り合うことができました。特に他の大学の方々には、練習試合やそれ以外の時も立教大学の練習に来ていただき、いろんなプレーを学ぶなど良い経験になりますが、その他違う分野においても自分の社会的視野を広げてくれます。また高校時代の先輩とバドミントンを通じて再び出会うことができ、地区の大会への参加や練習などお世話していただきました。

そして久しぶりに地元に帰った時は、昔の仲間、先輩、御指導いただいたコーチなどに会う機会にも恵まれるなど、バドミントンを通じてできた輪というものに感謝しています。

最後になりましたが、私はこのような機会を生かしつつ、残された大学生活の中で自分に甘えず厳しく鍛えて充実した日々を送りたいと思います。また、この4年間の経験を将来自分が進んでいく道に反映させていくことができたらと考えています。そして生涯スポーツとしてバドミントンが続けられ、さらに多くの人々と触れ合うことができればこのうえない喜びです。

## 私と体育会バドミントン部

2年
**細川　雅史**

今年、我が立教大学体育会バドミントン部は50周年を迎えるわけだが、私がこの部に所属しているのは本当に偶然である。

私は高校からバドミントンを始め、その魅力の取りつかれた。しかし、根っからの練習嫌いで、顧問もいなかったことから、ゲーム練習ばかりしていた。大学に入ってもバドミントンを続けたかったが、そのせいもあって、体育会でやっていく気はなかった。

入学式当日、サークル紹介のパンフレットを見るとバドミントンサークルが1つも見当たらなかった。しかし、バドミントンを続けたいという気持ちが強かったので、恐る恐るではあるが、体育会バドミントン部の出店へ向かった。そこには私が思い描いていたような重苦しい体育会のイメージはなかった。そこで私は入部を決意した。

数日後、実はサークルが存在していることを知った。

# バドミントンと友情

1年
**金田　秀彦**

私が立教大学バドミントン部に入部してから、もうすぐ1年になる。この1年を振り返ってみると様々な出会いがあった。同期の古謝、山田、川村はもちろんのこと、入学当時、主将を務めていた島崎先輩や現在の主将である大崎先輩をはじめとする諸先輩方、リーグ戦や練習試合などで交流を持った他校のバドミントン部員、同立定期戦で戦った同志社の部員、そして監督やコーチの方々やOB、OGの方々である。

バドミントン部に限らず、体育会の練習はハードである。また、練習時間も夕方から夜までででバイトや友達との遊びも制限される。さらに夏休みには合宿や練習などで、普通の大学生のような2ヵ月半の休みなどもってのほかである。そのような辛い体育会になぜ所属しているか？　その答えは僕の場合は、ズバリ友情である。バドミントンが好きなのは言うまでもないが、苦しい練習に耐えて頑張ることができるのは、励ましてくれる友達のお陰である。

高校のバドミントン仲間とは今でも仲良く、一生の友になると思う。立教大学においても同期の3人、古謝、山田、川村とも体育会を通し友情を培い、一生の友となれることを望んでいます。

# 今までを振り返って

1年
**小林　あや子**

私がバドミントンに出会ったのは中学生の時でした。バドミントンなんて羽根つきみたいなものだろうと軽い気持ちで入部したものの、実際はとてもハードなスポーツで、運動神経のない私にとってはとても辛かったのです。

それでもなんとか3年間やりとげ、今ではとてもいい思い出となりました。高校時代はバドミントンを離れ、漕艇部のマネージャーをしていました。掃除と洗濯が主な仕事で、競技に関するお手伝いはできませんでしたが、試合の時はプレーヤーと一緒に勝利を喜び、敗北を悲しむことができました。プレーヤーも私を部員の1人として同等に扱ってくれました。3年間マネージャーをやってみて、こういうスポーツとの関わり方もあるんだなと感じました。

大学生になって、何をするか決めぬまま、とりあえず大学に行ったらサークルや部活の勧誘の嵐で驚きました。最初にバドミントン部に誘われた時は、中学生の時の苦しい思い出がよみがえり、心の中で[illegible]と思いました　でも先輩方と話しているうちに、プレーヤーは無理だけどマネージャーならいいかなと思い始めて、練習を見に行くことにしました。

初めて練習を見た時のことを今でもよく覚えています。それまで中学の女子のレベルしか知らなかった私は、大学の男子のプレーを見て圧

倒されてしまいました。今までに見たことのない速さと音のスマッシュに感激し、入部することを決めました。

マネージャーが今までいなかったということで、仕事も決まっていなくて、最初の日は、何をすればいいんだろうととまどいました。結局、先輩方が気を使ってやることを指示してくれたので何とかやることもわかってきました。

入部してすぐに春のリーグ戦があり、先輩方のいつになく真剣な表情や白熱した試合を見て、この部活に入って良かったと思いました。でも慣れてくると、私のように気のきかないマネージャーがいる必要があるのかなどと考えてしまい、女子部の試合を見に行った時は、同性の仲間がいることをとてもうらやましく感じました。男子バドミントン部の中で私の存在が浮いているような気がして、退部も少し考えました。でも、私が雑用をする分、プレーヤーが練習できる時間が少し増える。1日単位で見れば小さなことだけど、それが続けば大きなことだよ、とある先輩に言ってもらって迷いがなくなりました。

スポーツをしている側の人から見れば、マネージャーなんて物足りないだろうと感じるのかもしれません。実際よくそう言われます。でも私はシャトルを渡した時、モップをかけた時、プレーヤーが何気なく言ってくれる「ありがとう」や「ご苦労さま」を生きがいにこれからもがんばっていこうと思います。

## 私とバドミントン

1年
**川村　典史**

私がバドミントン部に入部したのは入学してすぐではなく、6月の頃でした。それまでは、どこの部、サークルにも所属せず、勉強だけの毎日でした。しかし、心のどこかでこんな大学生活でいいのかと考え始め、何か勉強以外で一生懸命打ち込めるものを見つけようと思い、以前からバドミントンに興味があったので、バドミントン部に入部することにしました。

バドミントン部に入って、バドミントンをやるだけでなく、先輩との接し方、友達とのつき合い方を体験し、勉強した。また、途中から入部した僕に、先輩方や1年生の友達はいろいろとアドバイスをしてくれてとても感謝しています。

まだ初心者なので見ること、やることがとても新鮮で、今ものすごくやる気があります。特に、シングルスのゲームが楽しくてもっと強くなりたいと思っています。昨年の夏合宿はケガで棒に振ってしまったので、今年はケガのないようにがんばりたいと思います。

## 私とバドミントン

1年
**古謝　将史**

私がバドミントンを始めたのは、中学に入学し

てすぐのことで、始めたキッカケというのも、太っているからやせたいというささいな理由からであった。それからもう7年がたとうとしている。この文を書くにあたって、どうしてこんなに長い間、私はバドミントンを続けていくことができたのか、ということについて考えてみることにした。

まず、バドミントンが好きだ、ということももちろんあると思う。しかし、つらい練習や放課後や休日のほとんどの時間を練習についやさなくてはならないというリスクを考えると、好きだ、という感情だけがこれだけ長い間、自分を支えてきたとは思いない。

バドミントンには2つの大きな魅力があるという。まず、誰でも簡単に楽しめる手軽さがあること。ラケットとシャトルさえあれば、親子でも楽しむことができる。男の人も女の人も、バドミントン程度ならば、大人になるまで一度は接する機会があるだろうと思う。これが1つめの魅力である。

もう1つの魅力とは、真剣に取り組んだ者にしかわからない競技としてのバドミントンの本当のおもしろさである。そのスピード感は他のスポーツにも勝るとも劣らないであろうし、スマッシュを打ち込んだ時の快感や、粘りぬいて相手に打ち勝った時の喜びは、一度体験すると抜けられなくなるほどの魅力を持っている。

なぜ私はここまでやめずにこれたのか、どうやらその答えはこの2つ目の魅力に魅せられてしまったからのようである。一度ハマッたら抜けられないバドミントンの魔力にとりつかれてしまった、私にはそうとしか考えられないのである。

高校時代には沖縄県代表としてインターハイも経験したし、またそれだけの努力もしただろうと自負している。それでも、受験期間の間しばらくバドミントンから遠ざかると、もうあんな苦しい練習はしたくないと思うようになってしまった。他にもまだまだやりたいこともあるし、大学に入ったら何か違うことをやってみよう、そう思いながら立教大学への進学を決めた。それなのに、私は今、立教大学バドミントン部に在籍している。これはもう、とりつかれてしまったからだというほかはあるまい。

今、大学に入学して1年がたとうとしているが、振り返るとあまり充実していた感じはしない。何もかもなんだか中途半端だった。部活に打ち込んだ感じもしないし、勉強や遊びもそこそこだった。高校時代、部活一筋だった頃の方が充実していた感じがする。でも大学に入学して"自由"というものの難しさを学んだ。今考えると、部活だってあれこれ何か言われてやっていた時の方が何も考えずに強くなれたようだ。サボッたって誰にも何も言われない状態で強くなるというのは本当に難しいことだと思った。

今年はもう少し、気合いを入れてバドミントンに取り組んでみようと思う。別に大学のためにとかそういうんじゃなくて、自分のために、うすれかけている勝つ喜びを取り戻したいと思う。苦しくても、それに勝るなにかがそこにあるのだということをもう一度、思い出して。

## 私の思い出の試合

4年
**兼子　佳子**

卒業を間近に控え、現役でもありOGでもあるような私が、部での出来事を振り返るとたくさんの思い出があるのですが、その中でも特に忘れられない大切な思い出となる試合があります。

それは、私が3年生の時の秋リーグ対横浜国立大戦のダブルスの試合です。この試合は私が1年生の頃からずっとダブルスを組んできて、入部してからずっと目標としてきた先輩との最後の試合でした。

対戦相手はそれまでそのリーグで全勝していたダブルスで、私たちも同様に全勝していましたが、試合前の練習を見る限りでは圧倒的に相手の方が上で、相手チームも勝利を確信している様子でした。

しかし、私には先輩の動きがすでに頭の中にあり、先輩を見なくてもコートのどこにいるのかがわかるぐらいになっていましたし、恐らく先輩も同じように私の動きをわかってくれていると思っていましたので、ショットは相手の方が上でもコンビネーションの良さで絶対に勝てると信じていました。

試合は女子部・男子部のみんなが見守る、緊迫した雰囲気の中で行われ、点差の開かない接戦となりました。そして1セット目は私たちが、2セット目は相手が取り、結局3セット目を私たちが取って勝つことができました。

私はこの試合中、どうしても勝ちたいという思いが強くあり、また多くの人が見ているということもあって、とても緊張していたのですが、最高のパートナーと組んで最高の相手と試合ができたということで、不思議と「楽しい」という思いがずっとありました。試合に勝った瞬間の光景や気持ちは、今でもはっきりと思い出すことができますし、今後もずっとこの試合を忘れることはないと思います。

中学・高校と続けてきたバドミントンを、大学では続けるのはやめようと当初考えていたのですが、結局やめないでまたバドミントン部に入部し、良い指導者・良い先輩・良い友人に出会い、たくさんの思い出を作れたことを、今では本当に良かったと思っています。今後もずっと部には存続していってほしいと思いますし、部で出会った仲間とは、いつまでも付き合っていきたいと思っています。

## 最後のリーグ戦で感じたこと

4年
**松本　愛子**

試合前から気持ちが高ぶっていた。最後のリーグ戦でプレーできる喜びなのか、試合に対する緊張なのか、何とも説明できない思いで胸がいっぱいだった。これではまともに試合ができない、とユニフォームに着がえながら何度も深呼吸を繰り返し、冷静になろうと努めたが、どうにも抑まらない。

大学4年間という長い月日の時空を越えて、部

活の中で抱いてきた数々の思いが胸に込みあげてきた。

新座体育館で、初めて競技バドミントンというものを知った時の感動、両足首をテーピングでぐるぐる巻きにし、かろうじて1週間を乗り切れたとしか思えない1年次の夏合宿、早くうまくなりたいという焦りが先走り、力が入り過ぎて悪戦苦闘していた日々のこと……

今思えば私の大学生活は、調子の良い時も悪い時も、またオフの時でさえバドミントンのことがつねに重く、頭から離れることがなかった。

この4年間分の価値にふさわしい試合ができるのだろうか。そんなことを考えながら仲間と目を合わせるとすべてが解き放たれた気がした。不思議なことに、その試合では、それまでの試合で時折感じたことのある焦りのようなものから一切解放されていた。周りの応援もまったく聞こえず、自分達だけのバドミントンに集中できた。

この試合が最後で、バドミントン部を引退した。

自分はこの4年間でどう成長したのだろうか。いろいろな意味で成長したことはたしかだが、これを言葉にするのは難しい。しかしそれでいいと今は思っている。もし言葉にするなら、これは単なる思い込みに過ぎないのかも知れない。ただ今の私が確信を持って言えることは、素晴らしい人生の助言をくださった監督や多くの先輩方に感謝し、良き友に巡り会えたことを幸せに思い、そして自分は4年間この部に在籍してきたという自信と誇りを持って、卒業後の人生も頑張っていけるということだ。

「愛ちゃんと釜ちゃんの試合中、涙が止まらなかったよ」

最後の試合を終えた後の仲間のこの一言を、私は一生忘れないと思う。彼女達がどんな思いで私達の試合を見ていたのかわからないが、思うようにいかず思い悩んだ日々の連続だった、私の体育会バドミントン部でのすべてを肯定してくれる言葉だった。

仲間が一緒にいたからこそ頑張れた4年間であり、厳しい練習を共に乗り越えている仲間の存在が私の励みであり、また救いだった、と今でも感じている。

## 4年間を振り返って思うこと

4年
**大久保　麻子**

バドミントン部に入部して早、4年がたちました。この4年間を振り返ってみると、本当に様々なことがありました。リーグ戦や合宿など思い出に残る行事は多くありますが、私にとっては、同学年の友人達のことが何よりも思い出されます。

正直に言って、最初の頃、私はこの3人とうまくやっていけるのか心配でした。3人ともうらやましいほどの個性があって、3人の中で私は埋もれていくのではないかと思ったからです。自分の[illegible]というものに悩んだ時期もありましたが、今では少しいい思い出です。集団の中での自分の個性や役割に気付けたことが、自分を変えてくれたなと思っています。また、バドミントンの方でも、3人の存在が私を練習に駆り立ててくれました。そして試合の時はいつも応援が心強かったです。

特に4年生の春のリーグ戦の時、私は皆のパワーで、自分の力を出し切ってやれました。あの時ほど、応援がありがたかったことはありません。このように力強い友人に囲まれていたので、私は合宿中いつも安眠することができました。こう振り返ってみると、3人には非常にお世話になっていますが、いつもジャンケン負けてあげているので、5分5分ということにしてほしいと思います。

良い友人に巡り会え、先輩や後輩に恵まれ、監督さんをはじめとするOB・OGの方々と知り合えたこと、どれも私にとっては貴重な体験であり、幸運なことでした。これからも、このような貴重な体験をさせてくれるバドミントン部であり続けてほしいと願ってやみません。

## 部員の温かさを感じた時

4年
釜范　日女子

4年間のバドミントン生活を思い出すと数々の忘れられない場面がよみがえってくるが、その中でもとりわけ印象に残っているのが最後のリーグ戦だ。

私達4年生にとって最後のリーグ戦の最終日、午後の試合だった。第1ダブルスが終わり「次メンチェンで2人でダブルス出て」と言われた時、一瞬耳をうたがった。一つでも多く勝ちを取りたいといううちの大学であるのに、自分たちが試合に出ていいのかと思ったからだ。「絶対大丈夫、勝てるって」、「先輩頑張ってください」などと周囲に励まされながらコートに立つ。

2人のコンビネーションは入部当時からしばらく練習も一緒で、新人戦も2人でダブルスを組んでおりお互い息は合っていた。しかしそれでも久し振りに試合のコートに立つと、妙な緊張感からまるで地に足が着かず、宙に浮いているような感じがして落ち着かなかった。

ベンチからの応援に背を押されるように、あっという間に1セット目は終わっていた。

2セット目はもっとスマッシュを使って攻撃的にいこうと2人で言い合ったことまでは覚えているが、その後のことはほとんど覚えていない。いつの間にか「ラスト1本」の声がベンチから聞こえ、2人で「最後はビシッとスマッシュ決めようね、ビシッと」と言って2人でニヤニヤ笑っていたような気がする。(しかし現実はアウトジャッジによる15点目だった……)

勝った瞬間は「やったぁ勝った、勝っちゃったよ」という気持ちでいっぱいだった。ベンチで私達を拍手で迎えてくれるみんなの笑顔がとても温かかったのを覚えている。その日の試合の様子は今でも脳裏に焼き付いて忘れられない。第1シングルスがファイナルまでいく見応えのある試合で、ベンチで応援していた私は、絶対主将は勝つと信じていながらも内心ハラハラドキドキしていた。接戦の末見事に立教が勝ったが、あとで主将と話をしたとき、どうしても彼女がその試合に勝たないと第2ダブルスでメンチェンができないと思ったから必死だったというのを聞いて、涙が出そうなほど本当に嬉しかった。

試合に勝った嬉しさよりも、部員みんなの優しさと、実際試合で勝てる実力を備えた部員に囲まれてバドミントンができたことが何よりもずっ

と嬉しかったことは、きっといつまでも忘れられない思い出になることだろう。

## 協力することの大切さ

3年
高野　直子

バドミントンという競技を通して、はかり知れなく多くのことを学ぶことができたと思う。バドミントンに対する知識がついたこと、同じバドミントンを通して多くの人と出会えたこと、そして出会うことによってさまざまなことを吸収できたことはいうまでもないが、なかでも特に仲間と協力し合って目標を遂げるということを、我がバドミントン部から知ることができたと思っている。

現在、他部でも問題となっている立教大学体育会の部員低迷は、我が女子バドミントン部においても例外ではなく、部員数は多くても10数名、少ないときは5、6名といった状態で、部はつねに少人数を保ってしまっている。

しかし、人数が多くても少なくても、全部員が目標に向かって協力し合うということの大切さにかわりはないのだが、にも関わらず私はその重要さを忘れがちであった。あくまで個人競技のこのスポーツの中で、試合に勝ちたいのなら部員個人が個々に頑張らなければいけないものだと思ってきた。

もちろん個々の努力とやる気が必要不可欠なのは当然ではあるが、もっとほかにも必要なものがあると気付いたのは、自分が、ほかの部員がどんな目標を持っているのかを理解し、1つの部として部員をまとめていかなければいけない立場についてからだった。

自分は女子部の同学年に恵まれなかった。そんな自分を支えていたのは、先輩方や男子部、そして後輩たちであった。私は後輩たちが入部をすると自分は頑張らなくてはという気持ちが先走るばかりで、先輩方や後輩たちのことを理解しようとしたわけでもなく、自分がほかの部員のために何ができるのか、自分自身のために何ができるのか考えていなかった。

3年生の春に主将を命じられ、人数こそは少なくても複数の部員がそれぞれに自分のことばかり考えて練習に取り込んでいては、それは部としての単位で活動していることの意味をなさないのに気がついた。

複数の部員を1つにまとめ、全員が同じ目標を持ち、同じだけその目標に執着することがどれだけ大事なのか、ということに嫌でも気付かされたのである。

他人と協力して目標を達成するということの大切さはバドミントンの世界に限られたことではないのではない。まったく異なった個性をもつ複数の人間が同じ目的を達成するには、協力するということが大切なのであると知った。

自分の持っている力で自分が全体に対して、あるいは他人に対して何ができるのか、自分ひとりでは知ることができなかった、協力するということの大切さを、チームメイトからバドミントンというスポーツを通して学ぶことができたのである。

# バドミントンを通して

2年
東　知愛子

私がバドミントンを始めたのは中学1年生で、学校の部活動でした。仲の良かった友人の誘いと先輩方の雰囲気に魅かれてバドミントン部を選びました。何か新しいことを始めようかと迷った末に、やはり高校でもバドミントンを選び、大学でも選んだのは、六年間続けてきたけれども、もっとしっかりやってみたいという思いからでした。

中学・高校とやってきたわけですが、いずれも部活動に力を入れているわけでなく、バドミントン部もまた然りで、2回戦進出が目標のような学校でした。だからというのも何ですが、私自信、練習に取り組む気持ちは、何らかの試合や大会を目指してというよりは、その日、その日与えられた目の前のメニューをただ一生懸命こなそうというものでした。

ところが、大学にはリーグ戦というものがあり、毎回の練習は最終的にはリーグ戦で良い成績を残そうとするためにありました。私はその中で、レギュラーになれない悔しさや勝てない苦しみを味わい、強くなりたい、試合で勝てるプレーヤーになりたいと思うようになりました。しかし、技術面の伴わない私は、その気持ちが逸るばかりで何をどうしたら良いのか、頭の中が真っ白になってしまうことがしばしばです。技術面以上に精神面において多くアドバイスを受ける私の課題の一つは試合で技術と同様に重要な「精神力」の強化です。私は、この「精神力」が、努力と経験から生まれることを教わりました。

自分はこれだけ努力したんだ。これだけやったんだ、ということが大切なのだ。それが自信になるはず——。

中学や高校時代の目の前の練習をひたすらこなしていこうとする私の気持ちは間違いではないけれど、足りないのは、それを最後に自分の中で自信につなげられるかどうか、また自信につなげるには、量だけでなく質が重要であることを学びました。

友人の誘いと先輩に魅かれて始めたバドミントンは、今も、先輩方や同輩・後輩に支えられて続けることができ、学ぶことも多々あります。バドミントンを通じて学ぶことは、決してプレーの中だけにいえることではなく、これから私が生きていく中での指針、迷った時の糧になることと思います。

# スポーツとしてのバドミントン

2年
八木　智子

小学生の頃、兄と「何回羽を続けて打てるか」を楽しみに遊んでいた。ラケットの握り方も振り方も関係なく、ただ「羽」を打ち続けていた。それが風に吹かれて変な方向に飛んでも、一生懸命追いかけて打ち返した。

中学から部活動として取り組んだ「羽」を打つことから「シャトル」を打つことになった。ラケッ

トの握り方も振り方も先輩に教わった。体育館の中のコートの動き方を知り、試合をするようになった。当時もただ「打ち返す」だけで、試合に勝ちたい気持ちは特になかった。高校でも続けたが同じことだった。単なる課外活動だったのだから。

1年の浪人の末、本当に自分がやりたことを選べる世界に私はやってきた。いろいろ悩んだ末、私が選んだ大学生活は「バドミントン」だった。今まで誰かに言われてなんとなくやっていたのが少し物足りなく感じ、それならば今度は自分から選んでやる、だったら体育会で自分を試してみようと思ったのであった。

「体育会は厳しいもの」という認識が当然あったが、実際に入部してみると自分でも何とかついていけるものだった。始めにそう思っていた私はまだまだ甘かった。先輩に言われたとおりに練習しても、「たるんでいる」と叱られ、きちんと練習しているはずなのに試合では負けてばかり。そんな辛い状況から逃げ出そうともした。しかし自分で選んだことは途中で投げ出したくない、の一心で続けた。

実は私は体育会の部員であること自体に満足していて、実際の心構えは高校時代までと変わらなかったのだ。しかし先輩達からは「自分たちは真剣にバドミントンというスポーツに取り組んでいる」という、気迫というか、プライドのようなものを練習、試合から感じられた。それが私にはなかったことに気付いて以来、スポーツとして真剣にバドミントンをとらえ、先輩たちの気迫に負けないように懸命にプレーをするようになった。

私は今まで多くの試合を通じて、他大学の友人を得られた。大学で同じ授業を受けている友人に比べて会える機会は少ないが、彼女たちに強いつながりを感じる。それはお互いに「真剣にバドミントンをしている同じ仲間だ」という意識があるからではないだろうか。当然そのことは、今のバドミントン部の先輩、後輩、同学年の仲間にも通じている。

大学でもバドミントン生活もいよいよ折り返しになった。真剣に取り組める時間はもう残り少なくなりつつあるのだから、これからも自分に納得できるように、満足した結果を残せるようにがんばっていきたい。

## 私とバドミントン

2年
**荻野　裕美子**

私がバドミントンを始めたのは、高校に入学してから部活動としてである。しかし、その時は、1年半しかやらなかった。その後大学に入学するまでは、運動らしい運動を行っていなかった。

大学入学の時点ではバドミントンをやろうとは思っていなかった。ただ漠然と運動をしたいと思っていただけである。自分の中で運動をするのなら、きちんとやりたいと思っていた。その時に先輩から電話でバドミントンをやってみないかと言われて、話を聞き、入部することを決めた。中学校の頃に厳しい部活動に参加していたので、体育会に入ることには抵抗はなかった。

大学に入って部活を始めて2年ぐらいの月日

が経ちますが、自分では本当に徐々にであるが成長しているのではと思う。高校で1年半やっていたけれどもほとんど遊び感覚でやっていたので、少し打てるという状態でした。

1年目のときは、ただただ与えられたことを行うことで精一杯であった。最初のうちは自分の動きなど関係なく、打つことだけで必死であった。徐々に自分の動きなども考えられるようになっていった。相手の動きを考えて自分の意志で打てるようになったのは、本当にごく最近のことである。

大学に入ってから、シングルスやダブルスの試合に何度か出ていますが、初めてのときは、できるだけシャトルを拾い、相手のコートにシャトルを返すということだけで精一杯であった。ふだんの練習やゲーム練習や試合などを重ねていくうちに、試合のときに自分の打ちたいところや相手のいないところに打てるようになってきた。冷静な目をもって、試合に望めるようになった。しかし、相手の動きを推測して、打つなどと言った高度なことはまだ全然できていない。息づまってしまい頭が混乱してしまうことが多々あるが、自分が少しずつであるが上手になってきているので、バドミントンを行うことが今は楽しくなりつつある。

大学でバドミントン部に入部することによって、だけではなく、人間関係を学ぶことができたと思う。中学校・高校などでは、親しい友達を作るなどといいう人間関係を築くことは、どちらかと言えば、容易なことと思う。大学に入ってから、このような人間関係を築くのは難しくなってくるのではないだろうか。その中で、部活に参加することによって築くことができた。さまざまなことを一緒に体験することができるから、このような関係が築かれるのであると思う。

これからも、バドミントン部で築いた人間関係も大切にしていきつつ、精神的にも技術的にも向上できるよう頑張っていきたい。さまざまなことを得ていきたいです。

## 大学生活とバドミントン

2年
**岩城　葉子**

私は大学に入学してから、授業以外での活動——その時はサークルのつもりでいたはずなのですが——は何をするか、とても迷っていました。というのも、高校生の時にやっていた器械体操を続けるつもりでいたのですがサークルはもちろん体育会にも女子器械体操部がなかったのです。

何をやりたいか、を考えると正直なところ体操以外には思いつかず、何にも所属しないでいいとも思っていました。しかし中学・高校とずっと運動部で体を動かしていたこともあり、何か運動したいという気持ちからサークルを捜しました。そして、どうせやるなら真剣に練習に取り組んでいるほうがよいと思ったことと、母親が家の近くの小学校の体育館でバドミントンをやっていたことから興味を持ち、見学に行きました。

その時の印象は、先輩方が自分に厳しくまた一生懸命に頑張っているという自信に満ちていて、生き生きとしているように見え、個人が自分

というものを確立していながら、部という集団としてもまとまっていると感じました。バドミントンという種目に魅かれたのと同じぐらいに、立教大学女子バドミントン部で活動している人に魅かれて入部したいと思いました。ただし大学から始める、まったくの初心者が体育会でついていけるのかという大きな不安を抱えていましたが…。

入部した4月は部活動は、春のリーグ戦に向けての練習メニューでしたので、私は壁際で素振りをするだけで、皆のフットワークを見てとてもうらやましく、早く動けるようになりたいと強く思ったことを覚えています。一番嬉しかったのはフットワークを教えてもらった時で、ようやくバドミントンをやっているという実感が湧き、自分でも少し進歩したかなと思えました。でも実際のところは、ランニングでは息切れで苦しく、基礎打ちの途中でもうフラフラになり、家にたどりついて倒れて寝るだけの生活がしばらく続いていました。

しかしどんなに疲れても、運動する楽しさと気持ち良さで部活中心の生活によって、結局は規則正しく充実した大学生活を送っていることに満足できました。

そしてこの部活に入部して一番の財産は、たくさんの素晴らしい人に出会えたということです。OB・OGの方々、先輩、同輩、後輩から直接アドバイスを受けたり学ぶことも多いのですが、周りに一生懸命に頑張る人がいると自分も刺激され努力するようになって、大学生活を送ってきたと思います。

残り約2年の大学生活は、バドミントンを中心としながらも、後悔することのないような満足のいくような学生生活を送れるように、向上心をもって臨んでいきたいです。

Chapter-11

# 50年の足跡(戦績)

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和22年 | | | 1部　3位 | 1位慶大<br>2位明大<br>3位立大 |
| 昭和23年 | 1部　2位 | 1位慶大<br>2位立大<br>3位明大 | 1部　2位 | 1位慶大<br>2位立大<br>3位明大<br>4位法大 |
| 昭和24年 | 1部　2位 | 1位慶大<br>2位立大<br>3位法大<br>4位明大 | 1部　2位 | 1位慶大<br>2位立大<br>3位明大<br>4位法大 |
| 昭和25年 | 1部　4位 | 1位慶大<br>2位法大<br>3位明大<br>4位立大 | 1部　4位 | 1位慶大<br>2位法大<br>3位明大<br>4位立大 |
| 昭和26年 | 1部　4位 | 1位明大<br>2位慶大<br>3位法大<br>4位立大 | 1部　5位 | 1位慶大<br>2位明大<br>3位関東学院大<br>4位法大<br>5位立大<br>6位日大<br>7位早大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和27年 | 1部　3位 | 1位慶大<br>2位関学大<br>3位立大<br>4位法大<br>5位明大<br>6位早大 | 1部　2位 | 1位慶大<br>2位立大<br>3位関学大<br>4位法大<br>5位明大<br>6位日大 |
| 昭和28年 | 1部　優勝 | 1位立大<br>2位慶大<br>3位明大<br>4位法大<br>5位関学大<br>6位早大 | 1部　優勝 | 1位立大<br>2位明大<br>3位関学大<br>4位慶大<br>5位法大<br>6位横国大 |
| 昭和29年 | 1部　2位 | 1位慶大<br>2位立大<br>3位明大<br>4位法大<br>5位早大<br>6位日大 | 1部　2位 | 1位慶大<br>2位立大<br>3位明大<br>4位法大<br>5位関学大<br>6位早大 |
| 昭和30年 | 1部　優勝 | 立大8-1法大<br>8-1関学大<br>[illegible]<br>8-1明大<br>6-3慶大 | 立大　優勝 | 立大8-1法大<br>9-0日大<br>9-0関学大<br>[illegible]<br>8-1慶大 |
| 昭和31年 | 1部　優勝 | 立大9-0法大<br>9-0関学大<br>9-0日大<br>9-0慶大<br>8-1明大 | 立大　優勝 | 立大8-1関学大<br>8-1法大<br>9-0日大<br>8-1慶大<br>8-1明大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和32年 | 1部　優勝 | 立大6-3法大<br>9-0日大<br>8-1関学大<br>6-3慶大<br>6-3明大 | 1部　優勝 | 立大7-2法大<br>9-0日大<br>9-0関学大<br>8-1明大<br>5-4慶大 |
| 昭和33年 | 1部　優勝 | 立大6-3明大<br>9-0日大<br>8-1関学大<br>7-2法大<br>7-2慶大 | 1部　優勝 | 立大6-3慶大<br>9-0中大<br>8-1関学大<br>7-2法大<br>8-1明大 |
| 昭和34年 | 1部　優勝 | 立大6-3慶大<br>9-0中大<br>8-1関学大<br>5-4法大<br>7-2明大 | 1部　優勝 | 立大5-4明大<br>8-1青学大<br>7-2中大<br>8-1慶大<br>5-4法大 |
| 昭和35年 | 1部　2位 | 立大6-3慶大<br>8-1早大<br>7-2中大<br>3-6法大<br>6-3明大 | 1部　2位 | 立大8-1中大<br>8-1慶大<br>7-2明大<br>9-0早大<br>3-5法大 |
| 昭和36年 | 1部　優勝 | 立大9-0早大<br>8-1明大<br>8-1慶大<br>6-3中大<br>6-2法大 | 1部　優勝 | 立大6-3中大<br>6-3明大<br>7-2慶大<br>5-4法政<br>7-1神奈川大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和37年 | 1部　優勝 | 立大6-3慶大<br>6-3早大<br>7-2明大<br>6-3中大<br>5-4法大 | 1部　優勝 | 立大5-4中大<br>8-1早大<br>6-3慶大<br>7-2明大<br>6-2法大 |
| 昭和38年 | 1部　3位 | 立大4-5法大<br>8-1早大<br>4-5慶大<br>6-3明大<br>5-4中大 | 1部　3位 | 立大2-7中大<br>4-5慶大<br>6-3明大<br>5-4法大<br>8-1早大 |
| 昭和39年 | 1部　4位 | 1位法大<br>2位慶大<br>3位中大<br>4位立大<br>5位明大<br>6位早大 | 1部　2位 | 1位法大<br>2位立大<br>3位中大<br>4位慶大<br>5位明大<br>6位早大 |
| 昭和40年 | 1部　3位 | 1位法大<br>2位中大<br>3位立大<br>4位早大<br>5位明大<br>6位慶大 | 1部　3位 | 立大5-4日大<br>8-1明大<br>1-8法大<br>5-4早大 |
| 昭和41年 | 1部　3位 | 不明 | 1部　3位 | 立大8-1明大<br>2-7日大<br>2-7法大<br>4-5中大<br>8-1早大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和42年 | 1部　3位 | 立大8-1関学大<br>6-3早大<br>6-3日大<br>4-5法大<br>1-6中大 | 1部　3位 | 立大7-2関学大<br>6-3早大<br>4-5日大<br>×　(不明)法大<br>×　(不明)中大 |
| 昭和43年 | 1部　2位 | 立大7-2関学大<br>7-2早大<br>4-5中大<br>5-4法大<br>5-2日大 | 1部　3位 | 立大<br>対戦成績不明 |
| 昭和44年 | 1部　4位 | 立大7-2慶大<br>4-5早大<br>2-7法大<br>2-7中大<br>5-4日大 | 1部　5位 | 立大3-6中大<br>2-7法大<br>5-4関学大<br>3-6日大<br>3-5早大 |
| 昭和45年 | 1部　6位<br>1、2部入替戦2部降格 | 立大0-9中大<br>3-6早大<br>2-7法大<br>2-7日大<br>3-6関学大<br>立大2-5日体大 | 2部　5位 | 対戦成績不明 |
| 昭和46年 | 2部　2位 | 立大2-7青学大<br>5-4慶大<br>5-4千葉大<br>6-3明大<br>5-1神奈川大 | 2部　4位 | 立大2-7関学大<br>4-5明大<br>4-5慶大<br>5-4千葉大<br>6-3大東大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和47年 | 2部　2位 | 立大3-4関学大<br>5-2慶大<br>7-0大東大<br>7-0千葉大<br>4-0明大<br>1、2部入替戦2部残留 | 2部　優勝 | 立大6-1明大<br>5-2千葉大<br>4-3慶大<br>6-1大東大<br>4-1関学大<br>2-4青学大 |
| 昭和48年 | 2部　優勝 | 立大4-3明大<br>4-3千葉大<br>6-1大東大<br>4-3慶大<br>4-3関学大<br>2-4青学大<br>1、2部入替戦2部残留 | 2部優勝 | 立大5-2関学大<br>5-2千葉大<br>5-2大東大<br>5-2明大<br>4-2慶大<br>2-4青学大<br>1、2部入替戦2部残留 |
| 昭和49年 | 2部　4位 | 立大3-4関学大<br>2-4慶大<br>3-4大東大<br>5-2明大<br>4-3東大 | 2部　4位 | 立大3-4関学大<br>4-3慶大<br>2-4大東大<br>5-2明大<br>3-4千葉大 |
| 昭和50年 | 2部　5位 | 立大1-6青学大<br>3-4関学大<br>3-4専修大<br>0-7大東大<br>4-2千葉大 | 2部　6位 | 立大3-4関学大<br>2-5大東大<br>1-6慶大<br>1-6専修大<br>3-4千葉大<br>2、3部入替戦2部残留<br>4-0一橋大 |
| 昭和51年 | 2部　6位 | 立大1-6大東大<br>2-5千葉大<br>2-4関学大<br>0-7慶大<br>2-5専修大<br>立大3-4一橋大<br>2、3部入替戦3部降格 | 3部　4位 | 立大3-4明大<br>5-2埼玉大<br>2-4東大<br>3-4東海大<br>2-5専修大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和52年 | 3部　6位<br>3、4部入替戦4部降格 | 立大0-7明大<br>1-6東大<br>1-6神奈川大<br>3-4東海大<br>2-5理科大<br>立大0-4埼玉大 | 4部　6位<br>4、5部入替戦5部降格 | 立大3-4横国大<br>0-7明学大<br>4-3東洋大<br>2-5成蹊大<br>1-6都立大<br>1-4茨城大 |
| 昭和53年 | 5部　2位 | 立大5-2東農工大<br>2-5千葉商大<br>5-2武蔵工大<br>3-4東京経済大<br>6-1東農大 | 4部Bブロック<br>優勝<br>3、4部入替戦3部昇格 | 立大7-0学芸大<br>7-0成城大<br>5-2帝京大<br>4-3横市大<br>5-2武蔵工大<br>立大4-2駒沢大 |
| 昭和54年 | 3部　6位<br>3、4部入替戦4部降格 | 立大1-6千葉商大<br>2-6千葉大<br>4-3成蹊大<br>1-6一橋大<br>3-4都立大<br>立大2-4国士館大 | 4部Bブロック<br>優勝<br>3、4部入替戦4部残留 | 立大5-2武蔵工大<br>6-1山梨大<br>4-3東農大<br>7-0学芸大<br>3-4玉川大<br>立大0-4理科大 |
| 昭和55年 | 4部Dブロック<br>優勝<br>3、4部入替戦3部昇格 | 立大4-3帝京大<br>7-0武蔵大<br>6-1高崎経大<br>5-2関東学園大<br>4-3玉川大<br>立大4-3東京経済大 | 3部Bブロック<br>5位 | 立大3-4横国大<br>0-7国士館大<br>3-4東洋大<br>2-5一橋大<br>4-3茨城大 |
| 昭和56年 | 3部　6位<br>3、4部入替戦4部降格 | 対戦成績不明 | 4部ブロック<br>優勝<br>3、4部入替戦4部残留 | 対戦成績不明 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和57年 | 4部Aブロック<br>優勝<br><br><br><br><br>3、4部入替戦3部昇格 | 立大6-1高崎経大<br>7-0横市大<br>6-1玉川大<br>6-1都立大<br>7-0東農大<br>立大4-2和光大<br>立大4-0東学大 | 3部Bブロック<br>3位 | 立大4-3千葉商大<br>2-5横国大<br>6-1東大<br>3-4東海大<br>7-0茨城大 |
| 昭和58年 | 3部Bブロック<br>6位 | 対戦成績不明 | 3部　4位 | 対戦成績不明 |
| 昭和59年 | 3部　3位 | 立大4-3千葉商大<br>4-3埼玉大<br>1-4青学大<br>5-2工学院大<br>2-5関東学院大 | 3部　4位 | 立大4-3理科大<br>1-6城西大<br>2-5神奈川大<br>4-3千葉商大<br>1-6青学大 |
| 昭和60年 | 3部　5位 | 立大5-2城西大<br>2-5千葉大<br>[illegible]<br>0-7青学大<br>2-5創価大 | 3部　3位 | 立大3-4千葉商大<br>4-3国士館大<br>4-3理科大<br>4-3創価大<br>5-2明学大 |
| 昭和61年 | 3部Aブロック<br>4位 | 立大3-4国士館大<br>3-4工学院大<br>4-2神奈川大<br>1-6創価大<br>6-1横国大 | 3部Bブロック<br>2位 | 立大3-4明大<br>4-3明星大<br>5-2学習院大<br>4-3工学院大<br>6-1東京大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和62年 | 3部Bブロック<br>4位 | 立大3-4神奈川大<br>4-3明星大<br>2-5千葉商大<br>4-3理科大<br>2-4大東大 | 3部Bブロック<br>4位 | 立大3-4創価大<br>1-6千葉商大<br>3-4横浜商大<br>6-1千葉大<br>2-5城西大 |
| 昭和63年 | 3部Aブロック<br>4位 | 記録なし | 欠場 | |
| 平成元年 | 6部<br>2位 | 記録なし | 6部<br>3位 | 記録なし |
| 平成2年 | 不明 | | 不明 | |
| 平成3年 | 6部Bブロック<br>優勝<br><br><br>5、6部入替戦5部昇格 | 立大6-1青学大Ⅱ部<br>7-0東京水産大<br>7-0杏林大<br>5-2東農工大<br><br>立大4-0和光大 | 5部Cブロック<br>6位 | 立大3-4産能大<br>2-5文教大<br>2-5千葉工大<br>2-5立正大<br>3-4東京学芸大<br>5-2東京工科大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 平成4年 | 5部Cブロック<br>5位 | 立大3-4東京情報大<br>5-2千葉大<br>2-5東農大<br>4-3北里大<br>3-4千葉工大<br>3-4白鷗大 | 5部Dブロック<br>5位 | 立大3-4産能大<br>4-3亜細亜大<br>4-3常磐大<br>3-4東農工大<br>3-4工学院大<br>3-4東邦大 |
| 平成5年 | 5部　5位 | 立大3-4駒沢大<br>6-1聖学院大<br>2-5東京国際大<br>2-5拓殖大<br>2-5立正大<br>7-0日本工大 | 5部　4位 | 立大4-3文教大<br>3-4科学技術大<br>5-2東京外語大<br>3-4成城大<br>3-4亜細亜大<br>5-1高崎経大 |
| 平成6年 | 5部　3位 | 立大4-3桜美林大<br>4-3東京水産大<br>3-4順天堂大<br>3-4立正大<br>4-3白鷗大<br>3-4拓殖大 | 5部　4位 | 立大4-3東京工科大<br>5-2科学技大<br>3-4千葉大<br>3-4亜細亜大<br>7-0東邦大<br>1-6文教大 |
| 平成7年 | 5部　2位 | 立大7-0北里大<br>5-2東京薬科大<br>[illegible]<br>5-2白鷗大<br>5-2成城大<br>5-2日本工業大 | 5部　優勝<br><br>4、5部入替戦4部昇格 | 立大6-1拓殖大<br>6-1日大生産<br>6-1順天堂大<br>7-0上智大<br>[illegible]<br>6-1湘南工大<br>4-1独協大 |
| 平成8年 | 4部　2位 | 立大4-3横浜市大<br>2-5東京大<br>4-3国学院大<br>4-3神奈川工大<br>4-3千葉工大 | 4部　ブロック<br>優勝<br><br>3、4部入替戦4部残留 | 立大5-2電気通信大<br>5-2学習院大<br>7-0東洋大<br>4-3千葉工大<br>4-3千葉大<br>立大4-3武蔵工大<br>3-4一橋大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 平成9年 | 4部ブロック<br>優勝<br><br><br><br>3、4部入替戦4部残留 | 立大6-1武蔵大<br>6-1茨城大<br>7-0東洋大<br>4-3東京理大<br>2-5東京情報大<br>2-4横国大 | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |

# 全日本大学選手権大会(団体戦)

| 回／年 | 順　位 | 回／年 | 順　位 |
|---|---|---|---|
| 第1回 昭和26 | 1.慶大 2.法大 3.**立大** | 第11回 36 | 1.**立大** 2.慶大 3.法大 |
| 第2回 27 | 1.慶大 2.**立大** 3.関東学院大 | 第12回 37 | 1.法大 2.**立大** 3.慶大 |
| 第3回 28 | 1.**立大** 2.明大 3.慶大 | 第13回 38 | 1.**立大** 2.中大 3.慶大 |
| 第4回 29 | 1.**立大** 2.慶大 3.同大 | 第14回 39 | 1.法大 2.慶大 3.中大4.**立大** |
| 第5回 30 | 1.**立大** 2.慶大 3.明大 | 第15回 40 | 1.中大 2.法大 3.**立大** |
| 第6回 31 | 1.**立大** 2.慶大 3.関西大 | 第16回 41 | 1.中大 2.法大 3.**立大** |
| 第7回 32 | 1.**立大** 2.慶大 3.関西大 | 第17回 42 | 1.中大 2.法大 3.**立大** |
| 第8回 33 | 1.**立大** 2.慶大 3.法大 | 第18回 43 | 1.日大 2.法大 3.中大4.**立大** |
| 第9回 34 | 1.**立大** 2.法大 3.明大 | 第19回 44 | 1.中大 2.早大 3.法大<br>ベスト8 |
| 第10回 35 | 1.慶大 2.法大 3.**立大** | 第20回 45 | 以降入賞記録なし |

# 立教大学対明治大学定期戦

| | 対戦成績 | | | | 対戦成績 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1回 | S23 | ○立大 | 8-5 明大 | 28 | S46 | ×立大 | 4-5 明大 |
| 2 | S24 | ○ | 9-4 | 29 | S47 | ○ | 7-2 |
| 3 | S25 | × | 6-7 | 30 | S48 | ○ | 6-3 |
| 4 | S26 | ○ | 8-5 | 31 | S49 | ○ | 5-4 |
| 5 | S26 | × | 4-9 | 32 | S50 | ○ | 5-4 |
| 6 | S27 | ○ | 10-3 | 33 | S51 | ○ | 6-3 |
| 7 | S27 | ○ | 9-4 | 34 | S52 | × | 1-8 |
| 8 | S28 | ○ | 9-4 | 35 | S53 | × | 2-7 |
| 9 | S28 | ○ | 7-6 | 36 | S54 | × | 0-7 |
| 10 | S29 | ○ | 5-2 | 37 | S55 | × | 1-6 |
| 11 | S29 | ○ | 6-3 | 38 | S56 | × | 2-5 |
| 12 | S30 | ○ | 8-1 | 39 | S57 | × | 3-4 |
| 13 | S31 | ○ | 6-2 | 40 | S58 | × | 1-6 |
| 14 | S32 | ○ | 8-1 | 41 | S59 | × | 2-5 |
| 15 | S33 | ○ | 5-4 | 42 | S60 | × | 2-5 |
| 16 | S34 | ○ | 5-4 | 43 | S61 | × | 1-6 |
| 17 | S35 | ○ | 9-0 | 44 | S62 | × | 0-7 |
| 18 | S36 | ○ | 5-4 | 45 | S63 | × | 0-7 |
| 19 | S37 | ○ | 7-2 | 46 | H1 | × | 0-7 |
| 20 | S38 | ○ | 5-4 | 47 | H2 | × | 2-5 |
| 21 | S39 | × | 4-5 | 48 | H3 | × | 1-6 |
| 22 | S40 | ○ | 6-3 | 49 | H4 | × | 2-5 |
| 23 | S41 | ○ | 6-3 | 50 | H5 | × | 0-7 |
| 24 | S42 | ○ | 5-4 | 51 | H6 | × | 0-7 |
| 25 | S43 | ○ | 5-4 | 52 | H7 | × | 0-7 |
| 26 | S44 | ○ | 8-1 | 53 | H8 | × | 0-7 |
| 27 | S45 | × | 4-5 | | | | |

# 立教大学対同志社大学定期戦

| | 対戦成績 | | | | 対戦成績 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第1回 | S28 | ○立大-同大 | | 第23回 | S50 | ×立大 | 3-6同大 |
| 2 | S29 | ○スコア不明 | | 24 | S51 | × | 2-7 |
| 3 | S30 | ○スコア不明 | | 25 | S52 | × | 0-7 |
| 4(東京) | S31 | ○立大 | 8-1 同大 | 26 | S53 | × | 3-6 |
| 5(京都) | S32 | ○ | 8-1 | 27 | S54 | × | 1-6 |
| 6 | S33 | ○ | 9-0 | 28 | S55 | × | 0-7 |
| 7 | S34 | ○ | 8-1 | 29 | S56 | 不明 | |
| 8 | S35 | ○ | 9-0 | 30 | S57 | ○ | 4-3 |
| 9 | S36 | ○ | 9-0 | 31 | S58 | 不明 | |
| 10 | S37 | ○ | 8-1 | 32 | S59 | ○ | 6-1 |
| 11 | S38 | ○ | 9-0 | 33 | S60 | × | 2-5 |
| 12 | S39 | ○ | 9-0 | 34 | S61 | × | 3-4 |
| 13 | S40 | ○ | 7-2 | 35 | S62 | × | 1-6 |
| 14 | S41 | ○ | 8-1 | 36 | S63 | 中断 | |
| 15 | S42 | ○ | 6-3 | 37 | H1 | 中断 | |
| 16 | S43 | ○スコア不明 | | 38 | H2 | 中断 | |
| 17 | S44 | ○ | 7-2 | 39 | H3 | 中断 | |
| 18 | S45 | ○スコア不明 | | 40 | H4 | 中断 | |
| 19 | S46 | ○ | 5-4 | 41 | H5 | 中断 | |
| 20 | S47 | 不明 | | 42 | | 中断 | |
| 21 | S48 | ○ | 5-4 | 43 | H7 | 中断 | |
| 22 | S49 | 不明 | | 44 | H8 | 再開 × | 2-5 |

# 関東学生選手権成績

| 開催年度 | | 成績 |
|---|---|---|
| 昭和23年 | 単 | 第1回大会 |
| | 複 | 第1回大会 |
| 昭和24年 | 単 | |
| | 複 | |
| 昭和25年 | 単 | |
| | 複 | 2位島田・瀬川<br>3位村松・玉越 |
| 昭和26年 | 単 | |
| | 複 | 優勝玉越・有馬 |
| 昭和27年 | 単 | 優勝玉越<br>3位服部 |
| | 複 | 3位佐藤・山崎 |
| 昭和28年 | 単 | 2位佐藤 |
| | 複 | 3位玉越・新倉<br>4位佐藤・山崎 |
| 昭和29年 | 単 | 優勝佐藤<br>2位新倉 |
| | 複 | 優勝佐藤・山崎<br>2位片石・加藤、4位望月・新倉 |
| 昭和30年 | 単 | 2位佐藤、3位片石<br>4 位新倉 |
| | 複 | 優勝片石・加藤<br>3位佐藤・山崎 |
| 昭和31年 | 単 | 優勝永井<br>3位新倉、4位望月 |
| | 複 | 優勝望月・永井 |

| 開催年度 | | 成績 |
|---|---|---|
| 昭和32年 | 単 | 2位宮沢 |
| | 複 | |
| 昭和33年 | 単 | 優勝永井、2位小宮<br>3位板垣(隆) |
| | 複 | 優勝永井・並木<br>2位板垣(隆)・小宮 |
| 昭和34年 | 単 | 優勝永井、2位板垣(隆)、3位北島 |
| | 複 | 優勝永井・並木、2位板垣(隆)・小宮、<br>3位北島・板垣(善) |
| 昭和35年 | 単 | 優勝小宮、2位板垣(善) |
| | 複 | 3位小宮・板垣(善) |
| 昭和36年 | 単 | 4位板垣(善) |
| | 複 | 3位板垣(善)・長谷川 |
| 昭和37年 | 単 | 優勝板垣(善)、3位東条 |
| | 複 | 3位板垣(善)・長谷川 |
| 昭和38年 | 単 | 優勝東条、3位安沢 |
| | 複 | 3位大竹・安沢 |
| 昭和39年 | 単 | |
| | 複 | 優勝大竹・安沢 |
| 昭和40年 | 単 | |
| | 複 | 優勝大竹・安沢 |

# 関東学生選手権成績

| 開催年度 | | 成績 |
|---|---|---|
| 昭和41年 | 単 | |
| | 複 | 4位星野・寺前 |
| 昭和42年 | 単 | 4位寺前 |
| | 複 | |
| 昭和43年 | 単 | |
| | 複 | 2位堀・寺前<br>3位立野・瀬戸 |
| 昭和44年 | 単 | 3位堀 |
| | 複 | 4位堀・寺前 |
| 昭和45年 | 単 | 2位谷口 |
| | 複 | |

# 東日本学生選手権成績

| 開催年度 | | 成績 |
|---|---|---|
| 昭和33年 | 単 | 第1回大会<br>優勝永井、2位北島、3位小宮 |
| | 複 | 優勝宮沢・北島、2位板垣(隆)・小宮、<br>4位永井・並木 |
| 昭和34年 | 単 | 優勝小宮、2位永井、3位板垣(隆)<br>4位北島 |
| | 複 | 優勝板垣(隆)・小宮、2 位永井・並木、<br>3 位北島・板垣(善) |
| 昭和35年 | 単 | 優勝板垣(善)、2位小宮、3位板垣(隆) |
| | 複 | 優勝板垣(隆)・小宮<br>3位板垣(善)・長谷川 |
| 昭和36年 | 単 | 優勝小宮、2位板垣(善)、4位東条 |
| | 複 | 優勝小宮・鈴木<br>3位板垣(善)・長谷川 |
| 昭和37年 | 単 | 3位東条 |
| | 複 | 優勝佐藤・東条 |
| 昭和38年 | 単 | 優勝東条 |
| | 複 | 優勝大竹・安沢 |

※昭和35年第3回大会
女子複4位吉武・辻田

| 開催年度 | | 成績 |
|---|---|---|
| 昭和39年 | 単 | |
| | 複 | |
| 昭和40年 | 単 | |
| | 複 | 優勝大竹・安沢 |
| 昭和41年 | 単 | |
| | 複 | 3位星野・寺前 |
| 昭和42年 | 単 | 4位寺前 |
| | 複 | |
| 昭和43年 | 単 | 優勝堀 |
| | 複 | 2位堀・寺前 |

昭和44年以降入賞記録なし。

# 全日本学生選手権成績

| 開催年度 | | 成績 |
|---|---|---|
| 昭和25年 | 単 | 第1回大会 |
| | 複 | 3位村松・玉越 |
| 昭和26年 | 単 | 3位玉越 |
| | 複 | |
| 昭和27年 | 単 | 2位佐藤 |
| | 複 | 2位佐藤・山崎<br>3位玉越・服部 |
| 昭和28年 | 単 | 優勝望月、2位佐藤 |
| | 複 | 優勝佐藤・山崎 |
| 昭和29年 | 単 | 優勝佐藤 |
| | 複 | 2位佐藤・山崎<br>3位片石・加藤 |
| 昭和30年 | 単 | 優勝佐藤、2位片石<br>3位望月 |
| | 複 | 2位片石・加藤<br>3位佐藤・望月 |
| 昭和31年 | 単 | 優勝永井、2位片石 |
| | 複 | 優勝望月・永井、2位宮沢・北島<br>3位片石・加藤 |
| 昭和32年 | 単 | 優勝片石、2位永井 |
| | 複 | 優勝片石・板垣(隆) |
| 昭和33年 | 単 | 優勝永井、2位小宮 |
| | 複 | 優勝板垣(隆)・小宮<br>2位永井・並木 |

| 開催年度 | | 成績 |
|---|---|---|
| 昭和34年 | 単 | 優勝小宮、2位永井、3位板垣(隆) |
| | 複 | 優勝板垣(隆)・小宮<br>2位永井・並木 |
| 昭和35年 | 単 | 優勝板垣(隆)、3位小宮 |
| | 複 | 優勝板垣(隆)・小宮 |
| 昭和36年 | 単 | 優勝板垣(善)、2位小宮 |
| | 複 | 優勝小宮・鈴木 |
| 昭和37年 | 単 | |
| | 複 | 2位板垣(善)・長谷川<br>3位大竹・安沢 |
| 昭和38年 | 単 | 優勝東条、2位安沢 |
| | 複 | 3位大竹・安沢 |
| 昭和39年 | 単 | |
| | 複 | 3位星野・須田 |
| 昭和40年 | 単 | 4位大竹 |
| | 複 | 優勝大竹・安沢 |
| 昭和41年 | 単 | |
| | 複 | |
| 昭和42年 | 単 | 3位堀 |
| | 複 | |

| 開催年度 | | 成績 |
|---|---|---|
| 昭和43年 | 単 | |
| | 複 | |
| 昭和44年 | 単 | 3位寺前 |
| | 複 | |
| 昭和45年 | 単 | |
| | 複 | |
| 昭和46年 | 単 | 優勝谷口 |
| | 複 | |
| 昭和47年 | 単 | 2位谷口 |
| | 複 | |

昭和48年以降、現役、OBの入賞なし。

# 全日本(総合)選手権成績

| 開催年度 | | 成績 |
|---|---|---|
| 昭和22年 | 単 | 第1回大会開催 |
| | 複 | |
| 昭和28年 | 単 | 優勝望月 |
| | 複 | 優勝佐藤・山崎 |
| 昭和29年 | 単 | |
| | 複 | 優勝片石・加藤 |
| 昭和30年 | 単 | 2位佐藤 |
| | 複 | 優勝片石・加藤<br>2位佐藤・望月 |
| 昭和31年 | 単 | 優勝片石、3位佐藤OB |
| | 複 | 優勝片石・加藤<br>2位望月・永井 |
| 昭和32年 | 単 | 優勝佐藤OB、2位片石 |
| | 複 | 優勝片石・永井、2位佐藤OB・望月OB、3位宮沢・北島 |
| 昭和33年 | 単 | 優勝永井、2位佐藤OB、3位小宮 |
| | 複 | 優勝永井・並木、2位板垣(隆)・小宮 |
| 昭和34年 | 単 | 優勝佐藤OB |
| | 複 | 優勝永井・並木 |
| 昭和35年 | 単 | 優勝板垣(隆)、2位永井OB、3位板垣(善)、4位鈴木 |
| | 複 | 2位板垣(隆)・小宮、3位板垣(善)・長谷川、4位永井OB・北島OB |

| 開催年度 | | 成績 |
|---|---|---|
| 昭和36年 | 単 | 第1回全日本総合<br>優勝小宮、3位永井OB、4位板垣(隆) |
| | 複 | 2位板垣(善)・長谷川、3位小宮・鈴木、4位永井・北島OB |
| 昭和37年 | 単 | 優勝小宮、2位永井OB |
| | 複 | 2位板垣(隆)OB・小宮、3位板垣(善)・長谷川、4位片石OB・永井OB |
| 昭和38年 | 単 | |
| | 複 | |
| 昭和39年 | 単 | |
| | 複 | |
| 昭和40年 | 単 | |
| | 複 | |
| 昭和41年 | 単 | |
| | 複 | |
| 昭和42年 | 単 | 4位安沢 |
| | 複 | |
| 昭和43年 | 単 | 3位堀 |
| | 複 | |

昭和44年以降入賞記録なし。

# 国際試合成績

| 開催年度 | 成績 |
|---|---|
| 昭和29年 | 第3回トマス杯日本代表<br>選手佐藤・望月<br>1回戦日本3-6香港 |
| 昭和30年 | |
| 昭和31年 | |
| 昭和32年 | 第4回トマス杯日本代表<br>監督川端OB、選手佐藤OB、片石、永井<br>1回戦日本9-0セイロン<br>2回戦日本キケン(タイ戦) |
| 昭和33年 | 第3回アジア大会(東京)<br>佐藤OB、片石OB、永井出場<br>日本4-1タイ<br>日本4-1台湾<br>(オープン戦3国リーグ) |
| 昭和34年 | |
| 昭和35年 | 第5回トマス杯欠場 |
| 昭和36年 | |
| 昭和37年 | 第4回アジア大会日本代表<br>選手、永井OB、小宮OB<br>2回戦日本0-3インドネシア |

| 開催年度 | 成績 |
|---|---|
| 昭和38年 | 小宮OB全英選手権、全米選手権に単身出場<br>全英選手権ベスト8<br>全米選手権ベスト4 |
| 昭和39年 | 第6回トマス杯日本代表<br>監督川端OB、コーチ兼選手佐藤OB<br>選手永井OB、小宮OB、板垣(善)OB<br>▶アメリカゾーン予選<br>1回戦日本9-0メキシコ<br>準決勝日本8-1カナダ<br>決勝日本7-2アメリカ<br>▶インターゾーン(於東京)<br>準決勝日本3-6タイ |
| 昭和40年 | アジア選手権大会（於インド・ラックノー）<br>日本代表<br>板垣(善)、大竹、安沢出場<br>団体3位 |
| 昭和41年 | 第7回トマス杯日本代表<br>選手板垣(善)OB、安沢OB<br>オーストラレシアゾーン<br>1回戦日本9-0ニュージーランド<br>2回戦日本9-0オーストラリア |
| 昭和42年 | 第7回トマス杯日本代表 安沢OB<br>▶インターゾーン<br>1回戦日本7-2アメリカ<br>準決勝日本3-6マレーシア<br>第3回国際学生バドミントン大会<br>（スリランカ）堀出場<br>団体2位 |
| 昭和43年 | 第2回アジアバドミントン選手権<br>堀出場<br>団体2位<br>ダブルス2位 |
| 昭和44年 | |
| 昭和45年 | 第6回アジア大会日本代表<br>監督川端OB、コーチ板垣(隆)OB、選手谷口<br>バンコク<br>団体戦3位<br>ジャカルタ遠征<br>谷口出場 |
| 昭和46年 | |

# 国際試合成績

| 開催年度 | 成績 |
| --- | --- |
| 昭和47年 | 第9回トマス杯アジアゾーン<br>監督板垣(隆)OB<br>ミュンヘン五輪デモンストレーション<br>日本チーム監督川端OB出場 |
| 昭和48年 | 第1回訪中大会<br>コーチ板垣(隆)OB<br>選手谷口OB出場 |
| 昭和49年 | 第2回訪中大会<br>選手谷口OB出場 |

板垣(隆)OBは昭和52年第1回世界選手権日本チーム監督就任以降昭和61年まで、8回にわたり代表監督・コーチを歴任。

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和32年 | 3月25日女子部誕生<br>2部　4位 | 立大1-3明学大<br>1-4横国大<br>0-5日体大<br>不戦勝家政大 | 2部　3位 | 立大3-2日女大<br>5-0関学大<br>4-1成城大<br>5-0衛生大<br>2-3横国大<br>1-4明学大<br>不戦勝家政大 |
| 昭和33年 | 2部<br>成績不明 | | 2部<br>成績不明 | |
| 昭和34年 | 女子2部<br>優勝<br>1、2部入替戦1部昇格 | 1位立大<br>2位日本女子大<br>3位成城大<br>4位明大<br>5位早大<br>6位家政大 | 1部　4位 | 1位日女体短大<br>2位日体大<br>3位青学大<br>4位立大<br>5位学芸大<br>6位慶大 |
| 昭和35年 | 1部　4位 | 立大1-4日女体短大<br>2-3日体大<br>3-2慶大<br>1-4学芸大<br>3-2青学大 | 1部　5位 | 1位日女体大<br>2位早大<br>3位日体大<br>4位学芸大<br>5位立大<br>6位青学大 |
| 昭和36年 | 1部　5位 | 1位日女体大<br>2位日体大<br>3位青学大<br>4位早大<br>5位立大<br>6位学芸大 | 1部　6位 | 1位日女体大<br>2位日体大<br>3位青学大<br>4位早大<br>5位学芸大<br>6位立大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和37年 | 1部　6位 | 1位日女体大<br>2位日体大<br>3位青学大<br>4位早大<br>5位学芸大<br>6位立大 | 1部　5位 | 1位日女体大<br>2位日体大<br>3位青学大<br>4位早大<br>5位立大<br>6位学芸大 |
| 昭和38年 | 1部　6位<br><br><br><br>1、2部入替戦<br>2部降格 | 対戦成績不明 | 2部<br>成績不明 | |
| 昭和39年 | 2部　3位 | 立大5-0山梨大<br>4-1千葉大<br>2-3明学大<br>1-4昭和女子大<br>4-1学芸大 | 2部　3位 | 対戦成績不明 |
| 昭和40年 | 2部　4位 | 対戦成績不明 | 2部　4位 | 対戦成績不明 |
| 昭和41年 | 2部　5位 | 立大1-4早大<br>0-5学芸大<br>2-3共立女子大<br>2-3千葉大<br>5-0日本女子大 | 2部　5位 | 立大2-3千葉大<br>2-3早大<br>5-0杉野短大<br>2-3共立女子大<br>1-4東京女子大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和42年 | 2部　6位 | | 3部　6位 | 立大2-3明大 |
| | | 立大0-5埼玉大 | | 0-5茨城大 |
| | | 0-5早大 | | 0-5慶大 |
| | | 0-5明学大 | | 1-4津田塾大 |
| | | 0-5共立大 | 3、4部入替戦4部降格 | |
| | 2、3部入替戦3部降格 | 2-3千葉大 | | |
| 昭和43年 | 4部　4位 | | 4部　6位 | 対戦成績不明 |
| | | 立大0-5国士館大 | | |
| | | 2-3成蹊大 | | |
| | | 4-1山梨大 | | |
| | | 3-2学習院大 | 4~5部入替戦4部残留 | |
| | | 2-3成城大 | | 立大3-0山梨大 |
| 昭和44年 | 4部 | | 4部　優勝 | 立大不戦勝明大 |
| | 成績不明 | | | 3-2成蹊大 |
| | | | | 5-0理科大 |
| | | | | 3-2学習院大 |
| | | | 3、4部入替戦3部昇格 | 3-2国学院大 |
| 昭和45年 | 3部　5位 | 立大1-4日女大 | 3部6位 | 立大1-4津田塾大 |
| | | 1-4津田塾大 | | 2-3日女大 |
| | | 3-2早大 | | 2-3共立女大 |
| | | 1-4成城大 | | 1-4学習院大 |
| | | 1-4横国大 | 3、4部入替戦4部降格 | 2-3成城大 |
| 昭和46年 | 4部　4位 | 立大2-3独協大 | 4部　6位 | 立大2-3日女大 |
| | | 3-2早大 | | 1-4早大 |
| | | 2-3お茶の水女大 | | 2-3成蹊大 |
| | | 2-3成蹊大 | | 2-3お茶の水大 |
| | | 3-2関学女短大 | 4、5部入替戦5部降格 | 2-3玉川大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和47年 | 5部　4位 | 立大2-3明大<br>0-5埼玉大<br>3-2東経大<br>2-3明学大 | 5部　3位 | 立大1-4群馬大<br>5-0横国大<br>4-1東女大<br>2-3東経大 |
| 昭和48年 | 5部　3位 | 3勝　2敗<br>対戦成績不明 | 5部　2位 | 4勝1敗<br>対戦成績不明 |
| 昭和49年 | 5部　3位 | 立大5-0都立大<br>3-2東経大<br>4-1独協大<br>2-3武蔵大<br>1-3津田塾+ | 5部　6位<br>降格 | 立大1-4都留文大<br>2-3都立大<br>1-4東経大<br>1-4[illegible]<br>2-3津田塾大<br>立大0-3独協大 |
| 昭和50年 | 6部　5位 | 1勝4敗<br>対戦成績不明 | 6部　6位<br>6、7部入替戦7部降格 | 5敗<br>対戦成績不明 |
| 昭和51年 | 7部　3位 | 対戦成績不明 | 7部　2位 | 対戦成績不明 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和52年 | 7部　3位 | 立大4-1東農大<br>3-2富士短大<br>2-3家政大<br>1-4日大<br>4-1横市大 | 7部　2位 | 立大1-4駒大<br>3-2東農大<br>4-1家政大<br>5-0武美大<br>4-1横市大 |
| 昭和53年 | 7部<br>成績不明 | | 4部Bブロック<br>2位 | 立大5-0武美大<br>5-0杉野大<br>4-1東経大<br>3-2国士館大<br>2-3駒大 |
| 昭和54年 | 4部Bブロック<br>優勝<br><br>3、4部入替戦<br>3部昇格 | 5勝0敗関学大<br>東農大<br>共立女大<br>国士館大<br>女子美大<br>対戦成績不明 | 3部Bブロック<br>2位 | 4勝1敗<br>お茶の水女大<br>文教大<br>都留文大<br>千葉大<br>武蔵大 |
| 昭和55年 | 3部Bブロック<br>6位<br><br>3、4部入替戦4部降格 | 立大0-5日女大<br>0-5文教大<br>1-4国学院大<br>1-4筑波大<br>1-4千葉大 | 4部Cブロック<br>5位 | 立大0-5明大<br>0-5二松学舎大<br>1-4東経大<br>1-4上智大<br>4-1武美大 |
| 昭和56年 | 4部Dブロック<br>4位 | 立大0-5お茶の水女大<br>4-1都留文大<br>0-5鶴見大<br>0-5国士館大<br>4-1横市大 | 4部Dブロック<br>6位<br><br>4、5部入替戦5部降格 | 立大0-5神奈川大<br>0-5二松学舎大<br>1-4津田塾大<br>0-5玉川大<br>2-3関学大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和57年 | 5部Cブロック<br>4位 | 立大5-0東京女子短大<br>1-4成城大<br>5-0杏林大<br>2-3家政大<br>0-5ICU | 5部Cブロック<br>3位 | 立大4-1明星大<br>3-2東洋女子短大<br>2-3和光大<br>1-4東大<br>3-2東横学園短大 |
| 昭和58年 | 5部Bブロック<br>3位 | 立大0-5跡見短大<br>2-3白百合女大<br>4-1国際商大<br>4-1清泉女大<br>不戦勝ICU | 5部Aブロック<br>2位 | 立大4-1東農大<br>5-0二松学舎大<br>4-1女子美大<br>1-4一橋大<br>4-1富士短大 |
| 昭和59年 | 5部Cブロック<br>2位 | 立大5-0国際商大<br>3-2武蔵女大<br>3-2成城大<br>3-2東女大<br>2-3明星大 | 5部Aブロック<br>5位 | 立大4-1東女医大<br>1-4帝京大<br>2-3戸板女短大<br>2-3都留文大<br>1-4文教短大 |
| 昭和60年 | 5部Bブロック<br>優勝 | 立大3-0城西大<br>5-0白百合女大<br>3-2二松学舎大 | 5部Aブロック<br>優勝 | 立大4-1国際商大<br>3-2文教女短大<br>3-2東大 |
| | 4、5部入替戦<br>5部残留 | 〃 神奈川大<br>2-3相模女大 | 4、5部入替戦4部昇格 | 3-2都立大<br>3-2東外大 |
| 昭和61年 | 4部Aブロック<br>4位 | 立大2-3埼玉大<br>2-3上智大<br>5-0家政大<br>2-3独協大<br>4-1東洋大 | 4部Cブロック<br>優勝<br><br><br>3、4部入替戦3部昇格 | 立大3-2相模女大<br>4-1城西大<br>3-2東経大<br>4-1都留文大<br>4-1東洋大<br>立大3-1東農大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 昭和62年 | 3部Bブロック<br>優勝<br><br>2、3部入替戦2部昇格 | 立大3-2帝京大<br>2-3理科大<br>4-1和光大<br>4-1千葉大<br>4-1玉川大<br>3-1武蔵大<br>3-1昭和女大 | 2部　4位 | 立大0-5早大<br>1-4東海大<br>3-2国学院大<br>2-3大妻女大<br>4-1国士館大 |
| 昭和63年 | 2部　4位<br>2勝3敗 | 立大　早大<br>1-4東海大<br>4-1東農大<br>国学院大<br>大妻女大<br>(細部不明) | 2部　4位 | 立大1-4筑波大<br>1-4東海大<br>4-1横国大<br>4-1国学院大<br>2-3大妻女大 |
| 平成元年 | 2部　6位<br><br><br><br>2、3部入替戦3部降格 | 対戦成績不明 | 3部<br>順位不明 | 対戦成績不明 |
| 平成2年 | 3部B[illegible]<br>6位<br><br>3、4部入替戦4部降格 | 立大1-4武蔵野女短大<br>1-4国学院大<br>0-5文教大<br>0-5お茶の水女大<br>1-4帝京大 | 4部Aブロック<br>4位 | 対戦成績不明 |
| 平成3年 | 4部　4位 | 立大1-4淑徳短大<br>4-1昭和女大<br>2-3大東大<br>1-4鶴見大<br>3-2東大 | 4部　3位 | 立大3-2千葉大<br>2-3東工大<br>4-1理科大<br>1-4上智大<br>3-2杉野女大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 平成4年 | 4部Bブロック<br>3位 | 対戦成績不明 | 4部Cブロック<br>2位 | 対戦成績不明 |
| 平成5年 | 4部　2位 | 立大5-0杉野女大<br>4-1都留文大<br>4-1横国大<br>4-1淑徳大<br>1-4上智大 | 4部　2位 | 立大4-1慶大<br>3-2理科大<br>0-5武蔵大<br>3-2桜美林大<br>4-1学習院大 |
| 平成6年 | 4部　3位 | 立大4-1東京国際大<br>4-1和光大<br>2-3上智大<br>0-5尚美学大<br>3-0学芸大 | 4部　4位 | 立大2-3順天大<br>3-2東京家政大<br>3-2慶応大<br>2-3千葉大<br>3-2都留文大 |
| 平成7年 | 4部　3位 | 4勝2敗<br>細部不明 | 4部　3位 | 立大4-1東農工大<br>3-2都留文大<br>[illegible]大<br>3-2二松学舎<br>3-2白鴎大<br>3-2横国大 |
| 平成8年 | 4部　4位 | 立大4-1東農大<br>4-1北里大<br>2-3文教大<br>2-3日大経済<br>5-0東京家政大<br>2-3御茶水女大 | 4部　6位 | 立大0-5立正大<br>4-1武蔵大<br>0-5学習院大<br>0-5明星大<br>2-3東京学芸大<br>2-3東京農工大 |

# 関東大学リーグ戦　成績

| 年度 | 春季リーグ | | 秋季リーグ | |
|---|---|---|---|---|
| | 部　順位 | 対戦校 | 部　順位 | 対戦校 |
| 平成9年 | 4部Aブロック<br>6位 | 立大0-5千葉大<br>1-4お茶の水女大<br>1-4茨城大<br>1-4東農大<br>2-3東学大<br>3-0白鴎大 | | |

# 立教大学対明治大学定期戦

| 回 | 対戦成績 | | | | 回 | 対戦成績 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S40 | ×立大 | 0-5 | 明大 | 18 | S57 | ○立大 | 3-2 | 明大 |
| 2 | S41 | ○ | 3-2 | | 19 | S58 | × | 1-4 | |
| 3 | S42 | × | 1-4 | | 20 | S59 | × | 2-3 | |
| 4 | S43 | × | 1-4 | | 21 | S60 | ○ | 3-2 | |
| 5 | S44 | 不戦勝 | | | 22 | S61 | ○ | 3-2 | |
| 6 | S45 | × | 2-3 | | 23 | S62 | ○ | 4-1 | |
| 7 | S46 | × | 2-3 | | 24 | S63 | ○ | 5-0 | |
| 8 | S47 | 不明 | | | 25 | H1 | × | 0-5 | |
| 9 | S48 | ○ | 3-2 | | 26 | H2 | × | 0-5 | |
| 10 | S49 | × | 1-4 | | 27 | H3 | × | 1-4 | |
| 11 | S50 | × | 1-4 | | 28 | H4 | × | 1-4 | |
| 12 | S51 | × | 0-5 | | 29 | H5 | × | 1-4 | |
| 13 | S52 | × | 1-4 | | 30 | H6 | × | 0-5 | |
| 14 | S53 | 明大休部 | | | 31 | H7 | × | 0-5 | |
| 15 | S54 | × | 0-5 | | 32 | H8 | × | 0-5 | |
| 16 | S55 | × | 0-5 | | 33 | H9 | | | |
| 17 | S56 | × | 0-5 | | | | | | |

# 立教大学対同志社女子大学定期戦

| 年 | 対戦成績 | | | | 年 | 対戦成績 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S35 | ○立大 | 3-2 | 同女大 | 20 | S54 | 不明 | | |
| 2 | S36 | 不明 | | | 21 | S55 | ○立大 | 4-1 | 同女大 |
| 3 | S37 | × | 2-3 | | 22 | S56 | × | 2-3 | |
| 4 | S38 | 不明 | | | 23 | S57 | × | 2-3 | |
| 5 | S39 | ○ | 5-0 | | 24 | S58 | 不明 | | |
| 6 | S40 | ○ | 5-0 | | 25 | S59 | × | 2-3 | |
| 7 | S41 | ○ | 5-0 | | 26 | S60 | × | 2-3 | |
| 8 | S42 | × | 0-5 | | 27 | S61 | × | 2-3 | |
| 9 | S43 | × | 0-5 | | 28 | S62 | 不明 | | |
| 10 | S44 | × | 0-5 | | 29 | S63 | ○ | 3-2 | |
| 11 | S45 | × | 0-5 | | 30 | H1 | 不明 | | |
| 12 | S46 | 不明 | | | 31 | H2 | 不明 | | |
| 13 | S47 | 不明 | | | 32 | H3 | ○ | 5-0 | |
| 14 | S48 | × | 0-5 | | 33 | H4 | 不明 | | |
| 15 | S49 | 不明 | | | 34 | H5 | ○ | 5-0 | |
| 16 | S50 | × | 0-5 | | 35 | H6 | ○ | 3-2 | |
| 17 | S51 | × | スコア不明 | | 36 | H7 | ○ | 3-2 | |
| 18 | S52 | ○ | 3-2 | | 37 | H8 | × | 1-4 | |
| 19 | S53 | ○ | 5-0 | | 38 | H9 | | | |

Chapter-12

# 男女歴代キャプテン・マネージャー

# 立教大学バドミントン部歴代部長等名簿

| 卒業年 | 部長 | 監督 | 主将 | 主務 |
|---|---|---|---|---|
| 昭和23年 | | | 鷲塚圭司 | 中川孝治 |
| 昭和24年 | | | 鷲塚圭司 | 中川孝治 |
| 昭和25年 | | 武藤欣吾 | 森谷　林 | 吉田紀久 |
| 昭和26年 | 宮本馨太郎 | 〃 | 瀬川多七 | 川端昇市 |
| 昭和27年 | 〃 | 川端昇市 | 村松真治 | 内海冠次 |
| 昭和28年 | 〃 | 〃 | 亀山　博 | 上村　裕 |
| 昭和29年 | 〃 | 〃 | 玉越忠治 | 上村　裕 |
| 昭和30年 | 〃 | 〃 | 白木靖男 | 有馬英三 |
| 昭和31年 | 〃 | 〃 | 佐藤芳朗 | 金居桂二郎 |
| 昭和32年 | 〃 | 〃 | 望月文雄 | 天海正樹 |
| 昭和33年 | 〃 | 有馬英三 | 片石兼敏 | 加藤正則 |
| 昭和34年 | 〃 | 〃 | 宮沢健一 | 油井　一 |
| 昭和35年 | 〃 | 〃 | 永井栄一 | 小宮貞男 |
| 昭和36年 | 〃 | 〃 | 板垣隆房 | 小栗和平 |
| 昭和37年 | 〃 | 折井利彦 | 小宮好雄 | 岩佐俊二 |
| 昭和38年 | 〃 | 〃 | 板垣善憲 | 佐藤次之 |
| 昭和39年 | 〃 | 〃 | 東条義昭 | 小田　昇 |
| 昭和40年 | 〃 | 〃 | 大竹紘一 | 飯塚士朗 |
| 昭和41年 | 〃 | 〃 | 大竹紘一 | 飯塚士朗 |
| 昭和42年 | 〃 | 永井栄一 | 星野義昭 | 伊勢幸助 |
| 昭和43年 | 〃 | 〃 | 裏田光男 | 星野義夫 |
| 昭和44年 | 〃 | 〃 | 立野政昭 | 丸　保信 |
| 昭和45年 | 〃 | 〃 | 堀　幸矩 | 瀬戸　孝 |
| 昭和46年 | 〃 | 〃 | 高橋　宣 | 宮原　譲 |
| 昭和47年 | 〃 | 〃 | 宮原　譲 | 奥村道徳 |
| 昭和48年 | 〃 | 〃 | 谷口　寛 | 奥村道徳 |

| 卒業年 | 部長 | 監督 | 主将 | 主務 |
|---|---|---|---|---|
| 昭和49年 | 宮本馨太郎 | 永井栄一 | 村山英十 | 大内　進 |
| 昭和50年 | 〃 | 〃 | 岡田哲男 | 若松孝義 |
| 昭和51年 | 〃 | 鈴木幸春 | 清水正栄 | 下平勝久 |
| 昭和52年 | 〃 | 〃 | 井上　龍 | 伊藤要三 |
| 昭和53年 | 〃 | 〃 | 鈴木　宏 | 曽我之雄 |
| 昭和54年 | 〃 | 〃 | 中島富雄 | 曽我之雄 |
| 昭和55年 | 井沢和平 | 〃 | 佐藤久雄 | 薗部秀之 |
| 昭和56年 | 〃 | 〃 | 金子真人 | 坂野正明 |
| 昭和57年 | 〃 | 〃 | 有賀和美 | 武井慎一 |
| 昭和58年 | 〃 | 〃 | 松下一成 | 山崎　実 |
| 昭和59年 | 〃 | 〃 | 星　邦明 | 山崎　実 |
| 昭和60年 | 〃 | 〃 | 石田俊司 | 田中靖浩 |
| 昭和61年 | 〃 | 〃 | 遠藤敬志 | 高塚秀樹 |
| 昭和62年 | 〃 | 〃 | 宮野尾公一 | 尾崎弘明 |
| 昭和63年 | 〃 | 〃 | 渡辺　元 | 柴　公人 |
| 平成　1年 | 堀内　昭 | 松崎正門 | 嶋崎　靖 | 中谷厚之 |
| 平成　2年 | 〃 | 〃 | 川底宏至 | 小川原元茂 |
| 平成　3年 | 〃 | 〃 | 山崎祐一 | 小川原元茂 |
| 平成　4年 | 〃 | 〃 | 山崎祐一 | 小川原元茂 |
| 平成　5年 | 〃 | 〃 | 上原　等 | 小川原元茂 |
| 平成　6年 | 〃 | 〃 | 丸山泰史 | 田中　尚 |
| 平成　7年 | 〃 | 〃 | 渡辺篤夫 | 小林敦哉 |
| 平成　8年 | 〃 | 〃 | 三井邦雄 | 小林敦哉 |
| 平成　9年 | 〃 | 〃 | 島崎慎一 | 吉田　亘 |
| 現　役 | 〃 | 〃 | 大崎　武 | 古尾周作 |

# 立教大学女子バドミントン部歴代部長等名簿

| 卒業年 | 部長 | 監督 | 主将 | 主務 |
|---|---|---|---|---|
| 昭和33年 | 中村　亮 | 有馬英三 | 石山冴子 | 阿部純子 |
| 昭和34年 | 〃 | 〃 | 渡辺令美子 | 福田民子 |
| 昭和35年 | 〃 | 〃 | 上野久美子 | 二瓶章子 |
| 昭和36年 | 〃 | 〃 | 吉武　禊 | 佐原美子 |
| 昭和37年 | 〃 | 折井利彦 | 中司陸子 | 出口恵理 |
| 昭和38年 | 〃 | 〃 | 井手陽子 | 橋本綾子 |
| 昭和39年 | 〃 | 〃 | 篠塚栄子 | 沼田起代子 |
| 昭和40年 | 〃 | 〃 | 篠塚栄子 | 沼田起代子 |
| 昭和41年 | 〃 | 〃 | 谷口嘉代子 | 佐藤恵子 |
| 昭和42年 | 〃 | 永井栄一 | 丸田登喜子 | 米山サカエ |
| 昭和43年 | 〃 | 〃 | 堀部晴代 | 西田鈴子 |
| 昭和44年 | 〃 | 〃 | 増田道子 | 並木朋子 |
| 昭和45年 | 〃 | 〃 | 佐藤静子 | 内野ひろみ |
| 昭和46年 | 〃 | 〃 | 斎藤啓子 | 谷　和美 |
| 昭和47年 | 〃 | 〃 | 斎藤啓子 | 谷　和美 |
| 昭和48年 | 〃 | 〃 | 長田恵子 | 大石倫子 |
| 昭和49年 | 藤井陽江 | 〃 | 長田恵子 | 大石倫子 |
| 昭和50年 | 〃 | 〃 | 田中菊代 | 高月由紀子 |
| 昭和51年 | 〃 | 鈴木幸春 | 杉浦宮子 | 岡田晶子 |
| 昭和52年 | 〃 | 〃 | 鈴木てる子 | 長沢則子 |
| 昭和53年 | 〃 | 〃 | 中嶋久江 | 泉　恵 |
| 昭和54年 | 〃 | 〃 | 竹崎登茂子 | |
| 昭和55年 | 〃 | 〃 | 関口真澄 | 原野美佐江 |
| 昭和56年 | 〃 | 〃 | 小川由美子 | 吉田真樹 |
| 昭和57年 | 〃 | 〃 | 清水　啓子 | 吉田真樹 |

| 卒業年 | 部長 | 監督 | 主将 | 主務 |
|---|---|---|---|---|
| 昭和58年 | 〃 | 鈴木幸春 | 柳沢恵子 | 春名淳子 |
| 昭和59年 | 〃 | 〃 | 柳沢恵子 | 春名淳子 |
| 昭和60年 | 〃 | 〃 | 松島さゆり | 山縣みわこ |
| 昭和61年 | 〃 | 〃 | 佐々木潤子 | 服部純子 |
| 昭和62年 | 〃 | 〃 | 増澤みどり | 服部純子 |
| 昭和63年 | 〃 | 〃 | 賀茂由美子 | 吉野由樹子 |
| 平成　1年 | 〃 | 松崎正門 | 野津山まり子 | 宮本祥子 |
| 平成　2年 | 〃 | 〃 | 村田紀子 | 渡辺比呂子 |
| 平成　3年 | 〃 | 〃 | 長谷川千秋 | 鈴木道代 |
| 平成　4年 | 〃 | 〃 | 長谷川千秋 | 鈴木道代 |
| 平成　5年 | 〃 | 〃 | 和田陽子 | 鈴木道代 |
| 平成　6年 | 〃 | 〃 | 山口日登美 | 森屋利夏 |
| 平成　7年 | 〃 | 〃 | 坪　宏美 | 田中恵美 |
| 平成　8年 | 〃 | 〃 | 兼子佳子 | 釜蒻日女子 |
| 平成　9年 | 〃 | 〃 | 高野直子 | 八木智子 |
| 現　役 | 〃 | 〃 | 高野直子 | 八木智子 |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| | | | | |

Chapter-13

# OB·OG会名簿

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 |
|---|---|---|---|
| 24経 | 鷲塚圭司 | 113 東京都文京区千駄木3-21-14<br>☎(03)3827-6022 | ㈱ケイ・ジー企画<br>FAX(03)3822-0516 |
| 〃 | 伍井澄 | 164 東京都中野区中央5-19-7<br>☎(03)3381-9022 | |
| 〃 | 中川孝治 | 逝去 | |
| 〃 | 樋口元男 | | |
| 〃 | 武藤欣吾 | 158 東京都世田谷区中町1-18-17<br>☎(03)3705-2597 | |
| 25/3経 | 鈴木旭 | 167 東京都杉並区南荻窪1-6-10<br>☎(03)3333-5728 | |
| 〃 | 森谷林 | | |
| 〃 | 吉田紀久 | | |
| 25/12経 | 川端昇市 | 359 埼玉県所沢市緑町4-47-9<br>☎(0429)25-0343 FAX兼用 | ㈲のぼる<br>☎(03)3571-0630 |
| 26経 | 瀬川多七 | 410-24 静岡県田方郡修善寺町修善寺3451-8<br>☎(0558)72-0035 | |
| 〃 | 寺内秀興 | 194 東京都町田市東玉川学園1-14-13<br>☎(0427)26-5194 | |
| 〃 | 島田肇 | 203 東京都東久留米市南沢3-7-10<br>☎(0424)73-9465 | |
| 〃 | 森本友三郎 | 420 静岡県静岡市宮ケ崎町95<br>☎(054)252-0098 FAX252-7376 | 静岡中央産業㈱<br>☎(054)285-4121<br>FAX 285-4122 |
| 〃 | 梅林秀民 | | |
| 〃 | 高部章夫 | 140 東京都品川区東大井3-2-11<br>☎(03)3765-5566 | |
| 27経 | 村松真治 | | |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 |
|---|---|---|---|
| 27経 | 菊池　醇 | 311-12 茨城県ひたちなか市海門町1-5-26<br>☎(029)262-2214 FAX兼用 | 米六本店<br>☎(0292)62-2214 |
| 〃 | 内海冠次 | 225 神奈川県横浜市青葉区市ケ尾町1157-1<br>東急ドエル市ケ尾アネックス903号　☎(045)971-5687 | |
| 28理 | 亀山　博 | 158 東京都世田谷区奥沢1-58-5<br>☎(03)3728-2262 | 堀産科婦人科医院<br>☎(045)391-2561 |
| 29社 | 玉越忠治 | 491 愛知県一宮市平和2-17-7<br>☎(0586)45-5084 | ㈲玉越<br>☎(0586)46-2202 |
| 〃経 | 三谷恭通 | 逝去 | |
| 〃 | 遠山　宏 | 176 東京都練馬区小竹町1-69<br>☎(03)3955-0587 | |
| 〃 | 村上忠三 | 060 札幌市中央区北十八条西15-1-1<br>☎(011)716-1658 FAX兼用 | ㈱ムラカミ<br>☎(011)736-3311 FAX716-8339 |
| 〃 | 本多義生 | 158 東京都世田谷区東玉川2-38-9<br>☎(03)3720-8112 | |
| 〃 | 上村　裕 | 逝去(H8.4.17) | |
| 30経 | 白木靖男 | 104 東京都中央区築地2-10-11<br>☎(03)3543-8722 | 筧毛織<br>☎(03)3543-8721 |
| 〃 | 有馬英三 | 逝去 | |
| 31社 | 佐藤芳朗 | 177 東京都練馬区関町北3-30-3<br>☎(03)3928-7007 | ホテルグランドパレス<br>☎(03)3264-1111 FAX3262-4000 |
| 〃経 | ○野村昌宏 | 182 東京都調布市西つつじケ丘2-29-2<br>☎(03)3300-7685 | 小野村商店<br>☎(03)3256-1125 FAX3250 |
| 〃 | 古畑益男 | 107 東京都港区北青山2-9-14<br>☎(03)3401-8523 | 青山シスター生花<br>☎(03)3401-8523FAX兼用 |
| 〃 | 吉田友則 | 359 埼玉県所沢市久米332-21<br>☎(0429)24-7809 | |
| 〃社 | 瀬川　浩 | 逝去 | |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 |
|---|---|---|---|
| 31社 | 山崎　茂 | 233 横浜市港南区野庭町608-4-413<br>☎(045)843-5307 | ㈱旭商工社<br>☎(045)311-1551 FAX314-4678 |
| 〃 | 尾崎良三 | 逝去 | |
| 〃経 | 金居桂二郎 | | 芙蓉住宅サービス㈱業務部<br>☎(03)3249-3277 FAX3249-2771 |
| 32経 | 天海正樹 | 328 栃木県栃木市嘉右衛門町13-2<br>☎(0282)22-0458 | |
| 〃 | 望月文雄 | 116 東京都荒川区南千住8-52-1-410<br>☎(03)3802-3410 | 大洋信金事務管理部<br>☎(03)3802-5421 |
| 〃 | 力石　潔 | 237 神奈川県横須賀市湘南鷹取5-26-11<br>☎(0468)66-2090 FAX兼用 | ㈲シックスエス<br>☎(03)3446-7273 |
| 〃 | 新倉和男 | 240-01 神奈川県三浦郡葉山町下山口1936<br>☎(0468)75-6270 | ファミリーマート一騎塚店<br>☎(0468)57-3757 |
| 〃 | 岩崎松男 | 155 東京都世田谷区代沢2-3-7<br>☎(03)3421-0313 | |
| 〃 | 漆山　明 | 992-04 山形県南陽市宮内2549<br>☎(0238)47-2021 | ㈱漆山喜久治商店<br>☎(0238)47-2031 |
| 〃 | ○小西宏昌 | 101 東京都千代田区外神田5-5-11<br>☎(03)3836-4170 FAX3832-2289 | ㈱紅葉屋小西<br>☎(03)3833-5721 FAX3832-2289 |
| 〃 | 佐藤　劭 | 逝去 | |
| 33社 | 折井利彦 | 158 東京都世田谷区上用賀4-33-17<br>☎(03)3428-2596 FAX兼用 | 日本クリントン㈱<br>☎(03)3800-5391<br>FAX3800-5343 |
| 〃 | 花岡牧夫 | 194 東京都町田市成瀬1-18-5<br>☎(0427)96-3885 | ㈱ハヤカワエイジェンシー<br>☎(03)3502-4111 |
| 〃経 | 衣笠　亨 | 逝去(H8.6.) | |
| 〃 | 加藤正則 | 187 東京都小平市学園西町3-22-5<br>☎(0423)44-8161 FAX兼用 | ㈱フオリア<br>☎(03)5392-1207<br>FAX5392-3140 |
| 〃 | 三橋弘幸 | 194-01 東京都町田市鶴川2-17-10<br>☎(0427)35-0384 | 山本扛重機㈱<br>☎(03)3551-2012 FAX3551-2888 |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 |
|---|---|---|---|
| 33経 | 井桁啓允 | | |
| 〃社 | 片石兼敏 | 逝去 | |
| 34社 | 伊豆内宏 | 251 神奈川県藤沢市鵠沼桜が岡3-17-5<br>☎(0466)22-8062 | 伊豆内精機製作所<br>☎(0466)23-8341 FAX23-8342 |
| 〃 | 大野弘生 | 215 神奈川県川崎市麻生区白鳥3-1-17<br>☎(044)987-0907 | ㈱入船<br>☎(03)5920-2231 |
| 〃経 | 油井一 | 960 福島県福島市吉倉字谷地33-3<br>☎(0245)45-1842 | 丸井産業㈱<br>☎(0245)91-1417 |
| 〃 | 木下孝夫 | 272-01 千葉県市川市福栄2-1-1-516<br>☎(0473)97-1705 | |
| 〃 | 浅野久 | 165 東京都中野区新井4-32-7<br>☎(03)3228-0755 FAX兼用 | 尚山堂<br>☎(03)3987-2151 FAX3987-5469 |
| 〃 | 宮沢健一 | 251 神奈川県藤沢市鵠沼海岸2-13-8<br>☎(0466)36-7898 | 太平洋製糖㈱<br>☎(045)501-0511 |
| 35社 | 瀬戸喜行 | 236 横浜市金沢区金沢町148<br>☎(045)701-9371 | 原田港湾作業㈱<br>☎(045)201-3391 FAX201-4114 |
| 〃経 | 小宮貞男 | 235 横浜市磯子区森4-10-10<br>☎(045)752-3109 | 愛知陸運㈱本社<br>☎(0568)72-1100 FAX73-9716 |
| 〃 | 内山巌 | 333 埼玉県川口市神戸221-4<br>☎(0482)96-5496 | |
| 〃 | 並木伸裕 | 213 川崎市高津区末長428-1 B309<br>☎(044)8[illegible] | 日産東京会事務局<br>☎(03)3308-3723 FAX3308-4555 |
| 〃 | ○永井栄一 | 174 東京都板橋区蓮根2-19-30<br>☎(03)3968-3748 | ㈱野村商店<br>☎(03)3256-1125 FAX3256-1135 |
| 〃 | 富田重亮 | 勤務先　国際農業開発基金　IFAD　本部ローマ(イタリア)<br>International Fund for Agricaltural Development | |
| 36社 | 三雲晴夫 | 335 埼玉県蕨市中央4-15-4<br>☎(048)432-5476 | エトワール海渡<br>☎(03)3663-5111 FAX5687-3331 |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 |
|---|---|---|---|
| 36社 | 石川千明 | 165 東京都中野区野方6-33-8<br>☎(03)3310-6199 | 安生商事株式会社<br>☎(03)3349-6428 FAX3346-9427 |
| 〃経 | 小栗和平 | 432 静岡県浜松市鴨江4-19-16<br>☎(053)452-6093 | 浜松カントリークラブ<br>☎(0539)25-4141 FAX25-5003 |
| 〃 | 大林義和 | 761 香川県高松市鬼無町佐藤162<br>☎(0878)82-2615 | 四国菱興株式会社<br>☎(0878)82-1749 FAX82-1799 |
| 〃 | 瀧澤敏郎 | 950-21 新潟市青山新町25-21<br>☎(025)266-3983 | ㈱新潟総合テレビ<br>☎(025)249-8800 FAX(025)249-8880 |
| 〃 | 山下好一 | 244 横浜市戸塚区下倉田町443<br>☎(045)881-5086 | ニッカウヰスキー㈱本社総務部<br>☎(03)3498-0991 FAX3520-0250 |
| 〃 | 板垣隆房 | 990 山形県山形市木の実町9-15<br>☎(0236)22-1551 FAX22-1556 | ㈱板垣商店<br>☎(0236)22-1551 FAX22-1556 |
| 〃 | 永田靖男 | 120 東京都足立区中川1-21-14<br>☎(03)3604-0424 | ㈱東急ストア<br>☎(03)3714-2331 |
| 〃 | 内藤成安 | 202 東京都保谷市新町5-1-1<br>☎(0422)55-5166 | 山一證券株式会社<br>☎(03)5634-1168 FAX5634-1189 |
| 〃 | 安田元信 | 038 青森県北津軽郡板柳町大字福野田字実田114-2<br>☎(0172)73-2003 | 日本火災海上保険㈱青森支店弘前支社<br>☎(0172)33-1172 FAX33-1274 |
| 37社 | 小宮好雄 | 156 東京都世田谷区船橋3-4-18<br>☎(03)5477-4123 | 自動車工業振興会専務理事<br>☎(03)3211-8731 FAX3211-5798 |
| 〃経 | 長谷川陽一 | 467 名古屋市瑞穂区高田町2-4<br>☎(052)851-0331 | 第一倉庫㈱<br>☎(052)661-0215 |
| 〃 | 浅見征一郎 | 358 埼玉県入間市鍵山1-1-4<br>☎(0429)62-2022 | ㈱山万<br>☎(0429)62-2022 |
| 〃 | 望月昭 | 111 東京都台東区蔵前4-13-4<br>大蔵シャルム601 ☎(03)3861-9141 | ㈱大東流通サービス<br>☎03-3259-3764 |
| 〃 | ○岩佐俊二 | 142 東京都品川区西中延3-1-18<br>☎(03)3781-0324 | 昭和化学工芸㈱東京営業所<br>☎(03)3591-1438 FAX3591-1440 |
| 38法 | 鈴木幸春 | 358 埼玉県入間市新久820-157,11-130<br>☎(0429)36-1436 | (財)電気通信共済会東京支部 東京西営業所<br>☎(0425)24-0448 FAX24-0020 |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 |
|---|---|---|---|
| 38経 | 板垣善憲 | 470-03 愛知県豊田市四郷町天道46-10<br>☎(0565)44-0831 | 愛知陸運㈱<br>☎(0568)72-1310 FAX72-2904 |
| 〃 | 佐藤次之 | 235 横浜市磯子区磯子6-30-15<br>☎(045)753-7016 | ㈱岡村製作所ライフスケープ研究所<br>☎(03)5323-3760 FAX5323-3763 |
| 〃社 | 長谷川武司 | 236 横浜市金沢区富岡東6-5-8<br>☎(045)774-7571 | |
| 39経 | 東条義昭 | 761 香川県高松市一宮町1682-4<br>☎(0878)86-3756 | 琴平電鉄<br>☎(0878)21-5671 |
| 〃 | 田中邦彦 | 240 神奈川県三浦郡葉山町長柄1384-5<br>☎(0468)75-1401 | キョーエーメック㈱　（松下）<br>☎(045)311-7156 FAX311-7215 |
| 40文 | 秦浩 | 860 熊本県熊本市高平2-10-10<br>☎(096)345-9285 | 体育堂ラケットワークス Wai Wai<br>(096)326-8132 FAX兼用 |
| 41文 | 松崎正門 | 241 神奈川県川崎市多摩区生田6-28-3<br>☎(044)954-2705 | ㈱森林ホームプロダクツ<br>☎(03)3468-2278 FAX3468-2279 |
| 〃経 | ○鵜飼良機 | 162 東京都新宿区山吹町316<br>☎(03)3260-2734 FAX付 | ㈲鵜飼印刷<br>☎(03)3268-6804 FAX兼用 |
| 〃 | 田中勝 | 194-01 東京都町田市相原町856-27<br>☎(0427)73-3273 | ㈲田中タイル商会<br>☎(0427)73-3273 |
| 〃 | 木村捷夫 | 236 横浜市金沢区能見台5-50-9<br>☎(045)788-4433 | ㈱伊藤機電<br>☎(03)3669-7311 FAX3669-7310 |
| 〃社 | 安沢武司 | 444-21 愛知県岡崎市細川町上大針47-45<br>☎(0565)45-4653 | トヨタ自動車㈱広瀬工場　電子製技管理室<br>☎(0565)46-3115 FAX46-3380 |
| 〃 | 大竹紘一 | 950 新潟市東明2-5-1　マンション[illegible]<br>☎(025)286-1731 | ㈱中山工務店<br>☎(025)284-2141 FAX[illegible] |
| 〃 | 加藤寛 | 489 愛知県瀬戸市南山町1-82<br>☎(0561)84-2888 FAX84-7199 | ㈱加藤電機製作所<br>☎(0561)84-2888 FAX84-7199 |
| 〃法 | 飯塚士朗 | 145 東京都大田区上池台4-20-1<br>☎(03)3720-3408 | 日商岩井食料㈱<br>☎(03)5641-4060 |
| 42経 | 須田孝夫 | 232 横浜市南区六ツ川1-357<br>☎(045)731-1507 | パブレストラン<br>「クルーズ」<br>☎(0423)28-2036 |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 |
|---|---|---|---|
| 42法 | 星野義昭 | 179 東京都練馬区光が丘5-2-3,1406<br>☎(03)3979-6880 | ㈱NTT西東京支店<br>☎(0426)56-3317 FAX56-3319 |
| 〃 | 伊勢幸助 | 135 東京都江東区深川平野2-3-8<br>☎(03)3522-1471 FAX3522-1473 | 伊勢幸木材<br>☎(03)3642-1472,3522-147X |
| 〃 | 永田和義 | | |
| 43経 | 剣持勝巳 | 324 栃木県大田原市美原186<br>☎(02872)3-4575 | 河合楽器<br>☎(0286)63-3211 |
| 〃社 | 裏田光男 | 176 東京都練馬区中村南2-2-12-105<br>☎(03)3577-3972 | ミサワホーム上越<br>☎(0255)43-4494 |
| 〃法 | 星野義夫 | 951 新潟県新潟市寄附町4992<br>☎(025)224-0983 | 日産プリンス新潟販売<br>☎(025)243-4111 |
| 44文 | 池上芳三 | 307 茨城県結城市結城11711-22<br>☎(0296)32-3216 | 茨城木工所<br>☎(0297)42-2521 FAX42-4158 |
| 〃社 | 立野政昭 | 226 横浜市緑区青砥町1140<br>☎(045)931-4465 | メルクマール<br>☎(03)3450-2311 |
| 〃経 | 丸保信 | 004 札幌市豊平区平岡八条3丁目5-7<br>☎(011)884-4273 | 長崎屋サンバードFC本部<br>(011)898-1488 FAX(011)897-0714 |
| 45経 | 瀬戸孝 | 233 横浜市港南区野庭町615-2-212<br>☎(045)841-3182 | 産能大学　通信教育部<br>☎(03)3704-1118 FAX3704-8205 |
| 〃社 | 堀幸矩 | 471 豊田市古瀬間町鳥ケ峯371-114<br>☎(0565)80-7850 | トヨタ輸送㈱<br>☎(0565)28-3321 FAX28-0075 |
| | 寺前信之 | 931 富山市針原中町804<br>☎(0764)41-2487 | アール・ジェイ富山販売㈱<br>☎(0764)22-1168 FAX22-7768 |
| 46社 | 高橋宣 | 950 新潟市南出来島2-4-16<br>☎(025)285-0461 | ㈱日伸建物管理新潟支店<br>☎(025)281-0961 FAX281-0961 |
| 47社 | 小柳勇一 | 273 千葉県船橋市本町6-12-20-207<br>☎(0474)26-4518 | ㈱読売広告社新聞雑誌局雑誌部<br>(03)3563-7884 |
| 〃 | 宮原譲 | | |
| 48経 | 田中堅造 | 690 島根県松江市古志原町7-29-43 | |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 |
|---|---|---|---|
| 48経 | 大賀　恵 | 277 千葉県柏市松葉町4-1-12-406<br>☎(0471)31-4734 | ㈱ナポリアイスクリーム<br>☎(03)3357-5040 FAX3357-5047 |
| 〃 | 奥村道徳 | 700 岡山県岡山市奥田本町4-3-603 | |
| 〃 | 谷口　寛 | 519-14 三重県阿山郡伊賀町大字山畑4864<br>☎(0595)45-3267 FAX(0595)45-4492 | ヤマギシズム研鑽学校 |
| 49経 | 大内　進 | 961 福島県白河市字影鬼越30-58<br>☎(0248)24-5280 | 東邦銀行　白河支店<br>☎(0248)22-3131 |
| 〃法 | 村山英十 | 999-31 山形県上山市十日町6-19<br>☎(02367)2-0365 | ㈲丸正食料品店 |
| 49理 | 古郡文博 | 416 静岡県富士市中島221-2<br>☎(0545)61-3992 | 富士市役所　市民部<br>☎(0545)51-0123 |
| 50理 | 岡田哲男 | 930-03 富山県中新川郡上市町東町91-2<br>☎(0764)72-1588 | 婦中町立　朝日小学校<br>☎(0764)69-2392 |
| 〃文 | 若松孝義 | 277 千葉県柏市中央2-3-9<br>☎(0471)63-1837 | エムオーエアシステム㈱輸入開発部<br>☎(0473)28-8805 |
| 〃法 | 深沢政明 | 284 千葉県四街道市四街道1533-59<br>☎(043)423-7015 | ㈱フォード千葉　松飛台店<br>☎(047)385-0041 FAX385-8110 |
| 51社 | 桑田正栄（しょうえい） | 949-37 新潟県柏崎市北条773　西方寺<br>☎(0257)25-3015 | 西方寺　（清水）<br>☎(0257)25-3015 |
| 〃法 | 下平勝久 | 272 千葉県市川市高谷2-1-7-304<br>市川グリーンタウン磯貝304☎(047)370-7450 | ジャスコ㈱GM商品本部<br>☎(043)212-6174 FAX212-6859 |
| 〃経 | 鈴木節夫 | 227 横浜市緑区あかね[illegible]<br>☎(045)982-8098 | 川崎信用金庫本店人事教育部<br>☎[illegible] |
| 52経 | 井上　龍 | 472 愛知県知立市八ツ田町1-12-4<br>☎(0566)82-0968 | 名鉄保険代行㈱損害保険部<br>☎(052)581-6121 FAX586-0619 |
| 〃 | 鈴木哲夫 | 261 千葉市美浜区幸町1-5-3-608<br>☎(043)242-6680 | 山崎製パン㈱千葉工場経理課<br>☎(043)246-7113 |
| 〃法 | 伊藤要三 | 274 千葉県船橋市三咲5-29-7<br>☎(0474)47-0867 | きもののやまと 営業企画部 宣伝課<br>☎(03)3356-2181 FAX3354-4906 |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 |
|---|---|---|---|
| 53経 | 鈴木　宏 | 340-02 埼玉県北葛飾郡鷲宮町九本寺535-6<br>☎(0480)59-1672 | 寒梅酒造㈱<br>☎(0480)21-2301 FAX23-2078 |
| 54社 | 中島富雄 | 464 名古屋市千種区西崎町1-14（実家） | |
| 〃 | 植竹明彦 | 370-03 群馬県新田郡新田町木崎76-2<br>☎(0276)56-2586 FAX56-6330 | 日本トイザラス㈱<br>☎(044)549-9070 FAX549-9114 |
| 54法 | ○曽我之雄 | 173 東京都板橋区小茂根3-6-18-607<br>☎(03)3956-5617 | 第一ライフ損害保険㈱水戸センター<br>☎(029)227-2140 FAX222-4235 |
| 〃経 | 林　健二 | 064 札幌市中央区宮の森三条8丁目3-15<br>ワコール宮の森住宅206号(011)644-9908 | ㈱ワコール札幌店<br>☎(011)642-7113 |
| 55経 | 佐藤久雄 | 272 千葉県市川市南八幡1-24-15<br>ルミナス藤104☎(0473)93-2257 | 旭ファイバーグラス㈱複合基材事業本部<br>☎(03)5296-1521 |
| 〃 | 上村敏治 | 124 東京都葛飾区立石3-4-6<br>☎(03)3693-2587 | 巣鴨信用金庫本店業務部<br>☎(03)3918-4400 |
| 〃法 | 薗部秀之 | 188 東京都田無市本町2-19-9<br>☎(0424)63-6830 | ㈱ニコン経理部予算課<br>☎(03)3216-1085 FAX3216-1457 |
| 56経 | ○金子真人 | 340 埼玉県草加市松原5-7-12<br>三和銀行草加松原寮<br>(0489)43-5240 | 三和銀行 |
| 〃 | 坂野正明 | 224 横浜市都筑区荏田南5-20-7-103<br>☎(045)941-2793 | ソニーサウンドテック㈱<br>☎(03)3490-4132 |
| 56経 | 白沢千晴 | 251 神奈川県藤沢市藤沢628<br>☎(0466)23-3172 | (北村) |
| 〃 | 武井慎一 | 262 千葉市花見川区花園2-8-18-104<br>☎(043)296-1584 | 明治生命　蘇我営業所<br>☎(0472)63-1782 |
| 〃 | 有賀和美 | 389-12 長野県上水内郡牟礼村大字豊野1183-1<br>☎(0262)53-3135 | 長野信用金庫　飯山支店<br>☎(0269)62-3141 |
| 〃 | 榎本正美 | 330 埼玉県大宮市東大宮6-25-7-305<br>☎(048)686-5114 | パイオニア　本社<br>☎(03)3495-9943 |
| 〃文 | 上田孝司 | 228 神奈川県座間市相模が丘5-47-25-202<br>☎(0427)46-8035 | 都立忠生高等学校<br>☎(0427)91-1631 |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 |
|---|---|---|---|
| 〃経 | 関山　浩 | 259-01 神奈川県中郡二宮町中里919-18<br>☎(0463)73-3578 | 三井埠頭㈱東京営業所<br>☎(03)3553-7651<br>FAX3553-7663 |
| 〃 | 飯島明彦 | 320 栃木県宇都宮市材木町2-2<br>☎(0268)34-5051 | 製茶問屋飯島園<br>☎(0268)34-5051 |
| 58経 | 松下一成 | 226 横浜市緑区東本郷1-24-17<br>☎(045)472-3087 | 日産化学工業㈱農業化学品事業部営業統括部<br>☎(03)3296-8140 3296-8016 |
| 59法 | 山崎　実 | 360-01 埼玉県熊谷市楊井1732-5<br>☎(0485)36-6987 | 熊谷市役所　熊谷土木事務所<br>☎(0485)33-8775 |
| 〃経 | 流　博 | 157 東京都世田谷区喜多見9-22-7-106<br>☎(03)5497-5175 | 富士ゼロックス㈱<br>☎(03)5717-1383 FAX5717-1389 |
| 〃 | 星　邦明 | 逝去 | |
| 60経 | 石田俊司 | 247 横浜市栄区元大橋1-10-2<br>☎(045)892-7601 | 第一中央汽船㈱<br>☎(03)3278-6876 FAX3278-6830 |
| 〃文 | 小池直人 | 465 名古屋市名東区富が丘174<br>ヒルズ富が丘2-D☎(052)776-4019 | 富士ゼロックス㈱岐阜営業所<br>☎(058)276-1311 FAX278-0006 |
| 〃 | 田中靖浩 | 465 名古屋市名東区亀の井2-86<br>カメノイハウス 303☎(052)703-9590 | 大和證券㈱名古屋支店<br>☎(052)963-7313 FAX962-1750 |
| 61経 | 遠藤敬志 | 380 長野県長野市上松2-15-7<br>第一生命長野アパートA-101 ☎(029)232-8767☎(026)226-3983 FAX226-3976 | 第一生命　長野支社 |
| 〃 | ○大森康裕 | 262 千葉市花見川区幕張町4-646<br>京葉銀行　幕張寮304 ☎(043)276-7034 | 京葉銀行　行徳支店<br>☎(047)356-9111 FAX356-9116 |
| 61法 | 高塚秀樹 | 245 横浜市泉区和泉町6206-1-210<br>(045)805-3299 | 第一勧銀　本店　営業第7部<br>☎(03)3596-5898 FAX3596-5497 |
| 62法 | 宮野尾公一 | 381 長野県長野市柳原665-1<br>☎(0262)43-5086 | ㈱マルイチ産商<br>☎(0262)86-4101 |
| 〃 | 村島　実 | 134 東京都江戸川区船堀6-5<br>パークハイツ1-308 ☎(03)3878-9096 | 江東区役所(東洋図書館)<br>☎(03)3644-6121 |
| 〃経 | 尾崎弘明 | 栃木県小山市西城南1-8-49<br>アリエスⅠ-201 ☎(0285)27-5025 | 北関東フジクリーン管理㈱<br>☎(0285)45-5700 FAX(0285)45-5176 |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 |
|---|---|---|---|
| 63経 | 小林吉則 | 253 神奈川県茅ヶ崎市南湖6-4-6 | |
| 〃 | 柴公人 | 396 長野県伊那市大字伊那部6442-4<br>☎(0265)76-8796 | 伊那市役所農政課<br>☎(0265)78-4111 FAX(0265)72-4142 |
| 〃 | 渡部元 | 651-21 兵庫県神戸市西区王塚台3-7<br>プレジオ王塚台10A | |
| 〃 | 宇佐美正彰 | 890 鹿児島市上荒田町22-16-301<br>☎(099)257-3956 | 住友信託銀行　鹿児島支店<br>☎(099)227-1131 |
| 63法 | 中谷厚之 | 761 香川県高松市寺井町1266-8<br>☎(0878)85-9805 | 高松市役所　都市計画課<br>☎(0878)39-2455 FAX39-2452 |
| H1経 | 嶋崎靖 | 776 徳島県麻植郡鴨島町鴨島702-3<br>筒井ハイツ103(0883)24-7993 | ㈱四国銀行　鴨島支店 |
| H2社 | 川底宏至 | 216 川崎市青葉区あざみ野南2-2-3<br>リヴェールA101<br>(045)912-0039 FAX兼用 | 三和銀行　麹町支店<br>☎(03)3230-3221 FAX3265-0248 |
| H4文 | 山崎祐一 | 923 石川県小松市鵜川町1-3<br>☎(0761)47-1178 | 森康㈱<br>(0761)21-2233 |
| H5社 | 上原等 | 381 長野県長野市富竹1231<br>☎(0262)96-3803 | 長野地方法務局<br>☎(0262)35-6611 |
| 〃文 | 小川原元茂 | 173 東京都板橋区中丸町9-1-506<br>☎(03)3973-4554 | ㈱高島屋東京店<br>☎(03)3264-4510 |
| 〃法 | 飯島伸仁 | 244 横浜市戸塚区戸塚町2891-3-104<br>☎(045)862-3727 | 月島機械㈱横浜支店<br>(045)651-7331 FAX664-5086 |
| H6文 | 會澤謙二 | 112 東京都文京区春日2-24-7-205<br>☎(03)5800-0465 | 朝日生命保険相互会社　江戸川支社<br>☎(03)5607-1801 FAX5607-1818 |
| 〃法 | 島田昌寛 | 390 長野県松本市島立535-10<br>☎(0263)48-2408 | 第一勧業銀行　松本支店<br>☎(0263)33-3305 FAX36-5812 |
| 〃経 | 高橋幸二 | 350-11 埼玉県川越市砂62-9<br>☎(0492)45-2147 | 山下ゴム㈱総務部経理課<br>(0492)62-2122 FAX66-4145 |
| 〃 | 田中尚 | 350-11 埼玉県川越市的場2202-45<br>☎(0492)32-4588 | 川越市役所<br>(0492)24-8811 |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 |
|---|---|---|---|
| H6社 | 長瀧洋行 | 951 新潟市本町通五番町269-1<br>メゾン・ド・エグレット303 ☎(025)222-2330 | 日本高速通信㈱東京支店 新潟営業所<br>☎(025)249-0070 FAX269-0071 |
| 〃 | 西島次朗 | 183 東京都府中市美好町3-6-29-101<br>☎(0423)67-3045　FAX兼用 | 木下工務店　注文住宅事業部 八王子(営)<br>☎(0426)45-1064 FAX45-1924 |
| 〃文 | 丸山泰史 | 110 東京都台東区東上野2-8-1<br>☎(03)3831-6533 | 日東化学工業株式会社<br>☎(03)3271-0258<br>FAX3271-0354 |
| H7経 | 渡辺篤夫 | 245 横浜市泉区和泉町4375-1<br>いすゞ自動車ビューライド和泉寮121号 ☎(045)804-9180 | いすゞ自動車 |
| H8経 | 三井邦雄 | 225 横浜市青葉区美しが丘1-19-53 | 清泉女子大学<br>☎(03)3447-5551 FAX3447-5493 |
| 〃 | 小林敦哉 | 950 新潟県新潟市天神2-2-1-604 | サントリーフーズ㈱ |
| 〃理 | 相田敏広 | 136 東京都江東区北砂5-20-10-802<br>☎(03)3699-4528 | 岩谷産業<br>080-110-9268 |
| 〃文 | 桑山洋典 | 340 埼玉県草加市青柳8-28-5<br>レオパレス草加 第21-101☎(050)213-1437 | ミドリ安全工業㈱テクニカルセンター<br>☎(0489)31-4925 |
| H9理 | 吉田亘 | 352 埼玉県新座市北野2-5-6<br>☎(048)478-2419 | ㈱キャッツ横浜営業所<br>☎(045)314-6492 |
| 〃法 | 島崎慎一 | 336 埼玉県浦和市瀬ケ崎1-21-21<br>☎(048)887-6333 | |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 | (旧姓) |
|---|---|---|---|---|
| 34文 | 六角冴子 | 156 東京都世田谷区羽根木2-37-1<br>☎(03)3324-5138 | | (石山) |
| 〃 | 寺島桃子 | | | (阿部) |
| 35文 | 井口久美子 | 181 東京都三鷹市下連雀1-20-10<br>☎(0422)47-0086 | | (上野) |
| 〃 | 秋山令美子 | 174 東京都板橋区蓮沼町45-18-305<br>☎(03)5970-4118 | | (渡辺) |
| 〃 | 香西(かさい)民子 | 180 東京都武蔵野市吉祥寺南町3-2-8<br>☎(0422)79-0212 FAX兼用 | | (福田) |
| 〃 | 黒川章子 | 236 横浜市金沢区柴町7-57<br>☎(045)783-0624 | | (二瓶) |
| 36文 | 牧禊 | 112 東京都文京区千石4-25-13<br>☎(03)3943-8080 | | (吉武) |
| 〃 | 山本道子 | 350-13 埼玉県狭山市水野796<br>☎(0429)59-1331 | | (辻田) |
| 37文 | 佐原美子 | 242 神奈川県大和市下鶴間1780-5-104<br>☎(0462)77-1431 FAX共用 | JAS商事㈱販売本部<br>☎(03)5562-4672 FAX5562-4661 | |
| 〃 | 西郷陸(みち)子 | 216 川崎市宮前区土橋1-17-406<br>☎(044)854-3166 | | (中司) |
| 〃 | 出口恵理 | 221 横浜市神奈川区六角橋5-9-26<br>☎(045)491-0683 FAX兼用 | | |
| 〃 | Mrs. Gibney | | | (土井弘子) |
| 38文 | 青柳陽子 | 357 埼玉県飯能市美杉台3-8-6<br>☎(0429)72-1965 | | (井手) |
| 〃 | 金川綾子 | 164 東京都中野区中野2-29-9<br>☎(03)3380-2124 | さんすい堂 | (橋本) |
| 〃 | 宮本サヨ子 | 263 千葉市稲毛区小仲台7-8-28-202<br>☎(0472)55-5147 | | (鮎川) |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 | (旧姓) |
|---|---|---|---|---|
| 38文 | 小林延枝 | 350-04 埼玉県入間郡毛呂山町小田谷748<br>☎(0492)94-0502 FAX(0492)94-0432 | | (桑原) |
| 39文 | 安居渚 | 106 東京都港区南麻布4-5-36<br>☎(03)3447-5147 | | (川喜田) |
| 40文 | 佐川栄子 | 254 神奈川県平塚市龍城ケ丘2-43<br>☎(0463)34-0815 | | (篠塚) |
| 〃 | 冨田起代子 | 529-04 滋賀県伊香郡木之本町木之本1107<br>☎(0749)82-2013 FAX82-5507 | | (沼田) |
| 〃 | 大久保要子 | 251 神奈川県藤沢市辻堂太平台1-9-42<br>☎(0466)35-7367 | | (海内) |
| 41文 | 鈴木嘉代子 | "194 東京都町田市玉川学園8-5-7<br>☎(0427)27-0186,25-9200 FAX27-0145 | | (谷口) |
| 〃 | 岡光弘子 | | | (大原) |
| 〃経 | 豊田恵子 | 73-1404 KAIKA PLACE KAILUA-KONA,HAWAII<br>96740 USA Keiko Toyoda | | (佐藤) |
| 42文 | 北村登喜子 | 157 東京都世田谷区成城1-6-19-711<br>☎(03)3416-7830 | ㈱MSC<br>☎(03)3379-2456 | (丸田) |
| 〃社 | 足立サカエ | 323 栃木県小山市犬塚420-2<br>☎(0285)24-1026 | | (米山) |
| | 高木由起子 | (H9.3 逝去) | | (金子) |
| 〃 | 谷田秀子 | 685 島根県隠岐郡西郷町西町京見屋分店<br>☎(08517)2-0425 | | (沢井) |
| 〃 | 塩谷敦子 | 413 静岡県熱海市銀座町13-8<br>(0557)81-0111 | フジヤホテル<br>☎(0557)81-7111 | |
| 43法 | 脇晴代 | 359 埼玉県所沢市三ケ島1-119-5<br>☎(0429)48-6022 | | (堀部) |
| 〃文 | 野見山鈴子 | 167 東京都杉並区井草5-12-15<br>☎(03)3394-0378 | | (西田) |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 | (旧姓) |
|---|---|---|---|---|
| 44文 | 国井道子 | 302 茨城県取手市井野台2-2-2<br>☎(0297)72-7064 | | (増田) |
| 〃 | 山口朋子 | 231 横浜市中区千代崎町2-71-2-404 | | (並木) |
| 45文 | 渡辺静子 | 983 仙台市青葉区中江2-15-1-101<br>☎(0222)65-8329 | | (佐藤) |
| 〃 | 平井ひろみ | | | (内野) |
| 〃 | 吉田恵子 | 957 新潟県新発田市緑町3-13-11<br>☎(0254)24-8844 | | (川鍋) |
| 〃 | 塚越雪子 | | | (梨羽) |
| 〃 | 本山みどり | 072 美唄市大通西一条南一丁目3-11 | | (松野) |
| 〃 | 河野和子 | 272 千葉県市川市八幡5-19-11 | | |
| 47文 | 高橋啓子 | 362 埼玉県上尾市小敷谷858-47<br>☎(048)725-3039 | | (斎藤) |
| 〃 | 梅原和美 | 781-02 高知県高知市瀬戸166-6<br>☎(0888)41-0233 FAX42-8070 | | (谷) |
| 47文 | 佐々木順 | 115 東京都北区岩淵町25-5-408<br>☎(03)3903-2526 | 日本交通公社 | |
| 49文 | 若松恵子 | 177 千葉県柏市中央2-3-9<br>☎(0471)63-1837 | | (長田) |
| 50文 | ○河下菊代 | 349-01 埼玉県蓮田市桜台1-10-4<br>☎(048)769-3058 | | (田中) |
| 〃 | 吉田あや子 | 770 徳島県徳島市新蔵町3-34-3<br>☎(0886)55-7063 | | (庄野) |
| 〃 | 畑寿子 | 180 東京都武蔵野市吉祥寺北町4-10-1<br>☎(0422)51-6481 | | (栗田) |
| 〃社 | 佐藤由紀子 | 194 東京都町田市南つくし野3-12-17<br>センチュリーハイツ12-301☎(0427)96-5452 | | (高月) |
| 〃 | 片桐章(しょう)子 | 161 東京都新宿区中井2-23-3<br>☎(03)3952-3420 | | (大西) |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 | (旧姓) |
|---|---|---|---|---|
| 51文 | 後藤宮子 | 520 滋賀県大津市赤尾町19-27<br>☎(0775)33-0728 FAX兼用 | | (杉浦) |
| 〃 | 近藤晶子 | 362 埼玉県北足立郡伊奈町栄4-53-3<br>☎(048)722-0986 | 県立川口清陵高校 (岡田)<br>☎(0482)96-1154 | |
| 52文 | 塩谷てる子 | 567 大阪府茨木市山手台7-19-14<br>☎(0726)49-4041 | | (鈴木) |
| 〃 | 馬詰悦子 | 351-01 埼玉県和光市諏訪3-3<br>☎(048)463-0748 | | (志村) |
| 〃経 | 長沢則子 | 350 埼玉県川越市中原町1-10-5<br>☎(0492)24-2115 (実家) | 米国ハワイ在住 | |
| 53社 | 鈴木久江 | 340-02 埼玉県北葛飾郡鷲宮町久本寺535-6<br>☎(0480)59-1672 | | (中嶋) |
| 54経 | 平林登茂子 | 358 埼玉県入間市豊岡2-3-34<br>☎(0429)65-1780 | | (竹崎) |
| 55文 | 小川陽子 | 167 東京都杉並区下井草1-23-21<br>☎(03)3390-1776 FAX兼用 | コージーハウス(輸入雑貨)<br>☎(03)3390-1776 | |
| 〃 | 林史恵 | 183 東京都府中市押立町1-14<br>グリーンハイツ車返南3-501 ☎(0423)65-6724 | | (西岡) |
| 〃 | 猪狩美佐江 | 227 横浜市緑区鴨志田町429<br>☎(045)962-0417 | | (原野) |
| 〃社 | 関口真澄 | 359 埼玉県所沢市中富南1-3-4<br>☎(0429)43-6135 | セティ カンパニー リミテッド・アイソトープ課<br>☎(03)3403-0333 FAX3404-4472 | |
| 〃 | 本間かよ | 952-14 新潟県佐渡郡佐和田町大字沢根村717<br>☎(02595)2-6484 | | |
| 56法 | 渡辺由美子 | 182 東京都調布市小島町3-1-1<br>ライブタウン調布3番館207 ☎(0424)84-3986 | | (小川) |
| 57文 | 清水啓子 | 335 埼玉県戸田市上戸田111<br>サンマンション戸田512号 | | |
| 57経 | 大矢真樹 | 135 港区台場1-3-4-809<br>☎(03)5531-3593 | チェース信託銀行 (吉田)<br>☎(03)5570-8262 | |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 | (旧姓) |
|---|---|---|---|---|
| 57社 | 井桁麻子 | 330 埼玉県大宮市本郷町841<br>本郷宿舎3-103 ☎(048)668-4737 | | (菊田) |
| 59社 | 渡辺真知子 | 300 茨城県土浦市富士崎1-1-13-303<br>☎(0298)24-4976 | | (斎藤) |
| 〃理 | 矢野恵子 | 192-03 東京都八王子市下柚木3-2-3-506<br>☎(0426)77-5889 | 富士通㈱<br>☎(044)777-1111 | (柳沢) |
| 〃文 | 流淳子 | 157 東京都世田谷区喜多見9-22-7-106<br>☎(03)3420-7341 | 世田谷区立山崎小学校 | (春名) |
| 〃 | 木村敬子 | 351-01 埼玉県和光市新倉2-25-8<br>リーベスト和光306 ☎(048)467-4826 | | (橋本) |
| 〃 | 宇田川佐英 | 248 神奈川県鎌倉市笛田96-8<br>☎(0467)31-0185 | | (荒) |
| 60法 | 宮下さゆり | 362 埼玉県上尾市久保65-1<br>セントラルコート上尾903 | ㈱住友生命総合研究所<br>☎(03)5276-5081 | (松島) |
| 〃文 | 三田みわこ | 156 東京都世田谷区松原4-33-3-106 | | (山縣) |
| 61社 | 宮下潤子 | 420 静岡県静岡市二番町54<br>丸仲ビル南203号 ☎(054)255-8288 | | (佐々木) |
| 〃文 | 高橋正子 | 169 東京都新宿区高田馬場4-15-2-305<br>☎(03)3362-5947 | | |
| 62法 | 米山純子 | 193 東京都八王子市千人町1-1-8<br>ライオンズプラザ西八王子第二1202 | | (服部) |
| 〃文 | 増澤みどり | 262 千葉市花見川区宮野木台3-9-7<br>☎(047)254-3750 | | |
| 63社 | 飯塚由美子 | 271 千葉県松戸市松戸1117<br>ビラ松涛401 ☎(0473)64-3576 | | (賀茂) |
| 〃 | 小副川由樹子 | 267 千葉市緑区小食土町1177-10<br>ガーデンコート杜の街4-608 ☎(043)295-4567 | | (吉野) |
| 平1社 | 佐藤紀子 | 214 神奈川県川崎市多摩区生田2-7-21<br>あぱるとかやまⅡ-101☎(044)933-9434 | ハウス食品工業<br>☎(03)3243-1235<br>FAX3242-2469 | (神田) |

# 会員名簿

| 卒業年 | 氏名 | 住所 | 勤務先 (旧姓) |
|---|---|---|---|
| 平1経 | 宮本祥子 | 300-12 茨城県稲敷郡茎崎町上岩崎1285<br>☎(0298)76-0270 | |
| 〃 | 野津山まり子 | 277 千葉県柏市松葉町1-7-14<br>☎(0471)33-8779 | KPMGピートマーウィック |
| 平2社 | 稲津紀子 | 279 千葉県浦和市富士見3-11-1<br>舞浜ガーデンヒルズ506 ☎(047)355-5193 | (村田) |
| 〃文 | 二谷伸子 | 158 東京都世田谷区尾山台1-16-2<br>フラットネロ106 ☎(03)3703-8935 | |
| 平2経 | 上條比呂子 | 257 神奈川県秦野市南矢名4-21-1<br>今井パレス Ⅱ-304号 | (渡辺) |
| 平4文 | 長谷川千秋 | 173 東京都板橋区大谷口1-26-15<br>メゾンフルール205 | ヤマハ株式会社・<br>☎(03)5488-6712 |
| 平5文 | 和田陽子 | 146 東京都大田区池上7-19-2<br>ソフィア池上 205 ☎(03)3755-3122 | ヤマハ株式会社<br>☎(03)5488-1683<br>FAX 5488-5075 |
| 〃 | 鈴木道代 | 369-01 埼玉県北足立郡吹上町榎戸2-8-23<br>☎(0485)48-3663 | 埼玉県大利根町立大利根中学校<br>☎(0480)72-3118 FAX72-3110 |
| 平6社 | 池田道子 | 276 千葉県八千代市ゆりのき台4-5-1-718<br>☎(0474)86-6230 | 全日空<br>☎(0476)34-7354 FAX34-7382 |
| 〃理 | 福田留美 | 177 東京都練馬区関町南4-15-5-307<br>☎(03)3929-7165 | 東京大学 大学院 在学中<br>☎(03)5351-6457 |
| 〃文 | 森屋利夏 | 156 東京都世田谷区経堂2-8-8<br>☎(03)3929-7165 | ㈱ソニープラザ<br>☎(03)3541-2588 FAX3541-2669 |
| 〃 | 西島日登美 | 183 府中市美[illegible]<br>☎(0423)67-3045 FAX兼 | (山口) |
| 平8経 | 坪宏美 | 243-04 神奈川県海老名市柏ケ谷600-5-3-202<br>☎(0462)32-0731 | 鐘紡㈱カネボウ化粧品本部コスメットマーケッティング[illegible]<br>☎(03)5446-3137 |
| 平9経 | 松本愛子 | 278 千葉県野田市岩名1-13-16<br>☎(0471)29-8213 | 住友海上火災保険㈱<br>☎(048)644-5421 |
| 〃 | 兼子佳子 | 350-11 埼玉県川越市下松原660-7<br>☎(0492)47-4483 | 東京海上火災保険㈱ |

# 会 員 名 簿

| 卒業年 | 氏　名 | 住　所 | 勤 務 先　(旧姓) |
|---|---|---|---|
| 平9文 | 大久保　麻　子 | 184 東京都小金井市本町6-9-11<br>☎(0423)85-0415 FAX兼用 | 東京都立墨東養護学校<br>☎(03)3634-8431 |
| 〃 | 釜　菟　日女子 | 152 東京都目黒区中央町2-28-15-618<br>☎(03)3716-9438 | 丸　久㈱<br>☎(03)3634-8161 |

# 立教大学体育会バドミントン部名簿

体育会本部03(3985)2867

| 区分 | 氏名 | 学科 | 出身校 | 郵便番号 | 住所 | 電話番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 部長 | 堀内　昭 | | | 〒114 | 東京都大田区西蒲田4-13-7 | 03(3754)7345 |
| 監督 | 松崎　正門 | | | 〒214 | 神奈川県川崎市多摩区生田6-28-3 | 044(954)2705 |
| コーチ | 石田　俊司 | | | 〒247 | 神奈川県横浜市栄区元大橋1-10-2 | 045(892)7601 |
| コーチ | 大森　康裕 | | | 〒281 | 千葉県千葉市花見川区幕張町4-646<br>京葉銀行幕張寮304 | 043(276)7034 |
| 4年主将 | 大崎　武 | 日文 | 土佐 | 〒351 | 埼玉県和光市丸山台1-11-5-506 | 048(465)0983 |
| 4年主務 | 古屋　周作 | 産関 | 奈良学園 | 〒114 | 東京都北区滝野川2-24-2 | 03(3910)3796 |
| 4年副将 | 大西　徹 | 経済 | 福大付大濠 | 〒352 | 埼玉県新座市東北2-24-36-201 | 048(472)1347 |
| 4年 | 加藤　智浩 | 経済 | 旭野 | 〒353 | 埼玉県志木市本町3-2-27-302 | 048(472)5263 |
| 4年 | 権田　謙一 | 物理 | 明学東村山 | 〒187 | 東京都小平市上水本町1-8-2 | 0423(22)0016 |
| 4年 | 高尾　哲矢 | 物理 | 市川 | 〒343 | 埼玉県越谷市下間久里886-45 | 0489(75)2475 |
| 4年 | 村田　将史 | 産関 | 松阪 | 〒175 | 東京都板橋区赤塚5-23-17-201 | 03(5383)1653 |
| 3年 | 伊藤　信昭 | 法 | 伊那北 | 〒179 | 東京都練馬区早宮1-3-13-303 | 03(3948)2106 |
| 3年 | 上杉　慎一 | 経済 | 海城 | 〒357 | 埼玉県所沢市山口2898-5 | 0429(23)8383 |
| 3年 | 加藤　治 | 産関 | 錦城 | 〒205 | 東京都羽村市緑ヶ丘2-7-28 | 0425(79)1085 |
| 3年 | 細川　雅史 | 経済 | 芝浦工大柏 | 〒277 | 千葉県東葛飾郡印南町大津ヶ丘3-40-11 | 0471(91)5432 |
| 2年 | 金田　秀彦 | 経済 | 都立雪谷 | 〒145 | 東京都大田区北千束1-33-6 | 03(3725)0229 |
| 2年 | 川村　典史 | 数 | 千葉商大付 | 〒270 | 千葉県松戸市八ヶ崎179 | 0473(46)9811 |
| 2年 | 古謝　将史 | 社会 | 首里 | 〒352 | 埼玉県新座市栗原6-7-7 | 0424(23)3734 |
| 2年<br>マネージャー | 小林あや子 | 日文 | 越谷 | 〒343 | 埼玉県越谷市[illegible] | 0489(75)9904 |
| 1年 | 木谷　寿道 | 化 | 青森 | 〒179 | 東京都練馬区錦1-4-17-211 | 03(3559)2723 |
| 1年 | 新保　正和 | 産関 | 星稜 | 〒157 | 東京都板橋区徳丸1-37-20-102 | 03(3559)5222 |
| 1年 | 武田　章宏 | 化 | 横浜翠嵐 | 〒223 | 神奈川県横浜市港北区新羽町4802 | 045(531)9233 |
| 1年 | 向笠　大樹 | 経済 | 横浜翠嵐 | 〒221 | 神奈川県横浜市神奈川区羽沢町947-1<br>宮向団地4-301 | 045(381)1813 |

# 立教大学体育会女子バドミントン部名簿

体育会本部03-3985-2876

| 区分 | 氏名 | 学科 | 出身校 | 郵便番号 | 住所 | 電話番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 部長 | 藤井　陽江 | | | 〒105 | 東京都港区海岸1-6-1-1415 | |
| 監督 | 松崎　正門 | | | 〒214 | 神奈川県川崎市多摩区生田6-28-3 | 044-954-2705 |
| コーチ | 石田　俊司 | | | 〒247 | 神奈川県横浜市栄区元大橋1-10-2 | 045-892-7601 |
| | 大森　康裕 | | | 〒281 | 千葉県千葉市花見川区幕張町4-646<br>京葉銀行幕張寮304 | 043-276-7034 |
| | 野津山まり子 | | | 〒277 | 千葉県柏市松葉町1-7-14 | 0471-33-8779 |
| 4年主将 | 高野　直子 | 英米 | GCHS | 〒206 | 東京都多摩市桜ヶ丘3-19-6 | 0423-72-2507 |
| 3年主務 | 八木　智子 | 社会 | 学芸大附属 | 〒222 | 神奈川県横浜市港北区篠原台町13-8 | 045-421-7457 |
| 3年 | 東　知愛子 | 経営 | 金沢大附属 | 〒175 | 東京都板橋区成増4-18-19<br>PROCECAN211 | 03-5997-8489 |
| 3年 | 岩城　葉子 | 経済 | 国立 | 〒186 | 東京都国立市北2-13-12 | 0425-75-0669 |
| 3年 | 荻野裕美子 | 心理 | CIS | 〒154 | 東京都世田谷区三宿2-27-14-202 | 03-3412-6695 |
| 1年 | 本間あかね | 観光 | ASF | 〒276 | 千葉県八千代市八千代台東2-14-26 | 0474-82-0995 |
| 1年 | 照屋真木子 | 産関 | 首里 | 〒171 | 東京都豊島区西池袋3-35-1<br>立教大学ミッチェル館 | 03-3985-2658 |

## 編纂を終えて

苦しみは1995年12月、現役納会の席から始まった。

1997年に創部50周年を迎えることを知らされたのもその時のこと。50周年記念事業の実行委員長を仰せつかった。いや、押しつけられた。「記念誌を発行すべきだ」との言葉も付いていた。

1996年8月に「全員参加による記念誌」づくりがスタートした。11月30日を締め切り日として会員諸兄・諸姉に寄稿文と写真をお願いした。ところがである。原稿が集まらない。締め切り日までに到着したのはわずか25名分のみ。

これでは本にならない。いろいろ手を尽くした結果が、いま皆さんが手になさっているものである。立派なものになった。会員の皆様のご協力に感謝する次第である。ここまでこぎつけることができたのも、本づくりのプロ瀬戸孝OBの卓抜なアイデアと実行力、また、デザイン・体裁をはじめ全面的にご支援、ご協力をいただいた凸版印刷の皆様のお力添えの賜であり、厚く御礼申し上げます。山本さん、渡辺さんありがとうございました。（小宮 好雄）

「全員参加の記念誌」づくりに参画でき、とても充実した楽しい1年間でした。1年間とは言うものの実質的にはわずか半年のことであり、その中身も小宮実行委員長の後ろを付いてきたに過ぎません。原稿が揃わなければ自分の出番はない、と言わば「高見の見物」を決め込んでいる間、小宮実行委員長は体を張って原稿を集め、写真を収集し、記録を追いかけてくださっていました。その姿は、時には「鬼気迫る」ものでした。

そして若手OB諸君の活躍も素晴らしく、過ぎ去った50年にこだわるのではなく、これからの50年へのスタートにふさわしい取り組み方でした。

なお、編纂にあたっては内容を変えない範囲で多少手直しをさせていただいた部分があります。また、原則として敬称は略させていただきました。この場を借りて、ご寛容をお願い申し上げます。

最後になりましたが、次々とご無理をお願いしご迷惑をおかけしました凸版印刷のスタッフの皆様に、心から感謝申し上げます。（瀬戸 孝）

【立教大学体育会バドミントン部創部50周年記念事業実行委員会メンバー】

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 川端 昇市 | 佐藤 芳朗 | 野村 昌宏 | 小西 宏昌 | 折井 利彦 | 加藤 正則 | 永井 栄一 |
| 小宮 好雄 | 岩佐 俊二 | 鈴木 幸春 | 松崎 正門 | | | |
| 鵜飼 良機 | 星野 義昭 | 瀬戸 孝 | 井上 龍 | 鈴木 宏 | 南部 秀之 | 金子 真人 |
| 関山 浩 | 松下 一成 | 石田 俊司 | 大森 康裕 | 川底 宏至 | 飯島 伸仁 | 田中 尚 |
| 高橋 幸二 | 丸山 泰史 | 渡辺 篤夫 | 三井 邦雄 | 桑山 洋典 | | |
| 井口 久美子 | 牧 峡 | 佐原 美子 | 鈴木 嘉代子 | 北村 登喜子 | 関口 真澄 | 野津山 まり子 |
| 二谷 伸子 | | | | | | |

立教大学体育会バドミントン部創部50周年記念誌
編集　立教大学体育会バドミントン部創部50周年記念事業実行委員会
発行　1997年7月5日
印刷所　凸版印刷株式会社